福島県文化財調査報告書第473集

常磐自動車道遺跡調査報告64

西　原　遺　跡（１・２次調査）
宿仙木Ａ遺跡（２次調査）

２０１０年

福　島　県　教　育　委　員　会
財団法人 福島県文化振興事業団
東日本高速道路株式会社

常磐自動車道遺跡調査報告64

西原（にしはら）遺跡（１・２次調査）

宿仙木（しゅくせんぎ）Ａ遺跡（２次調査）

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通し，現在は富岡～宮城県山元間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は,それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に,我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成18年度と20年度に行った相馬市の西原遺跡，平成21年度に行った宿仙木Ａ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書を県民の皆様が，文化財に対するご理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，相馬市教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成23年１月

福島県教育委員会
教育長　　遠　藤　俊　博

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は，平成６年度のいわき市四倉町に所在する遺跡の調査から開始され，富岡ＩＣまでの間については，楢葉パーキングエリアの一部を除き，平成13年度までに発掘調査が終了しております。平成14年度からは富岡ＩＣから相馬ＩＣ予定地までの区間にかかる遺跡の調査も開始され，平成21年度には新地ＩＣ以北についての調査が着手され，現在も継続して実施されております。

本報告書は，平成18・20年度の２ヵ年にわたって発掘調査を実施した相馬市の西原遺跡と，平成21年度に調査した同市宿仙木Ａ遺跡の成果をまとめたものです。西原遺跡では，平安時代製炭跡に関連する遺構が多数確認され，宿仙木Ａ遺跡では，縄文時代前期中葉の資料や，平安時代の集落跡が確認されました。

今後，これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として，さらには地域社会を理解する資料として，生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社，相馬市ならびに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年１月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成18・20・21年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）遺跡調査の発掘調査報告書である。

2　本書には以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

西 原 遺 跡　　福島県相馬市坪田字西原　　埋蔵文化財番号　09600193

宿仙木Ａ遺跡　　福島県相馬市黒木字宿仙木　　埋蔵文化財番号　09600198

3　本事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査および報告書作成にあたった。

平成18年度

副　主　幹　安田　稔　　専門文化財主査　山岸　英夫

嘱　　託　淺間　陽（平成19年度３月まで現職）

平成20年度

副　主　幹　吉田　秀享　　文化財副主査　笠井　崇吉　　嘱　　託　西澤　正和

嘱　　託　本田　拓基

平成21年度

副　主　幹　吉田　秀享　　文化財副主査　笠井　崇吉　　文化財副主査　三浦　武司

嘱　　託　髙橋　岳（平成21年度３月まで現職）　　嘱　　託　本田　拓基

嘱　　託　水野　一夫（平成21年度３月まで現職）

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行った。執筆分担は章・節末または文末に示した。

7　本書に掲載した自然科学分析は，次の機関に委託し第１編第３章にその結果を掲載している。

炭化材の樹種同定　　株式会社　古環境研究所

放射性炭素年代測定　　株式会社　加速器分析研究所

8　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し，編ごとにまとめて掲載した。

9　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関からご協力いただいた。

相馬市教育委員会　　東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 方　　位　　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない遺構図はすべて図の真上を座標北とした。

(2) 標　　高　　水準点を基にした海抜標高で示した。

(3) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(4) 土　　層　　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。

（例）基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土－ℓ１・ℓ２…

なお，挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著　1999　日本色研究事業株式会社発行)に基づく。

(5) ケ　　バ　　遺構内の傾斜面は「𝍏」で表現したが，相対的に緩傾斜の部分には「𝍐𝍐」で表している。また,「𝍑𝍑」は後世の撹乱が明らかである場合に使用した。

(6) 網　か　け　　挿図中の網かけの用例は，同図中に表示した。

2　本書における遺物図版の用例は，以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(2) 番　　号　　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は，例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし，写真図版中では「１－１」と示した。

(3) 注　　記　　出土グリッド，出土層位などは遺物番号の右脇に示した。

(4) 土器断面　　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し，胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。

(5) 遺物計測値　　(　) 内の数値は推定値，[　] 内の数値は遺存値を示す。

(6) 網　　点　　挿図中の網点の用例は黒色処理を示し，それ以外は図中に示した。

3　本書で使用した略号は，次のとおりである。

相馬市：ＳＭ　　西原遺跡：ＮＨ　　宿仙木Ａ遺跡：ＳＳＧ・Ａ　　竪穴住居跡：ＳＩ

掘立柱建物跡：ＳＢ　　柱列跡：ＳＡ　　土　坑：ＳＫ　　溝　跡：ＳＤ　　井戸跡：ＳＥ

焼土遺構：ＳＧ　　集石遺構：ＳＳ　　鍛治炉跡：ＳＷｋ　　性格不明遺構：ＳＸ

小穴・ピット：Ｐ　　グリッド：Ｇ

目　　次

序　章

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　地理的環境 …… 6

第３節　歴史的環境 …… 8

第１編　西原遺跡（１・２次調査）

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形 …… 15

第２節　調査経過 …… 15

第３節　調査方法 …… 18

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層 …… 19

第２節　掘立柱建物跡と周囲の関連遺構 …… 21

１号建物跡(21)　１号柱列跡(24)　２号柱列跡(24)　小穴群(25)

第３節　土　　坑 …… 27

１号土坑(27)　２号土坑(27)　３号土坑(29)　４号土坑(29)
５号土坑(29)　６号土坑(30)　７号土坑(30)　８号土坑(30)
９号土坑(32)　10号土坑(32)　11号土坑(32)　12号土坑(34)
13号土坑(34)　14号土坑(34)　15号土坑(35)　16号土坑(35)
17号土坑(35)　18号土坑(37)　19号土坑(37)　20号土坑(37)
21号土坑(39)　22号土坑(39)　23号土坑(39)　24号土坑(40)
25号土坑(40)　26号土坑(40)　27号土坑(42)　28号土坑(42)
29号土坑(42)　30号土坑(43)　31号土坑(43)　32号土坑(43)
33ａ号土坑(45)　33ｂ号土坑(45)　34号土坑(47)　35号土坑(47)
36号土坑(47)　37号土坑(48)　38号土坑(48)　39号土坑(48)
40号土坑(49)　41号土坑(49)　42号土坑(49)　43号土坑(51)
44号土坑(51)　45号土坑(51)　46号土坑(53)　47号土坑(53)
48号土坑(55)　49号土坑(55)　50号土坑(55)　51号土坑(56)
52号土坑(56)　53号土坑(56)　54号土坑(57)　55号土坑(57)
56号土坑(57)　57ａ号土坑(59)　57ｂ号土坑(59)　58号土坑(59)
59号土坑(61)　60号土坑(61)　61号土坑(61)　62号土坑(62)

第４節　溝跡・井戸跡 …… 64
１号溝跡(64)　２号溝跡(64)　３号溝跡(65)　４号溝跡(67)
５号溝跡(67)　６号溝跡(69)　１号井戸跡(70)　２号井戸跡(72)
第５節　焼土遺構・集石遺構 …… 72
１号焼土遺構(72)　２号焼土遺構(72)　１号集石遺構(73)　２号集石遺構(74)
第６節　性格不明遺構 …… 75
１号性格不明遺構(75)　２号性格不明遺構(75)　３号性格不明遺構(78)
第７節　遺構外出土遺物 …… 79
層位と分布(79)　縄文時代の遺物(80)　平安時代の遺物(90)　近世の遺物(92)
第３章　自然科学分析
第１節　樹種同定 …… 96
第２節　放射性炭素年代 …… 98
第４章　ま　と　め
第１節　木炭焼成土坑について ……101
第２節　遺跡の変遷 ……104

第２編　宿仙木Ａ遺跡（２次調査）
第１章　周辺地形と調査経過
第１節　遺跡の位置と地形 ……109
第２節　調査経過 ……109
第３節　調査方法 ……112
第２章　遺構と遺物
第１節　遺跡の概要と基本土層 ……114
第２節　竪穴住居跡 ……118
２号住居跡(118)　３号住居跡(122)　４号住居跡(125)　５号住居跡(126)
第３節　土　　坑 ……129
15号土坑(129)　16号土坑(129)　17号土坑(130)　18号土坑(130)
19号土坑(130)　20号土坑(132)　21号土坑(133)　22号土坑(133)
23号土坑(134)　24号土坑(134)　25号土坑(135)　26号土坑(137)
第４節　鍛治炉跡・焼土遺構・溝跡 ……138
１号鍛治炉跡(138)　２号鍛治炉跡(138)　１号焼土遺構(139)　１号溝跡(140)
第５節　遺物包含層・遺構外出土遺物 ……141
河川跡・遺物包含層(141)　土器(143)　土製品(150)　羽口(150)　鉄製品(150)　石器(150)
第３章　ま　と　め ……152

挿図・表目次

序　章

［挿図］

図１　常磐自動車道位置図……１
図２　遺跡周辺の地形分類図……７
図３　周辺の遺跡位置図……９
図４　相馬市周辺の時代別遺跡分布図……10

［表］

表１　四倉ＩＣ以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数……２
表２　周辺の遺跡……９

第１編　西原遺跡（１・２次調査）

［挿図］

図１　遺跡の地形と調査範囲……16
図２　遺構・グリッド配置図……20
図３　基本土層……21
図４　１号建物跡……23
図５　１号建物跡出土遺物……24
図６　１・２号柱列跡……25
図７　小穴群(グリッドピット)……26
図８　１～５号土坑，５号土坑出土遺物……28
図９　６～９号土坑……31
図10　10～14号土坑……33
図11　15～19号土坑……36
図12　20～24号土坑……38
図13　25～29号土坑……41
図14　30～32・33ａ・33ｂ号土坑……44
図15　34～38号土坑……46
図16　39～43号土坑……50
図17　44～47号土坑……52
図18　48～52号土坑……54
図19　53～56・57ａ・57ｂ号土坑……58
図20　58・59・61号土坑……60
図21　60・62号土坑，62号土坑出土遺物……63
図22　１号溝跡，出土遺物……65
図23　２号溝跡，出土遺物……66
図24　３号溝跡……67
図25　４号溝跡……68
図26　５号溝跡……69
図27　６号溝跡……70
図28　１・２号井戸跡，１号井戸跡出土遺物……71
図29　１・２号焼土遺構……73
図30　１・２号集石遺構，１号集石遺構出土遺物……74
図31　１・２号性格不明遺構……76
図32　２号性格不明遺構出土遺物……77
図33　３号性格不明遺構，出土遺物……78
図34　グリッド別遺構外出土土器・陶磁器点数図……80
図35　縄文時代の遺物（１）……81
図36　縄文時代の遺物（２）……82
図37　縄文時代の遺物（３）……84

図38　縄文時代の遺物（４）……86
図39　縄文時代の遺物（５）……87
図40　縄文時代の遺物（６）……89
図41　平安時代の遺物……91
図42　近世の遺物（１）……94
図43　近世の遺物（２）……95
図44　炭化材の木材組織……97
図45　木炭焼成土坑分析 ……103

［ 表 ］

表１　樹種同定結果……96
表２　放射性炭素年代測定結果 ……100
表３　暦年較正年代 ……100
表４　木炭焼成土坑分析一覧 ……103

第２編　宿仙木Ａ遺跡（２次調査）

［挿図］

図１　調査位置図 ……110
図２　グリッド配置図 ……113
図３　遺構配置図，基本土層（１）……115
図４　遺構配置図，基本土層（２）……116
図５　２号住居跡 ……119
図６　２号住居跡，出土遺物（１）……120
図７　２号住居跡出土遺物（２）……122
図８　３号住居跡，出土遺物 ……123
図９　４号住居跡，出土遺物 ……126
図10　５号住居跡 ……127
図11　５号住居跡出土遺物 ……128
図12　15～20・22号土坑 ……131
図13　21・23～26号土坑 ……135
図14　土坑出土遺物（１）……136
図15　土坑出土遺物（２）……137
図16　１・２号鍛治炉跡，
　　１号焼土遺構 ……139
図17　１号溝跡 ……140
図18　河川跡，遺物包含層 ……142
図19　遺構外出土遺物（１）……144
図20　遺構外出土遺物（２）……146
図21　遺構外出土遺物（３）……147
図22　遺構外出土遺物（４）……148
図23　遺構外出土遺物（５）……149
図24　遺構外出土遺物（６）……151

写 真 目 次

第１編　西原遺跡（１・２次調査）

［写真］

1　遺跡の遠景 ……159
2　２次調査区全景 ……159
3　１次調査区全景 ……160
4　基本土層 ……160
5　１号建物跡 ……161
6　１号建物跡柱穴 ……161
7　１・２号柱列跡 ……161
8　１～７号土坑 ……162
9　８～15号土坑 ……163
10　16～23号土坑 ……164
11　24～30号土坑 ……165
12　31～37号土坑 ……166
13　38～45号土坑 ……167
14　46～53号土坑 ……168
15　54～58号土坑 ……169
16　59～62号土坑 ……170
17　１～６号溝跡 ……171
18　井戸跡 ……171
19　焼土遺構・集石遺構 ……172
20　１～３号性格不明遺構 ……172
21　５号土坑出土須恵器 ……173
22　１号建物跡出土遺物 ……173
23　62号土坑出土金属製品 ……173
24　溝跡・井戸跡・集石遺構出土遺物 ……174
25　２・３号性格不明遺構出土陶磁器 ……174
26　遺構外出土縄文土器（１） ……175
27　遺構外出土縄文土器（２） ……176
28　遺構外出土石器 ……177
29　遺構外出土土師器 ……177
30　遺構外出土須恵器 ……178
31　遺構外出土かわらけ・羽口 ……178
32　遺構外出土近世陶磁器（１） ……179
33　遺構外出土近世陶磁器（２） ……180
34　遺構外出土近世石製品 ……180
35　遺構外出土金属製品 ……180

第２編　宿仙木Ａ遺跡（２次調査）

［写真］

1　調査区全景 ……183
2　調査区全景 ……184
3　北調査区全景 ……184
4　南調査区全景 ……185
5　基本土層 ……185
6　２号住居跡全景 ……186
7　２号住居跡細部 ……186
8　３号住居跡全景 ……187
9　３号住居跡細部 ……187
10　４号住居跡全景 ……188
11　４号住居跡細部 ……188
12　５号住居跡全景 ……189
13　５号住居跡細部 ……189
14　15～18号土坑 ……190

15　19～21号土坑 ……191
16　22～25号土坑 ……192
17　26号土坑 ……193
18　１・２号鍛治炉跡，
　１号焼土遺構，１号溝跡 ……193
19　北調査区
　遺物包含層と河川跡検出状況 ……194
20　北調査区　遺物包含層断面 ……194
21　２・５号住居跡出土遺物 ……195
22　２号住居跡出土遺物 ……195
23　３号住居跡出土遺物 ……196
24　19・21・23・24・26号土坑出土遺物 …196
25　20号土坑出土遺物 ……197
26　遺構外出土遺物
　（Ⅰ群土器・Ⅱ群土器１類）……197
27　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器２類）……198
28　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器３・４類）…198
29　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器５類）……199
30　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器５類）……199
31　遺構外出土遺物（Ⅲ群土器）……200
32　遺構外出土遺物
　（Ⅳ群土器・土製品・鉄製品）……200

序　　章

第１節　調査に至る経緯

１.事業概要と平成19年度までの事業経緯

常磐自動車道は，埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下ＩＣと略す)を起点とし，千葉県から茨城県，そして福島県の浜通り地方を通って，宮城県亘理郡亘理町の亘理ＩＣを終点とする高速自動車道である。このうち，三郷ＩＣ～いわき市のいわき中央ＩＣまでは昭和63年３月に供用が開始され，平成11年３月には，いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣまで，平成14年３月には，いわき四倉ＩＣ～広野ＩＣまで，平成16年４月には広野ＩＣ～富岡ＩＣまでの供用が開始されている。さらに，平成21年９月には，宮城県側の亘理ＩＣ～山元ＩＣまでの11.5kmが開通し，残りは富岡ＩＣ～山元ＩＣまでの47kmの区間となった。

これらの区間内に所在する埋蔵文化財については，茨城県境からいわき中央ＩＣまでの４遺跡を昭和59・60年度に，いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して，発掘調査を実施した。また，いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣ間の埋蔵文化財に関しても，平成６年度から平成９年度にかけて好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査を，いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施した。これ以外の四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査は，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現　財団法人福島県文化振興事業団)に委託して実施した。

いわき四倉ＩＣ以北の路線内の埋蔵文化財については，平成９年度から福島県教育委員会が財団

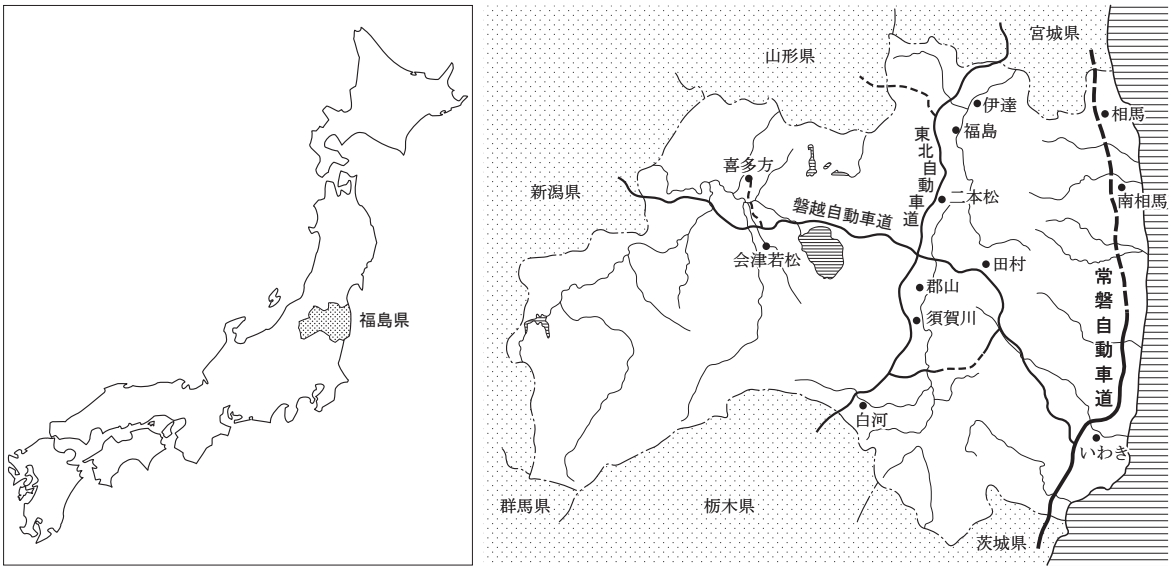


図１　常磐自動車道位置図

表１　四倉ＩＣ以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数

調査年度	市町村名											
	いわき市	広野町	楢葉町	富岡町	大熊町	双葉町	浪江町	南相馬市 小高区	南相馬市 原町区	南相馬市 鹿島区	相馬市	新地町
Ｈ９	5	1										
H10	4	3	3	2								
H11		4	5									
H12		1	7	5								
H13			1	5								
H14				1	2							
H15							2				2	
H16					3				2		1	
H17					3	2	2	3	1	1	1	
H18					1		6	4	4	1	2	
H19							4	6	7			
H20			1				7	5	3		1	
H21					1			1	3	1	1	3

法人福島県文化センターに調査を委託して実施した。平成９年度以降の市町村別発掘調査数については，表１に示した通りである。

なお富岡ＩＣまでは，当初，日本道路公団東北支社(現　東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所，富岡ＩＣ以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，平成14年７月より富岡ＩＣ～浪江町までの区間についても，いわき工事事務所が管轄することとなり，相馬工事事務所は南相馬市～新地町までの区間となった。

２.平成20年度の事業経緯

平成20年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき，遺跡調査部の職員10名を配置して実施した。当初計画では，相馬市１遺跡(西原遺跡)，南相馬市原町区５遺跡(菖蒲沢遺跡・西内遺跡・中山Ｃ遺跡・赤柴遺跡・荒井遺跡)，同市小高区４遺跡(君ヶ沢Ｂ遺跡・横大道遺跡・舘越遺跡・四ツ栗遺跡)の合計10遺跡，総調査面積30,000㎡が予定された。しかし，調査の進捗に伴い発掘調査範囲が拡張したり，保存協議の対象となったり，新たな工事計画の提示や条件整備が整わず調査不可能となった箇所などもあり，関係機関で協議した結果，相馬市に所在する西原遺跡（２次調査)，南相馬市原町区に所在する中山Ｃ遺跡・赤柴遺跡（３次調査)・荒井遺跡の３遺跡，同市小高区に所在する君ヶ沢Ｂ遺跡（２次調査)・横大道遺跡（２次調査)・舘越遺跡・大田和広畑遺跡（３次調査)・四ツ栗遺跡（３次調査)の５遺跡，計９遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は，総計で29,200㎡である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所(以下，相馬工事事務所と略す)との事前協議を受けて，４月上旬から原町区内の中山Ｃ遺跡（1,200㎡)・荒井遺跡（1,000㎡)，小高区内の君ヶ沢Ｂ遺跡（1,000㎡)・横大道遺跡（4,800㎡)の４カ所で開始した。４月下旬には，各遺跡での表土剥ぎも進捗し，中山Ｃ遺跡では木炭窯跡，荒井遺跡では遺物包含層，君ヶ沢Ｂ遺跡では土坑などが確認された。横大道遺跡からは，木炭窯跡が20数基検出され，さらに製鉄炉跡も確認された。

５月に入ると，荒井遺跡で調査範囲が西側に広がることが判明し，新たに400㎡が追加された。

検出した遺構については順次調査が行われ，５月16日には，土坑５基，焼土遺構２基が確認された君ヶ沢Ｂ遺跡（1,000㎡）の調査が終了し，舘越遺跡（3,700㎡）の調査に移行した。また，中山Ｃ遺跡では，斜面中腹から木炭窯跡と製鉄炉跡が各１基ずつ確認され，竪穴住居跡も検出された。

６月には，中山Ｃ遺跡の竪穴住居跡が５軒となり，同一箇所で頻繁に建て替えていたことが判明した。荒井遺跡では，検出した遺物包含層が縄文時代の小河川跡であったことが確認され，小河川に隣接する自然堤防上に同時代の竪穴住居跡も確認された。また，隣接する赤柴遺跡の３次調査（3,500㎡）を開始した。６月下旬には，横大道遺跡で今年度確認できた木炭窯群も含めて保存に関する協議が開始され，遺構の調査は協議結果を待つこととなった。さらに，舘越遺跡でも木炭窯跡が多数確認され，北側斜面裾部600㎡の範囲が追加された。横大道遺跡や舘越遺跡の様相から，当該地域が古代行方郡でも希有な製鉄工業地域であったことが推測された。６月13日には，荒井遺跡（1,400㎡）の調査が収束し，西側に隣接する赤柴遺跡の調査に移行した。

７月になると，中山Ｃ遺跡（1,200㎡）の調査が７月11日に終了し，本遺跡が平安時代10世紀代前半の集落跡と10世紀代後半の製鉄炉跡，中世の木炭窯跡の複合遺跡であったことが判明した。中山Ｃ遺跡の調査終了に伴い，四ツ栗遺跡（7,500㎡）の調査が開始された。赤柴遺跡からは，縄文時代後期の竪穴住居跡や配石遺構，鍛冶炉跡や土坑などが確認された。舘越遺跡で検出された木炭窯跡は，全長13ｍほどと東北でも最大級の長さを誇る古代の木炭窯跡であることが判明し，さらに木炭窯跡が上下に重複していることが予測された。

８月には，赤柴遺跡で当初予定していた調査区南西端部にあるコンクリート擁壁の撤去が次年度に変更となり，これに伴い今年度調査面積が減じることとなった。四ツ栗遺跡では木炭焼成土坑が40基ほど確認され，舘越遺跡では木炭窯跡が深さ２ｍ，長さ10ｍにも達し，調査が難航していた。横大道遺跡は保存協議中であるため，現地作業は鉄滓の分類などに終始した。

９月に入ると，19日に赤柴遺跡（3,100㎡）の調査が終了し，新たに相馬市西原遺跡（5,200㎡）の調査に移行した。舘越遺跡では連日の木炭窯跡の調査に追われ，製鉄炉跡の調査も同時に行われた。29日には四ツ栗遺跡（7,500㎡）の３次調査が終了し，木炭焼成土坑，溝跡，竪穴状遺構などが確認され，古代の製炭遺跡であることが判明した。

10月には，今年度の調査の収束に向け，南相馬市原町区の西内遺跡・菖蒲沢遺跡の調査前の条件整備が急がれたが，両遺跡とも整わず，今年度の調査は事実上不可能となった。相馬市西原遺跡では，土坑50基ほどが確認され，縄文時代早・前期と古代の複合遺跡であることが判明した。また，10月下旬には，新たに君ヶ沢Ｂ遺跡(2,500㎡)の調査が追加され，27日より開始した。

11月に入ると，15日に舘越遺跡の現地説明会が開催され，264名の参加を得た。君ヶ沢遺跡では伏せ焼き法による大型の木炭焼成遺構が確認され，西原遺跡では近世の建物跡も確認された。

12月には，新たに大田和広畑遺跡（100㎡）の調査も行われたが，各遺跡の調査が収束に向かった。大田和広畑遺跡では土坑１基を確認し，３日に調査を終了した。このほか，11日には君ヶ沢Ｂ遺跡，12日には西原遺跡で調査が終了し，19日に舘越遺跡と横大道遺跡の調査が終了した。保存協議中の

横大道遺跡では，木炭窯跡などの遺構が集中して検出された以外の範囲，2,900㎡が調査終了となり，年明けに保存協議中の遺構群の養生を行うこととなった。

年が明けた１月14日から，舘越遺跡出土鉄滓の分類作業と発掘器材の整理，プレハブなどの撤去作業を行い，22日から横大道遺跡の遺構群の養生を行い，１月30日に全ての現地作業を終了した。

そのほか，平成18・19年度に発掘調査を実施した南相馬市原町区の小池田遺跡（１・２次調査）・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡について，福島県文化財調査報告書第450集『常磐自動車道遺跡調査報告51』として11月に報告書を刊行した。同じく，平成18・19年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の広谷地遺跡と同市原町区石神遺跡について，福島県文化財調査報告書第451集『常磐自動車道遺跡調査報告52』として11月に報告書を刊行した。

３．平成21年度の調査経過

平成21年度の常磐自動車道（浪江～相馬）建設予定地に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき，遺跡調査部の職員７名を配置して実施した。当初計画では，新地町３遺跡（赤柴前遺跡・鴻ノ巣遺跡・白子下Ｃ遺跡），相馬市２遺跡（払川遺跡・宿仙木Ａ遺跡），南相馬市鹿島区１遺跡（椴木沢Ｂ遺跡），同市原町区３遺跡（西内遺跡・菖蒲沢遺跡・赤柴遺跡），同市小高区１遺跡（横大道遺跡）の合計10遺跡，総調査面積23,000㎡が予定された。しかし，新たに発見した遺跡により調査範囲が拡張し，工事計画の変更などもあり，関係機関で協議した結果，新地町に所在する赤柴前遺跡（１次調査）・鴻ノ巣遺跡・白子下Ｃ遺跡の３遺跡，相馬市に所在する宿仙木Ａ遺跡（２次調査），南相馬市鹿島区に所在する椴木沢Ｂ遺跡，原町区に所在する西内遺跡（２次調査）・菖蒲沢遺跡・赤柴遺跡（４次調査）の３遺跡，同市小高区に所在する横大道遺跡（３次調査）の計９遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は，総計で23,300㎡である。

相馬工事事務所との事前協議を受けて，４月上旬から南相馬市原町区内の赤柴遺跡（600㎡）を皮切りに，中旬には同市小高区の横大道遺跡（800㎡），同市鹿島区内の椴木沢Ｂ遺跡（2,800㎡）の２カ所でも開始した。４月下旬には，赤柴遺跡では小河川跡，椴木沢Ｂ遺跡では製鉄炉跡や木炭焼成土坑などが確認された。横大道遺跡では，南側の調査区で工事掘削ラインが確定し，このラインより西側にある製鉄炉跡や木炭窯跡の調査を行った。

５月に入ると，横大道遺跡で北区の調査700㎡が追加され，調査面積が計1,500㎡となった。北区では土坑３基と溝跡１条が確認された。５月下旬には，椴木沢Ｂ遺跡で製鉄炉２基，廃滓場１カ所，土坑６基が検出され，赤柴遺跡では平安時代と縄文時代の溝跡や小河川跡の調査が行われた。また，横大道遺跡では，北区の調査が終了し，５月22日に当該地区の現地引渡しを行った。

６月になると，３日に赤柴遺跡の調査が終了したため，現地引渡しを行った。同時に，新地町鴻ノ巣遺跡（3,000㎡）・赤柴前遺跡（1,000㎡）の表土剥ぎを開始した。また，椴木沢Ｂ遺跡では，２基の製鉄炉が，それぞれ上下に重複していることが判明し，確認できた製鉄炉が５基になったほか，鍛冶炉跡２基，土坑11基などが確認され，古代末の製鉄遺跡の様相が徐々に明らかとなった。６月

中旬から下旬にかけては雨天が続き，作業の進捗が遅れ気味であったが，鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡では，確認された木炭焼成土坑などの調査に従事した。さらに新地町白子下Ｃ遺跡（4,100㎡）でも調査を開始し，近世以降の道跡で測量を行った。横大道遺跡では，１基の製鉄炉跡から炉壁が倒壊した状態で確認されたため，これの採り上げ作業を行った。また，木炭窯も20基以上が検出され，主に作業場のみの調査であったが，これらの調査が順調に行われた。

７月には，常磐自動車道いわき工区側の調査が終了したため，新たに調査員を増員し，南相馬市原町区西内遺跡（3,400㎡）の調査も開始した。このため，調査班は新地町で２班，南相馬市鹿島区で１班，原町区で１班，小高区で１班の計５班を，調査員８人で実施することとなった。中旬には，鴻ノ巣遺跡・赤柴前遺跡で遺構検出作業がほぼ終了し，検出した土坑11基の調査が順次行われた。白子下Ｃ遺跡では，近世以降の道跡１条のほか，平安時代の竪穴住居跡が６軒，土坑１基などが確認され，西内遺跡でも平安時代の竪穴住居跡１軒が確認された。７月18日には横大道遺跡で現地説明会が行われ，小雨が降る中109名の参加を得た。椴木沢Ｂ遺跡では，掘立柱建物跡が３棟，柱列が２カ所確認され，廃滓場も厚く堆積していることが判明し，調査は困難を極めた。

８月になると，西内遺跡の北側調査区に隣接した箇所で新たに木炭窯が発見され，この部分の調査600㎡が追加となり，西内遺跡の調査面積は4,000㎡となった。鴻ノ巣遺跡や赤柴前遺跡では，盆前の７日には調査が終了し，器材などの撤収を行い，20日に現地引渡しを行った。８月下旬には，横大道遺跡で空撮をし，さらに，県教育委員会と南相馬市教育委員会，事業団とが協議を行い，主に調査区東側を対象とした横大道遺跡の範囲確認調査が開始された。また，椴木沢Ｂ遺跡の廃滓場の調査も収束に向かい，28日には器材などを撤収し調査が終了したため，８月31日に現地引渡しを行った。

９月になり，西内遺跡の調査と平行して菖蒲沢遺跡（1,100㎡）の調査も開始した。菖蒲沢遺跡では木炭窯跡が確認され，西内遺跡でも木炭窯が３基となった。白子下Ｃ遺跡では，７軒の竪穴住居跡のうち，３軒が住居内鍛冶炉を有すなど，カマドの造り替えなども認められる特徴があり，12日には現地説明会を開催した。あいにくの降雨のため参加人数は少なかったが，30名を超える人数が遺跡を見学した。９月末には，白子下Ｃ遺跡で空撮を行い，横大道遺跡でも，遺構の調査は収束に向かった。菖蒲沢遺跡では，木炭窯のほか，平安時代の竪穴住居跡も確認され，住居内から土師器や，酸化炎で焼成された須恵器が大量に出土した。

10月に入ると，横大道遺跡では遺構の調査がほぼ終了し，出土した大量の鉄滓の分類作業に追われた。また，今年度の調査区東側部分の取り扱いについて関係機関で協議し，13日から遺跡の養生作業を開始した。同13日には，白子下Ｃ遺跡の調査が終了したため現地引渡しを行い，本年度最後の調査遺跡である相馬市宿仙木Ａ遺跡（4,900㎡）の調査を15日から開始した。この段階で本年度の調査面積は23,000㎡となり，相馬市払川遺跡（800㎡）の調査は次年度以降となった。10月下旬には，西内遺跡や菖蒲沢遺跡で空撮を行い，地形測量などの作業を行った。

11月になると，６日に西内遺跡・菖蒲沢遺跡の調査が終了し，11日に現地引渡しを行った。横大

道遺跡でも遺跡の養生作業が収束に向かい，調査区東側の本遺跡の範囲確認調査もほぼ終了した。11月16日には，３年に及ぶ横大道遺跡のすべての調査が終了し，20日には現地引渡しを行った。宿仙木Ａ遺跡では，縄文時代や平安時代の竪穴住居跡が検出され，遺物包含層や鍛冶炉跡なども確認された。また，調査区北側では埋没した小河川跡が確認され，即時掘り下げに入った.

12月に入ると，調査は宿仙木Ａ遺跡のみとなり，検出した遺構の調査が順調に進んだ。８日には空撮を行い，中旬には発掘器材の整理・搬出作業が行われた。18日には，すべての調査が終了したため，現地の引渡しを行った。

年が明けた１月中旬には，横大道遺跡の北区で追加調査が計画され，関係機関の協議を経て，２月上旬に300㎡の追加調査を行うこととなった。調査は２月８日～10日に行われ，10日に現地引渡しを行った。これにより，今年度の調査は９遺跡，調査面積は23,300㎡となった。

このほか，平成18～20年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の四ツ栗遺跡（３次調査）・太田和広畑遺跡について，福島県文化財調査報告書第458集『常磐自動車道遺跡調査報告55』として11月に報告書を刊行した。同じく，平成18～20年度に発掘調査を実施した南相馬市小高区の荻原遺跡（３・４次調査）・君ヶ沢Ｂ遺跡についても，福島県文化財調査報告書第467集『常磐自動車道遺跡調査報告59』として，平成22年３月に報告書を刊行した。（吉　田）

第２節　地 理 的 環 境

位置　福島県は，本州の北東部，東北地方の南端に位置する。面積の約８割を山地が占め，南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた「浜通り地方」「中通り地方」「会津地方」の３区域に区分される。掲載した西原遺跡・宿仙木Ａ遺跡は浜通り地方北部の相馬市に所在する。相馬市は，北を宮城県伊具郡丸森町・福島県相馬郡新地町，西を伊達市霊山町，南を南相馬市・相馬郡飯館村と接し，東は太平洋が広がる。西原遺跡は，相馬市南部の坪田字西原に所在し，宿仙木Ａ遺跡は相馬市北西部の黒木字宿仙木に所在する。

気候　相馬市の気候は夏涼しく冬暖かい，太平洋岸気候であり，気象的には海の影響を受けやすい。梅雨期には「やませ」と呼ばれる北東風が吹き込むと日照時間が減り，低温気候が長く続くことが多い。四季を通じて晴天の日が多く，しばしば水不足となる。そのために二宮仕法による溜池が江戸時代より造られ，丘陵地の谷頭に多く認められる。双葉断層以西の地域は，平野部と異なり，ある程度の積雪が認められる。

地形　この地域の地形は，西端に阿武隈高地と呼ばれる山地帯があり，東端に太平洋が広がる。山地帯と太平洋の間は，丘陵地と沖積低地からなる低地帯が東側へ標高を下げながら展開する。

山地帯を構成する阿武隈高地は，標高500～700m前後の起伏の乏しい隆起準平野である。阿武隈高地東縁部には霊山（標高804m），古霊山（783m），手倉山（672m），彦四郎山（635m），天明山（488m）などが連なる。阿武隈高地の東縁部には，相双地域を南北に縦走する双葉断層があり，その支線と

図２　遺跡周辺の地形分類図

考えられ，双葉断層よりも東側を平行して走る相馬断層で100～200mほどの比高差をもって東側の低地帯と接している。

低地帯は，丘陵地と沖積低地に大きく区分される。この丘陵地を東流する宇多川・小泉川・地蔵川・日下石川などの河川により開析され，次第に標高を減じながら段丘状になる。この段丘は，洪積世の氷期と間氷期に生じた海水準変動により形成された。高位の段丘から第Ⅰ～Ⅴの段丘面が確認されている。高位の第Ⅰ・Ⅱ段丘は，阿武隈高地との境や丘陵頂部に断片的に認められるのみである。第Ⅲ・Ⅳ段丘は相馬市北部で広く発達している。第Ⅴ段丘は丘陵の縁辺部にわずかに認められるのみである。西原遺跡は第Ⅳ段丘面に立地し，宿仙木Ａ遺跡は丘陵地上に立地する。丘陵間には沖積低地が発達している。

地質　相馬市域の地質構造は双葉断層を中心に大きく異なる。阿武隈高地域では中新世以前の団結堆積物，火山性堆積物，深成岩，変成岩であり，北沢層・粟津層・山上層・栃窪層・中ノ沢層が不整合に覆う。造陸運動により，全体として複背斜構造をなす。丘陵地帯では新第三紀鮮新世の半固結堆積物である竜ノ口層や久保間層が構成する。竜ノ口層は青灰色シルト岩で，岩体の硬さは柔らかい。貝・植物化石を含む海成層である。久保間層は含亜炭層の陸水成層である。宿仙木Ａ遺跡付近で見られる亜炭の採掘坑は，久保間層に含まれる亜炭を採掘している。沖積低地では海岸平野堆積物，段丘堆積物，砂州堆積物などの第四紀更新世の未固結堆積物が広く発達している。西原遺跡周辺では，低位下位段丘堆積物，宿仙木Ａ遺跡周辺では最低位段丘堆積物が主体となっている。

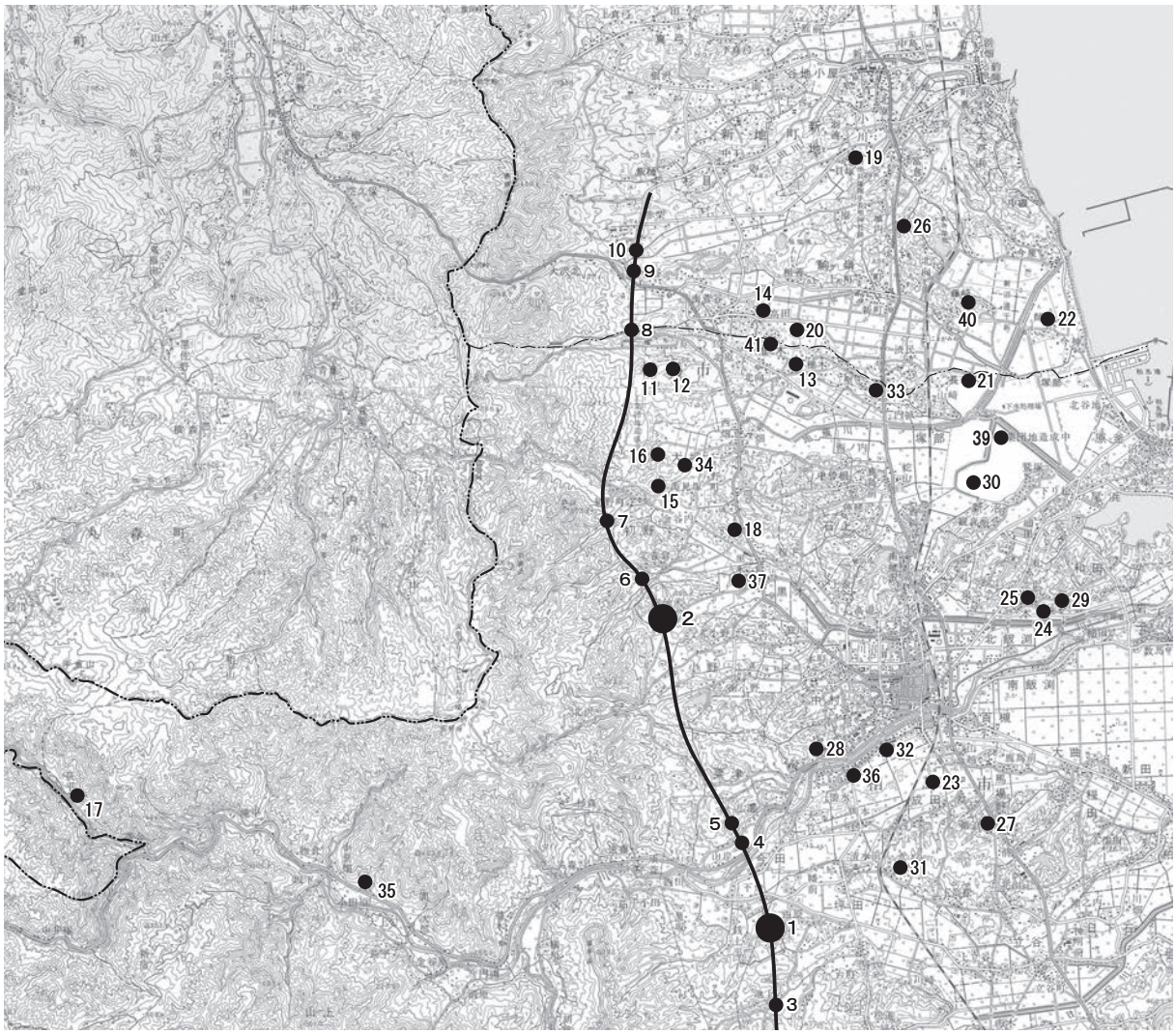
西原遺跡は塩手山の東麓，宇多川の南段丘縁部に立地する。宿仙木Ａ遺跡は天明山の東麓，小泉川支流の御門川北の丘陵上に立地する。（三浦・西澤）

第３節　歴 史 的 環 境

相馬市は古くは宇多郡に属し，鎌倉時代から明治維新まで約500年間に及び相馬氏の統治下にあり，近世においても国替えがなく，江戸時代には相馬中村藩の城下町として栄えてきた。このような環境が，無形民俗文化財に登録された相馬野馬追いや，現在においても継承されている古式武術などが繁栄する礎となっている。

戦後の各種機関による発掘調査のほか，『相馬市史』の編集や『福島県遺跡地図』作成，近年は相馬地域開発や一般国道６号相馬バイパス・一般国道113号バイパス・相馬第二用水・阿武隈東道路・常磐自動車道などの建設に伴う発掘調査が行われ，遺跡を通して当地における人々の営みがおぼろげながら見え始めた地域である。

相馬市における旧石器時代の遺跡は，椎木地区の段ノ原Ａ遺跡(11)・段ノ原Ｂ遺跡(12)や北原遺跡(13)からナイフ形石器などが出土しているのが確認されている。しかし，宇多川流域などで現段階での確認例はない。新地町三貫地遺跡(14)では，石器製作跡が見つかっている。流紋岩製で，ナイフ形石器や彫器などが出土している。石刃技法を用いた接合資料も認められた。



0　5km
(1/100,000)

図３　周辺の遺跡位置図

表２　周辺の遺跡

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代
1	西原遺跡	相馬市坪田字西原	散布地	縄文・古代・近世
2	宿仙木Ａ遺跡	相馬市黒木字宿仙木	集落跡	縄文・古代・近世
3	山田遺跡	相馬市坪田字山田	散布地	縄文・古代
4	明神遺跡	相馬市山上字明神・広瀬	集落跡	縄文・古代
5	山岸硝庫跡	相馬市山上字山岸	硝庫跡	古代・近世
6	南萱倉遺跡	相馬市初野字南萱倉	窯跡	近世
7	払川遺跡	相馬市初野字払川・羽黒	散布地	縄文時代
8	白子下Ｃ遺跡	新地町駒ヶ嶺字白子下・猪コロバシ，相馬市椎木字椎木川	集落跡・街道跡	縄文・古代・近世
9	鴻ノ巣遺跡	新地町駒ヶ嶺字鴻ノ巣	散布地	縄文・古代
10	赤柴前遺跡	新地町駒ヶ嶺字赤柴山・鴻ノ巣・大沢北	散布地	縄文・古代
11	段ノ原Ａ遺跡	相馬市椎木字段ノ原	集落跡	旧石器・縄文
12	段ノ原Ｂ遺跡	相馬市椎木字段ノ原	集落跡	旧石器・縄文・古代
13	北原遺跡	相馬市椎木字北原	集落跡	旧石器・古代
14	三貫地遺跡	新地町駒ヶ嶺字三貫地西	集落跡	旧石器・古代
15	山田Ｂ遺跡	相馬市大坪字山田	集落跡・製鉄跡	縄文・古代
16	猪倉Ｂ遺跡	相馬市初野字猪倉	集落跡・製鉄跡・窯跡	縄文・古代
17	荻平遺跡	相馬市山上字荻平	集落跡	縄文・弥生・古代
18	馬見塚遺跡	相馬市黒木字薬師堂・芹谷地	集落跡	縄文・古代
19	新地貝塚	新地町小川字貝塚西	貝塚	縄文
20	三貫地貝塚	新地町駒ヶ嶺字田丁場	貝塚	縄文
21	大森Ａ遺跡	相馬市長老内大森	包含層・水田跡	縄文・古代～近世

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代
22	双子遺跡	新地町駒ヶ嶺字双子	包含層・製塩跡	縄文・古代・近世
23	藤堂塚遺跡	相馬市成田字藤堂塚	散布地	縄文・弥生
24	柴迫古墳群	相馬市和田字柴迫・西和田	集落跡	弥生・古墳・古代・近世
25	柴迫Ａ遺跡	相馬市和田字柴迫	集落跡	弥生・古墳・古代
26	武井地区遺跡群	新地町駒ヶ嶺字向田・洞山，今泉字武井	製鉄跡・集落跡	弥生・古代
27	福迫横穴墓群	相馬市馬場野字福迫	古墳	古墳
28	西山横穴墓群Ａ～Ｃ	相馬市西山字西山	古墳	古墳
29	本笑和田横穴墓群	相馬市本笑字馬場添・西和田	古墳	古墳
30	古川尻Ａ遺跡	相馬市塚部字古川尻	集落跡	古墳
31	高松横穴墓群	相馬市坪田字高松	古墳	古墳
32	黒木田遺跡	相馬市中野字明神前	郡衙関連	古墳・古代
33	善光寺遺跡	相馬市塚部字善光寺	窯跡	古代
34	山田Ａ遺跡	相馬市大坪字山田	製鉄跡	古代
35	小豆畑遺跡	相馬市山上字小豆畑	生産遺跡	中世～近世
36	熊野堂館跡	相馬市中野字堂ノ前	城館跡	中世
37	黒木城跡	相馬市黒木字西館・中樋・持添	城館跡	中世
38	相馬中村城跡	相馬市中村字北町	城館跡	中世・近世
39	古川尻Ｂ遺跡	相馬市塚部字古川尻	製塩跡	近世
40	山中Ｂ遺跡	新地町駒ヶ嶺字山中	製塩跡	近世・近代
41	藩境土塁	相馬市椎木字北原～長老内字大森	土塁	近世

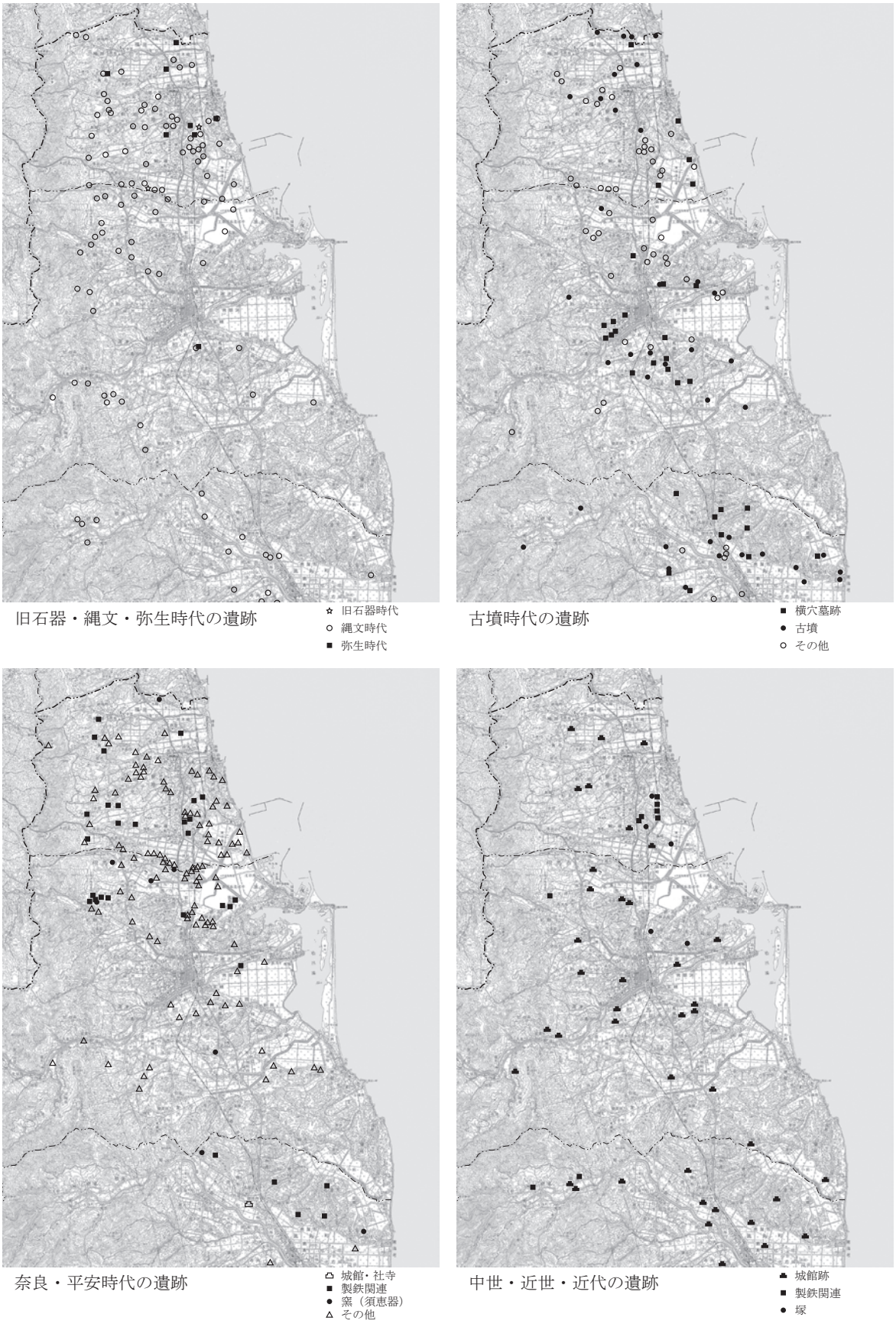


図４　相馬市周辺の時代別遺跡分布図

縄文時代になると遺跡は増加する。これらの遺跡は丘陵地や段丘上に立地している。西原遺跡（１）においては条痕文系土器群が出土している。早期末葉から前期前葉にかけては，主に相馬地域開発により大きな成果が認められている。段ノ原Ｂ遺跡(12)，山田Ｂ遺跡(15)，猪倉Ｂ遺跡(16)などそれぞれ100軒以上の竪穴住居跡が検出され，当地域での大規模な集落の様相が見てとれる。相馬市西部山上地区の荻平遺跡（17）では早期末葉から中期初頭，さらに晩期の集落跡が認められ，山間部における集落形成の様相をうかがえる資料である。西原遺跡と同一段丘状に立地する山田遺跡(３)においても前期前葉の時期の竪穴住居跡が確認されている。宿仙木Ａ遺跡（２）では前期中葉のまとまった資料が認められた。中期初頭には前述した荻平遺跡のほかに，山上の明神遺跡（４）においても認められる。馬見塚遺跡(18)では，複式炉を有する集落跡が認められている。後期には貝塚が形成されるようになり，学史上著名な新地町新地貝塚(19)や三貫地貝塚(20)がある。長老内地区の大森Ａ遺跡(21)や新地町双子遺跡(22)などの低湿地に立地する遺跡では，櫂状木製品や丸木弓，丸木舟などの木質遺物が豊富に出土している。

弥生時代には明確な遺構を伴う調査事例は少ない。成田地区の藤堂塚遺跡(23)では前期の再葬墓が確認されている。集落跡としては柴廹古墳群(24)・柴廹Ａ遺跡(25)・荻平遺跡の他，新地町ではあるが武井地区遺跡群(26)があげられる。

古墳時代の遺跡として福廹横穴墓群(27)・西山横穴墓群Ａ～Ｃ(28)・本笑和田横穴墓群(29)などの横穴墓は多数認められている。福廹横穴墓群からは金銅製双龍環頭大刀柄頭が出土している。横穴墓の多くは，宇多川流域に立地している。６世紀後半頃と考えられる坪田地区の高松古墳群(31)の１号墳は人物・円筒埴輪のほかに馬具，金銅製承盤付椀・雲珠が出土している。集落跡としては，塚部地区の古川尻Ａ遺跡(30)が著名である。湿地帯に立地する遺跡で，試掘調査により平地式の住居跡が倒壊したままの状態で埋没していることが予測されている。大森Ａ遺跡からは該期の水田跡が認められ，馬鍬などの木製農具が多数出土している。

古代の代表的な遺跡としては，宇多郡衙または寺院に比定されている中村地区の黒木田遺跡(32)がある。単弁八葉蓮華文軒丸瓦や複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。これら瓦の主な供給源としては，塚部地区の善光寺遺跡(33)がある。瓦陶兼用窯で10基の窯跡を確認している。また，製鉄関連遺跡では，市内では山田Ａ遺跡(34)・猪倉Ｂ遺跡，新地町では武井地区製鉄遺跡群が存在する。製錬から精錬・鍛冶・鋳造まで一貫して行われた痕跡が認められている。出土した鋳型から，香炉や梵鐘などの仏具を製作していたことがわかっている。集落跡としては，明神遺跡において８世紀代のＬ字に配置された掘立柱建物群が発見されており，同時期に宇多川流域に立地する黒木田遺跡との関連が想定されている。山上地区の山岸硝庫跡（５）では西原遺跡と同様に古代の木炭焼成土坑が確認されると同時に，丘陵頂部から９世紀後半から10世紀前半頃の土師器杯のみが出土したことから，祭祀に関連する遺物であると考えられている。宿仙木Ａ遺跡では９世紀前半から中頃の小規模な集落の様子が認められている。

中世から近世までは，相馬氏の支配下に置かれた。文治５(1189)年の源頼朝の「奥州征伐」の功に

より，下総国相馬郡の千葉氏(後の相馬氏)が所領として拝領したことに始まる。中世に属す遺跡として，半地下式の木炭焼成土坑が認められた山上地区の小豆畑遺跡(35)がある。南北朝から戦国時代には戦が続く不安定な情勢であり，各地に城館が造られるようになる。中野地区の熊野堂館跡(36)や黒木城が南朝方の拠点である霊山城の搦手として築城された。さらに，山上・小野地区の丘陵上には多くの館跡が認められる。伊達氏との争乱が続いていたが，天正18(1590)年には小田原の役の功績により豊臣秀吉から宇多・行方・標葉の３郡を安堵されている。しかし，慶長５(1600)年の関ヶ原の戦いには，不参して徳川家康により一旦は改易されたが，説得を試み本領が安堵されることとなった。以後，江戸城の普請などを受けざるを得なくなり，藩の財政は逼迫していった。

慶長16(1611)年，中世以来の居城であった小高城から中村城(38)へと居を移し，城下の整備を開始する。以後中村城は相馬６万石，13代ににわたる260余年の居城となった。中村城は，一部に石垣を有するものの土塁と枡形，水堀を利用した環郭式平山城である。城下では藩の御用窯で現在も残る相馬駒焼が，陶工田代清治右衛門により操業されている。民窯としては，館の下焼・小野相馬焼が製作されている。新沼浦においては，塚部地区の古川尻Ｂ遺跡や新地町山中Ｂ遺跡の調査により，多数の灌水槽が設けられ入浜式製塩による製塩業が盛んであったことが判明している。さらに製造された塩は，通称「塩の道」と呼ばれる街道を抜け，二本松藩や会津藩などに運ばれ消費されていた。宇多川北の丘陵に穴を穿ち造られた山岸硝庫跡は，中村藩の火薬庫として『奥相誌』に記述がある。平成15・18年度に発掘調査が行われ，当時の大規模な土木工事の状況が確認された。また，現在の相馬市と新地町の境界には，藩境土塁(41)や塚が部分的に残っており，新地町の白子下Ｃ遺跡では藩境土塁に続くと考えられる道路跡と切通しが調査されている。

徳川政権下において幕府の賦役，天明・天保の飢饉などを受け疲弊した相馬中村藩は，文化の厳法・二宮仕法の導入・浄土真宗の移民政策により藩財政の建て直しを図ることとなる。坪田地区は最初に二宮仕法を実施した村として記録が残っており，『坪田村絵図』には安政２(1855)年に実施された御仕法の様子が見て取れる。また，坪田地区と同様に山上地区や粟津地区では，宇多川から取水する両堰と呼ばれる用水路を構築し，新田開発を計っている。この用水路は現在においても一部で使用されている。浄土真宗の移民の多くは黒木・小野・粟津地区に居住し，子孫は現在も数多く住んでいる。

明治４(1871)年の廃藩置県により中村藩は中村県となり，明治９(1876)年に福島県に属した。昭和29(1954)年には相馬市が成立し，現在に至っている。　　(西澤・三浦)

引用・参考文献

ⅰ相馬市　1969　『相馬市史』第４巻(奥相誌)
ⅱ宮城県　1988　「表層地質図」『土地分類基本台帳　角田』
ⅲ福島県　1989　「表層地質図」『土地分類基本台帳　相馬中村』

第１編　西原（にしはら）遺跡（１・２次調査）

遺跡記号	ＳＭ－ＮＨ
所在地	相馬市坪田字西原
時代・種類	縄文時代－狩場・散布地，平安時代－生産地 近世－宅地・墓地
調査期間	１次調査　平成18年９月15日～12月14日 ２次調査　平成20年９月24日～12月11日
調査員	１次調査　山岸英夫・淺間　陽 ２次調査　吉田秀享・笠井崇吉・西澤正和・本田拓基

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

西原遺跡は相馬市坪田字西原に所在する。遺跡の所在する坪田地区は，相馬市の中心地である中村地区の南西部に位置し，地区の東側を南北にＪＲ常磐線が走る。また，南北に主要地方道相馬・浪江線，東西に県道山上・赤木線が走り，地区のほぼ中央で交差している。

遺跡の所在する坪田字西原地区は，坪田地区の中でも西端に位置し，西側は今田地区と接している。地形的には，宇田川南岸沿いに西から東に延びる丘陵帯の東端付近にあたり，丘陵北側に広がる段丘面より20mほど標高が高い。遺跡は，この西原地区西側の丘陵平坦面上に位置し，遺跡のほぼ中央を東西に市道 474号線が走っている。現況は主に，果樹園・畑地・牧草地として利用されており，宅地・山林は少ない。

調査対象範囲は遺跡の東側にあたり，地形的には丘陵平坦面から北側斜面部にかけてである。調査区内の標高は43m前後で，北方向と南東方向に緩やかに傾いている。現況は畑地・牧草地として利用されているほか，北部は孟宗竹を主体とする山林となっている。（山　岸）

第２節　調 査 経 過

西原遺跡は，平成10年度に福島県教育委員会が実施した常磐自動車道建設工事に関わる埋蔵文化財包蔵地の分布調査で確認された遺跡で，平安時代の散布地として登録されている。平成15年度には試掘調査が実施され，工事区内の7,900㎡の範囲について保存が必要とされた。常磐自動車道建設工事の進捗に伴い，保存範囲の発掘調査が必要となり，平成18年度と20年度の２次に分けて，保存範囲の発掘調査が実施された。

１次調査

平成18年度，前述の試掘調査によって確定された保存範囲のうち，南側の2,700㎡の範囲を対象に発掘調査を実施した。調査に際しては，調査区を南北に分断して市道474号線が走っているため，便宜的に市道を境として北区・南区と仮称することとした。

現地調査は９月15日から開始した。まず，駐車場・現地連絡所などの造成・設置や発掘器材類の搬入，環境整備などを行うと共に，重機による表土除去を南区から着手した。９月26日には作業員を導入し，南区の表土剥ぎの終了部分から人力による残土処理作業を開始した。

10月上旬になって南区の表土剥ぎが終了したため，南区全域にわたって残土処理作業と遺構検出作業に入った。10月中旬には北区の表土除去も終了し，調査区全域での残土処理・遺構検出作業を行った。また，南区では遺構検出作業も順調に進み，縄文土器片・土師器片の遺物が散発的に出土

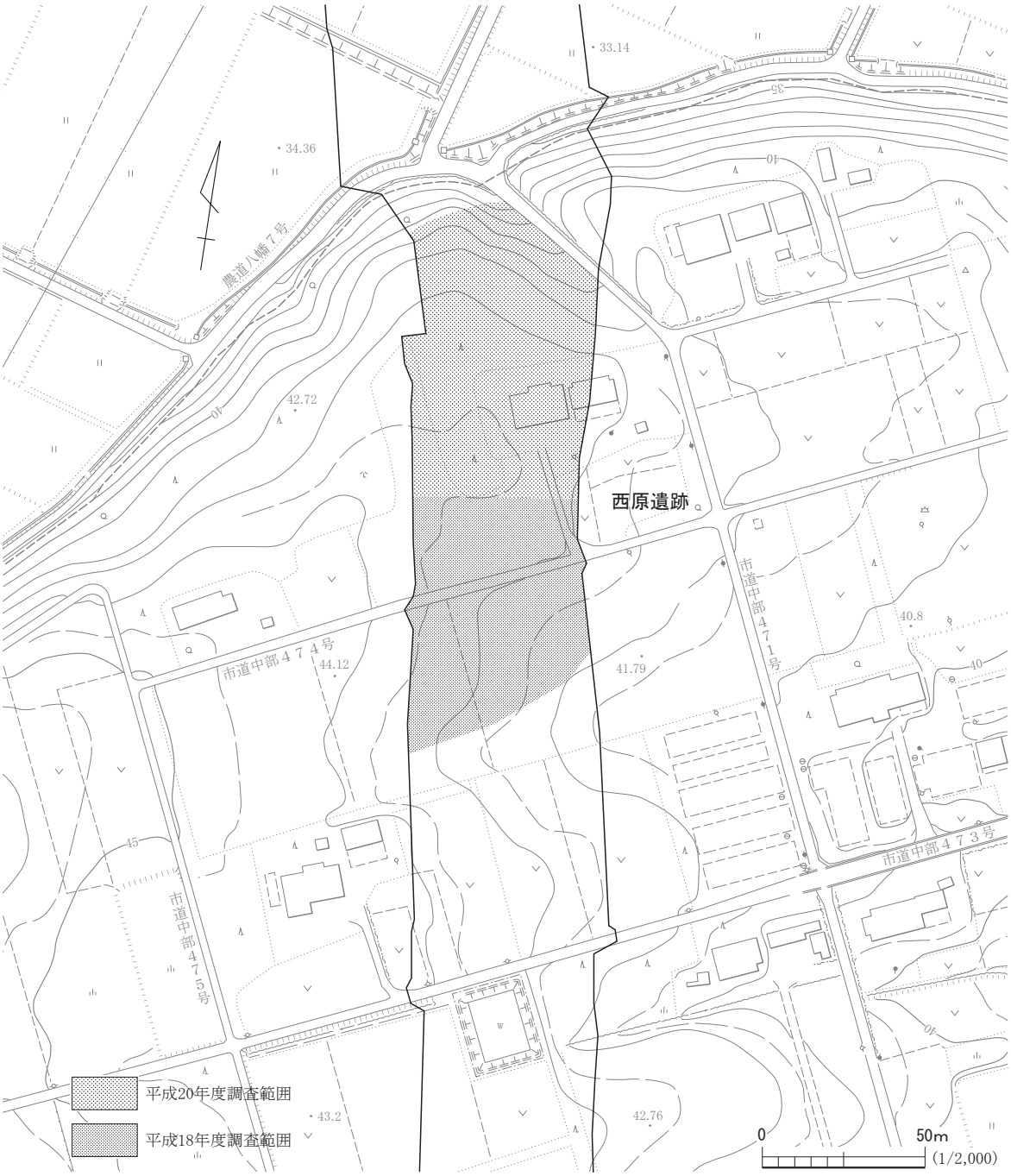


図１　遺跡の地形と調査範囲

し，平安時代の土坑なども検出した。同月下旬からは検出遺構の精査・記録作業を中心とし，調査区全域での遺構検出作業を進めた。

11月に入ると天候にも恵まれ，作業は順調に進み，同月中旬には南区での調査をほぼ終了することができた。調査は北区での遺構検出と精査・記録を中心として進められ，比較的多くの遺物が出土したものの，果樹園として使われていた際の撹乱が激しく，遺構はほとんど検出できなかった。

11月20日には北区での作業もほぼ終了し，同月22日に調査区内の地形測量や遺跡全景撮影などの補足調査を行い，実質的な発掘調査を終了した。

その後，調査区内の埋め戻しと撤収作業を12月５日までに終了し，同月14日に福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団から東日本高速道路東北支社相馬工地事務所へ現地の引渡しが行われ，１次調査を終了した。（山　岸）

２次調査

平成20年度，１次調査で実施できなかった保存範囲北部の5,200㎡を対象に行った発掘調査が２次調査である。２次調査開始に際して問題となったのは，常磐自動車道路線内の樹木の伐採から数年を経ていたため，調査範囲内には孟宗竹が群生し，表土掘削の重機の進入を阻んだことである。このため，発掘調査に先立つ９月中旬から伐採作業を開始し，これと平行して駐車場・現地連絡所などの造成と設置を行い，発掘作業員の受け入れ態勢を整えた。

９月24日，竹林の伐採作業に目処がついたことから，重機による表土除去を調査区北端部から着手した。翌25日からは15人の作業員を導入し，発掘器材類の搬入整理，調査区境の柵設置などの環境整備を行い，重機による表土剥ぎが終了した部分から随時人力による遺構検出作業を開始した。また同じ頃，測量会社に委託した測量基準杭の打設作業も行われ，遺物の採り上げが可能になった。

10月に入ると，重機による表土除去がより南部へ進み，人力による遺構検出作業の可能な面積が広がったことで，７日に24人の作業員を増員して遺構の検出作業と精査・記録を本格化させた。16日には，重機による表土除去が終了した。遺構検出が進んだことで，調査区の北部を中心に平安時代の木炭焼成土坑が群集することが明らかとなり，25日には遺跡の案内人ボランティアによる遺跡の現地公開を実施した。

11月に入ると，遺構検出・精査・記録作業が調査区西部に及び，焼土遺構を中心に縄文時代早期の遺物が集中する範囲が存在することが明らかになった。また，北部ほどではないが，木炭焼成土坑が多数存在することが明らかになった。11月下旬には調査区全域の残土処理と遺構検出作業が一段落し，終了にむけて調査の追い込みに入った。

12月２日には，ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。また，調査区の南部で新たに検出した近世の所産と考えられる建物跡の精査・記録作業に重点を移すとともに，地形測量を実施し，11日には実質的な発掘調査を終了することができた。同日福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団から東日本高速道路東北支社相馬工地事務所へ現地の引渡しが行われ，12月17日に発掘器材の搬出，18・19日に現地連絡所の解体撤去を確認して，西原遺跡に関わるすべての調査を終了した。（笠　井）

第３節　調 査 方 法

調査にあたっては，まず，遺構・遺物のおおまかな出土位置を表示するための方眼(グリッド)を西原遺跡の保存範囲全域に設定した。グリッドの設定にあたっては20ｍ四方の方眼を基本とし，必要に応じて細分が可能な大グリッドとした。グリッドの呼称には，北から南に１・２…と算用数字を，西から東にＡ・Ｂ…とアルファベットを用い，これを組み合わせてＡ１・Ｂ２と呼んだ。

調査は重機を使用して表土部分を除去したが，それ以外の堆積層の除去はすべて人力によった。堆積層の掘り込みは各グリッドの土層ごとに行い，併せて遺物の採り上げと記録を行った。

遺構の調査にあたっては，遺構検出面と掘り込まれている最終面までが，調査区内の基本土層とどのような関係にあるかに留意し，可能な限り断面図に記録することとした。また，遺構の遺存状況や特性に合わせ，適宜土層観察用の畔を残し，土の堆積状況や遺物の出土状態に留意しながら精査と記録に努めた。

遺構の個別番号は，遺構の所属年代に関わらず，遺構の種別ごとに連続した番号とし，検出・精査した順につけた。また，同一遺構の造り替えと判断したものについては，遺構番号にアルファベットａ・ｂを付加して遺構名とした。

遺構の記録については，１次調査ではグリッドを１ｍあるいは50㎝四方の方眼に細分し，その交点を測点として用い，２次調査では後述する国土座標に基づく測量基準杭を基点としたトータルステーションを使用して作図した。測点の表記には，国土座標（平面直角座標系）をそのまま使用した。Ｘは経線(縦軸)，Ｙは緯線(横軸)を表し，座標値はそれぞれ北および東方向に増加する。

基本土層については，調査区全体を通観して色調・成分・包含遺物などから区分した。土層番号にはローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを用い，遺構内堆積土については基本土層と区別するため算用数字１・２・３で表記した。

各遺構および土層の図化に際しては，1/20の縮尺を原則としたが，遺構の規模・性格に合わせて1/10の縮尺も適宜使用した。また，遺跡基底面の地形図は1/200の縮尺で作成した。

発掘現場での写真の撮影は，35㎜判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用し，両者同一被写体で撮影を行った。

遺構については土層断面や遺物の伴出状況，完掘状況などを，遺物については出土状況を中心として撮影した。また，遺跡の空中写真撮影ついては，ラジコンヘリコプターにより，35㎜判のリバーサルフィルム，６×７判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用し，合わせてデジタル写真データの撮影も実施した。

これらの調査記録および出土遺物については，報告書刊行後に当事業団の定める基準に従って整理を行い，福島県教育委員会へ移管した後，福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

（山岸・笠井）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

遺跡の概要（図２，写真１～３）

今回の調査で検出した遺構は，掘立柱建物跡１棟，柱列跡２カ所，土坑62基（造り替えを含めると64基），溝跡６条，井戸跡２基，焼土遺構２基，集石遺構２基，性格不明遺構３基である。遺構の分布は調査区北部に木炭焼成土坑が集中し，中央東側に近世の遺構群があり，南部はまばらである。時期的には焼土遺構および落し穴が縄文時代早期，木炭焼成土坑が平安時代，掘立柱建物跡と柱列跡・井戸跡・溝跡が近世と考えられ，遺構からは３時期の変遷が想定できる。

出土した遺物は，縄文土器片2,211点，土師器片171点，須恵器片146点，陶磁器類264点，羽口１点，石器22点，古鏡を含む銅製品３点，弾丸１点，古銭80枚以上が出土した。これら遺物は調査区全体から出土しているが，耕作などによる撹乱のためＬＩから出土したものが多く，基本土層との関係が明確なものは少ない。また，出土遺物の主体である縄文土器は，縄文時代早期末葉～晩期の各時期にわたっている。これら遺物の分布と特徴については「本章　第７節」で詳しく報告する。

基本土層（図３，写真４）

今回の調査区は，耕作や撹乱が基底層であるＬⅢにまで及んでいる部分が多く，本来の堆積状況を示す部分は極めて少ない。調査区内の土層観察にあたっては，調査区内の各地点で各層の特徴や遺構の検出状況・包含遺物などから対応させ３層に大別し，さらに中間の２層を色調の違いからａ・ｂに２細分したため計４層となった。また，基本土層の区分・番号については試掘調査時の層位区分を踏襲し，対応させた。以下，各層の特徴や遺構・遺物の関係について述べていく。

ＬＩは表土・耕作土などで，厚さは20～50㎝前後である。調査区内では，北部が山林，中央部が畑地以前に果樹園，南部が畑地として利用されていたため部分的に色調が異なり，黒色～黄褐色と一定していない。部分的に細分が可能であるが，ＬＩとして一括した。また，縄文時代～近世の遺物を比較的多く含むが，耕作などで再包括されたものである。

ＬⅡは調査区北部の斜面部のみに堆積する黒褐色土を基調とするＬⅡｂと，調査区全域で確認できる褐色土を基調としたＬⅡａに細分できる。いずれも粘性が強く，主に縄文時代前期後半の遺物を包含するが，包含密度は薄い。また，今回の調査区では平安時代の土坑，近世の井戸跡が本層上面から掘り込まれているのを確認している。

ＬⅢは黄褐色の色調の粘質土で，本遺跡の基盤層である。砂と小礫を含む無遺物層で，堅く締まっている。遺跡の基底面以下と判断し，細分はしていない。（山岸・笠井）

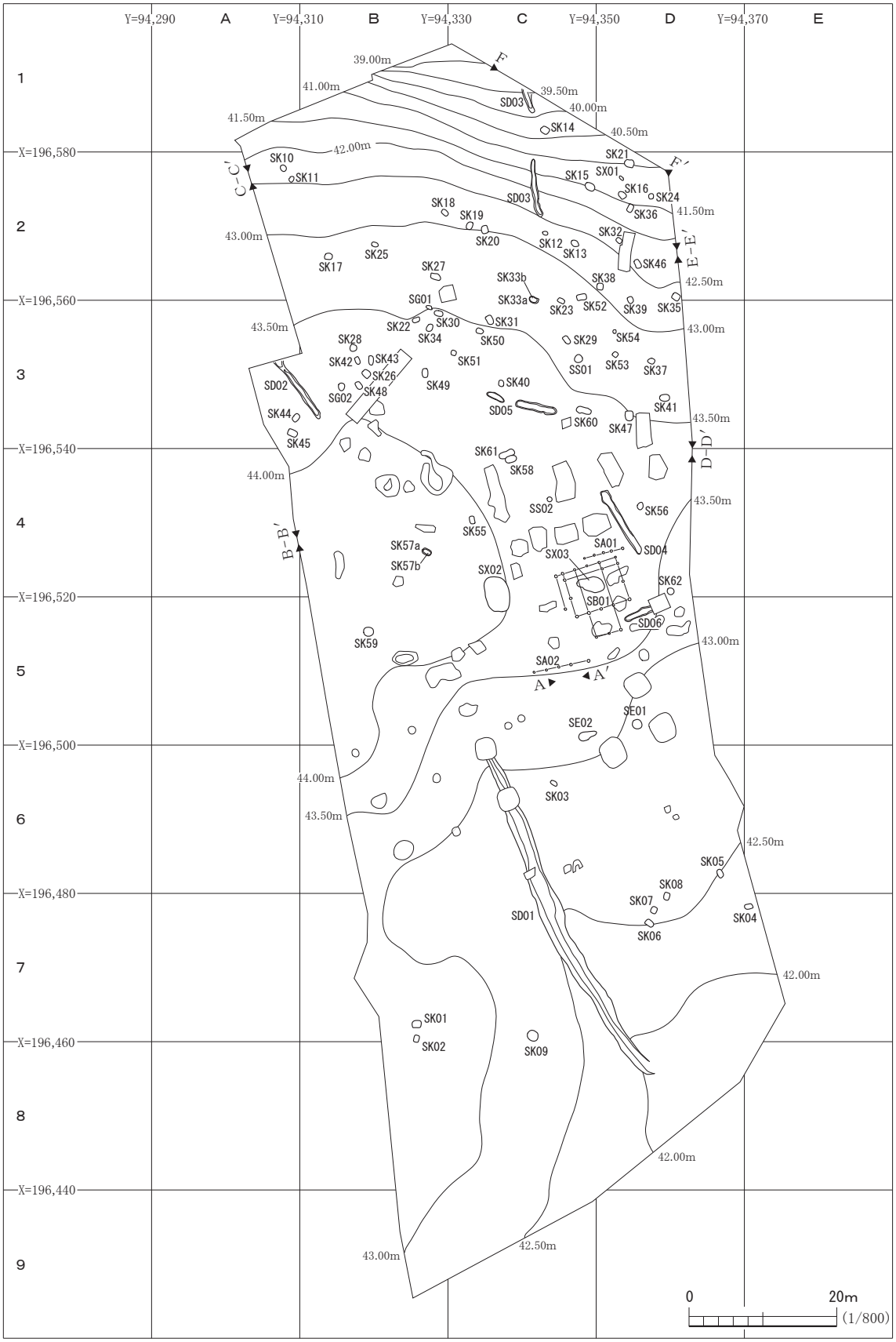


図２　遺構・グリッド配置図

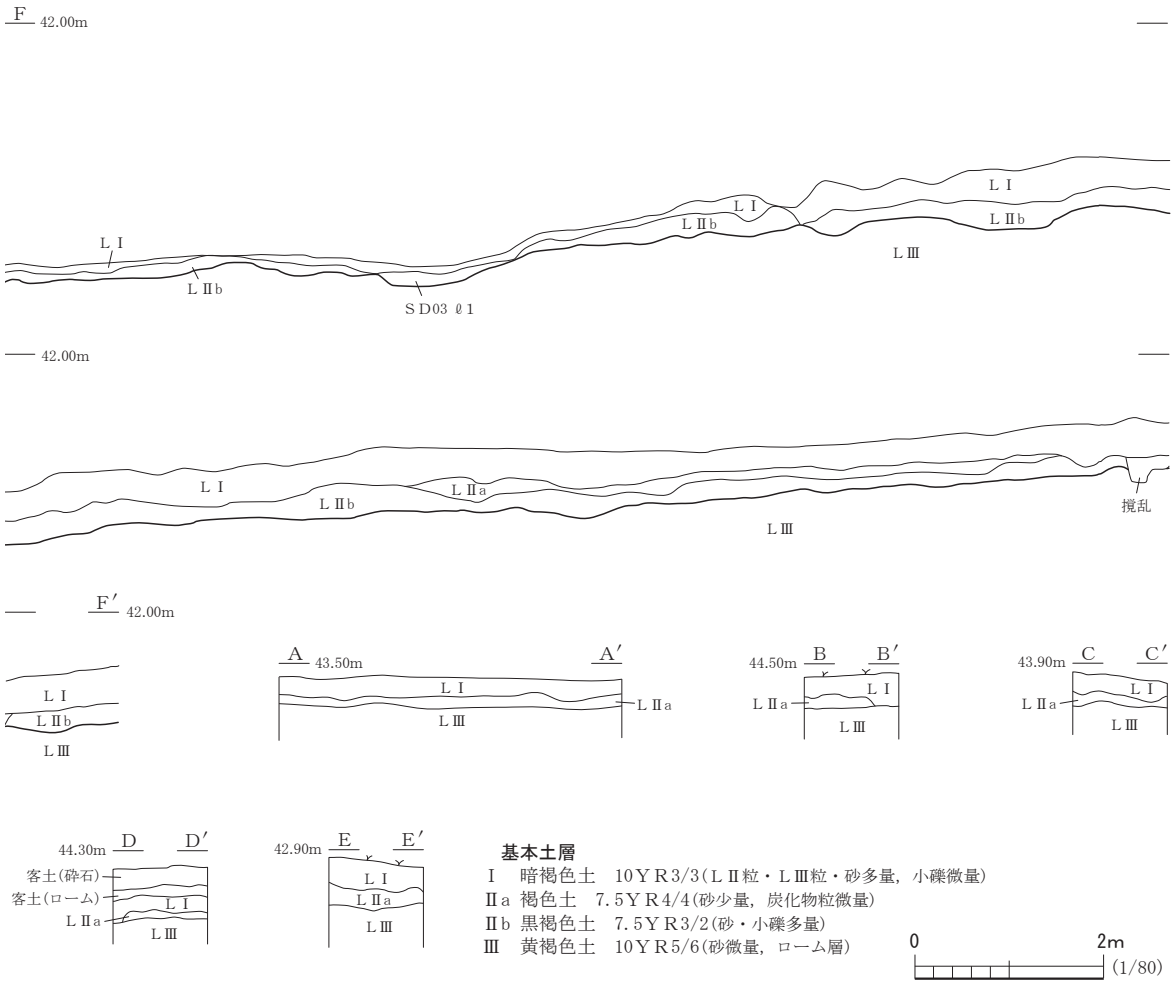


図３　基本土層

第２節　掘立柱建物跡と周囲の関連遺構

西原遺跡では調査区中央東側のＣ４・５，Ｄ４・５グリッドを中心に近世の掘立柱建物跡１棟と，２カ所の柱列跡および小穴群を検出した。これらの遺構は互いに関連して存在したと考えられるため，本節で一括して報告する。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図４，写真５・６）

Ｃ４・５，Ｄ４・５グリッドの境界部分に位置する。遺構はＬⅠ直下のＬⅢ上面で検出した小穴群のうち，規則的な長方形の配置が見出せる14個の柱穴（Ｐ１～14）と，掘形の規模および位置関係から，前述した14個の柱穴と一連の建物を構成していたと考えられる６個の柱穴（Ｐ15～20）を１棟の建物として認識したものである。３号性格不明遺構と重複するが，新旧関係は不明である。建物は凸形の平面形状で，主屋の南側に方形の張り出しをもち，北側および西側に縁側が付属する間取

りを想定した。

建物の中心となる主屋は，Ｐ６～14・20からなる桁行４間，梁行２間の東西方向に長辺をとる長方形をしている。柱配置から考えると，北辺にあたるＰ14－20間にあと２個ほど柱穴の存在が推測されるが，検出することはできなかった。主屋の規模は，北側柱列のＰ14－６間が7.50ｍ，東側柱列のＰ６－８が5.05ｍ，南側柱列のＰ８－12間が7.55ｍ，西側柱列のＰ12－14間が5.15ｍを測る。建物の方位は南辺で測るとＮ71°Ｅを示す。主屋の柱間寸法は桁行と梁行で違いが認められ，桁行側は西側３間が約175㎝，東側１間のみが約230㎝，梁行側は約255㎝で，桁行側に比べ梁行側の柱間寸法が長い。

主屋の南側にはＰ９－11に対応する部分にＰ17－19が主屋の南辺に平行して並んでいる。Ｐ17－19間は約3.5ｍあり，Ｐ17－19の線と主屋南辺との距離も約3.5ｍであることから，主屋の南側にほぼ正方形の空間が存在することとなる。この空間の床面は固く踏み締まっており，土間のような空間であったことが想定される。

主屋の北側には南側柱列に一致する柱間を持つ柱列Ｐ１－５があり，主屋北辺との間に長さ約7.50ｍ，幅約85㎝の細長い空間を形成する。また，Ｐ１－５の西側延長線上にＰ15があり，Ｐ15から南方に直角に折れて主屋西辺と平行する線上にＰ16が位置する。両柱穴を結んだ線と主屋西辺との間には，長さ約4.55ｍ，幅約１ｍほどの細長い空間を想定できる。この２カ所の細長い空間を主屋の北側および西側にＬ字形に取り付く縁側と推定したが，西側に関しては柱間が主屋のものより長く，柱配置上もズレがあるため，断定は避け可能性の指摘に留めておく。

個々の柱穴に目を向けると，柱穴掘形の平面形は円形および楕円形で，規模は最小のＰ５が長軸長29㎝，短軸長25㎝，検出面からの深さ13㎝，最大のＰ11が長軸長45㎝，短軸長40㎝，検出面からの深さ32㎝を測り，おおむね直径が30～40㎝，深さ30㎝前後のものが多い。

掘形内堆積土は，ℓ１～５に分かれる。ℓ１～３は，掘形内の大半を満たす堆積土である。ℓ１はにぶい黄褐色土で，主屋および主屋北側の柱列を構成するＰ２～13・20とＰ16で認められる。ℓ２は暗褐色土で，主屋の北西側のＰ１・２・14および主屋南側の柱列Ｐ17・18で認められる。ℓ３は黒褐色土で，建物北西隅のＰ15と南東隅のＰ19で認められる。Ｐ２の堆積状況からℓ１に関しては自然堆積と判断できたが，ℓ２・３については自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。ℓ４・５は，根石の下に堆積する暗褐色および褐色土で，ℓ４はＰ６～９・12で，ℓ５はＰ10・11・13・14で認められる。根石固定のための充填土と考えられる。

主屋の東西南面にあたるＰ６～Ｐ14の底面には，柱を支えた根石が据えられていた。根石の設置状況は４種類認められた。１種類目はＰ６のみに認められ，柱穴の底面に４～10㎝ほどの割石を複数敷き詰めたものである。２種類目はＰ７～９・11・13・14で認められ，20㎝ほどの扁平な自然石を柱穴の底面中央に置いているものである。３種類目はＰ10のみで認められ，20㎝弱の割石２個を柱穴の底面に置いているものである。４種類目はＰ12のみで認められ，柱穴の底面に４～10㎝ほどの複数の割石と20㎝ほどの扁平な割石を敷き詰めたものである。

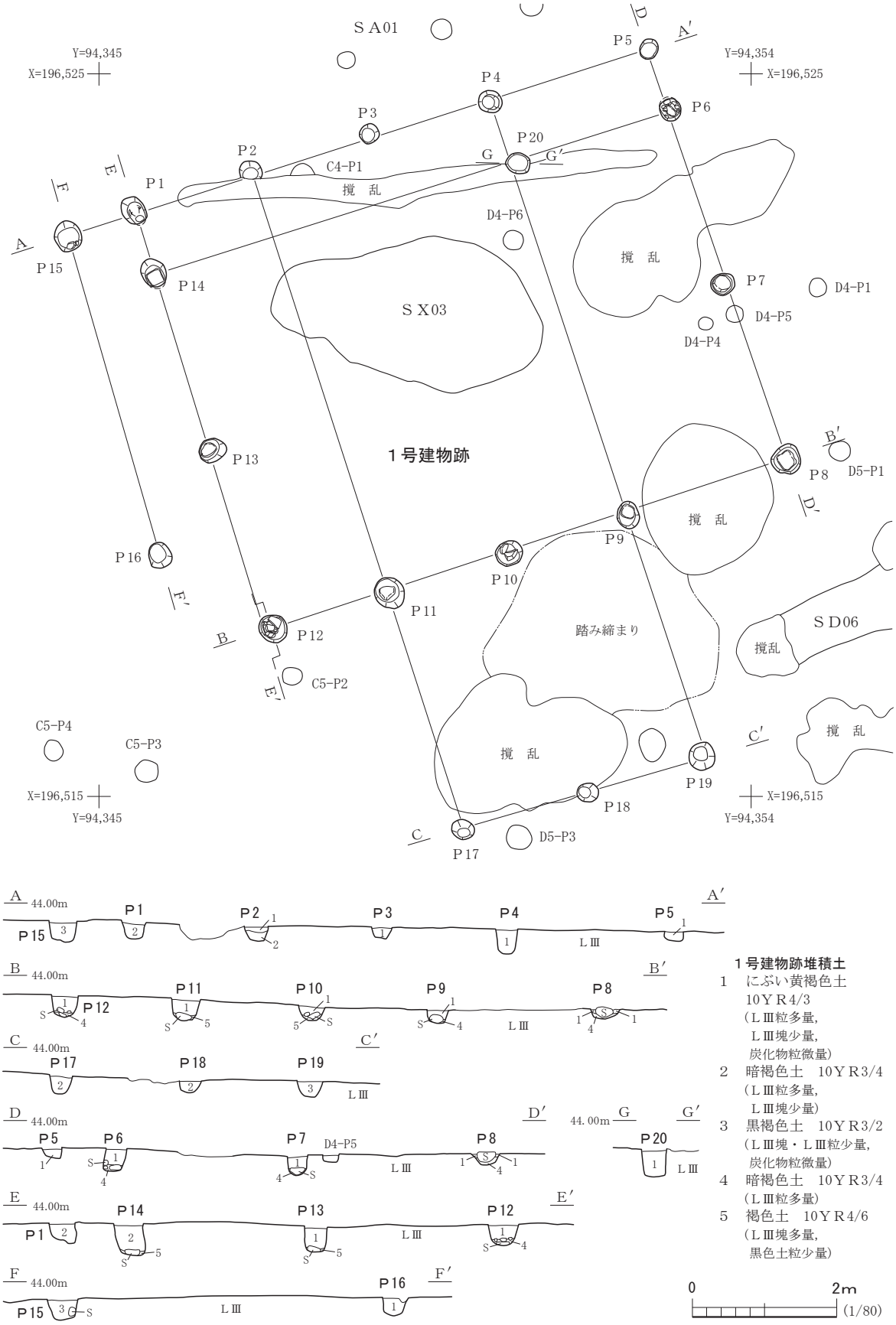

ＳＡ01
Y=94,345
X=196,525
Y=94,354
X=196,525
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
C4-P1
D4-P6
D4-P1
D4-P5
D4-P4
D5-P1
D5-P3
C5-P2
C5-P4
C5-P3
ＳＸ03
１号建物跡
撹　乱
踏み締まり
ＳＤ06
撹乱
X=196,515
Y=94,345
X=196,515
Y=94,354
44.00m
ＬⅢ
１号建物跡堆積土
1　にぶい黄褐色土
10ＹＲ4/3
（ＬⅢ粒多量,
ＬⅢ塊少量,
炭化物粒微量）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅢ粒多量,
ＬⅢ塊少量）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（ＬⅢ塊・ＬⅢ粒少量,
炭化物粒微量）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4
（ＬⅢ粒多量）
5　褐色土　10ＹＲ4/6
（ＬⅢ塊多量,
黒色土粒少量）
0
2m
(1/80)

図４　１号建物跡

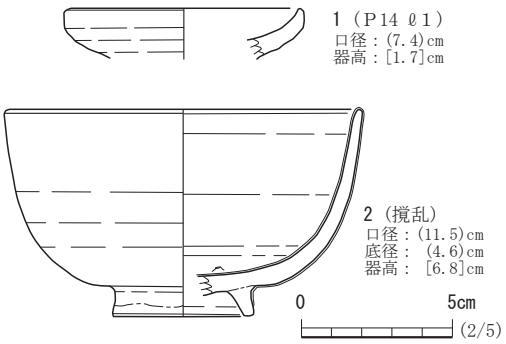


図５　１号建物跡出土遺物

遺　　物（図５，写真22）

本遺構から出土した遺物は土師質土器２点，陶器１点である。このうち図化できた２点を掲載する。

１はＰ14から出土した土師質土器で，ロクロ成形の小皿である。口縁端部が垂直に立ち上がる器形をしており，焼成は軟調で脆く，色調は橙色で胎土に白色の針状物質を含む。内面にススが付着することから灯明皿として使用されたと考えられる。

２は陶器丸椀でＰ18を壊している撹乱から出土した。18世紀後半～19世紀前半の在地産の製品である。焼成は堅緻で，高台内面を除く全面に施された灰釉の発色は良く，水色に近い色調で光沢を放っている。

ま と め

本遺構は，桁行４間，梁行２間の主屋を中心に，南側に土間を伴う張り出し部，北側および西側に縁側の巡る建物と推定できる。主屋の柱穴には根石が認められ，重い屋根を支えていたことがうかがわれる。遺構の年代は，Ｐ14出土遺物および周囲の撹乱から出土する遺物の年代が，18世紀後葉から19世紀前葉の所産に限られるため，少なくともこの時期には廃絶されていたものと考えられる。

（笠　井）

１号柱列跡　ＳＡ01（図６，写真７）

Ｃ・Ｄ４グリッドの境界中央付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はグリッドピットのＤ４－Ｐ２で，本遺構のＰ４が重複し，これよりも新しい。またすぐ南側には１号建物跡が所在する。柱列の全長は5.3ｍでＰ１～５の５個の小穴が一直線に並んでいる。遺構の方位はＮ74°Ｅを示し，１号建物跡の長辺にほぼ平行する。小穴間の距離は，小穴底面の中心で測るとＰ１－２間が140㎝，Ｐ２－３間が127㎝，Ｐ３－４間が100㎝，Ｐ４－５間が158㎝を測る。

個々の小穴掘形は平面形が円形で，直径は最小のＰ１が25㎝，最大のＰ４が34㎝である。検出面からの深さは両端のＰ１・５が深く，36～44㎝を測り，間のＰ２・３は26～30㎝を測る。

掘形内堆積土は，ℓ１・２に分かれる。ℓ１は１号建物跡ℓ１に近いにぶい黄褐色土で，Ｐ３～５で認められる。ℓ２は１号建物跡ℓ２に近い暗褐色土で，Ｐ１・２で認められる。いずれの堆積土も自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は方位が１号建物跡と一致することから，これに付属する遺構と考えられる。遺構の所属時期は近世であろう。

（笠　井）

２号柱列跡　ＳＡ02（図６，写真７）

Ｃ５グリッド東側中央付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，

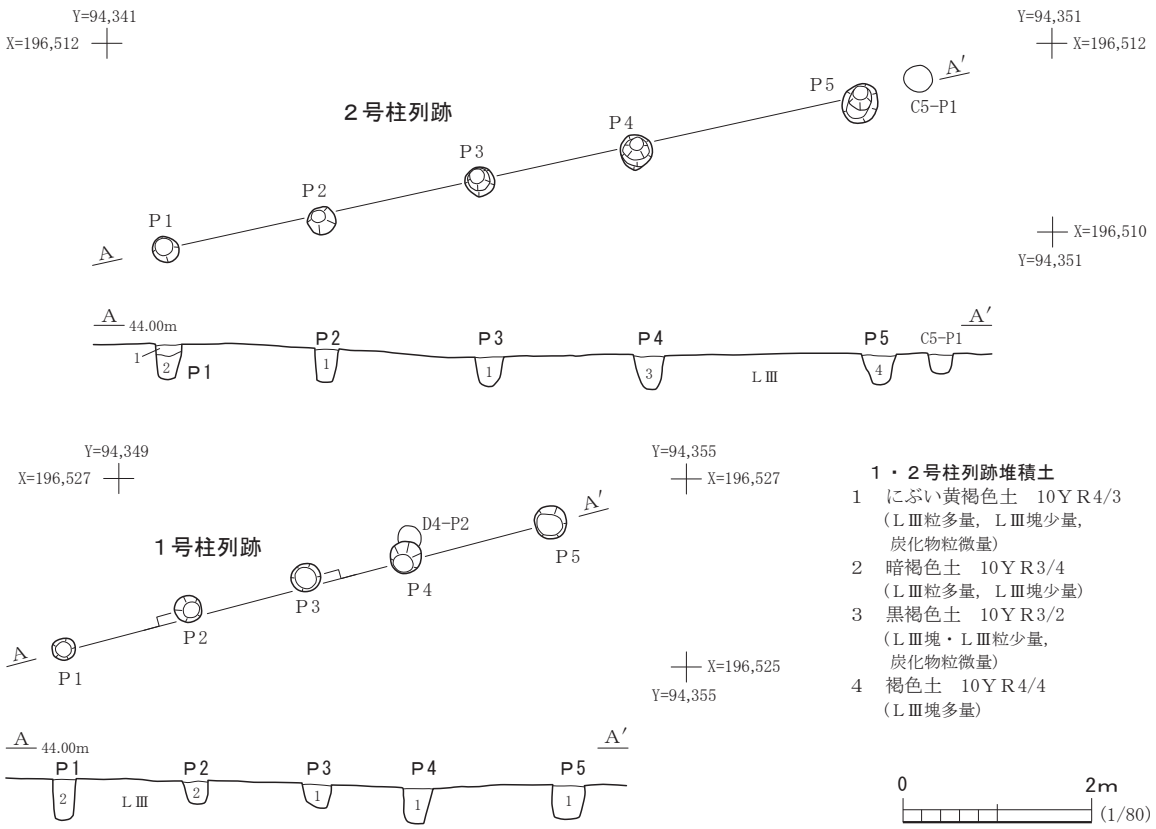


図６　１・２号柱列跡

北東側に１号建物跡が所在する。柱列の全長は7.5ｍで，Ｐ１～５の５個の小穴が一直線に並んでいる。遺構の方位はＮ77°Ｅを示し，１号建物跡の長辺の方位と若干のズレが生じている。小穴間の距離は，小穴底面の中心間で測るとＰ１－２間が166㎝，Ｐ２－３間が175㎝，Ｐ３－４間が172㎝，Ｐ４－５間が244㎝を測る。

個々の小穴は掘形の平面形がおおむね円形をしており，Ｐ５のみ楕円形である。直径は最小のＰ１・２が28㎝，最大のＰ５が長軸長45㎝，短軸長37㎝である。検出面からの深さはおおむね共通しており，32～37㎝を測る。

掘形内堆積土は，ℓ１～４に分かれる。ℓ１は１号建物跡ℓ１に近いにぶい黄褐色土で，Ｐ１上層およびＰ２・３で認められる。ℓ２は１号建物跡ℓ２に近い暗褐色土で，Ｐ１下層に堆積する。ℓ３は１号建物跡ℓ３に近い黒褐色土で，Ｐ４でのみ認められる。ℓ４は褐色土でＰ５でのみ認められる。いずれの堆積土も自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。本遺構からは遺物は出土しなかった。

本遺構は１号建物跡と軸の方位が若干ずれるが，堆積土の特徴が一致することから，建物跡と同時期に並存した施設と考えられる。遺構の所属時期は近世であろう。　（笠　井）

小穴群（図７）

１号建物跡を中心とするＣ４・５，Ｄ４・５グリッドでは，21個の小穴を確認した。遺構検出面

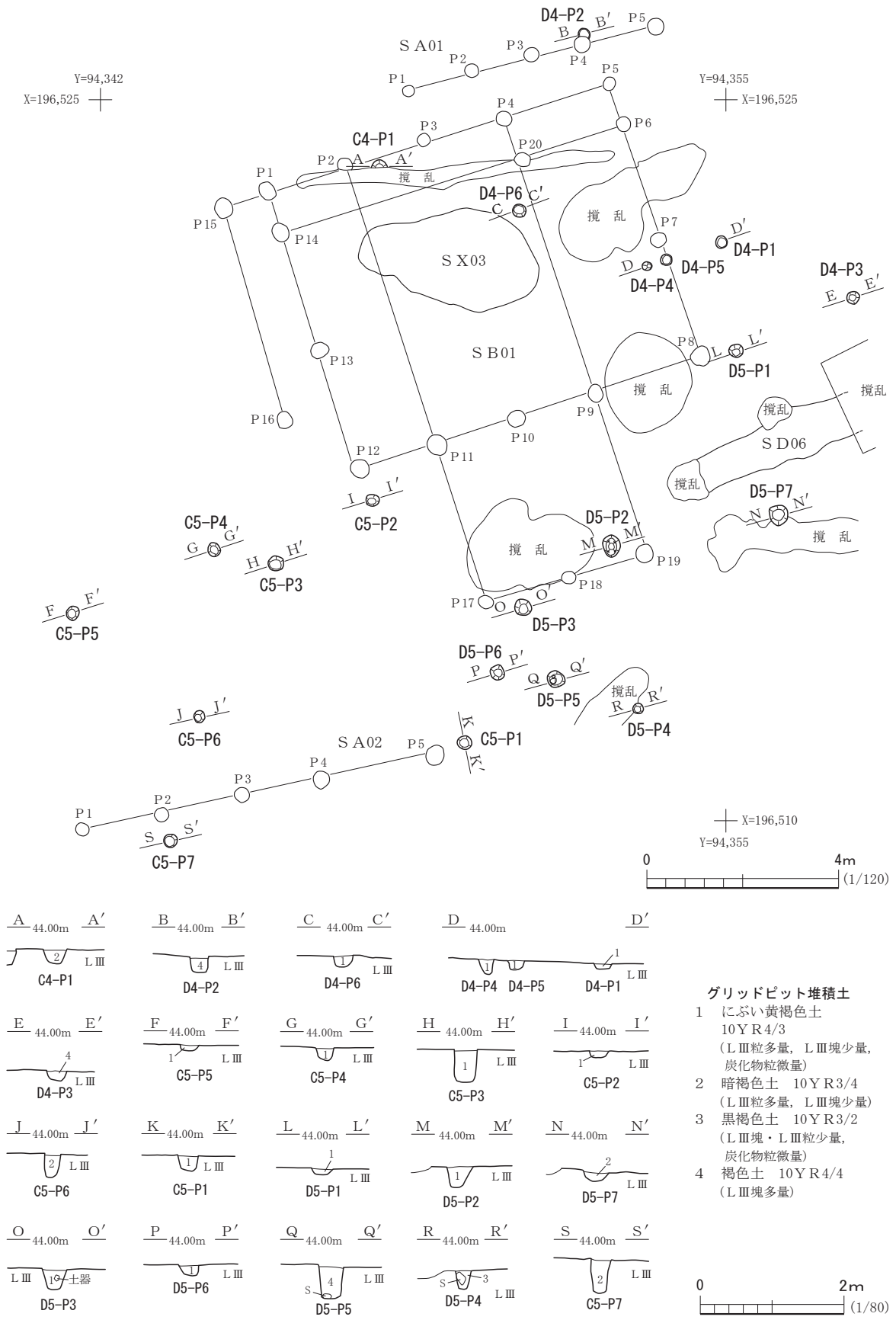


図７　小穴群（グリッドピット）

はいずれもＬⅢ上面である。重複関係を示すものはＤ４－Ｐ２のみで，１号柱列跡Ｐ４と重複し，これに壊されている。

小穴の平面形は円形もしくは楕円形を基調とする。規模は最小のＤ４－Ｐ４が直径20㎝，最大のＤ５－Ｐ２で長軸長46㎝，短軸長37㎝を測り，直径30㎝前後のものが多い。検出面からの深さは最浅のＤ４－Ｐ１で９㎝，最深のＣ５－Ｐ７で49㎝を測り，20㎝前後のものが多い。

小穴内堆積土は，ℓ１～４に分かれる。ℓ１は１号建物跡ℓ１に近いにぶい黄褐色土で，１号建物跡付近に分布する小穴の堆積土で，全体の６割がこの堆積土である。ℓ２は１号建物跡ℓ２に近い暗褐色土で，Ｃ４－Ｐ１，Ｃ５－Ｐ６・７，Ｄ５－Ｐ７に認められる。ℓ３は１号建物跡ℓ３に近い黒褐色土で，Ｄ５－Ｐ４のみで認められる。ℓ４は１・２号柱列跡ℓ４に近い褐色土で，Ｄ４－Ｐ２・３，Ｄ５－Ｐ５で認められる。ℓ２～４は縁辺部に分布する小穴内に堆積する傾向がある。いずれの堆積土も自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

これらの小穴からは遺物がほとんど出土していないことから，時期の特定は困難である。堆積土の近似性と位置関係から掘立柱建物跡および柱列跡に関連する施設と判断でき，近世の所産と考えられる。（笠　井）

第３節　土　　坑

西原遺跡の調査で検出された土坑は62基(造り替えを含めると64基)で，調査区北部の丘陵縁から斜面にかけての範囲に集中する。調査区中央部は分布が希薄で，南部では散在して検出された。土坑の主体は平安時代の木炭焼成土坑である。以下各土坑ごとに報告する。

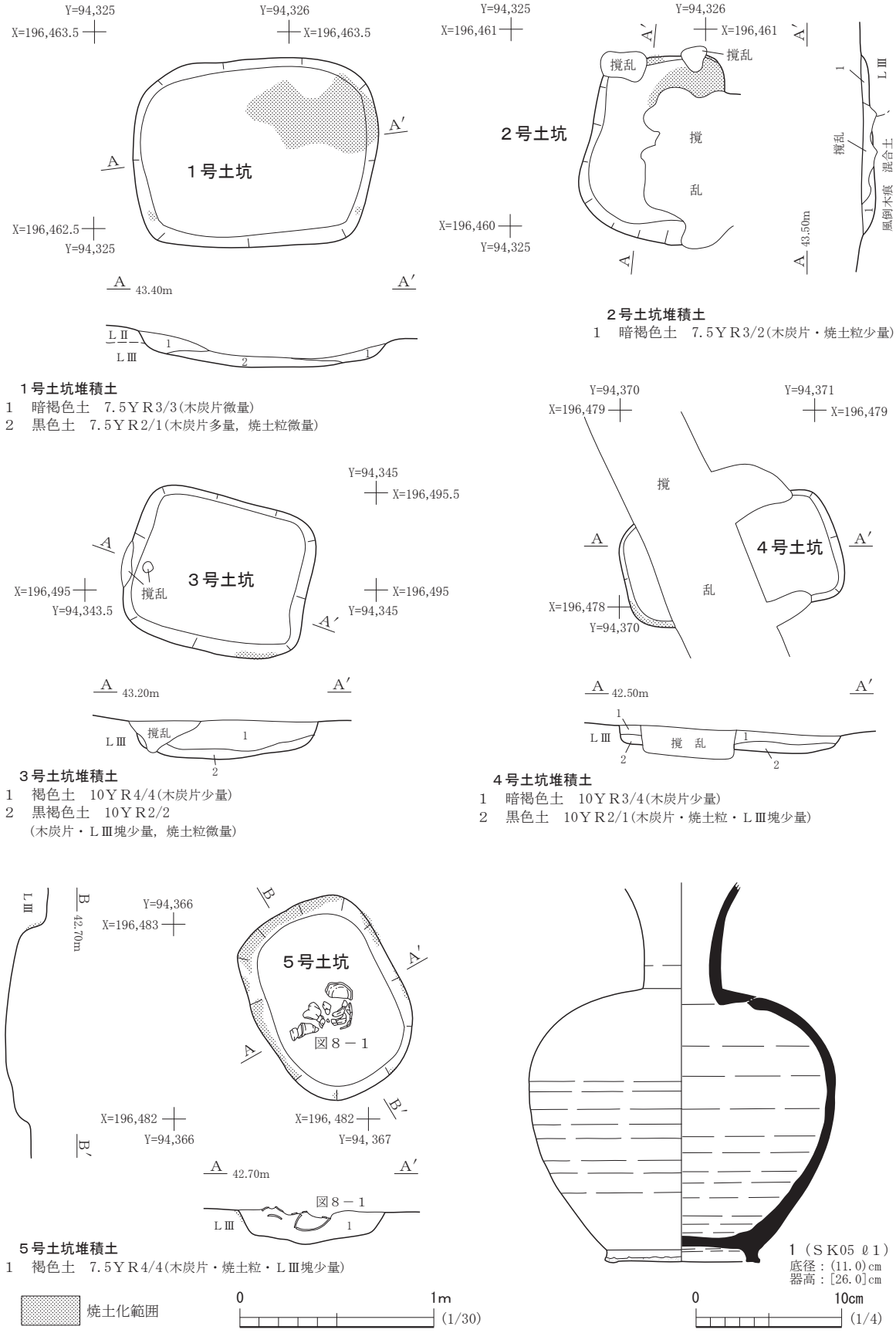
１号土坑　ＳＫ01（図８，写真８）

Ｂ７グリッドの南東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅡおよび一部ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，南側に２号土坑が近接している。平面は長方形を基調とし，東西方向にやや長い。検出面での規模は長辺が125㎝，短辺が95㎝，深さは最深で15㎝である。底面は中央付近がくぼみ，断面形が皿状に近い。壁は底面から急角度で立ち上がっている。また，北東側を主とし壁・底面の一部は被熱により２㎝の厚さまで焼土化していた。遺構内堆積土は木炭片・焼土粒の混入量から２層に分けられ，いずれも自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑は壁・床面の焼土化，堆積土中に焼土粒・木炭片が認められることから木炭を焼成した土坑と考えている。また，５号土坑との共通性から平安時代に機能していた可能性が高い。（山　岸）

２号土坑　ＳＫ02（図８，写真８）

Ｂ７グリッドの南東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，東側半分が木根の撹乱を受け遺存していない。平面は長方形を基調とし，南北方向に長い。遺



１号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/3(木炭片微量)
2　黒色土　7.5ＹＲ2/1(木炭片多量，焼土粒微量)

２号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5ＹＲ3/2(木炭片・焼土粒少量)

３号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(木炭片少量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2
(木炭片・ＬⅢ塊少量，焼土粒微量)

４号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭片少量)
2　黒色土　10ＹＲ2/1(木炭片・焼土粒・ＬⅢ塊少量)

５号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4(木炭片・焼土粒・ＬⅢ塊少量)

1（ＳＫ05 ℓ1）
底径：(11.0)cm
器高：[26.0]cm

図８　１～５号土坑，５号土坑出土遺物

存範囲での規模は長辺95㎝，短辺63㎝，深さが最深で７㎝である。底面はほぼ平坦で，壁の立ち上がりは比較的急角度である。また，北側の壁・底面の一部は焼土化し，特に壁の一部は堅く締まっている。遺構内堆積土は１層で，自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑は壁・床面の焼土化と堆積土中の混入物から，木炭を焼成した土坑と考えている。また，５号土坑との共通性から，機能時期は平安時代の可能性が高い。（山　岸）

３号土坑　ＳＫ03（図８，写真８）

Ｃ６グリッドの中央付近に位置し，ＬⅡ中ほどで木炭粒を含む褐色土の広がりとして検出したが，平面形を確認したのはＬⅢ上面である。重複する遺構はない。平面は長方形を基調とし，東西にわずかに長い。検出面での規模は長辺92㎝，短辺78㎝，深さが最深で20㎝である。底面はほぼ平坦であるが，中央付近がわずかにくぼんでいる。壁は底面から急角度で立ち上がり，南壁の東側の一部には弱い焼土化が認められる。遺構内堆積土は２層に分けられるが，いずれも自然堆積で木炭片を含む。遺物は出土していない。

本土坑は形態と堆積土中の混入物から木炭を焼成した土坑と考えられ，他の土坑同様に平安時代に機能していたものと考えられる。（山　岸）

４号土坑　ＳＫ04（図８，写真８）

Ｅ７グリッドの北西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，本土坑の中央は撹乱により大きく壊されている。平面は長方形を基調とし，東西に長い。検出面での規模は長辺110㎝，短辺58㎝，深さが最深で10㎝である。壁は平坦な底面から急角度で立ち上がり，南西隅に弱い焼土化が認められる。遺構内堆積土は２層に分けられ，いずれも木炭粒を含むが自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は形態と堆積土中の混入物から木炭を焼成した土坑と考えられ，遺物は出土していないが５号土坑との共通性から平安時代に機能していた可能性が高い。（山　岸）

５号土坑　ＳＫ05（図８，写真８・21）

Ｄ６グリッドの南東隅に位置し，重複する遺構はない。ＬＩ直下のＬⅢ上面で須恵器片を検出し，精査の結果，土坑を確認した。平面は長方形を基調とし，南北方向に長い。検出面での規模は，長辺100㎝，短辺75㎝，深さは最深で20㎝である。底面は平坦であるが，中央付近に向かってわずかにくぼんでいる。壁は底面から急角度で立ち上がり，不連続ながら全面に焼土化が認められる。遺構内堆積土は１層で木炭片・焼土粒と黄褐色土の小ブロックを含むが，区分できない。また，堆積状況も判断できない。

遺物は，土坑中央のℓ１から横倒しで潰れた状態で須恵器が１点出土している。１は口縁部を欠損した須恵器長頸瓶である。体部上半に最大径を持つ器形で，底部に粘土紐貼り付けによる高台が

作り出されている。色調は全体的にオリーブがかった灰色で，焼成は堅緻であるが，体部上半から頸部にかけての器表面は荒れてざらついている。また，高台の縁も全周にわたって欠けている。

本土坑は壁に認められる焼土化と堆積土中の混入物から，木炭を焼成した土坑と考えられる。遺物は木炭焼成後，廃棄された可能性が高い。機能時期については，出土遺物から平安時代の９世紀前半頃と考えられる。（山　岸）

６号土坑　ＳＫ06（図９，写真８）

Ｄ７グリッドの中央北側に位置し，北側には７号土坑が近接している。周辺には検出面であるＬⅡが堆積しており，遺存状態は比較的良好である。平面は長方形を基調とし，東西方向に長い。検出面での規模は長辺120㎝，短辺80㎝，深さは最高で25㎝である。底面はほぼ平坦であるが，整っていない。底面からの壁の立ち上がりは急角度であるが，ＬⅡ中の壁面の崩落に起因してかＬⅢとの層境から上位では緩やかに外傾している。また，西壁のＬⅢ上面部分にのみ焼土化が認められた。遺構内堆積土は色調と木炭片の混入量から２層に分けたが，いずれも自然堆積と考えている。

本土坑は形態と堆積土中の混入物から木炭を焼成した土坑と考えられ，遺物は出土していないが他の土坑と同様に平安時代に機能していた可能性が高い。（山　岸）

７号土坑　ＳＫ07（図９，写真８）

Ｄ７グリッドの中央北側に位置し，ＬⅡ上面で検出した。重複する遺構はないが，南側には６号土坑が近接している。平面は長方形を基調とし，南北方向に長い。検出面での規模は長辺100㎝，短辺85㎝，深さは最高で25㎝である。底面は中央に向かって緩やかにくぼみ，断面形が皿状に近い。壁は底面から比較的緩やかな角度で立ち上がり，ＬⅡ・Ⅲの層境から上位ではさらに外傾している。ＬⅢを壁・底面としている部分では，不連続ながら全面に焼土化が認められ，特に壁の焼けが強い。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれにも木炭粒が含まれている。また，壁際からの流入状況を示していることから自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑は壁・床面の焼土化，堆積土中の木炭粒の混入状況から木炭を焼成した土坑と考えられている。また，出土遺物がないため特定出来ないが，他の土坑と同様に平安時代に機能していたものと考えている。（山　岸）

８号土坑　ＳＫ08（図９，写真９）

Ｄ７グリッドの中央北隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，東壁部分は削平によって遺存していない。平面は長方形を基調とし，南北に長い。検出面での規模は長辺100㎝，短辺75㎝，深さは最深で10㎝である。底面は中央に向かって緩やかにくぼみ，壁も緩やかに外傾している。このため，全体の断面形は皿状となっている。また，南半部の壁・床面の一部に焼土化が認められるが，いずれも焼けは弱い。遺構内堆積土は１層で，自然堆積と考え

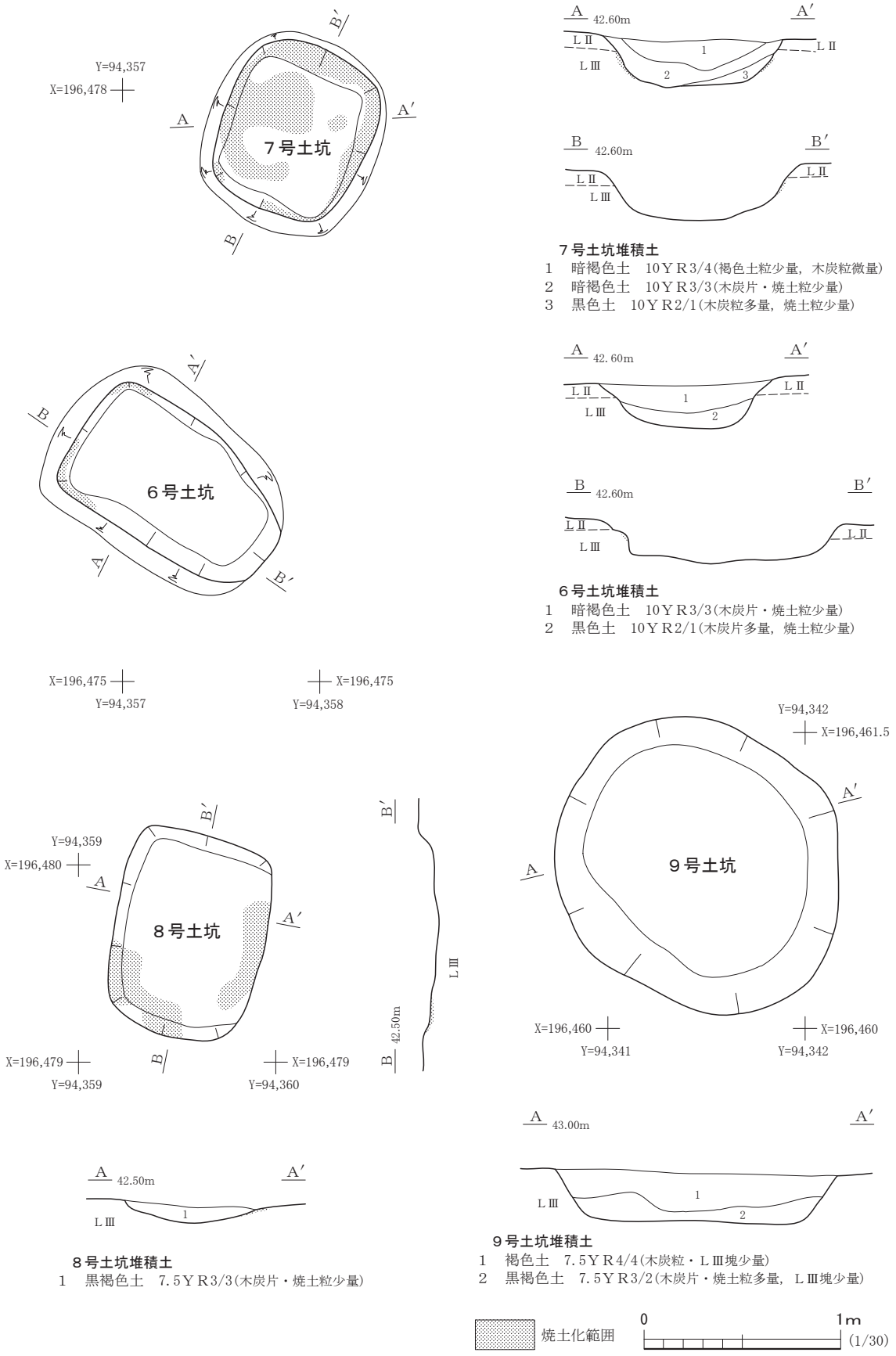

Y=94,357
X=196,478
A
A′
B
B′
７号土坑
A 42.60m
A′
L Ⅱ
L Ⅲ
1
2
3
B 42.60m
B′
７号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(褐色土粒少量，木炭粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(木炭片・焼土粒少量)
3　黒色土　10ＹＲ2/1(木炭粒多量，焼土粒少量)
A 42. 60m
A′
B 42.60m
B′
６号土坑
６号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(木炭片・焼土粒少量)
2　黒色土　10ＹＲ2/1(木炭片多量，焼土粒少量)
X=196,475
Y=94,357
X=196,475
Y=94,358
Y=94,342
X=196,461.5
９号土坑
X=196,460
Y=94,341
X=196,460
Y=94,342
Y=94,359
X=196,480
８号土坑
X=196,479
Y=94,359
X=196,479
Y=94,360
42.50m
A 42.50m
A′
８号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5ＹＲ3/3(木炭片・焼土粒少量)
A 43.00m
A′
９号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4(木炭粒・ＬⅢ塊少量)
2　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2(木炭片・焼土粒多量，ＬⅢ塊少量)
焼土化範囲
0
1m
(1/30)

図９　６～９号土坑

ている。遺物は出土していない。

本土坑は壁・床面の焼土化，堆積土の混入物から他の土坑と同様に，平安時代に木炭を焼成した土坑と考えている。（山　岸）

９号土坑　ＳＫ09（図９，写真９）

Ｃ７グリッドの中央南隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で木炭粒を含む褐色土の広がりとして検出した。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し，全体的に歪んでいる。検出面での規模は，長軸長155㎝，短軸長138㎝，深さは25㎝を測る。底面は平坦で，壁際を除き比較的締まっている。底面からの壁の立ち上がりは比較的急角度であるが，崩落に起因してか全体的に整っていない。また，壁・底面ともに焼土化は認められなかった。遺構内堆積土は２層に分けられ，ℓ２には多量の木炭片と焼土粒が含まれている。また，いずれにも壁の崩落土と考えられる黄褐色土の小ブロックが含まれていることから自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑より規模が大きく形状も異なるが，堆積土中に木炭片・焼土粒を多量に含むことから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期についても他の土坑と同様に，平安時代と考えている。（山　岸）

10号土坑　ＳＫ10（図10，写真９）

Ａ２グリッドの北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。本遺構の南東２ｍに11号土坑が所在する。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し，長軸長92㎝，短軸長73㎝，深さ40㎝を測る。底面は北東側で歪むが，ほぼ平坦であり，壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構内堆積土は３層に分けられる。それぞれがレンズ状の堆積をしていることから，自然堆積と判断した。ℓ１から縄文土器の細片が出土している。

本土坑の性格は不明であるが，出土遺物と堆積土の状況から縄文時代の可能性がある。（西　澤）

11号土坑　ＳＫ11（図10，写真９）

Ａ２グリッドの北西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。検出段階ですでにその上面は掘削されていた。本遺構の北西２ｍに10号土坑が所在する。重複する遺構はない。土坑は南北方向に主軸を持つ不整な楕円形を呈し，長辺83㎝，短辺69㎝，深さは４㎝程度を測る。底面はほぼ水平であるが，壁は掘削を受けているため，ほとんど確認できなかった。遺物は出土しなかった。

本土坑は，極めて遺存状態が悪い。底面上に多量の木炭片と木炭粒が認められることから，木炭焼成土坑の底部のみが遺存していると判断した。遺構の機能時期については，周囲の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

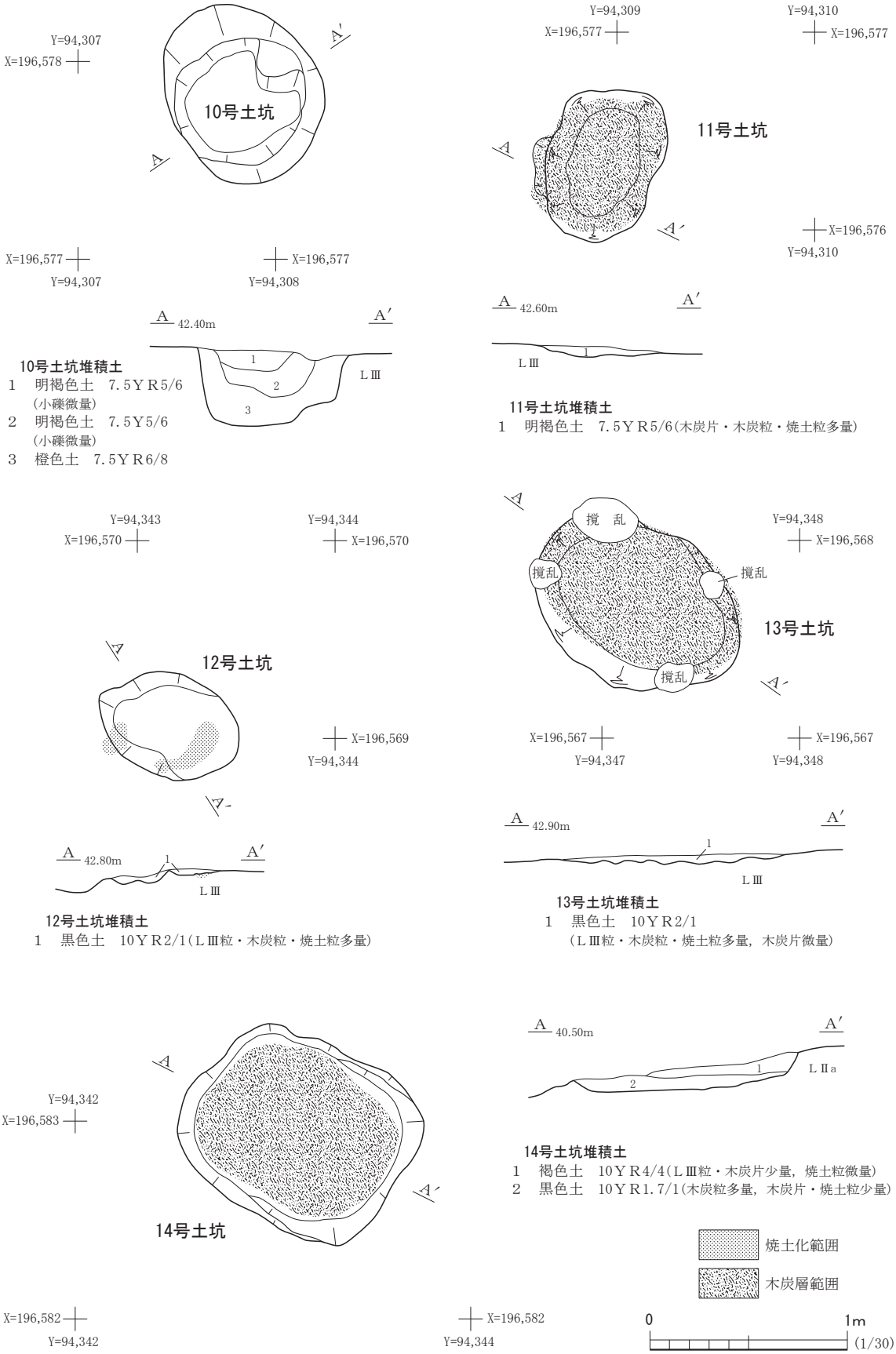

Y=94,307
X=196,578
10号土坑
A
A′
X=196,577
Y=94,307
X=196,577
Y=94,308
A 42.40m
A′
1
2
3
LⅢ
10号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5ＹＲ5/6
（小礫微量）
2　明褐色土　7.5Ｙ5/6
（小礫微量）
3　橙色土　7.5ＹＲ6/8
Y=94,309
X=196,577
Y=94,310
X=196,577
11号土坑
X=196,576
Y=94,310
A 42.60m
A′
1
LⅢ
11号土坑堆積土
1　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（木炭片・木炭粒・焼土粒多量）
Y=94,343
X=196,570
Y=94,344
X=196,570
12号土坑
X=196,569
Y=94,344
A 42.80m
A′
1
LⅢ
12号土坑堆積土
1　黒色土　10ＹＲ2/1（LⅢ粒・木炭粒・焼土粒多量）
撹　乱
撹乱
撹乱
撹乱
Y=94,348
X=196,568
13号土坑
X=196,567
Y=94,347
X=196,567
Y=94,348
A 42.90m
A′
1
LⅢ
13号土坑堆積土
1　黒色土　10ＹＲ2/1
（LⅢ粒・木炭粒・焼土粒多量，木炭片微量）
Y=94,342
X=196,583
14号土坑
A 40.50m
A′
1
2
LⅡa
14号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4（LⅢ粒・木炭片少量，焼土粒微量）
2　黒色土　10ＹＲ1.7/1（木炭粒多量，木炭片・焼土粒少量）
焼土化範囲
木炭層範囲
X=196,582
Y=94,342
X=196,582
Y=94,344
0
1m
(1/30)

図10　10～14号土坑

12号土坑　ＳＫ12（図10，写真９）

Ｃ２グリッドのほぼ中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。南東４ｍに13号土坑が所在し，北２ｍに３号溝跡が所在する。３号溝跡の延びる方向に，本土坑が位置するが，周囲の地形が削平されているため，重複関係は確認できない。本遺構で残存していたのは基底部のみで，壁の立ち上がりは確認できなかった。木炭粒を含む層の広がりは北西－南東に主軸を持つ楕円形を呈し，長軸長75㎝，短軸長50㎝，底部の起伏が２㎝前後遺存しており，一部が焼土化していた。遺物は出土していない。

本土坑は極めて残存状態が悪い。底面上に多量の木炭粒と焼土粒が認められることから，木炭焼成土坑の底部のみが遺存していると判断した。遺構の機能時期については，周囲の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

13号土坑　ＳＫ13（図10，写真９）

Ｃ２グリッドの東側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。北西４ｍに12号土坑が所在する。重複する遺構はない。本遺構で残存していたのは基底部のみで，壁の立ち上がりは確認できなかった。木炭粒を含む層の広がりは，北西－南北方向に主軸を持つ楕円形を呈し，長軸長112㎝，短軸長79㎝，深さは４㎝程度を測る。底面には起伏が多く認められた。遺物は出土しなかった。

本土坑は極めて残存状態が悪い。底面上に多量の木炭粒と焼土粒が認められることから，木炭焼成土坑の底部のみが遺存していると判断した。遺構の機能時期については，周囲の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

14号土坑　ＳＫ14（図10，写真９）

Ｃ１グリッドの南側の斜面に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構はなく，南東10ｍに所在する15号土坑が最も近接する土坑であり，木炭焼成土坑が集中する地点からやや離れている。平面形は，主軸方位を北西－南東に置く正方形に近い長方形を呈する。遺構の規模は，長辺106㎝，短辺94㎝，深さは10㎝程度を測る。底面はほぼ平坦であるが，周囲の標高に沿って南東側でわずかに高まる。壁は南東側ではやや急な立ち上がりを確認できるが，掘削されている北西側の壁は明確に確認できなかった。遺構内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は一部掘削を受けて確認できないが，自然堆積と判断した。ℓ２は木炭粒を多量に含むことから，木炭層と判断した。遺物は出土しなかった。

本土坑は堆積土中に木炭粒・木炭片・焼土粒を含むことから，木炭焼成土坑と考えている。帰属時期についても他の土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

15号土坑　ＳＫ15（図11，写真９）

Ｃ２グリッドの北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構はないが，遺構の北東部が撹乱によって遺存していない。平面は隅丸長方形を呈し，東西方向に長い。規模は長辺138㎝，短辺 98㎝，深さ42㎝を測る。底面はほぼ平坦で中央付近が小規模にくぼむ。壁は急峻に立ち上がっており，一部でオーバーハングする箇所も認められる。底面の中央を除く外周の一部と壁の下部を中心に不連続ではあるが焼土化が認められた。遺構内堆積土は３層に分けられた。堆積状況からℓ１は流入土の自然堆積，ℓ２は木炭の含有量が多いことから木炭層，ℓ３は焼土粒を多量に含むことから壁の崩落土と判断した。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と底面，壁が焼けていること，堆積土に炭化物を含むことから木炭を焼成した土坑と考えられる。本遺構出土の木炭は，放射性炭素年代測定(AMS)を実施しており，測定結果によると８世紀前半の年代がでているが，遺跡全域でこの時期の遺構・遺物が皆無であるため，その機能時期は他の土坑と同様に平安時代の所産と考えられる。（本　田）

16号土坑　ＳＫ16（図11，写真10）

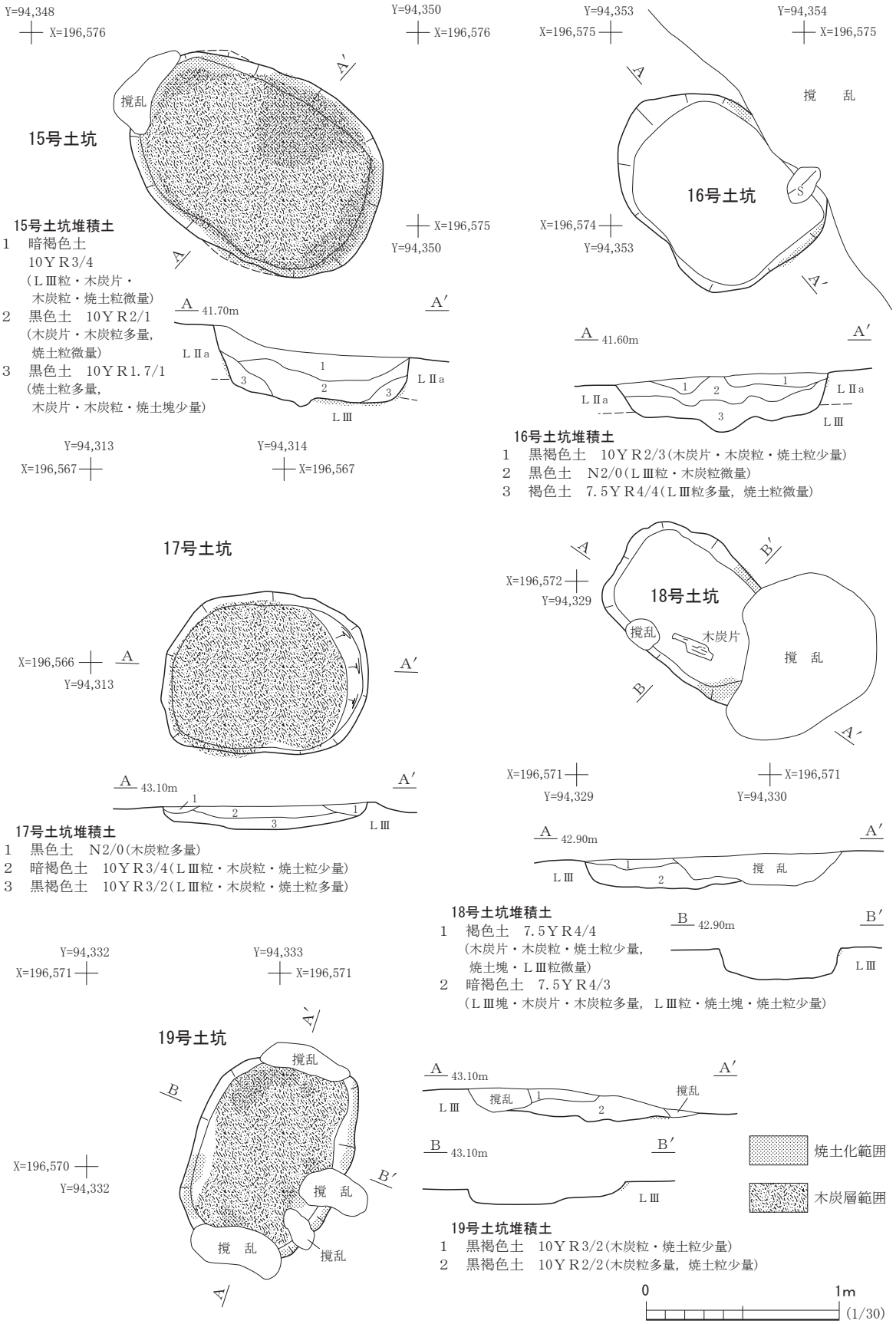
Ｄ２グリッドの北西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構はなく，本土坑を中心に半径２ｍほどの範囲で，36号土坑，１号性格不明遺構が近接する。遺構の北東部が撹乱を受けており遺存していない。平面は隅丸長方形を呈しており，北西部が張り出していて南北方向に長い。規模は長辺116㎝，短辺86㎝，深さ32㎝を測る。底面には起伏が認められ，操業最終段階に木炭を突き崩した痕跡の可能性がある。壁はやや急に立ち上がっている。北東壁と南東壁の一部に焼土化が認められた。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれもレンズ状の堆積状況が認められることから自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と壁が焼けていること，遺構内堆積土に木炭片・木炭粒を含むことから木炭を焼成した土坑と考えられる。遺物が出土していないため所属年代は不明であるが，他の土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

17号土坑　ＳＫ17（図11，写真10）

Ｂ２グリッドの南西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，遺存状態も良い。平面は隅丸長方形を呈しており，やや東西方向に長い。規模は長辺106㎝，短辺86㎝，深さ17㎝を測る。底面は平坦で，北壁，西壁，南壁は急峻に立ち上がっており，西壁は最初の立ち上がりは緩やかだが徐々に急になっていく。遺構内堆積土は３層に分けられ，上面が掘削されているので不明確であるが，ℓ１は撹乱などにより層位が逆転したものと考えられる。ℓ２は自然堆積土で，ℓ３は水平堆積と炭化物の含有量の多さから木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と遺構内堆積土に木炭粒・焼土粒を含むことから，木炭を焼成した土坑と考え



15号土坑堆積土
1　暗褐色土
10ＹＲ3/4
（Ｌⅲ粒・木炭片・
木炭粒・焼土粒微量）
2　黒色土　10ＹＲ2/1
（木炭片・木炭粒多量，
焼土粒微量）
3　黒色土　10ＹＲ1.7/1
（焼土粒多量，
木炭片・木炭粒・焼土塊少量）

16号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（木炭片・木炭粒・焼土粒少量）
2　黒色土　N2/0（Ｌⅲ粒・木炭粒微量）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4（Ｌⅲ粒多量，焼土粒微量）

17号土坑堆積土
1　黒色土　N2/0（木炭粒多量）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（Ｌⅲ粒・木炭粒・焼土粒少量）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（Ｌⅲ粒・木炭粒・焼土粒多量）

18号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
（木炭片・木炭粒・焼土粒少量，
焼土塊・Ｌⅲ粒微量）
2　暗褐色土　7.5ＹＲ4/3
（Ｌⅲ塊・木炭片・木炭粒多量，Ｌⅲ粒・焼土塊・焼土粒少量）

19号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（木炭粒・焼土粒少量）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2（木炭粒多量，焼土粒少量）

図11　15～19号土坑

られる。遺物が出土していないため所属年代は不明であるが，他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

18号土坑　ＳＫ18（図11，写真10）

Ｂ２グリッドの東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南東側４ｍに19号土坑が近接する。南東壁と南西壁の一部が木痕の撹乱を受けていて遺存していない。平面は南北方向に長い隅丸長方形をしており，規模は長辺108㎝，短辺68㎝，深さ16㎝を測る。底面はほぼ平坦で，壁は急峻に立ち上がっている。南西壁と北東壁の一部に焼土化が認められる。遺構内堆積土は２層に分けられ，ℓ１は流入土の自然堆積，ℓ２は木炭を多く含み，水平堆積をしていることから木炭層と判断した。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と壁が焼けていること，遺構内堆積土に木炭片・木炭粒を含むことから，木炭を焼成した土坑と考えられる。本遺構出土の木炭は，放射性炭素年代測定(AMS)を実施しており，測定結果によると６世紀前半の年代がでているが，遺跡全域でこの時期の遺構・遺物が皆無であるため，その機能時期は他の土坑同様に平安時代の所産と考えている。（本　田）

19号土坑　ＳＫ19（図11，写真10）

Ｃ２グリッド中央西側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，周辺の４ｍ以内に18号土坑，20号土坑が近接する。北壁，西壁，南壁の４カ所が木根の撹乱を受けて遺存していない。平面は南北に長い隅丸長方形を呈し，やや歪んでいる。規模は長辺116㎝，短辺83㎝，深さ16㎝を測る。底面は平坦で，中央に向かってくぼんでおり，壁は急峻に立ち上がっている。底面の一部と壁には不連続ではあるが焼土化が認められた。遺構内堆積土は２層に分けられるが，ℓ１は自然堆積と考えられる。ℓ２は操業に伴う木炭層であろう。遺物は縄文土器の細片２点が出土しているが，図化できなかった。ℓ１から出土しているので遺構の周囲から流れ込んだものと判断している。

本土坑はその形態と底面・壁が焼けていること，遺構内堆積土に木炭粒を多く含むことから木炭を焼成した土坑と考えられる。出土遺物から所属年代を特定することはできなかったが，他の土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

20号土坑　ＳＫ20（図12，写真10）

Ｃ２グリッドの中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，西側３ｍに19号土坑が近接する。北壁の一部，南壁が木根の撹乱を受けて遺存していない。平面は隅丸長方形を呈し，南北方向に長い。規模は長辺112㎝，短辺89㎝，深さ19㎝を測る。底面は平坦で，中央に向かってくぼんでおり，壁は急峻に立ち上がっている。北壁，東壁，西壁の一部に焼土化が認められた。遺構内堆積土は３層に分けられる。堆積状況と包含物の特徴から，ℓ１は流入土の自然堆積，焼土粒を多量に含むℓ２は壁の崩落土，木炭を多量に含むℓ３は水平堆積をしていることから

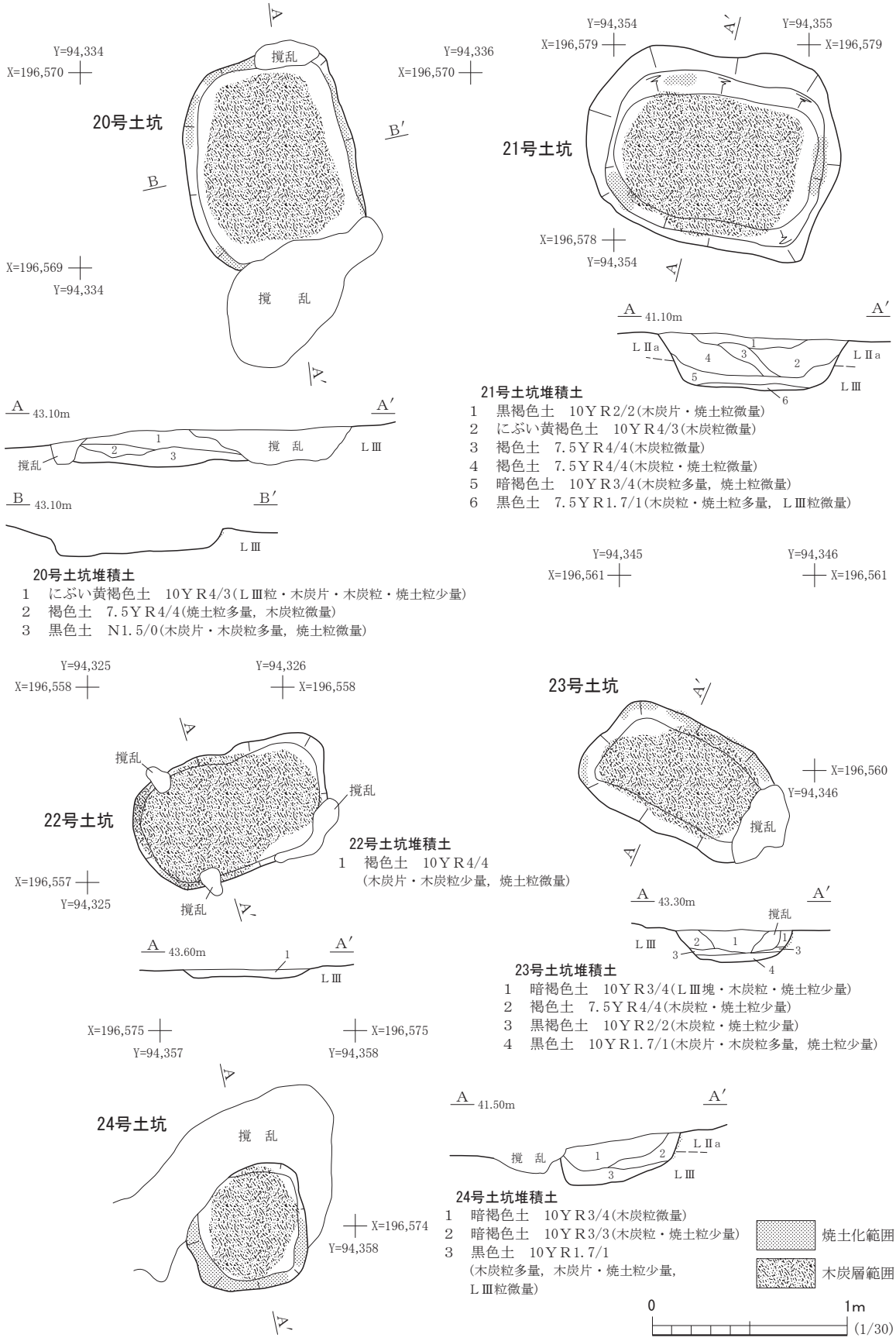

20号土坑
Y=94,334
X=196,570
Y=94,336
X=196,570
X=196,569
Y=94,334
撹乱
撹　乱
A
A′
B
B′
A 43.10m
A′
撹乱
撹　乱
L Ⅲ
B 43.10m
B′
L Ⅲ
21号土坑
Y=94,354
X=196,579
Y=94,355
X=196,579
X=196,578
Y=94,354
A 41.10m
A′
L Ⅱa
L Ⅲ
20号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（Ｌ Ⅲ粒・木炭片・木炭粒・焼土粒少量）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4（焼土粒多量，木炭粒微量）
3　黒色土　N1.5/0（木炭片・木炭粒多量，焼土粒微量）
21号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（木炭片・焼土粒微量）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（木炭粒微量）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4（木炭粒微量）
4　褐色土　7.5ＹＲ4/4（木炭粒・焼土粒微量）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（木炭粒多量，焼土粒微量）
6　黒色土　7.5ＹＲ1.7/1（木炭粒・焼土粒多量，Ｌ Ⅲ粒微量）
Y=94,345
X=196,561
Y=94,346
X=196,561
Y=94,325
X=196,558
Y=94,326
X=196,558
22号土坑
撹乱
X=196,557
Y=94,325
A 43.60m
A′
L Ⅲ
22号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4
（木炭片・木炭粒少量，焼土粒微量）
23号土坑
X=196,560
Y=94,346
A 43.30m
A′
撹乱
L Ⅲ
23号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（Ｌ Ⅲ塊・木炭粒・焼土粒少量）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4（木炭粒・焼土粒少量）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2（木炭粒・焼土粒少量）
4　黒色土　10ＹＲ1.7/1（木炭片・木炭粒多量，焼土粒少量）
X=196,575
Y=94,357
X=196,575
Y=94,358
24号土坑
撹　乱
X=196,574
Y=94,358
A 41.50m
A′
撹　乱
L Ⅱa
L Ⅲ
24号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（木炭粒微量）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（木炭粒・焼土粒少量）
3　黒色土　10ＹＲ1.7/1
（木炭粒多量，木炭片・焼土粒少量，
Ｌ Ⅲ粒微量）
焼土化範囲
木炭層範囲
0
1m
(1/30)

図12　20～24号土坑

木炭層と判断した。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と壁が焼けていること，遺構内堆積土に木炭片・木炭粒，焼土粒を多く含むことから木炭を焼成した土坑と考えられる。遺物が出土していないため所属年代は不明であるが，他の土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と思われる。（本　田）

21号土坑　ＳＫ21（図12，写真10）

Ｄ２グリッドの北西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構はなく，１号性格不明遺構が近接している。平面は隅丸長方形を呈し，全体的に歪んでおり，東西方向に長い。規模は長辺133㎝，短辺115㎝，深さ31㎝を測る。底面は平坦で，壁は比較的急に立ち上がっている。北壁の一部，南西隅，東壁に焼土化が認められた。遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ１～４は標高の高いところから遺構内に土が流入したような堆積状況がみられることから，いずれも自然堆積と考えている。ℓ５・６は木炭を多量に含み水平に堆積することから，木炭を取り出した後の残り炭の堆積と考えられる木炭層と判断した。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と壁が焼土化していること，遺構内堆積土に木炭粒・焼土粒を含むことから木炭を焼成した土坑を考えられる。遺物が出土していないため所属年代は不明であるが，他の土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

22号土坑　ＳＫ22（図12，写真10）

Ｂ３グリッドの北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，１号焼土遺構が近接する。南東部を含む３カ所が木根による撹乱を受けており遺存していない。平面は隅丸長方形を呈し，北東部が張り出している。規模は長辺106㎝，短辺60㎝，深さ６㎝を測る。底面は平坦で，壁はやや急に立ち上がっている。壁の焼土化は認められなかった。遺構内堆積土は１層で，木炭を含むことから木炭層の一部と判断した。遺物は出土していない。

本土坑は壁の焼土化はみられなかったものの，その形態や堆積土中に炭化物を含むこと，また，床面に炭化物の広がりがみられたことから木炭を焼成した土坑と考えられる。遺物が出土していないため所属年代は不明であるが，他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

23号土坑　ＳＫ23（図12，写真10）

Ｃ２グリッドの南東部・Ｃ３グリッドの北東部に位置しており，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，33ａ号土坑，33ｂ号土坑，52号土坑が近接している。東部が撹乱によって遺存していない。平面は東西方向に長い隅丸長方形を呈しており，やや歪んでいる。規模は長辺101㎝，短辺60㎝，深さ18㎝を測る。底面は平坦で中央に向かってややくぼんでいて，壁は急峻に立ち上がっている。北壁，南西隅に焼土化が認められた。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１・２は堆積

状況から，流入土の自然堆積と判断でき，ℓ３・４は木炭を含み，水平堆積することから，木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と壁が焼けていること，遺構内堆積土に炭化物・焼土粒を含むことから，木炭を焼成した土坑と考えられる。遺物が出土していないため，所属年代は不明である。他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

24号土坑　ＳＫ24（図12，写真11）

Ｄ２グリッドのほぼ中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構はなく，16号土坑，36号土坑が近接している。北壁，東壁が撹乱によって遺存していない。平面は隅丸長方形を呈しており，南北方向に長い。規模は長辺71㎝，短辺62㎝，深さ28㎝を測る。底面は平坦で，壁は急峻に立ち上がっており，全面にわたって焼土化している。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれも自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と壁が焼けていること，遺構内堆積土に木炭粒・焼土粒を含むことから木炭を焼成した土坑と考えられる。本遺構出土の木炭は，放射性炭素年代測定(AMS)を実施しており，測定結果によると５世紀後半の年代がでているが，遺跡全域でこの時期の遺構・遺物が確認されていないことから，そのままこの年代を遺構の機能時期とするには問題が多いと判断し，他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えたい。（本　田）

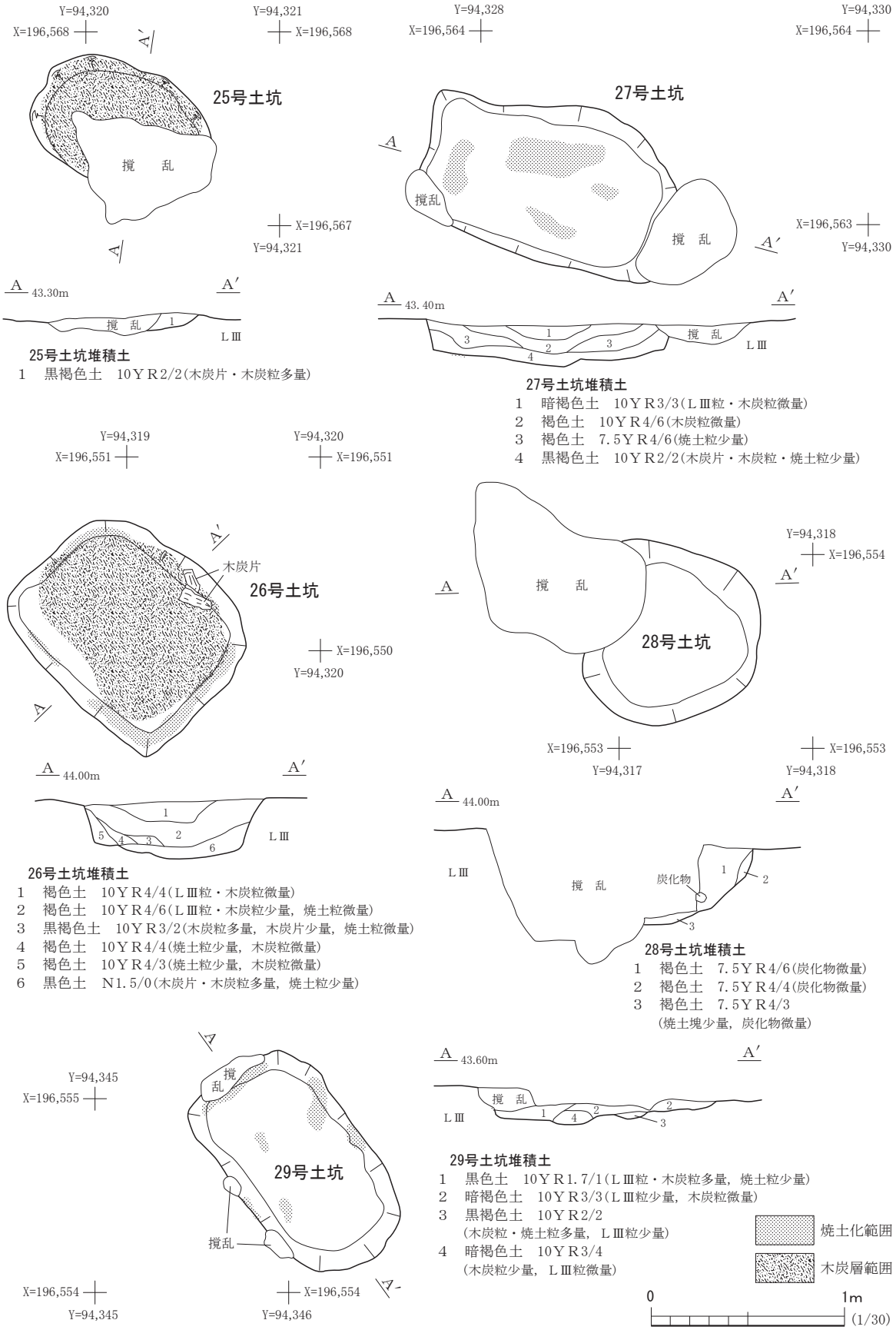
25号土坑　ＳＫ25（図13，写真11）

Ｂ２グリッドの中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，南壁と南壁から延びる底面が撹乱によって遺存していない。平面形は不整な円形で，全体的に歪んでいる。遺存している範囲での規模は長辺98㎝，短辺64㎝，深さ10㎝を測る。底面は平坦で，中央に向かってくぼんでおり，壁はやや急峻に立ち上がっている。また，壁・底面ともに焼土化は認められなかった。遺構内堆積土は１層で，木炭片・木炭粒を多量に含む層である。遺物は出土していない。

本土坑はその形態と遺構内堆積土に木炭片・木炭粒を含むことから，木炭を焼成した土坑と考えられる。遺物が出土していないため，所属年代は不明である。他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えられる。（本　田）

26号土坑　ＳＫ26（図13，写真11）

Ｂ３グリッドのほぼ中心に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，付近には北側２ｍの42号土坑を中心として，四方６ｍ以内に28号土坑や43号土坑など４基の木炭焼成土坑と２号焼土遺構が所在する。遺構の平面形は，正方形に近い長方形を呈しており，長軸方位を北西－南東に置く。規模は長辺110㎝，短辺94㎝，深さ30㎝を測る。底面は東側に起伏がある。底面から壁の立ち上がりは急角度で，崩落に伴う乱れは特に見られない。壁面の南側隅と北側隅を中心



25号土坑堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭片・木炭粒多量)

27号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3(ＬⅢ粒・木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒微量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6(焼土粒少量)
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭片・木炭粒・焼土粒少量)

26号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/4(ＬⅢ粒・木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(ＬⅢ粒・木炭粒少量，焼土粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2(木炭粒多量，木炭片少量，焼土粒微量)
4　褐色土　10ＹＲ4/4(焼土粒少量，木炭粒微量)
5　褐色土　10ＹＲ4/3(焼土粒少量，木炭粒微量)
6　黒色土　Ｎ1.5/0(木炭片・木炭粒多量，焼土粒少量)

28号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/6(炭化物微量)
2　褐色土　7.5ＹＲ4/4(炭化物微量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/3
(焼土塊少量，炭化物微量)

29号土坑堆積土

1　黒色土　10ＹＲ1.7/1(ＬⅢ粒・木炭粒多量，焼土粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(ＬⅢ粒少量，木炭粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2
(木炭粒・焼土粒多量，ＬⅢ粒少量)
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4
(木炭粒少量，ＬⅢ粒微量)

図13　25～29号土坑

に部分的な焼土化が認められる。遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ１～５は壁の崩落などに伴う自然堆積と考えている。ℓ６は，比較的厚い木炭層であり，一部には木炭の形を残すものもあった。ただし，操業最終時の木材の配列を復元することは出来なかった。遺物はℓ１から縄文土器の細片が出土しているが本土坑に伴うものではなく，周囲に多く散布する縄文土器の一部が混入したものと考えられる。

本土坑は，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期についても他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

27号土坑　ＳＫ27（図13，写真11）

Ｂ２グリッドの南東隅に位置しており，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南側４ｍほどに１号焼土遺構や30号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，東北東－西南西に主軸方位を置く。遺構の規模は長辺124㎝，短辺84㎝，深さ20㎝を測る。底面の一部が焼土化している。底面はほぼ平坦であるが，東側で一段高くなる。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。土層は４層に分層できる。ℓ１～３は壁面崩落などに伴う自然堆積層と考えられる。ℓ４は木炭の取り残しである木炭層であろう。遺物は数点出土しているが，いずれも縄文土器の細片であり，堆積中に混入したものと考えられる。

本土坑は堆積土に木炭粒と焼土粒が含まれることから，木炭を焼成した土坑と考えている。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

28号土坑　ＳＫ28（図13，写真11）

Ｂ３グリッドの中央やや北寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。当初は撹乱として掘り下げたため，堆積土のほとんどを除去してしまった。重複する遺構はなく，付近には南側２ｍの42号土坑を中心として，四方６ｍ以内に43号土坑など４基の木炭焼成土坑と２号焼土遺構が所在する。遺構の平面形は不正円形で，規模は直径約90㎝，深さ40㎝を測る。堆積土は，一部を掘り過ぎてしまったため不明な点が多いが，３層確認できる。ℓ１に炭化物，ℓ３に焼土塊を検出した。堆積状況は不明である。遺物は縄文土器の細片がℓ１から出土しているが，遺存状況が悪く図化できなかった。

本土坑は不整円形の土坑で，堆積土に炭化物と焼土塊を含む。その機能および時期については不明である。（西　澤）

29号土坑　ＳＫ29（図13，写真11）

Ｃ３グリッドの東に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で樹木による撹乱を受けている状況で検出した。重複する遺構はなく，北側５ｍに23号土坑と52号土坑が，南側４ｍに１号集石遺構が所在する。遺構の平面形は長軸方位を北西－南東に置く長方形を呈する。遺構の規模は，長辺120㎝，短辺68㎝，深さ15㎝を測る。底面は凹凸が多いが，地形に沿って南側で高くなる傾向がある。底面から壁が立

ち上がる部分については緩やかに立ち上がり，部分的に焼土化している。遺構内堆積土は４層に分けられ，いずれもＬⅢ粒を含んでおり，それぞれに撹乱の影響がうかがえる。その中でもℓ３とℓ４が木炭層の残存と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は撹乱の影響を強く受けてはいるが，堆積土中に木炭粒と焼土粒を多く含有することから木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期についても他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

30号土坑　ＳＫ30（図14，写真11）

Ｂ３グリッドの北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南側２ｍに34号土坑が所在する。遺構の平面形は隅丸長方形を呈し，主軸方位は東北東－西南西方向に置く。遺構の規模は，長辺120㎝，短辺72㎝，深さ20㎝を測る。底面はほぼ平坦で，壁は底面から急角度で立ち上がる。側壁をほぼ全周するように焼土化が認められた。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１・２は流入土の自然堆積，ℓ３は三角堆積することから壁際の流入土，水平堆積し木炭片を多く含むℓ４を木炭層と判断した。ℓ４の西側では木炭が形を残したまま遺存しており，操業最終段階の木炭の回収が完全でなかったことがうかがえる。遺物は出土していない。

本土坑は堆積土中に木炭片・焼土粒を多量に含むことから木炭を焼成した土坑と考えている。本遺構出土の木炭は，放射性炭素年代測定(AMS)を実施しており，測定結果によると８世紀前半の年代がでているが，遺跡全域でこの時期の遺構・遺物が確認されていないことから，そのままこの年代を遺構の機能時期とするには問題が多いと判断し，他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えたい。（西　澤）

31号土坑　ＳＫ31（図14，写真12）

Ｃ３グリッド中央北側隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南西１ｍに50号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，主軸方位は北北西－南南東方向に置く。遺構の規模は，長辺130㎝，短辺84㎝，深さ45㎝を測る。底面はほぼ平坦で，底面と壁面の一部に焼土化が認められる。壁は東側では急角度で，西側ではほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は７層に分けられた。レンズに状堆積するℓ１・２と三角堆積を示すℓ３～６は，周囲からの流入土が自然堆積したものであり，ℓ７が操業最終段階の木炭層であろう。遺物は縄文土器の細片が出土しているが，これは付近に散布する縄文土器の一部が自然堆積の際に混入したものと考えられる。

本土坑は堆積土中に木炭粒と焼土粒を多く含有することから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

32号土坑　ＳＫ32（図14，写真12）

Ｄ２グリッドの中央西側隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南

30号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭片少量，ＬⅢ粒・焼土粒微量)
2　黒色土　7.5ＹＲ2/1(木炭粒多量，ＬⅢ粒・焼土粒少量，木炭片微量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4(焼土粒少量)
4　黒色土　10ＹＲ1.7/1(木炭片・木炭粒多量，ＬⅢ粒・焼土粒少量)

31号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/4(ＬⅢ粒・木炭片・木炭粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(ＬⅢ塊・ＬⅢ粒・木炭片・木炭粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3(ＬⅢ粒・木炭粒多量，木炭片・焼土粒微量)
4　褐色土　10ＹＲ4/6(ＬⅢ塊・ＬⅢ粒多量，木炭粒微量)
5　褐色土　7.5ＹＲ4/3(ＬⅢ粒・木炭片・木炭粒・焼土粒微量)
6　褐色土　7.5ＹＲ4/4(ＬⅢ塊・ＬⅢ粒・木炭粒・焼土粒微量)
7　黒色土　10ＹＲ2/2(木炭片・木炭粒・焼土粒多量)

32号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭片・木炭粒多量)
4　褐色土　7.5ＹＲ4/6(木炭粒・焼土粒少量)
5　黒色土　10ＹＲ2/2(木炭片・木炭粒多量)
6　明黄褐色土　10ＹＲ6/8(焼土粒少量，木炭粒微量)
7　黒色土　10ＹＲ1.7/1(木炭片・木炭粒多量)

33ａ号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4
(ＬⅢ粒・木炭粒・焼土粒少量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4
(ＬⅢ粒・木炭粒・焼土粒多量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3
(木炭粒微量)
4　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4
(焼土粒多量，木炭粒微量)
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3
(木炭粒少量，焼土粒微量)

33ｂ号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6
(木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6
(木炭粒少量，木炭片・焼土塊・焼土粒微量)

図14　30～32・33ａ・33ｂ号土坑

東４ｍに46号土坑が所在する。遺構の東側の一部は試掘時に確認され，その際に破壊されている。遺構の平面形は長方形で，主軸方位を北西－南東方向に置く。遺構の規模は長辺80㎝，短辺62㎝，深さ20㎝を測る。底面は平坦で，強く締まっていた。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており，遺存する壁のほぼ半分ほどに焼土化が認められる。堆積土は７層に分けられる。ℓ１～６は三角堆積やレンズ状堆積から，流入土の自然堆積であると考えられる。ℓ７は木炭粒・木炭片を多量に含むことから木炭層と考える。遺物は出土しなかった。

本土坑はその形態から，他と同様に木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

33ａ号土坑　ＳＫ33ａ（図14，写真12）

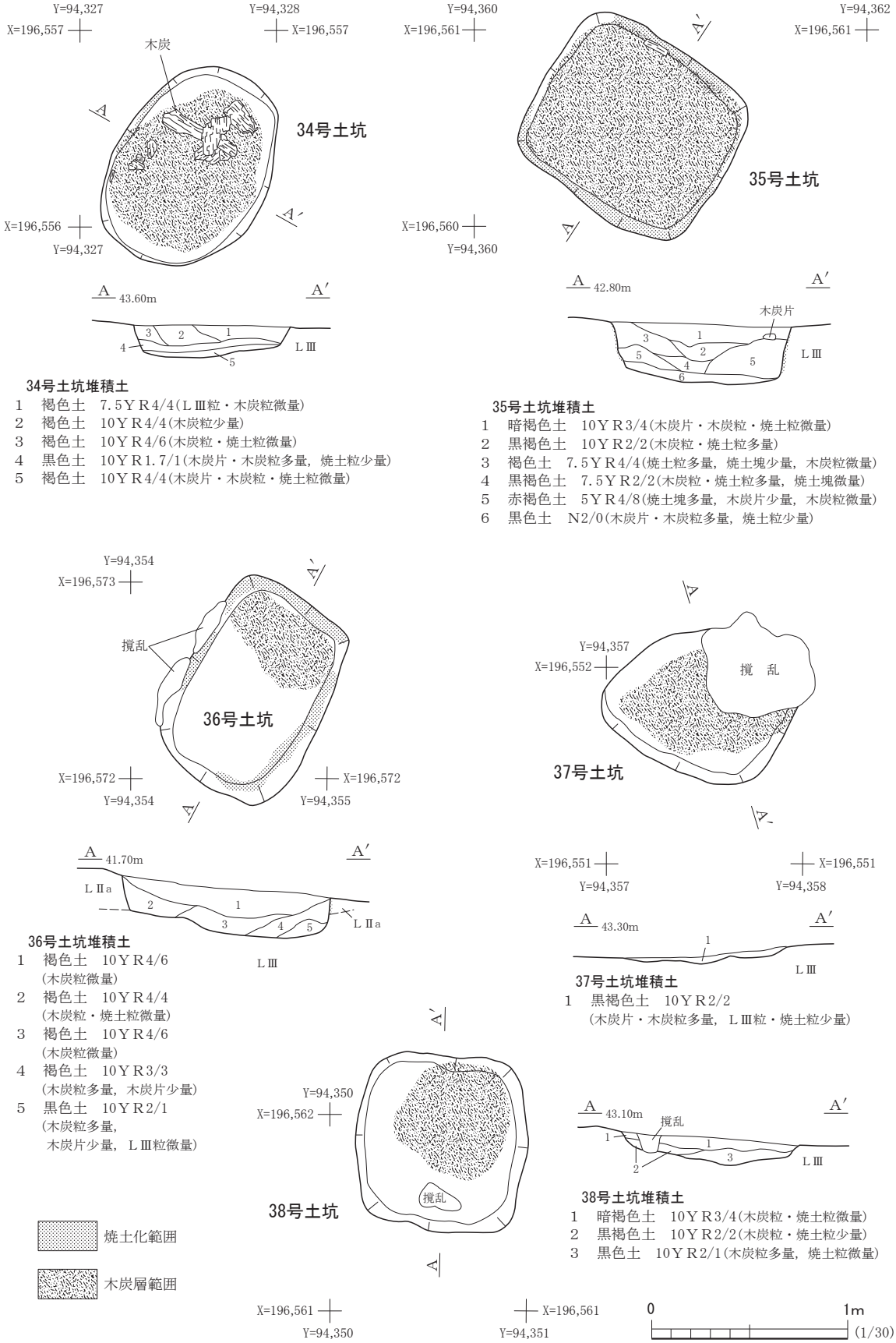
Ｃ２・Ｃ３グリッドの境中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。本遺構の直下には，一回り規模の小さい33ｂ号土坑があり，長軸方位が一致することから両遺構はつながりを有するものと考えられる。上位にある本遺構が新しい。遺構の平面形は楕円形で，北西－南東方向に長い。検出面での規模は，長辺123㎝，短辺81㎝，深さは最深で20㎝である。底面には起伏があり，中央部がやや深い。壁は底面から急角度で立ち上がり，南辺の一部と北西隅が焼土化していた。遺構内堆積土は５層で，ℓ１～４は堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。ℓ５は木炭の包含量から，木炭の取り残しからなる木炭層と判断できる。遺物は出土しなかった。

本遺構は底面いっぱいに木炭層が存在することから，木炭焼成土坑と考えられる。また木炭層の存在は，下位の33ｂ号土坑の埋没後に少なくとも１回以上の操業が行われたことをものがたり，両遺構の機能時期に時間差があることの傍証となる。本遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。（笠　井）

33ｂ号土坑　ＳＫ33ｂ（図14，写真12）

Ｃ２・Ｃ３グリッドの境中央に位置し，33ａ号土坑の調査時に検出した。本遺構は33ａ号土坑の直下にあり，前述したが，長軸方位が一致することから両遺構はつながりを有するものと考えられる。本遺構の上に33ａ号土坑の木炭層が堆積することから，本遺構のほうが古い。遺構の平面形は不整な楕円形で，北西－南東方向に長い。検出面での規模は，長辺103㎝，短辺62㎝，33ａ号土坑の底面からの深さは最深で18㎝を測り，33ａ号土坑より一回り小さい。底面は皿状にくぼんでおり，壁は底面から緩やかに立ち上がる。北辺の一部が焼土化していた。遺構内堆積土は２層で，包含物の状況から人為的な埋め戻しと判断した。遺物は出土しなかった。

本遺構は壁の焼土化や木炭層の存在が認められないので，機能を断定できない。本遺構の直上に33ａ号土坑の木炭層があることから，両遺構は断絶した別遺構と判断したが，本遺構が33ａ号土坑の掘形であれば，同一遺構とみなすこともできる。本遺構の機能時期は，33ａ号土坑との関係から他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。（笠　井）



34号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4(ＬⅢ粒・木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4(木炭粒少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒・焼土粒微量)
4　黒色土　10ＹＲ1.7/1(木炭片・木炭粒多量，焼土粒少量)
5　褐色土　10ＹＲ4/4(木炭片・木炭粒・焼土粒微量)

35号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭片・木炭粒・焼土粒微量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭粒・焼土粒多量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4(焼土粒多量，焼土塊少量，木炭粒微量)
4　黒褐色土　7.5ＹＲ2/2(木炭粒・焼土粒多量，焼土塊微量)
5　赤褐色土　5ＹＲ4/8(焼土塊多量，木炭片少量，木炭粒微量)
6　黒色土　N2/0(木炭片・木炭粒多量，焼土粒少量)

36号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6
(木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4
(木炭粒・焼土粒微量)
3　褐色土　10ＹＲ4/6
(木炭粒微量)
4　褐色土　10ＹＲ3/3
(木炭粒多量，木炭片少量)
5　黒色土　10ＹＲ2/1
(木炭粒多量，
木炭片少量，ＬⅢ粒微量)

37号土坑堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/2
(木炭片・木炭粒多量，ＬⅢ粒・焼土粒少量)

38号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭粒・焼土粒少量)
3　黒色土　10ＹＲ2/1(木炭粒多量，焼土粒微量)

図15　34～38号土坑

34土坑　ＳＫ34（図15，写真12）

Ｂ３グリッドの北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，北側２ｍに30号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，主軸を北東－南西に置き，長辺106㎝，短辺79㎝，深さ20㎝を測る。底面は周囲の地形に沿って南西側でやや高くなるもほぼ水平で，壁は急傾斜で立ち上がる。西壁の一部が焼土化していた。遺構内の堆積土は５層に分けられる。堆積状況からℓ１～３を流入土の自然堆積，ℓ４を木炭の含有量から木炭層と判断した。ℓ５は層中に木炭粒と焼土粒を含むことから，木炭焼成中の堆積土であった可能性が高い。ℓ４より木材の形態を留めた木炭片が見つかっているが，量が少ないため焼成時の木材の配置状況を復元することは出来なかった。本遺構から遺物は出土しなかった。

本土坑は，堆積土中に木炭が遺存していることから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

35号土坑　ＳＫ35（図15，写真12）

Ｄ２グリッドの中央南側隅，遺跡調査区の端に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はない。遺構の平面形は，正方形に近い長方形を呈し，主軸方位は北西－南東である。遺構の規模は，長辺105㎝，短辺93㎝，深さ30㎝を測る。底面は地形に沿って南西側でやや高くなるもののほぼ水平で，締まりは強い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺存する壁の焼面と，堆積土中の焼土の多さから類推すると，壁の大半が焼土化していたものと類推できる。遺構内堆積土は６層に分けられた。ℓ１～５は木炭と焼土を含んでいることから，人為的な埋土と考えられる。ℓ６は水平堆積をし，炭化物の含有量が多いことから木炭層と判断した。出土遺物はない。

本土坑の特筆すべき点は，多量の焼土である。単に遺構遺存状態の良好さに起因するものではなく，焼成状況が他と異なっていた可能性がある。本遺構出土の木炭は放射性炭素年代測定(AMS)を実施しており，測定結果によると７世紀前半の年代がでているが，遺跡全域でこの時期の遺構・遺物が確認されていないことから，そのままこの年代を遺構の機能時期とするには問題が多いと判断し，他の木炭焼成土坑と同様に，その機能時期は平安時代の所産と考えたい。（西　澤）

36号土坑　ＳＫ36（図15，写真12）

Ｄ２グリッド中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構はなく，北西２ｍに16号土坑が，北東４ｍに24号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈しており，主軸方位は北東－南西方向である。遺構の規模は，長辺105㎝，短辺75㎝，深さ20～25㎝を測る。底面は地形に沿って長軸線南側が１段高くなる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。北側の壁面を中心に焼土化が認められる。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ１～４は，標高の高い南側から流れ込んできた自然堆積土と考えられる。ℓ４は木炭粒を多く含み，周囲に散らばっていた木炭が再度土坑

の中に混入したものであろう。木炭層と考えられるℓ５が北側に偏って堆積しており，地形に起因するものの可能性高い。遺物は縄文土器の細片がℓ１より出土しているが，周囲からの混入であると考えられる。

本土坑は他の土坑と同様に，堆積土中に木炭粒や焼土粒を多量に含むことから木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。

（西　澤）

37号土坑　ＳＫ37（図15，写真12）

Ｄ３グリッドのほぼ中心に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，北西側５ｍに54号土坑，南側５ｍに41号土坑が所在する。遺構の平面形は，一部を大きく撹乱されているため把握が困難だが，長辺90㎝，短辺70～80㎝程度の正方形に近い長方形であった可能性が高い。遺構の深さは４㎝程度を測るのみである。主軸方位は北西－南東方向であろう。底面は標高に沿って，南側でやや高くなっている。遺物は出土していない。

本土坑は後世の掘削を受け，基底部のみが残った木炭焼成土坑と考えている。遺構の機能時期に関しても，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と判断した。（西　澤）

38号土坑　ＳＫ38（図15，写真13）

Ｄ２グリッド南西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南西２ｍに52号土坑が所在する。遺構の平面形は正方形で，各辺の方位は東西南北にそろっている。遺構の規模は一辺90㎝，深さ15㎝を測る。底面は，中央付近に向かい深くなっている。壁面は遺存部から確認すると，やや急な傾斜で立ち上がっている。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１・２は南側から流れ込んできた自然堆積と考えられる。ℓ３に木炭粒の含有量が多いことから木炭層と考えられる。木炭層は底面の低いほうに堆積するように北側に偏っている。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑と同様に，堆積土中に焼土粒を多量に含み木炭層を有することから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。

（西　澤）

39号土坑　ＳＫ39（図16，写真13）

Ｄ２グリッドとＤ３グリッドの境界上に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はない。遺構の平面形は不整な隅丸長方形を呈し，主軸方位は北北西－南南東方向である。長辺94㎝，短辺74㎝，深さ15㎝を測る。底面はほぼ中心で深くなるレンズ状を呈する。壁は上面が掘削されていることから詳しい様相は不明だが，遺存する部分からやや急に立ち上がることが確認できる。遺構内堆積土は２層に分けられる。ℓ１は壁の崩落などに起因する自然堆積と考えられ，ℓ２は炭化物の含有が多いことから木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑より上面が掘削されているため全体的に形状が不明瞭であるが，木炭層を有することから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

40号土坑　ＳＫ40（図16，写真13）

Ｃ３グリッドのほぼ中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南側２ｍに５号溝跡が所在する。遺構の平面形は撹乱を受けているものの，主軸方位を北北東－南南西方向に置く長方形である。遺構の規模は，長辺82㎝，短辺72㎝，深さ10㎝を測る。底面はほぼ平坦である。壁は東側がやや急に立ち上がり，西側はそれに比較してやや緩やかに立ち上がる。西壁は焼土化しており，操業段階から壁の立ち上がり角度に差があったものと考えられる。遺構内堆積土は４層に分けられた。堆積状況からℓ１～３は自然堆積土と考えられる。水平堆積をするℓ４は木炭の含有量が多いため，木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は堆積土中に木炭粒と焼土粒を含むことから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

41号土坑　ＳＫ41（図16，写真13）

Ｄ３グリッドの中心やや南側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，北側５ｍに37号土坑が，西側５ｍに47号土坑が所在する。遺構の平面形は楕円形に近い隅丸長方形を呈し，長軸方位を東西に置く。遺構の規模は長辺134㎝，短辺90㎝，深さ30㎝を測る。底面はほぼ平坦である。壁は比較的急角度に立ち上がる。堆積土中に焼土が含まれるものの，壁や床面の焼土化は確認できなかった。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１・２がレンズ状堆積，ℓ３が三角堆積を示すことから，流入土の自然堆積と判断した。ℓ４は木炭を多量に含有することから，木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑と同様に，堆積土中に焼土粒を多量に含み，木炭層を有することから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期についても他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

42号土坑　ＳＫ42（図16，写真13）

Ｂ３グリッドのほぼ中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で当初撹乱として検出した。撹乱を掘り下げていく途中で焼土を確認したため，遺構として認識し調査した。重複する遺構はなく，付近には本土坑を中心として四方６ｍ以内に26号土坑や28号土坑など，４基の木炭焼成土坑と２号焼土遺構が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，主軸方位を北北西－南南東方向に置く。遺構の規模は長辺100㎝，短辺60㎝，深さ15㎝を測る。底面はほぼ平坦である。壁は東側ではほぼ垂直に立ち上がり，西側は比較して緩やかに立ち上がる。周壁の北側にのみ焼土化が確認できる。遺構内堆土は

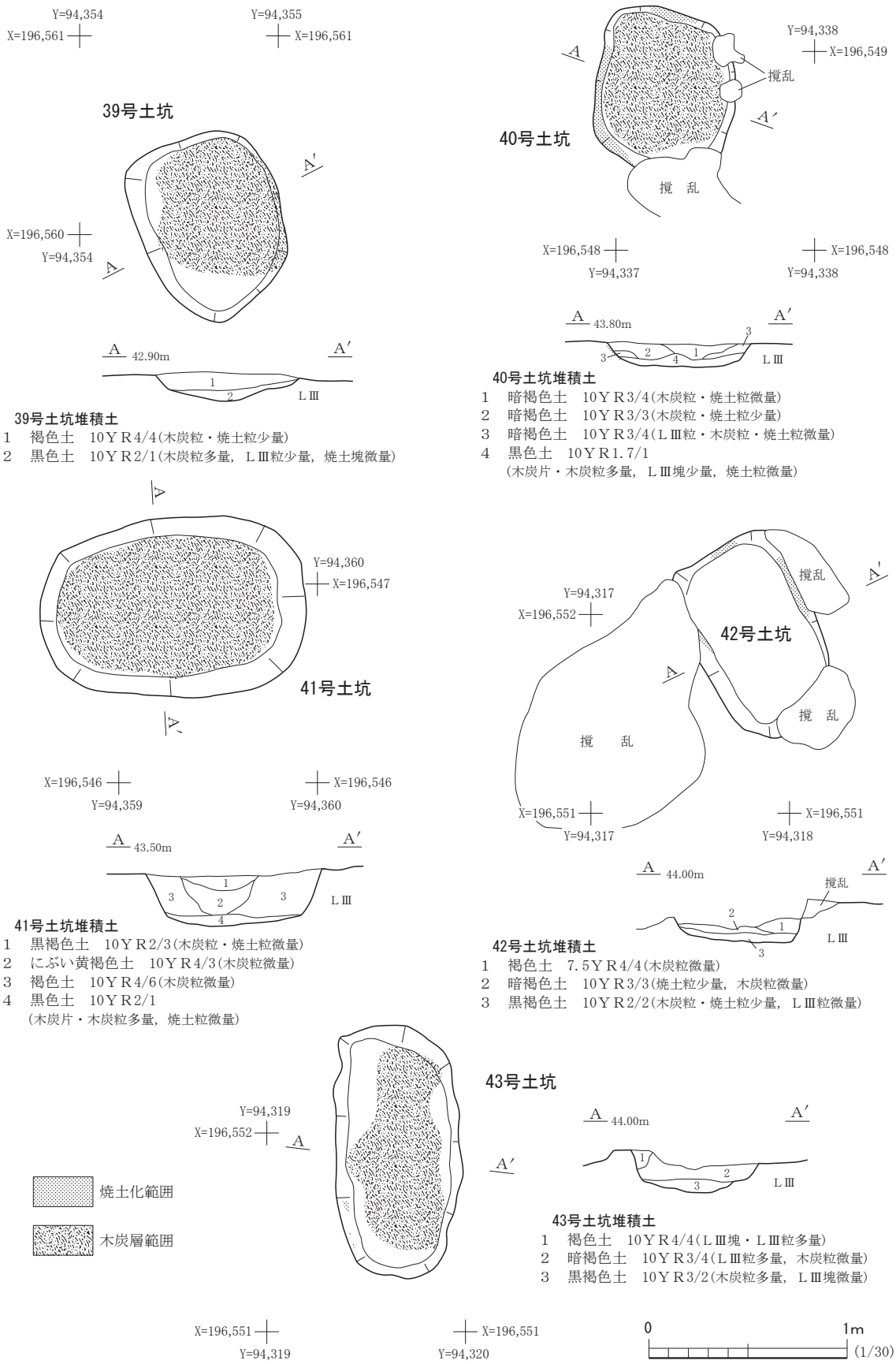

Y=94,354
X=196,561
Y=94,355
X=196,561
39号土坑
A
A′
X=196,560
Y=94,354
A
A′
42.90m
1
2
ⅢL
39号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(木炭粒・焼土粒少量)
2　黒色土　10ＹＲ2/1(木炭粒多量，ⅢL粒少量，焼土塊微量)
Y=94,338
X=196,549
A
撹乱
A′
40号土坑
撹　乱
X=196,548
Y=94,337
X=196,548
Y=94,338
A
43.80m
A′
3
2
4
1
3
ⅢL
40号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(木炭粒・焼土粒少量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(ⅢL粒・木炭粒・焼土粒微量)
4　黒色土　10ＹＲ1.7/1
(木炭片・木炭粒多量，ⅢL塊少量，焼土粒微量)
A
Y=94,360
X=196,547
41号土坑
A′
X=196,546
Y=94,359
X=196,546
Y=94,360
A
43.50m
A′
1
3
2
3
4
ⅢL
41号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3(木炭粒・焼土粒微量)
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(木炭粒微量)
3　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒微量)
4　黒色土　10ＹＲ2/1
(木炭片・木炭粒多量，焼土粒微量)
撹乱
A′
Y=94,317
X=196,552
42号土坑
A
撹　乱
撹　乱
X=196,551
Y=94,317
X=196,551
Y=94,318
A
44.00m
A′
撹乱
2
1
3
ⅢL
42号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/4(木炭粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3(焼土粒少量，木炭粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭粒・焼土粒少量，ⅢL粒微量)
43号土坑
Y=94,319
X=196,552
A
A′
A
44.00m
A′
1
2
3
ⅢL
43号土坑堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4(ⅢL塊・ⅢL粒多量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(ⅢL粒多量，木炭粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2(木炭粒多量，ⅢL塊微量)
焼土化範囲
木炭層範囲
X=196,551
Y=94,319
X=196,551
Y=94,320
0
1m
(1/30)

図16　39～43号土坑

３層に分けられる。ℓ１はそのほとんどを撹乱として掘削してしまったため，遺存していない。ℓ２・３はそれぞれ水平に堆積することから人為堆積と判断した。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑と比較し遺構内の炭化物の量が少ないものの，壁面の一部が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期についても他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

43号土坑　ＳＫ43（図16，写真13）

Ｂ３グリッドのほぼ中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，付近には西側２ｍに所在する42号土坑を中心として，四方６ｍ以内に26号土坑や28号土坑など４基の木炭焼成土坑と２号焼土遺構が所在する。当初は撹乱として掘り下げたが，暗褐色土を取り除くと，炭化物粒を含む層を検出したので遺構として調査した。遺構の平面形は長方形で，主軸方位を南北方向に置き，長辺128㎝，短辺62㎝，深さ20㎝を測る。底面は中央がくぼんでいくレンズ状で，急角度に立ち上がる壁と合わせて，短軸断面は船底状の断面形を呈する。壁の焼土化は西壁のごく一部で確認できる。遺構内堆積土は３層に分けられる一部を掘削してしまったため判断が難しいが，おそらくℓ１・２は自然堆積であろう。水平に堆積し，木炭を多量に含むℓ３が木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑より，短辺に対し長辺が長いという形状に特徴がある。木炭層を有することから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

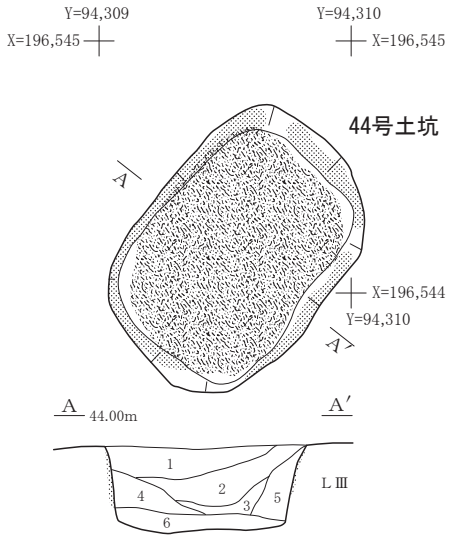
44号土坑　ＳＫ44（図17，写真13）

Ａ３グリッドの南東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，南側２ｍに45号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，長軸方位を北東－南西に置く。遺構の規模は，長辺112㎝，短辺72㎝，深さは30㎝を測る。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面の周囲は焼土化している。遺構内の堆積土は６層に分けられる。堆積状況から，ℓ１～５は流入土の自然堆積と判断した。水平に堆積し，木炭粒の含有量が多いℓ６は木炭層と考えられる。遺物はℓ１から縄文土器の細片が出土しているが，周辺の縄文土器の散布が密であることから，これらが混入したものであると考えられる。

本土坑は木炭層を有し周壁が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代と考えている。（西　澤）

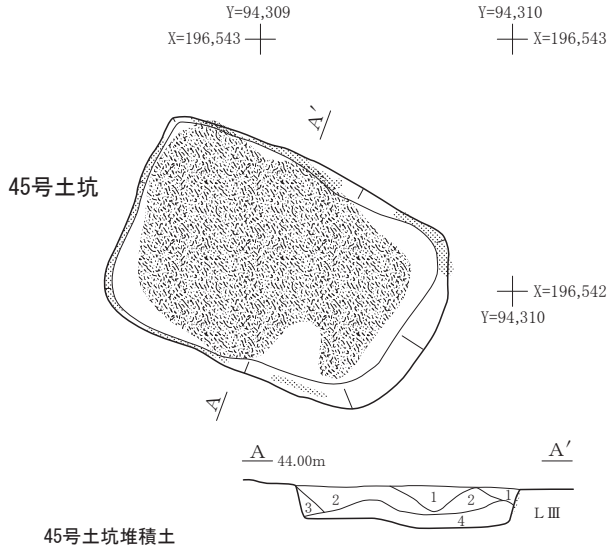
45号土坑　ＳＫ45（図17，写真13）

Ａ３グリッドの南東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，北側２ｍに44号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，長軸方位を北西－南東に置く。遺構の規模



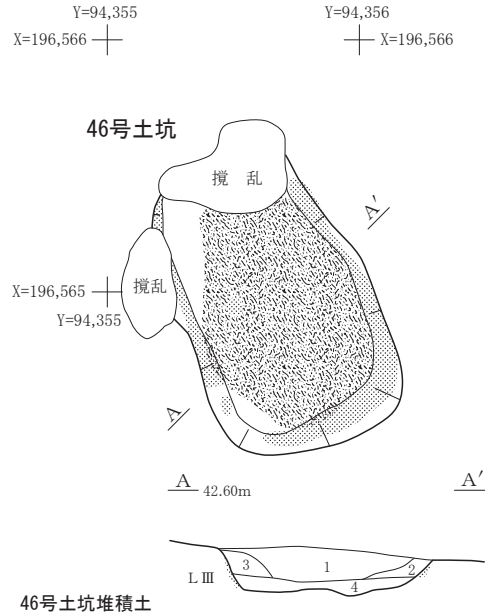
44号土坑堆積土

1　褐色土　7.5ＹＲ4/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　褐色土　7.5ＹＲ4/3(ＬⅢ粒少量，木炭粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
4　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒・焼土粒微量)
5　褐色土　10ＹＲ4/6(焼土少量，木炭粒微量)
6　黒色土　Ｎ2/0(木炭片・木炭粒多量)



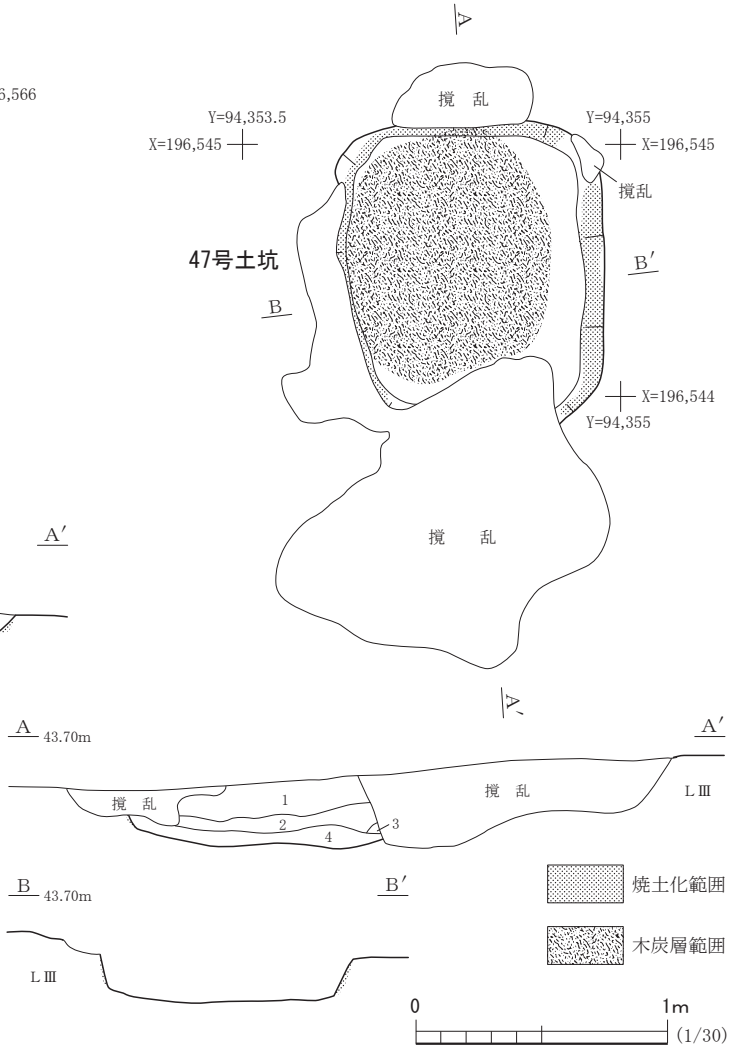
45号土坑堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/4(ＬⅢ塊多量，ＬⅢ粒・木炭粒・焼土粒微量)
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3(ＬⅢ塊・ＬⅢ粒・木炭粒・焼土粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(ＬⅢ塊・焼土塊多量，木炭粒微量)
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭粒多量，ＬⅢ粒少量，焼土粒微量)



46号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒多量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4(焼土粒少量)
4　黒色土　Ｎ1.5/1
(木炭片・木炭粒多量，焼土粒少量)



47号土坑堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒多量)
3　褐色土　10ＹＲ4/4(焼土粒少量)
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2
(木炭粒多量，焼土粒微量)

図17　44～47号土坑

は長辺132㎝，短辺89㎝，深さ15㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが，等高線に沿って北西側で１段下がるように低くなる。その差はおよそ５㎝弱である。壁は垂直に近い急角度で立ち上がる。壁面の焼土化は南東側を除き巡っているが，南東側の壁の立ち上がりが他と比較して緩やかなことを考えると，この面のみ崩落してしまっている可能性が高い。遺構内の堆積土は４層に分けられた。ℓ１～３は乱れた堆積を示すことから人為的な埋土と判断できる。水平に堆積し，木炭粒の含有量が多いℓ４は木炭層と考えられる。遺物はℓ１・２から縄文土器の細片が比較的多く出土しているが，周辺の土器が混入したものであると考えられる。

本土坑は木炭層を有し周壁が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えている。機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

46号土坑　ＳＫ46（図17，写真14）

Ｄ２グリッド中央やや南西側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はなく，北西４ｍに32号土坑が，南側５ｍに39号土坑が所在する。遺構の平面形は長方形を呈し，長軸方位を北北西－南南東に置く。遺構の規模は，長辺110～120㎝，短辺75㎝，深さ20㎝を測る。底面は北東側でわずかにくぼむが，全体的には水平である。壁は西側ではやや急な角度で立ち上がり，東側はそれに比べて緩やかに立ち上がる。焼土化は壁のほぼ全周で認められる。遺構内堆積土は４層に分けられた。堆積状況から，ℓ１～３は流入土の自然堆積と考えられる。焼土粒の含有量かℓ２は壁の崩落土である可能性がある。水平に堆積し，多量に木炭を含有するℓ４は木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は木炭層を有し周壁が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えられる。遺構の機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

47号土坑　ＳＫ47（図17，写真14）

Ｄ３グリッド南西側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。東側の上面は近現代の撹乱により破壊されていたが，底面は比較的良好に残る。逆に西から南側にかけてそれとは異なる撹乱により大きく破壊されている。重複する遺構はない。遺構の平面形は，ほぼ南北方向に長軸方位をもつ長方形を呈する。遺構の規模は長辺120㎝程度，短辺110㎝程度，深さは25～30㎝を測る。底面はほぼ水平であるが，長軸方向でわずかに傾斜している。壁は底面から急角度に立ち上がる。壁を全周するように焼土化が認められる。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１・２は堆積状況から流入土の自然堆積と判断した。ℓ３はほとんど遺存していないため，堆積状況が不明である。ℓ４は水平に堆積し，木炭の含有量が多いことから木炭層と考えられる。遺物は出土していない。

本土坑は他の土坑よりやや規模が大きいが，木炭層および周壁が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えられる。遺構の機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

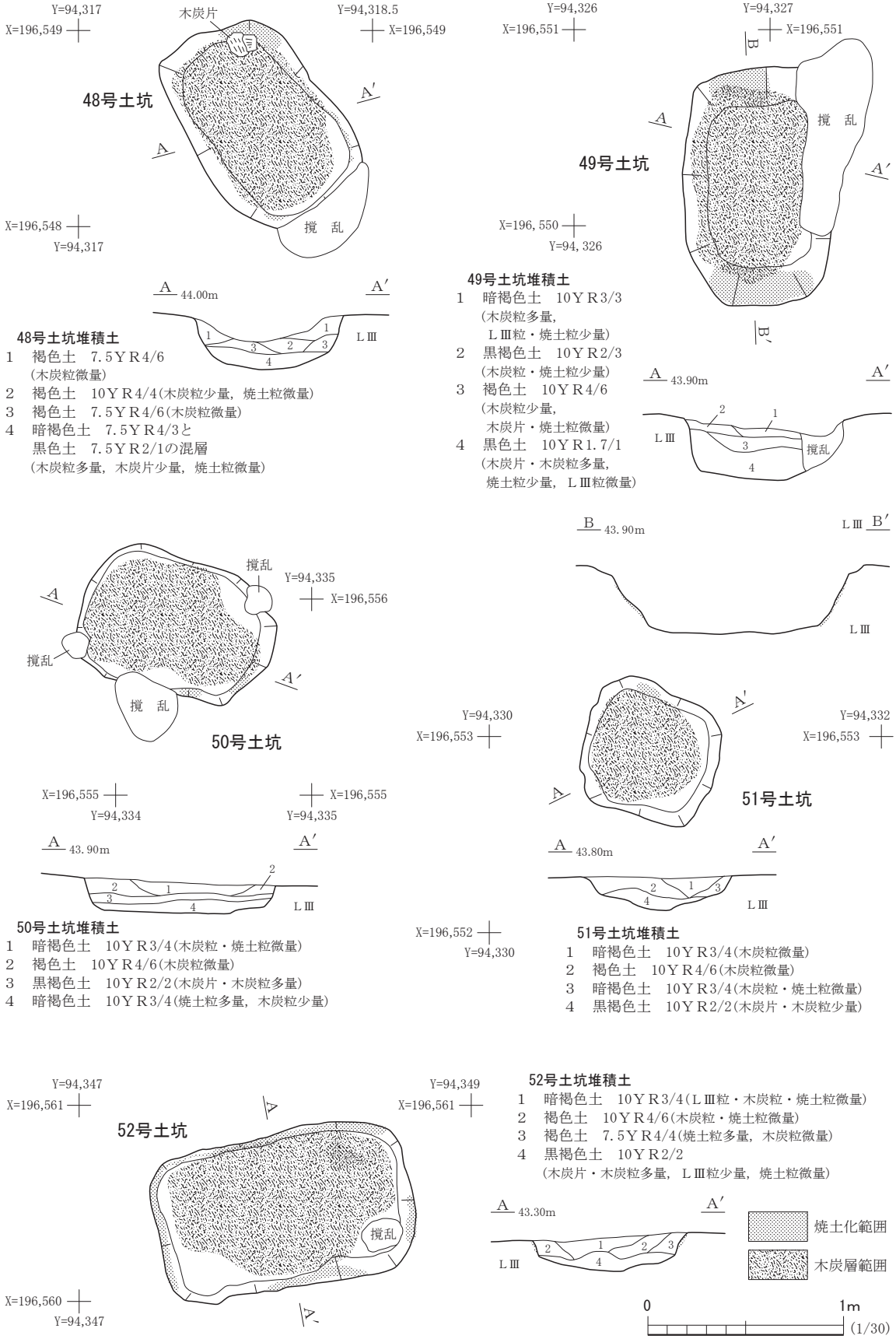

Y=94,317
X=196,549
木炭片
Y=94,318.5
X=196,549
48号土坑
A
A′
撹　乱
X=196,548
Y=94,317
A 44.00m
A′
LⅢ
48号土坑堆積土
1　褐色土　7.5ＹＲ4/6
(木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/4(木炭粒少量，焼土粒微量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/6(木炭粒微量)
4　暗褐色土　7.5ＹＲ4/3と
黒色土　7.5ＹＲ2/1の混層
(木炭粒多量，木炭片少量，焼土粒微量)
Y=94,326
X=196,551
Y=94,327
X=196,551
B
B′
49号土坑
撹　乱
X=196, 550
Y=94, 326
49号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
(木炭粒多量,
ＬⅢ粒・焼土粒少量)
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3
(木炭粒・焼土粒少量)
3　褐色土　10ＹＲ4/6
(木炭粒少量,
木炭片・焼土粒微量)
4　黒色土　10ＹＲ1.7/1
(木炭片・木炭粒多量,
焼土粒少量，ＬⅢ粒微量)
A 43.90m
A′
LⅢ
撹乱
B 43.90m
LⅢ B′
LⅢ
撹乱
Y=94,335
X=196,556
撹乱
撹　乱
50号土坑
X=196,555
Y=94,334
X=196,555
Y=94,335
A 43.90m
A′
LⅢ
50号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒微量)
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭片・木炭粒多量)
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4(焼土粒多量，木炭粒少量)
Y=94,330
X=196,553
Y=94,332
X=196,553
51号土坑
A 43.80m
A′
LⅢ
X=196,552
Y=94,330
51号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒微量)
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4(木炭粒・焼土粒微量)
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2(木炭片・木炭粒少量)
Y=94,347
X=196,561
Y=94,349
X=196,561
52号土坑
撹乱
X=196,560
Y=94,347
52号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(ＬⅢ粒・木炭粒・焼土粒微量)
2　褐色土　10ＹＲ4/6(木炭粒・焼土粒微量)
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4(焼土粒多量，木炭粒微量)
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2
(木炭片・木炭粒多量，ＬⅢ粒少量，焼土粒微量)
A 43.30m
A′
LⅢ
焼土化範囲
木炭層範囲
0
1m
(1/30)

図18　48～52号土坑

48号土坑　ＳＫ48（図18，写真14）

Ｂ３グリッドのほぼ中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。当初は撹乱と判断し掘り下げたため，土層の一部しか確認できなかった。重複する遺構はなく，付近には42号土坑を中心として，四方６ｍ以内に26号土坑や28号土坑など，４基の木炭焼成土坑と２号焼土遺構が分布する比較的遺構密度の濃い範囲に立地する。遺構の平面形は長方形を呈し，長軸方位を北西－南東に置く。遺構の規模は長辺110㎝，短辺70㎝，深さ25㎝を測る。底面はレンズ状を呈し，壁際に近づくにつれ緩やかに傾斜しており，急角度で立ち上がる壁と合わせて遺構短軸の断面が割竹形を呈す。周壁の下部が部分的に焼土化していた。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１～３は，堆積状況が複雑であることから，人為的な埋土と判断でき，水平に堆積するℓ４は木炭層と考えられる。遺物はℓ４より縄文土器の細片が出土しているが，これは周辺に散布していたものが土坑構築時に混入したものと考えられる。

本土坑は木炭層を有し周壁が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えられる。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

49号土坑　ＳＫ49（図18，写真14）

Ｂ３グリッドの東側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。遺構の重複はない。遺構の上面には樹木が生えていたため，遺構南側の上面と北東側の全域が撹乱されて失われていたが，それ以外の部分は遺存し旧状を留めている。遺構の平面形は長方形を呈し，長軸方位をほぼ南北方向に置く。遺構の規模は，長辺122㎝，短辺75㎝，深さ30㎝を測る。底面はほぼ水平である。周壁は南側を除きほぼ垂直か急角度で立ち上がるが，南側の壁のみ緩やかな傾斜で立ち上がる。短辺である南北の壁に焼土化した部分が確認できる。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１・２は水平に堆積し，木炭粒・焼土粒が認められるが，人為的な堆積土とは考えにくく，流れ込みの状況により自然堆積土と判断した。ℓ３も流れ込みを示す堆積状況と含有物から，自然堆積土と判断した。ℓ４はレンズ状に堆積しているが，堆積が厚く木炭の含有量が多いことから木炭層と考えられる。本遺構出土の木炭の量は他の土坑と比較して非常に多い。遺物はℓ１より縄文土器の細片が出土しているが，周辺に散布している縄文土器が混入したものと考えられる。

本土坑は木炭層を有し壁の一部が焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えられる。木炭粒の含有量が多いが，形を留めた木炭は確認できなかった。遺構の機能時期については，他の木炭焼成土坑と同様に平安時代の所産と考えている。（西　澤）

50号土坑　ＳＫ50（図18，写真14）

Ｃ３グリッド北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められず，北東１ｍに31号土坑が所在する。平面形は長方形を基調とし，東西方向に長い。検出面での規模は長

辺が98㎝，短辺72㎝，深さは最高で16㎝である。底面はほぼ平坦で，壁は底面から急角度で立ち上がり，南壁東側と東壁南側に焼土化が認められる。遺構内堆積土は４層で，ℓ１はレンズ状，ℓ２は三角堆積を示すことから自然堆積と判断した。ℓ３は木炭片・木炭粒の含有量が多く，水平に堆積することから機能時の木炭層と考えられる。ℓ４は木炭層下位に水平に堆積する暗褐色土で，多量の焼土粒を含むことから遺構機能時の堆積層と考えられ，この層の存在から複数回の操業が想定できる。遺物はℓ１から縄文時代早期の土器片６点が出土しているが，いずれも細片で本遺構に伴うものではない。

本遺構は木炭層の存在と周壁の焼土化から，木炭焼成土坑と考えている。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。（笠　井）

51号土坑　ＳＫ51（図18，写真14）

Ｃ３グリッド西縁中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ面で検出した。重複する遺構は認められない。平面形は方形を基調とし，検出面での規模は，東西69㎝，南北66㎝，深さは最高で16㎝である。底面は中央付近に向かいくぼんでいる。壁の立ち上がりは比較的急角度で，北壁の西寄りが弱く焼土化している。遺構内堆積土は４層で，ℓ１～３は堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。木炭の含有量が多いことからℓ４は機能時の木炭層と判断できる。遺物は出土しなかった。

本遺構は木炭層の存在と周壁の焼土化から，木炭焼成土坑と考えている。方形を基調としており，木炭焼成土坑としては小型である。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。（笠　井）

52号土坑　ＳＫ52（図18，写真14）

Ｃ２グリッド南東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ面で検出した。重複する遺構は認められない。平面形は長方形を基調とし，東西方向に長い。検出面での規模は，長辺129㎝，短辺81㎝，深さは最深で18㎝である。底面はほぼ平坦であるが，中央付近がわずかにくぼんでいる。壁の立ち上がりは比較的急角度で，上部は角度が緩くなる。北壁および西壁の全面，南壁中央および東壁南側が焼土化している。また北東隅付近の床面もわずかに焼土化していた。遺構内堆積土は４層で，ℓ１～３は堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。焼土粒を多量に含むℓ３は壁の崩落土であろう。ℓ４は木炭の包含量が多いことから，機能時の木炭層と判断できる。遺物はℓ１から縄文時代早期の土器片１点が出土したが，細片であり本遺構に伴わないため図示しなかった。

本遺構は木炭層の存在と周壁の焼土化から，木炭焼成土坑と考えている。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。（笠　井）

53号土坑　ＳＫ53（図19，写真14）

Ｄ３グリッド西側中央寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められ

ないが，上面は削平を受けている。平面形は方形を基調としており，検出面での規模は，北西－南東方向が70㎝，北東－南西方向が68㎝，深さは10㎝である。底面はほぼ平坦である。壁は下部しか残っていないが，立ち上がりは比較的緩やかである。遺構内堆積土は２層で，ℓ１は自然堆積土，ℓ２は木炭の包含量が多いことから機能時の木炭層と判断できる。遺物は出土しなかった。

本遺構は木炭層の存在から，木炭焼成土坑と考えている。方形を基調としており，木炭焼成土坑としては小型である。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。

（笠　井）

54号土坑　ＳＫ54（図19，写真15）

Ｄ３グリッド西側北寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，上面は削平を受けており，遺存状態は悪い。平面形は方形を基調としていると思われるが，削平と根による撹乱で崩れてしまっている。検出面での規模は，北西－南東方向が47㎝，北東－南西方向が52㎝，深さは最深で６㎝である。底面はほぼ平坦である。壁は下部しか残っていないが，立ち上がりは比較的緩やかである。遺構内堆積土は１層のみで，木炭の包含量から木炭層の最下部に相当すると判断した。遺物は出土しなかった。

本遺構は木炭層の存在から，木炭焼成土坑と考えている。方形を基調としていると考えられ，本遺跡の木炭焼成土坑としては最も小型の部類である。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。

（笠　井）

55号土坑　ＳＫ55（図19，写真15）

Ｃ４グリッド西側中央付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，北・西・南壁に木根による撹乱を受けている。平面形は長方形を基調とし，南北方向に長い。検出面での規模は，長辺99㎝，短辺64㎝，深さは最深で18㎝である。底面はおおむね平坦であるが東側にわずかな起伏がある。壁は底面から急角度で立ち上がり，東壁と北壁が強く焼土化している。遺構内堆積土は４層で，ℓ１～３は堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。ℓ４は木炭の包含量から，機能時の木炭層と判断できる。遺物は出土しなかった。

本遺構は木炭層の存在と周壁の焼土化から，木炭焼成土坑と考えている。遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。

（笠　井）

56号土坑　ＳＫ56（図19，写真15）

Ｄ４グリッド西側北寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ面で検出した。重複する遺構は認められない。平面形は不整な楕円形をしており，南北方向に長い。検出面での規模は，長辺102㎝，短辺79㎝，深さは最深で63㎝である。底面は南側が一段深くくぼんでおり，北から南へ緩やかに傾斜している。壁は急角度で立ち上がっており，南壁の一部はオーバーハング気味になっている。遺構内堆積土は

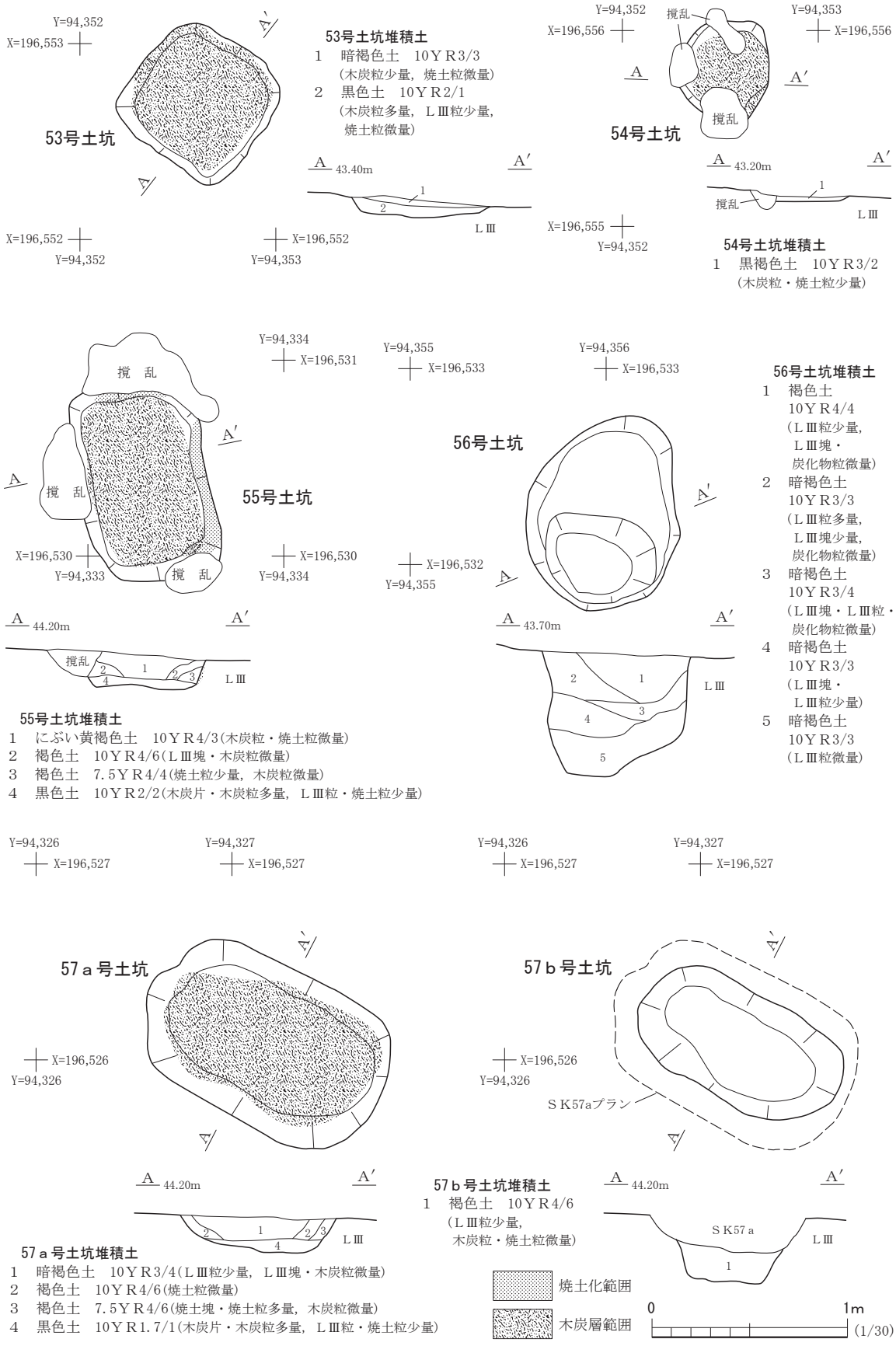


図19　53～56・57ａ・57ｂ号土坑

５層で，堆積状況からいずれの層も周囲から流入した自然堆積土と判断した。遺物はℓ２から縄文時代早期の土器片５点が出土したが，細片のため図示しなかった。

本遺構は垂直に深く掘り込まれ，底面が傾斜する特徴的な土坑であるが，その機能および性格は不明である。堆積土が近世のものに近いことから，遺構の機能時期は近世としておく。　（笠　井）

57ａ号土坑　ＳＫ57ａ（図19，写真15）

Ｂ４グリッド南東寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。本遺構の直下には，一回り規模の小さい57ｂ号土坑があり，平面形および方位が一致することから両遺構はつながりを有するものと考えられる。上位にある本遺構が新しい。平面形は短辺が膨らむ長方形で，北西－南東方向に長い。検出面での規模は，長辺129㎝，短辺81㎝，深さは最深で17㎝である。底面には起伏があり，北東辺側がやや深い。壁は底面から緩やかに立ち上がり，しだいに角度を増す。遺構内堆積土は４層で，ℓ１～３は堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。ℓ４は木炭の包含量が多いことから，機能時の木炭層と判断できる。遺物は出土しなかった。

本遺構は底面に木炭層が存在することから，木炭焼成土坑と考えられる。また木炭層の存在は，下位の57ｂ号土坑の埋没後に少なくとも１回以上の操業が行われたことをものがたり，両遺構の機能時期に時間差があることの傍証になる。本遺構の機能時期は，他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。　（笠　井）

57ｂ号土坑　ＳＫ57ｂ（図19，写真15）

Ｂ４グリッド南東寄りに位置し，57ａ号土坑の調査時に検出した。本遺構は57ａ号土坑の直下にあり，前述したが，平面形および方位が一致することから両遺構はつながりを有するものと考えられる。下位にある本遺構が古い。平面形は短辺が膨らむ長方形で，北西－南東方向に長い。検出面での規模は，長辺107㎝，短辺58㎝，深さは最深で18㎝で，57ａ号土坑より一回り小さい。底面はほぼ平坦で，壁は底面から急角度で立ち上がる。遺構内堆積土は１層のみで，全体的に均質であり，短時間で埋没したようである。人為的な埋戻しであろうか。遺物は出土しなかった。

本遺構は57ａ号土坑の真下に位置し，長軸の方位がほぼ一致する土坑である。本遺構の直上に57ａ号土坑の木炭層があることから，両遺構は断絶した別遺構と判断したが，本遺構が57ａ号土坑の掘形であれば，同一遺構とみなすこともできる。本遺構の機能時期は，57ａ号土坑との関係から他の木炭焼成土坑同様，平安時代の所産と考えられる。　（笠　井）

58号土坑　ＳＫ58（図20，写真15）

Ｃ４グリッド北縁中央付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。61号土坑と重複しており，本遺構のほうが新しい。また遺構の西側が木根の撹乱で壊されている。平面形は楕円形を基調としており，東西方向に長い。検出面での規模は遺存値で，長辺140㎝，短辺93㎝，深さは最深で24㎝

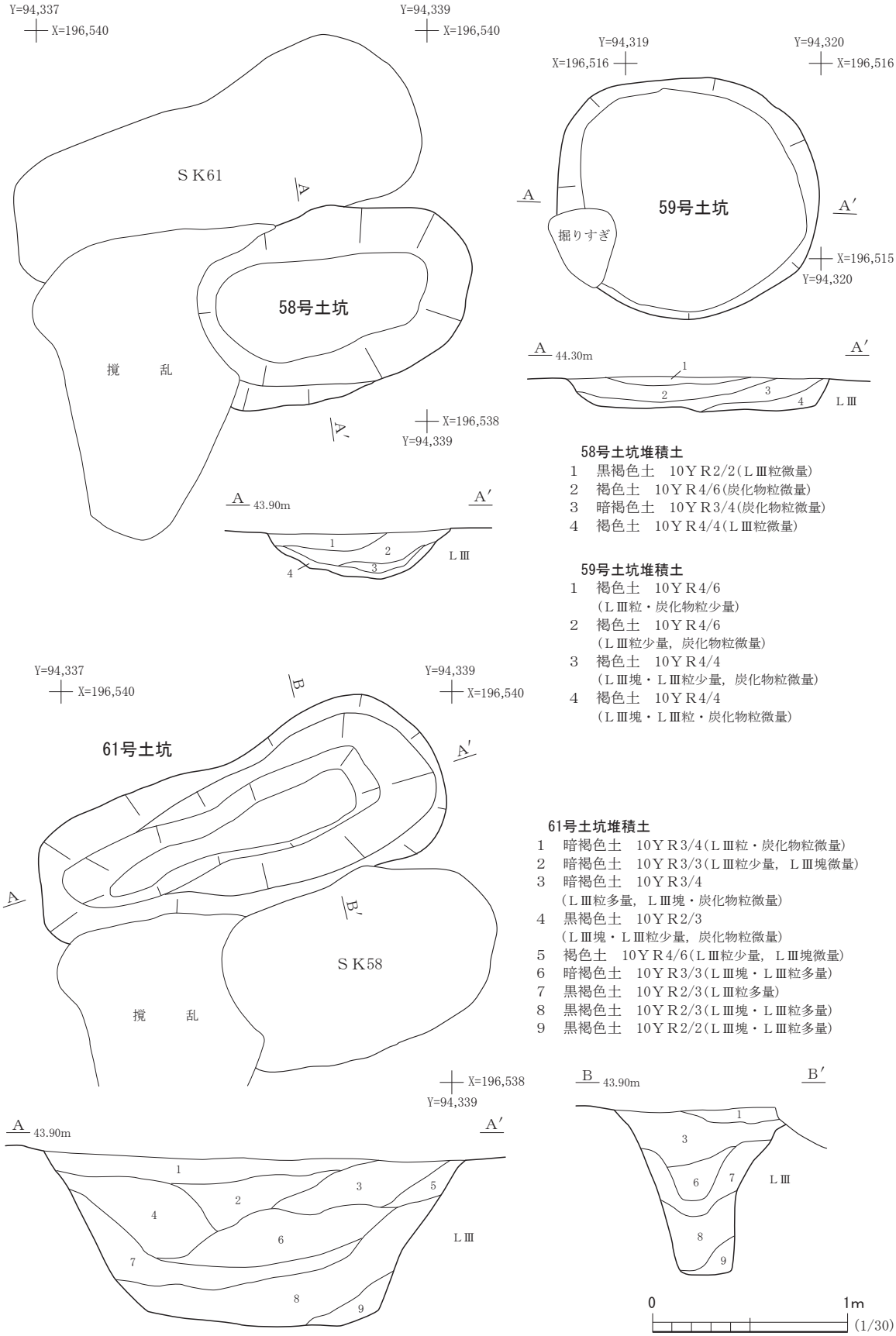


図20　58・59・61号土坑

である。底面は皿状に緩やかなカーブを描きくぼんでいる。壁は底面からそのまま緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は４層で，堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

本遺構は楕円形を基調とした土坑であるが，その性格は不明である。遺構の機能時期は遺物が出土していないため断定できないが，堆積土の特徴から平安時代以降の所産と考えられる。（笠　井）

59号土坑　ＳＫ59（図20，写真16）

Ｂ５グリッド北寄り中央付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を基調としている。検出面での規模は，南北124㎝，東西130㎝，深さは最深で18㎝である。底面はほぼ平坦で中央がわずかにくぼむ。壁は底面から急角度で立ち上がる。遺構内堆積土は４層で，堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。遺物は図化していないが，ℓ１から陶磁器の小片が７点出土している。

本遺構は円形を基調とした土坑であるが，その性格は不明である。遺構の機能時期は，出土した陶磁器片から近世の所産と考えられる。（笠　井）

60号土坑　ＳＫ60（図21，写真16）

Ｃ３グリッド東縁南寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は隅丸長方形を基調としており，東西方向に長い。検出面での規模は遺存値で，長辺204㎝，短辺98㎝，深さは最深で44㎝である。底面は船底形にくぼみ，壁面に移行する。壁は急角度に立ち上がり，上部ほど角度が緩い。遺構内堆積土は３層で，堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

本遺構は隅丸長方形をした土坑であり，その細長い形状と堆積土の流入状況から，落し穴と考えられる。遺構の機能時期は遺物が出土していないため断定できないが，堆積土の特徴から縄文時代の所産と考えられる。（笠　井）

61号土坑　ＳＫ61（図20，写真16）

Ｃ４グリッド北縁中央寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。58号土坑と重複しており，本遺構のほうが古い。また遺構の南側が木根の撹乱で壊されている。平面形は隅丸長方形を基調としており，南西－北東方向に長い。検出面での規模は，長辺214㎝，短辺の遺存値80㎝，深さは最深で88㎝である。底面はほぼ平坦である。壁は底面から中位ほどまで急角度に立ち上がるが，中位以上は崩落のため，立ち上がる角度が緩やかである。遺構内堆積土は９層で，堆積状況からいずれも自然堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

本遺構は隅丸長方形をした土坑であり，その細長い形状と堆積土の流入状況から，落し穴と考えられる。遺構の機能時期は遺物が出土していないため断定できないが，堆積土の特徴から縄文時代の所産と考えられる。（笠　井）

62号土坑　ＳＫ62（図21，写真16・23）

Ｄ５グリッド南縁中央付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はない。平面形は円形を基調としている。検出面での規模は，南北94㎝，東西95㎝，深さは最深で17㎝である。底面はほぼ平坦である。壁は底面から急角度で立ち上がる。遺構内堆積土は１層で，均質な暗褐色土が一面に入っているので，人為的な埋め土と考えている。

出土した遺物は，銅鏡１枚と棒状鉄製品１個，銭貨80枚以上である。これらの内遺存状態の悪い２枚の銭貨を除くすべてを報告する。

１は青銅製の柄鏡である。鏡部の直径は8.4㎝で，柄の部分は失われており，全面がサビに覆われている。Ｘ線写真によると背面には文様が認められる。背面の文様は麻葉文を地文とし，中央に「姫路剣片喰」という家紋が鋳出されている。

２は断面が方形の棒状鉄製品で，鉤の手に曲がっており，サビに覆われた球状の塊を貫通している。形状から簪（かんざし）と推定している。

３～16は六道銭と考えられる銭貨で，そのほとんどは寛永通宝であると考えられる。銭貨は銭通しに通されて，有機物で包まれていたと考えられ，数枚単位で癒着し分離できない。正確な枚数は不明であるため，塊ごとに観察できる範囲で報告する。３は８枚以上の銭貨からなる塊で，サビの状態から側面図右側の３枚は鉄銭と考えられる。４は最大の塊で，29枚の銭貨からなり大半は銅銭であるが，中央付近にサビが顕著であることからこの部分に鉄銭が混じっているようである。５は14枚の銅銭を主体とする銭貨からなる。サビ・土・有機物で構成される周囲の付着物の断面形が方形を示すことから，内寸４㎝弱の細長い箱状の入れ物に銭貨を収めていた可能性が考えられる。６は７枚以上の銭貨からなる。側面図右から２枚目の銅銭は，「永」「通」の２文字が読み取れるので，寛永通宝であろう。７は銅銭１枚のみの資料であるが，付着物中に，入れ物もしくは棺材の一部と見られる木質が確認できる。８は鉄銭を含む５枚の銭貨からなる。側面右端の銅銭は「寛」と読みとれる部分があることから，寛永通宝であろう。９・10はともに４枚ずつの銭貨からなるもので，10には木質遺物の付着が認められる。11～16は拓本が取れたものである。11～15はすべて「寶」の字体から新寛永と考えられる。特に背面に「文」と読み取れる11は，寛文８（1668）年鋳造開始の通称文銭である。16は３枚の銅銭が癒着したもので，文字は読み取れない。

本遺構は，出土遺物の特徴から江戸時代の墓穴であると考えられる。鏡や簪（かんざし）が出土していることから埋葬者は女性であると推定される。また，六道銭と考えられる多量の銭貨は，銅銭と鉄銭が混ざっており，付着物の形状から細長い箱状のものに納められていた可能性を指摘しておきたい。遺構の機能時期は，出土した遺物の特徴から江戸時代の所産と考えられる。（笠　井）

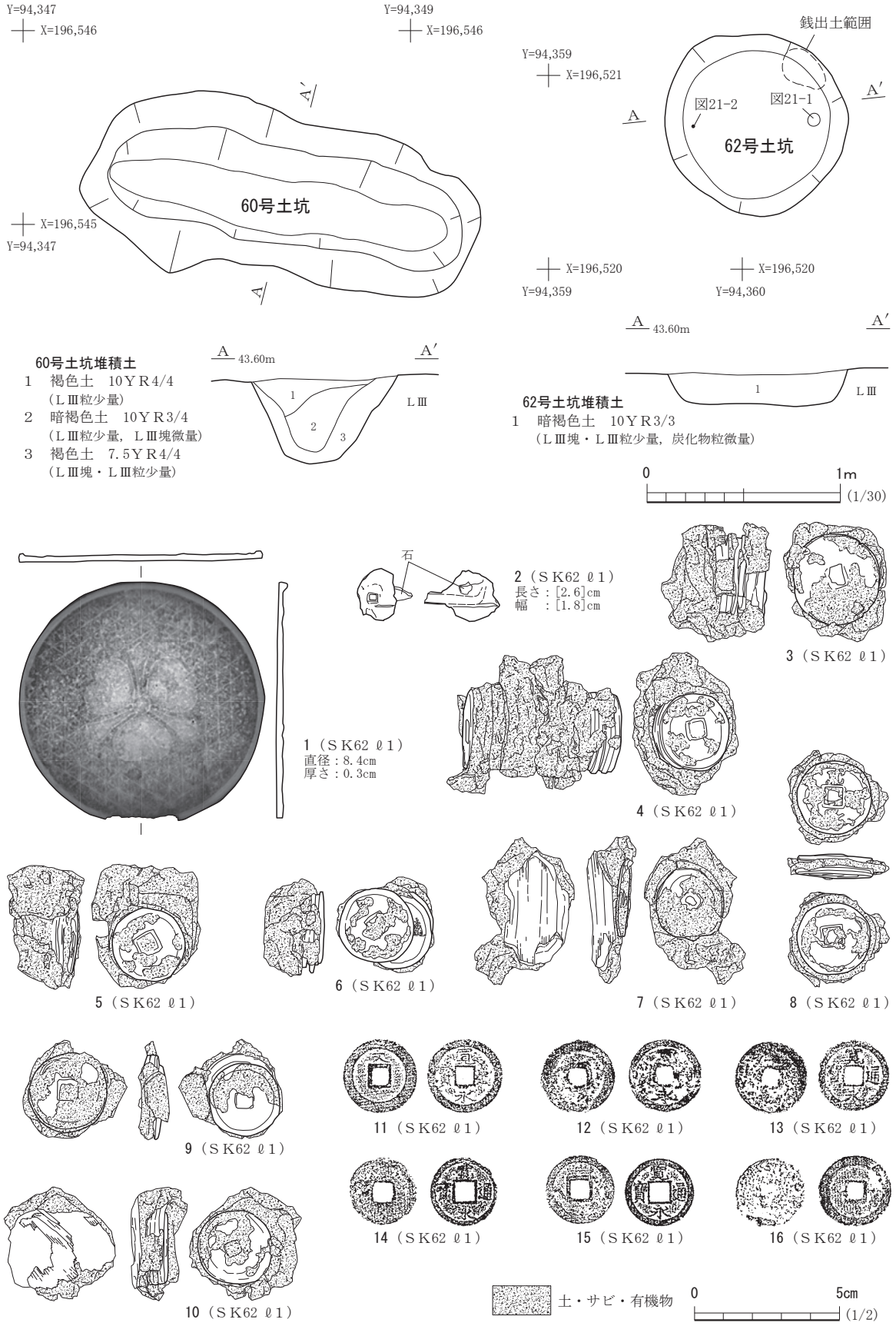


図21　60・62号土坑，62号土坑出土遺物

第４節　溝跡・井戸跡

西原遺跡で検出された溝跡は６条で，井戸跡は２基である。堆積土の状況から，いずれも近世以降の所産と考えられる。溝跡は調査区内に散在しており，遺構相互の関連は認められない。井戸跡は，位置関係から第２節で報告した近世の建物跡に付属すると推定される。以下溝跡，井戸跡の順で遺構ごとに説明していく。

１号溝跡　ＳＤ01（図22，写真17・24）

調査区南部のほぼ中央，Ｃ５グリッドの北西隅からＤ８グリッドの北西隅にかけて位置する。遺構検出面はＬⅠ直下のＬⅡおよびＬⅢ上面である。北端が撹乱のため判然としないが，規模は長さ約48ｍで南北に直線的に延びている。幅は約１～３ｍで中央付近がもっとも広く，両端に向かって狭まっている。底面は浅い皿状にくぼみ，検出面からの深さは中央付近が約30～40㎝と最も深い。壁は東側が緩く傾斜しているのに対し，西側は急角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は３層で，いずれも自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片３点，土師器片１点，須恵器片２点，土師質土器１点，陶器１点がℓ１から出土している。このうち，縄文土器１点，須恵器１点，土師質土器１点，陶器１点を図化した。

１は縄文土器で，斜行縄文が施された深鉢形土器の胴部片である。

２・３は平安時代の遺物である。２は須恵器長頸瓶の頸部で器面の荒れが激しい。３は底部に回転糸切り痕を残す土師質土器で，焼成は良好で胎土も堅緻である。

４は近世の遺物で，本遺構に伴うと考えられる資料である。肥前産の陶器皿で，灰釉の上に青緑釉を重ね掛けしている。

本溝跡の機能時期については，遺構検出面と出土遺物から近世頃と考えている。　（山　岸）

２号溝跡　ＳＤ02（図23，写真17・24）

Ａ３グリッド東側からＢ３グリッド南西に位置し，ＬⅠ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はない。北西－南東方向に直線的に延びており，北西側は調査区外へと延びていく。遺構の規模は，長さ8.89ｍ，幅80～110㎝，深さはおおむね10㎝である。底面はほぼ平坦で北側に向かいしだいに浅くなる。壁は遺構上面が削平されていることから判然としないが，北側に行くにつれ緩やかな立ち上がりとなる。遺構内堆積土は２層で，自然堆積と判断した。

遺物は縄文土器片と石器が出土しているが，遺構に伴うものではなく，周辺に散布する縄文土器が流れ込んだものと考えられる。比較的遺存状態の良い土器片３点を掲載した。１～３は，いずれも縄文時代早期後葉の土器片で，内外面の条痕文と胎土の繊維混和痕を特徴とする。１・２は口縁部片で，端部がしだいに薄くなっている。１には口唇部に刻み目が認められ，外面には半截竹管に

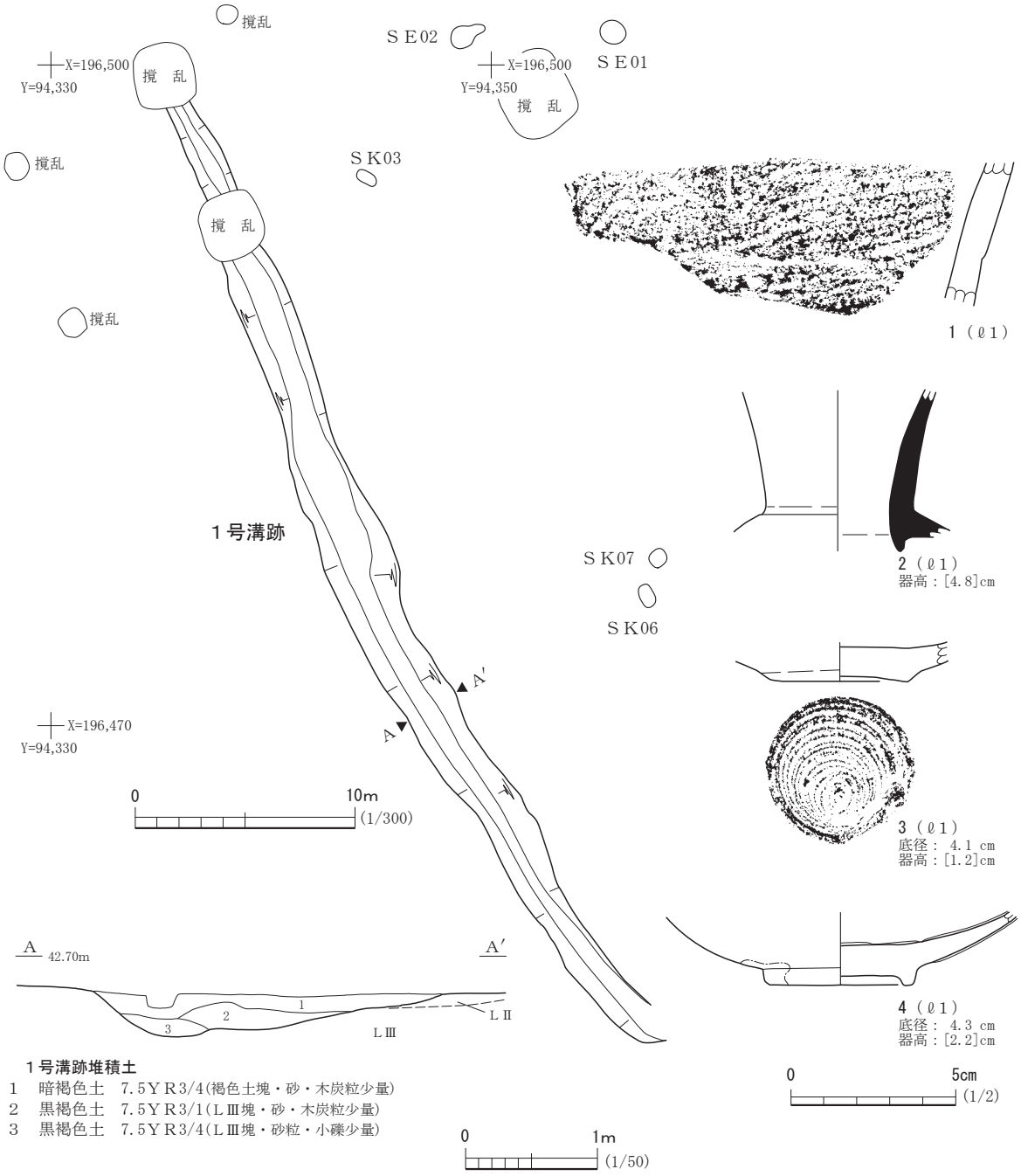


図22　１号溝跡，出土遺物

よる押引き沈線文が斜位に施されている。３は胴部片で，外面に山形の集合沈線が施されている。

本遺構は，北西－南東方向へ直線的に延びる溝跡である。本来はより長い遺構であったと考えられる。遺構の時期は判別しないが，比較的新しい近世以降の所産と考えられる。　（西　澤）

３号溝跡　ＳＤ03(図24, 写真17)

Ｃ１グリッドの中央付近とＣ２グリッドの中央から北側に延びる２条の溝跡で，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。両溝は屈曲しながらもほぼ南北に延びており，延長線上に位置し，堆積土の状況

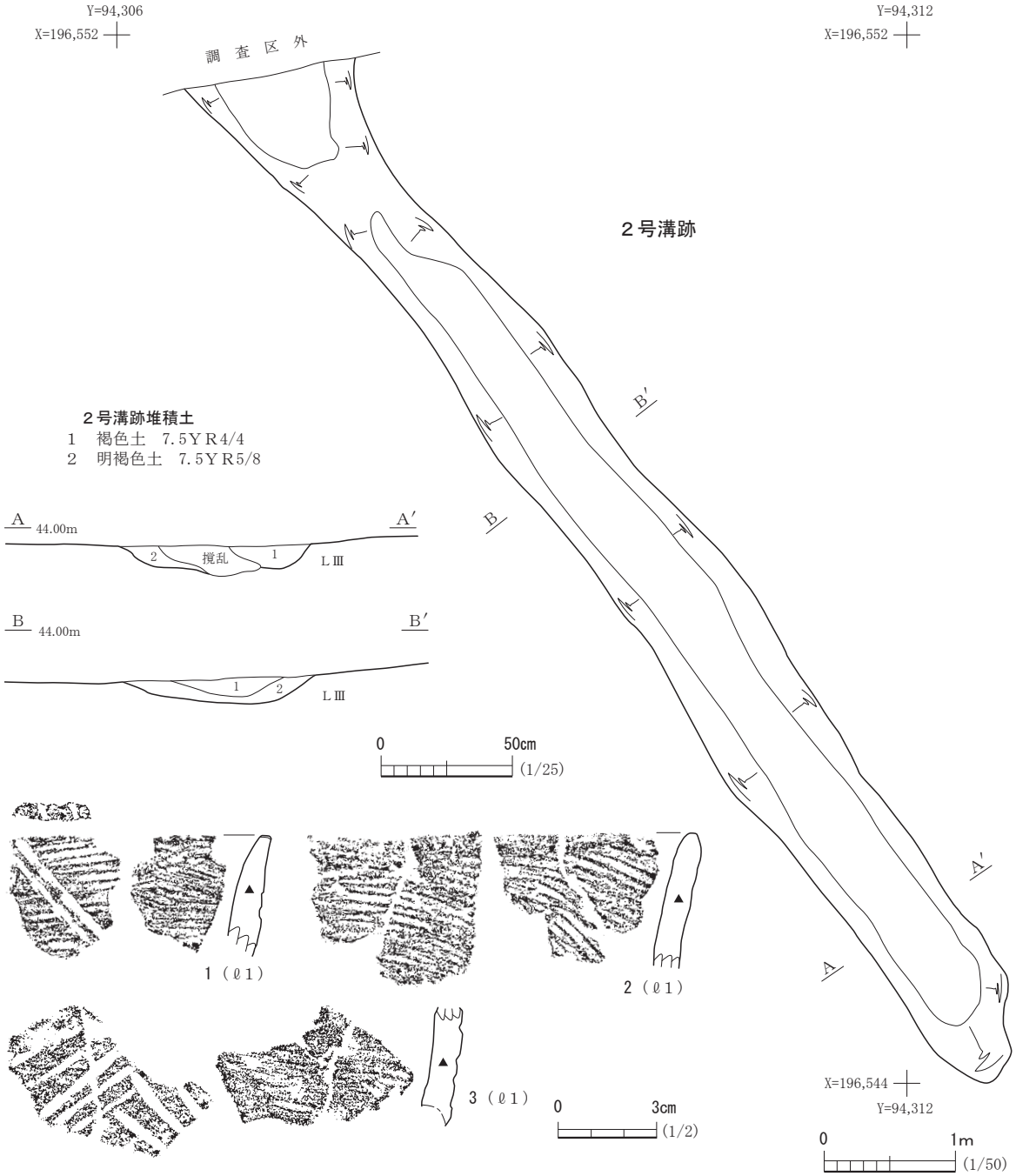


図23　２号溝跡，出土遺物

も同一であることから一連の溝跡と判断した。遺構の規模は，南側の長さが7.9m，北側は調査区外へ延びるものの3.1mを測る。両溝を合わせた全長はおおむね17mを測る。幅は南側で30～40㎝，北側では35～60㎝，深さは南側で10㎝，北側で25㎝を測る。底面は地形に沿って下っていくものの，断面はほぼ水平で，壁は比較的緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

本遺構は，南北方向に延びる溝跡である。堆積土からも水の流れた痕跡は確認できず，斜面を降下する道であった可能性が高い。調査前段階の地表観察から同様のくぼみは確認されており，時期的にはそれほどさかのぼらない近世以降の所産と考えられる。（西　澤）

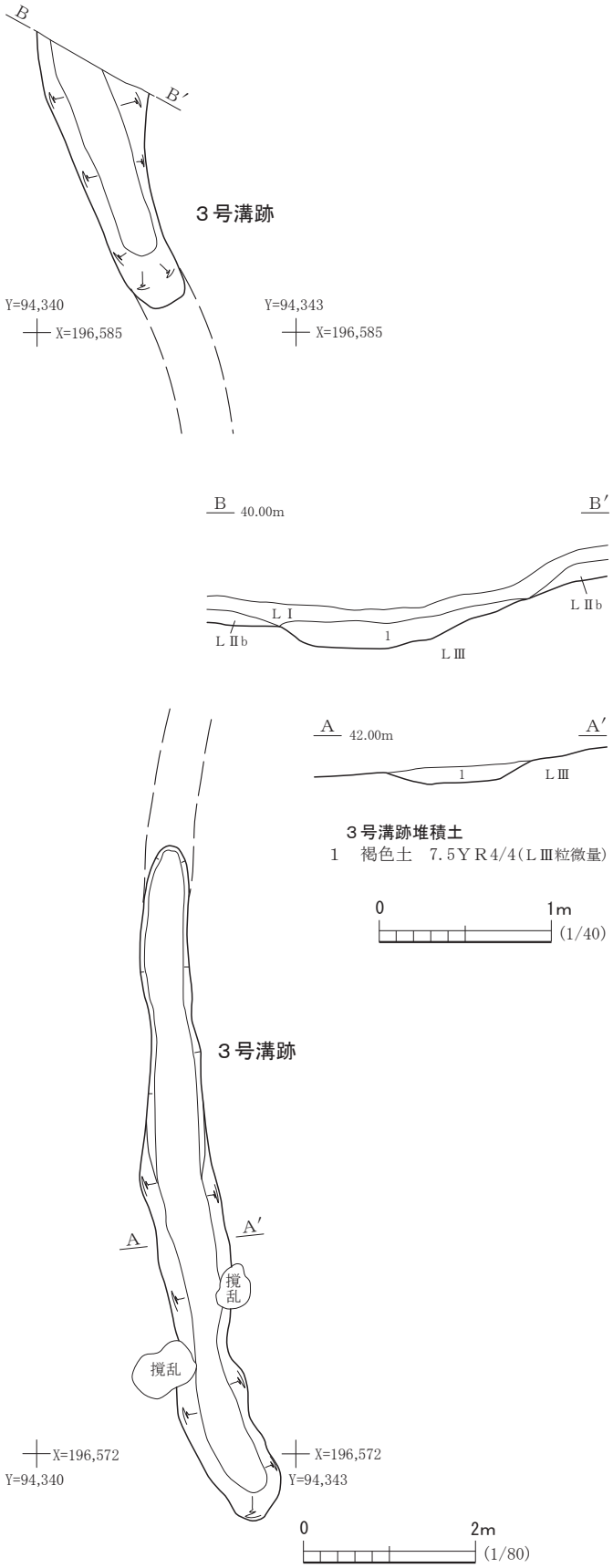


図24　３号溝跡

４号溝跡　ＳＤ04

（図25，写真17）

Ｄ４グリッド西側中央に位置し，ＬⅠ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められず，遺構の南西側に近接して１号建物跡などの近世の遺構群が所在する。規模は長さ9.8ｍで北西－南東方向に直線的に延びており，両端は途切れている。幅はおおむね95㎝で，北端のみ幅が広がり，135㎝を測る。底面は平坦で，深さは最高で６㎝である。壁は遺構上部が削平されていることから判然としないが，底面付近では急角度で立ち上がる。遺構内堆積土は１層で，砂粒と炭化物粒を含む均質な土が堆積する。層厚が薄いため堆積状況は判断できなかった。遺物は出土しなかった。

本遺構は，北西－南東方向へ直線的に延びる溝跡である。本来はより長い遺構であったと考えられる。遺構の機能時期は堆積土の特徴から，近世以降の所産と考えられる。（笠　井）

５号溝跡　ＳＤ05

（図26，写真17）

Ｃ３グリッドの中央やや南側に位置する２本の溝跡で，ＬⅠ直下のＬⅢ上面で検出した。

両溝は西北西－東南東方向へ同軸で延びる溝で，両者が近接し堆積土が同じであることから同一の溝跡と判断した。遺構の規模は西側2.6ｍ，東側が5.5ｍを測り，両溝を合わせた全長はおおむね9.7ｍ

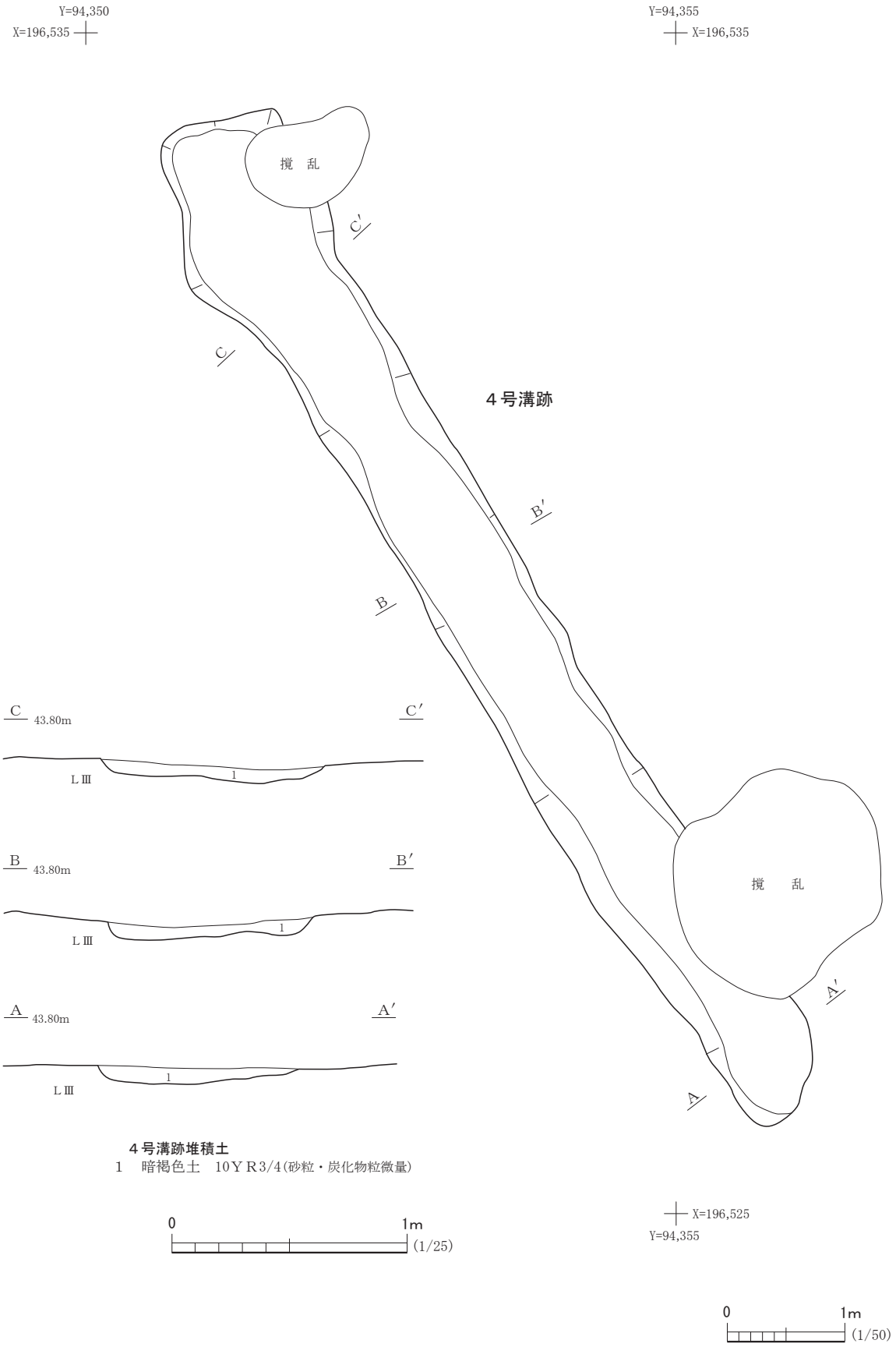

Y=94,350
X=196,535
Y=94,355
X=196,535
撹　乱
C'
C
４号溝跡
B'
B
C
43.80m
C'
LⅢ
1
B
43.80m
B'
LⅢ
1
A
43.80m
A'
LⅢ
1
撹　乱
A'
A
４号溝跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4(砂粒・炭化物粒微量)
0
1m
(1/25)
X=196,525
Y=94,355
0
1m
(1/50)

図25　４号溝跡

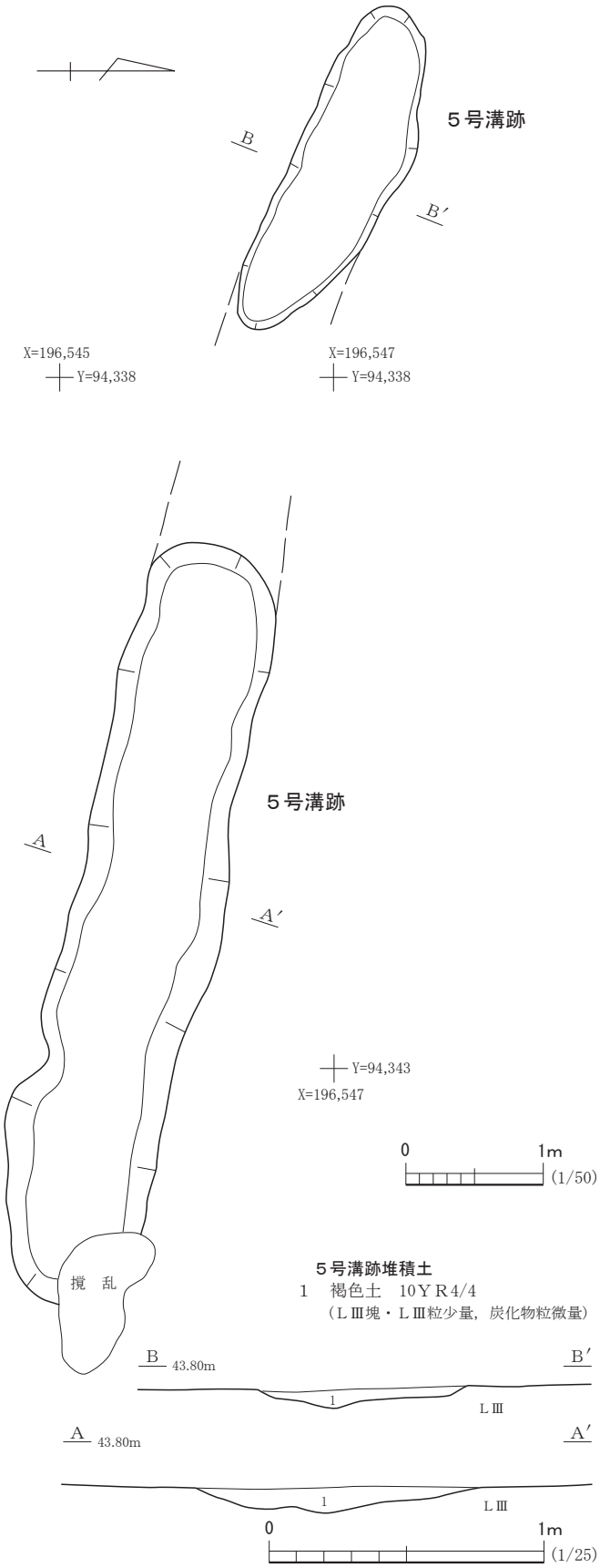


図26　５号溝跡

を測る。深さは東側で10㎝程度，西側で７㎝程度を測る。底面には起伏があるが，全体的に平坦である。壁は上部が掘削のため明瞭な立ち上がりは確認できない。遺物は遺構内の撹乱から出土したが，すべて遺構外からの混入であろう。

本遺構は，西北西－東南東に直線的に延びる溝跡である。時期的にはそれほどさかのぼらない近世以降の所産と考えられる。（西　澤）

６号溝跡　ＳＤ06

（図27，写真17）

Ｄ５グリッド北側西寄りに位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，遺構西端は木根により撹乱されており，東端は電柱支持線の養生のため調査できず不明である。調査部分の規模は長さ3.2ｍで東西方向に直線的に延びている。幅は70～110㎝で，西側ほど狭まる。底面は平坦で，深さは最高で10㎝である。壁は遺構上部が削平されていることから判然としないが，底面付近では緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は１層で，炭化物粒・ＬⅢ塊などの含有状況に偏りがあり，人為堆積と判断した。遺物は縄文時代早期の土器片２点が出土したが，細片であるため図示しなかった。

本遺構は，東西方向へ直線的に延びる溝跡である。本来はより長い遺構であったと考えられる。遺構の機能時期は堆積土の特徴から，近世時代以降の所産と考えられる。（笠　井）

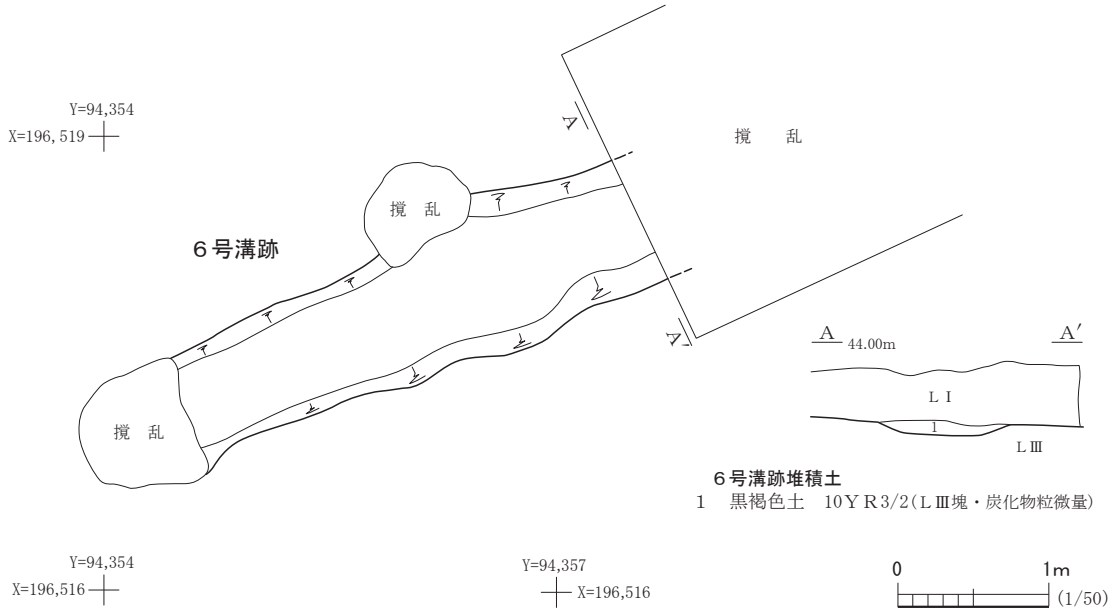


図27　６号溝跡

１号井戸跡　ＳＥ01（図28，写真18・24）

Ｄ５グリッドの南西側に位置し，西側に２号井戸跡が所在する。ＬⅡａ上面で，堅く締まった褐色土の広がりとして検出した。検出面から約３ｍの深さまで精査し，さらに約４ｍの深さまで確認したが，それ以下については危険防止のため調査を断念した。

平面は円形を基調とし，南東方向がやや膨らむ。検出面での開口部の規模は径が120㎝前後で，下方に向かってしだいに狭まり，精査最終面での径は90㎝である。断面形は円筒状を呈し，井戸枠は検出されていない。遺構内堆積土は１層で，全体的に褐色のやや明るい色調である。主にＬⅢを起源とする黄褐色や橙色の粘質土の小ブロックに，人頭大の礫，黒褐色土と褐色土が不規則に混在しており，分層できなかった。人為堆積と判断され，一気に埋め戻されたと考えている。

遺物は堆積土中から縄文土器片１点，土師器片１点，須恵器片３点が出土している。１は縄文土器で，折り返し口縁の下端に刻みが巡らされ，胴部には地文上に細い沈線で山形状の図形を描いている。また，無文の口縁部にはわずかではあるが赤色顔料の付着が認められる。２・３は須恵器甕の体部片で，２の表面には平行タタキ目痕，３の表面には平行タタキ目と裏面にアテ具痕が認められる。このほかに，内面黒色処理された土師器杯の口縁部片と須恵器長頸瓶の体部片が出土しているが，いずれも細片のため図示していない。

本井戸跡の機能時期については，遺構検出面と周辺から検出されている遺構・遺物との関連から近世頃と考えられる。また，遺構堆積土中からの出土遺物については，井戸跡廃棄時の埋め戻しの際に混入したものと考えられる。（山　岸）

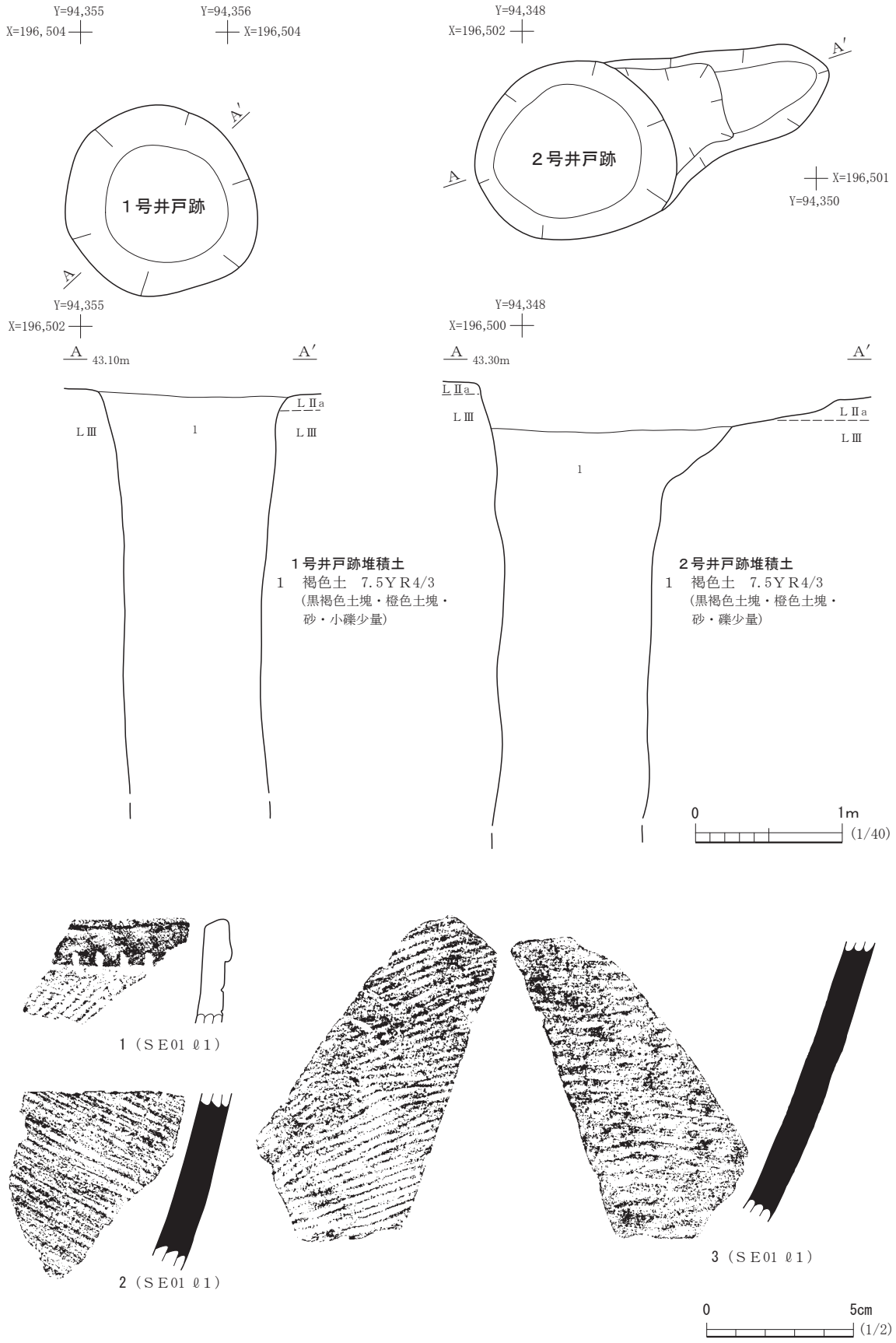


図28　１・２号井戸跡，１号井戸跡出土遺物

２号井戸跡　ＳＥ02（図28，写真18）

Ｃ５グリッドの南東隅に位置し，東側に１号井戸跡が所在する。ＬⅡａ上面で，不整楕円形に広がる堅く締まった褐色土を検出し，精査の結果，井戸跡と判明した。検出面から約３ｍの深さまで精査したが，それ以下については危険防止のため調査を断念した。

平面は円形を基調とし，東側に浅い舌状の張り出しを持つ。舌状の張り出しは，長さ100㎝ほどで北東方向に延びる。底面は井戸跡本体に向かって，スロープ状に検出面から約60㎝の深さまで掘り込まれている。井戸跡本体の開口部での規模は径が約110㎝，精査最終面で約100㎝と下方に向かってわずかに狭まる。断面形は円筒で，井戸枠は検出されなかった。遺構内堆積土は１層で，主にＬⅢを起源とする黄褐色や橙色の粘質土のブロックに，砂礫，黒褐色土などを不規則に含んでいる。人為堆積と判断され，１号井戸跡同様に埋め戻されたと考えている。遺物は出土していない。

本井戸跡は円形を基調とし，東側にスロープ状の張り出しを持つ。機能時期については，遺構検出面などから１号井戸跡同様に近世頃と考えている。（山　岸）

第５節　焼土遺構・集石遺構

西原遺跡で検出された焼土遺構は２基で，集石遺構も２基である。

焼土遺構は，縄文時代早期の遺物が集中して散布する調査区北西部に位置することから，この時期の地床炉と考えられる。

集石遺構は，調査区北東部と北部の中央寄りで検出され，遺構相互の関連は認められない。遺構の時期を特定する明確な遺物を伴っていないことから，時期不明の遺構である。

以下焼土遺構，集石遺構の順で遺構ごとに説明していく。

１号焼土遺構　ＳＧ01（図29，写真19）

Ｂ３グリッド北東隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められない。東西方向に長い不整な方形の範囲が焼土化して赤色に変色していた。焼土化の範囲は長辺が90㎝，短辺46㎝を測る。焼土化した厚さは，中央部が最も厚く８㎝である。遺物は出土していない。

本遺構は，被熱の状況から地床炉と考えられる。遺構そのものから遺物の出土はないが，周囲からは縄文土器片が集中して出土しており，本遺構に関連する遺物と考えられる。遺構の機能時期は，周囲から出土した縄文土器片の年代観から，縄文時代早期後葉と考えられる。（笠　井）

２号焼土遺構　ＳＧ02（図29，写真19）

Ｂ３グリッド中央西寄りに位置する。重複する遺構は認められないが，縄文時代早期後葉の所産と考えられる風倒木痕上で検出した。南北方向に長い楕円形の範囲が焼土化して赤色に変色してい

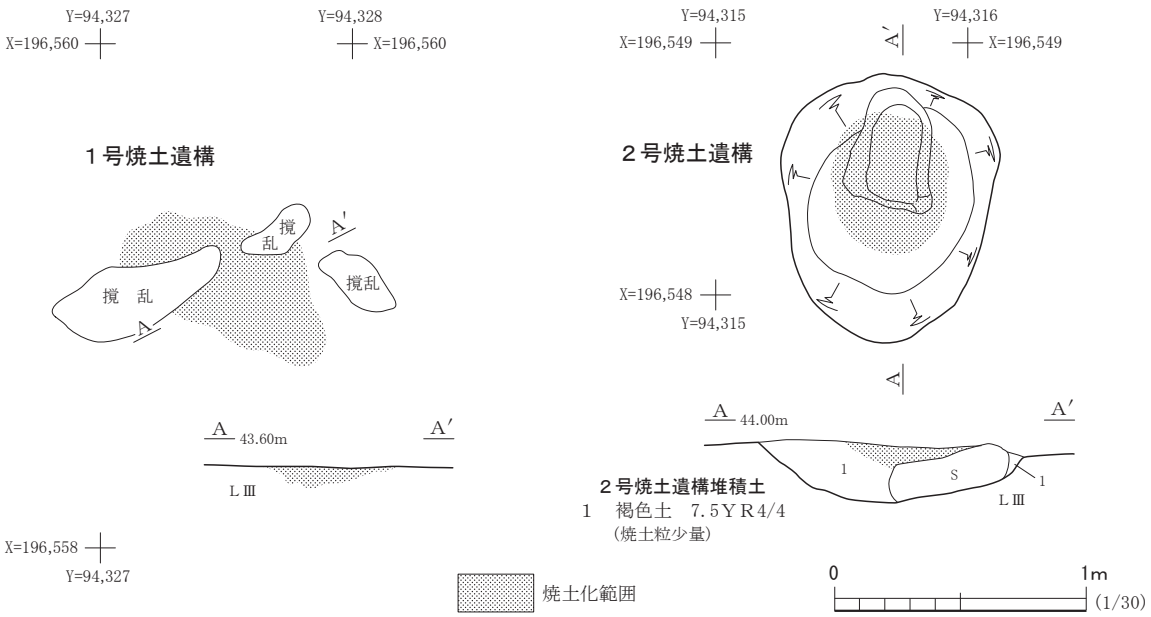


図29　１・２号焼土遺構

た。焼土化の範囲は南北55㎝，東西47㎝を測る。焼土化した厚さは，中央部が最も厚く８㎝である。風倒木痕内に長さ48㎝，幅36㎝，厚さ16㎝の自然礫が落ち込んでおり，検出当初この礫を縁石，風倒木痕を掘形と想定して調査したが，断ち割りの結果，本遺構に伴うものでないと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は，被熱の状況から地床炉と考えられる。遺構そのものから遺物の出土はないが，周囲からは縄文土器片が集中して出土しており，本遺構に関連する遺物と考えられる。遺構の機能時期は，周囲から出土した縄文土器片の年代観から縄文時代早期後葉と考えられる。　（笠　井）

１号集石遺構　ＳＳ01（図30，写真19・24）

Ｃ３グリッドの東側に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。遺構上部は木根により大きく撹乱されていた。重複する遺構はない。遺構は平面円形の掘形を持ち，掘形の内面縁に長さ20～50㎝大の角礫を乱雑に積み上げ，中央に土を充填した遺構である。掘形の規模は直径115㎝，深さ30㎝を測る。壁は，60～80°の比較的きつい勾配で立ち上がる。底面は水平である。

遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１は堆積状況から流入土の自然堆積，ℓ２はＬⅢ塊を含み上面が水平であることから人為的な充填土，ℓ３は掘形埋土であると考えられる。

遺物は上面の撹乱から石器１点が出土した。１は縄文時代の削器と考えられる。少し厚めの黒色頁岩の剥片末端に調整剥離を施し，弧状の刃部を作り出している。石材の節理面で割れており，基部は失われている。遺構に伴うものではなく，周辺から混入したものと考えられる。

本遺構は，円形の掘形に沿って角礫を積み上げ，礫に囲まれた空間に土を充填した遺構であるが，その機能・性格については不明である。遺構の所属時期は，遺構に伴う遺物が出土していないため不明である。　（笠　井）

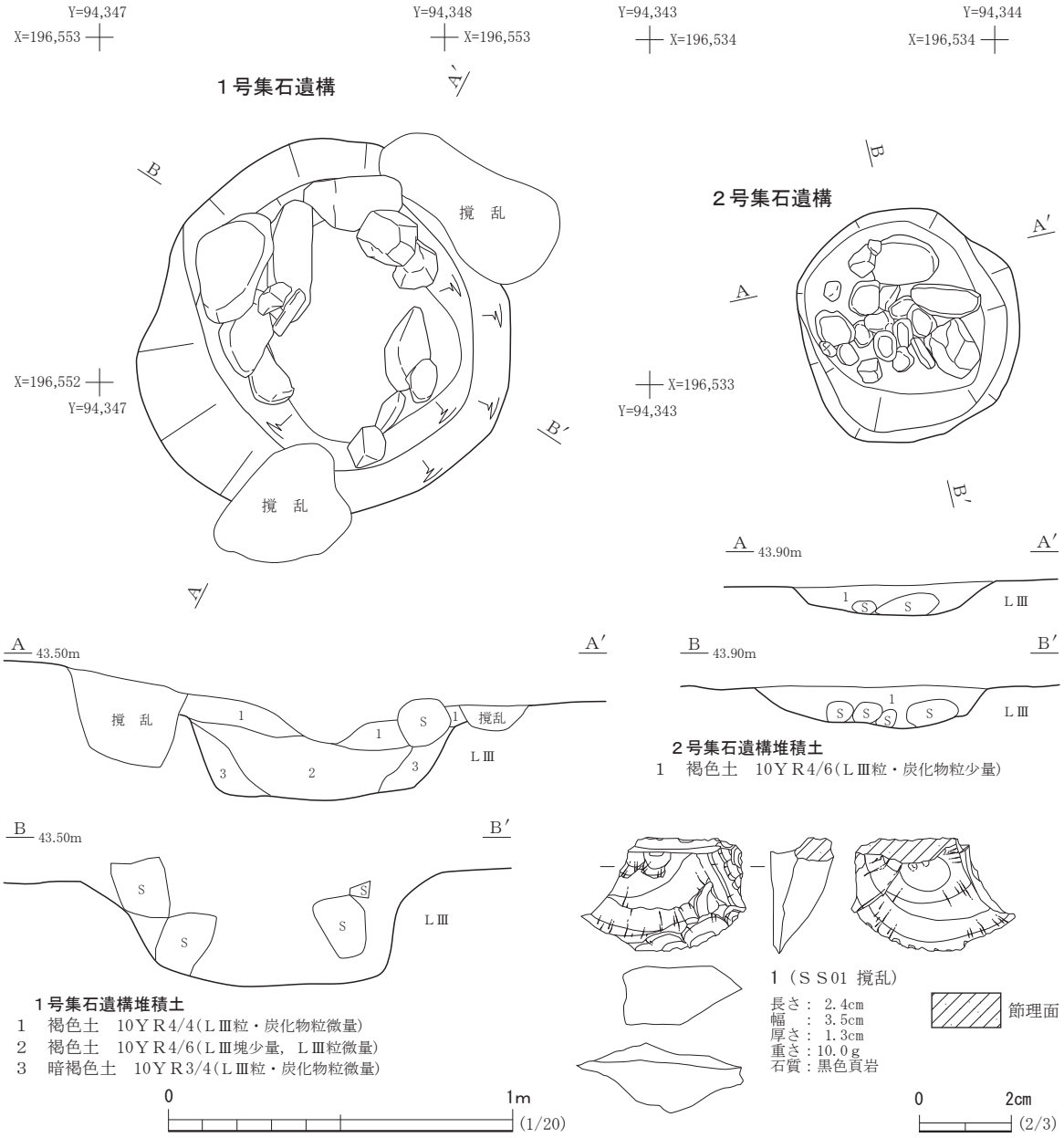


図30　１・２号集石遺構，1号集石遺構出土遺物

２号集石遺構　ＳＳ02（図30，写真19）

Ｃ４グリッドの中央に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。平面はやや不正形な円形で直径67㎝，深さは10㎝程度を測る。上面は掘削されて不明だが，北側と東側の壁はそのまま緩やかに立ち上がっていく。それに対し南側と西側の壁は急に立ち上がる。底面はほぼ水平で，一部20～30㎝大の石が見られるが，ほとんど10㎝前後の石が遺構の中心に隙間なく配置されている。

本遺構はその構造から礎石のような性格が推定されるが，これに対をなす類似した遺構は確認できなかった。遺構の所属時期に関しても，遺構内堆積土の状況からそれほど古い時期のものとは考えられず，近隣の近世遺構に付随するものと考えられる。（西　澤）

第６節　性格不明遺構

西原遺跡で検出された性格不明遺構は３基である。調査区北部で検出した１号性格不明遺構は不整楕円形のくぼみ状の遺構で，周囲の遺構との関係から，平安時代の木炭焼成土坑の残骸である可能性がある。調査区中部で検出した他の２基は，位置関係から，１号建物跡などの近世遺構に伴うと考えられる大型の土坑で，陶磁器類が出土した。

１号性格不明遺構　ＳＸ01（図31，写真20）

Ｄ２グリッド北西隅に位置し，ＬＩ直下のＬⅡａ上面で検出した。重複する遺構は認められず，周囲２ｍほどに16・21号土坑などの木炭焼成土坑が所在する。平面形は不整な楕円形を基調とし，北西－南東方向に長い。検出面での規模は長軸が74㎝，短辺35㎝，深さは最深で７㎝である。底面は起伏があり，北西側に傾斜している。壁は遺構上部が削平されていることから判然としないが，遺構北東側では急角度，そのほかは緩やかに立ち上がる。

遺構内堆積土は１層のみで，砂粒・炭化物粒・焼土粒を含む均質な土が堆積する。層厚が薄いため堆積状況は判断できなかった。遺物は出土していない。

本遺構は不整楕円形の掘り込みで，堆積土に木炭粒および焼土粒を含む。木炭層が検出されなかったため木炭焼成土坑としなかったが，検出面や周囲の遺構検出状況から平安時代の木炭焼成土坑の一部である可能性がある。（笠　井）

２号性格不明遺構　ＳＸ02（図31・32，写真20・25）

Ｃ４・Ｃ５グリッド西寄りの境界付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。重複する遺構は認められないが，遺構東側に大きな撹乱があり東壁の大部分が壊されている。平面形は南北方向に長い長方形を基調としており，遺構北側は上端が崩落して不整形になっている。検出面での規模は，長辺が485㎝，短辺が遺存値で248㎝，深さは最高で58㎝である。底面は中央付近に向かい緩やかにくぼんでいる。壁の立ち上がりは底面付近が緩やかで，上部ほど急角度に立ち上がる。北側は崩落して段が生じている。遺構内堆積土は５層で，いずれも人為堆積である。

出土した遺物は，縄文土器16点，土師器13点，須恵器６点，陶磁器43点，石器13点である。遺物は主にℓ１・２から出土しており，縄文時代から近世までの様々な時期の遺物が含まれる。ℓ４からは近世の遺物のみが出土した。本遺構に伴う遺物のうち，図化し得た９点を掲載する。

図32－１～４は陶器碗で，いずれも18世紀後半～19世紀前半の在地産の製品である。１は丸椀の口縁部から体部にかけての部分で，ほぼ全面に灰釉が施され，濃緑色に発色している。２～４は椀の体部下半から高台にかけての部分で，高台付近を除く部分に施釉されている。２はロクロ目の上に薄く黒色の鉄釉が掛けられ，３・４は灰釉が施されている。３の施釉は厚く淡緑色に発色し，全

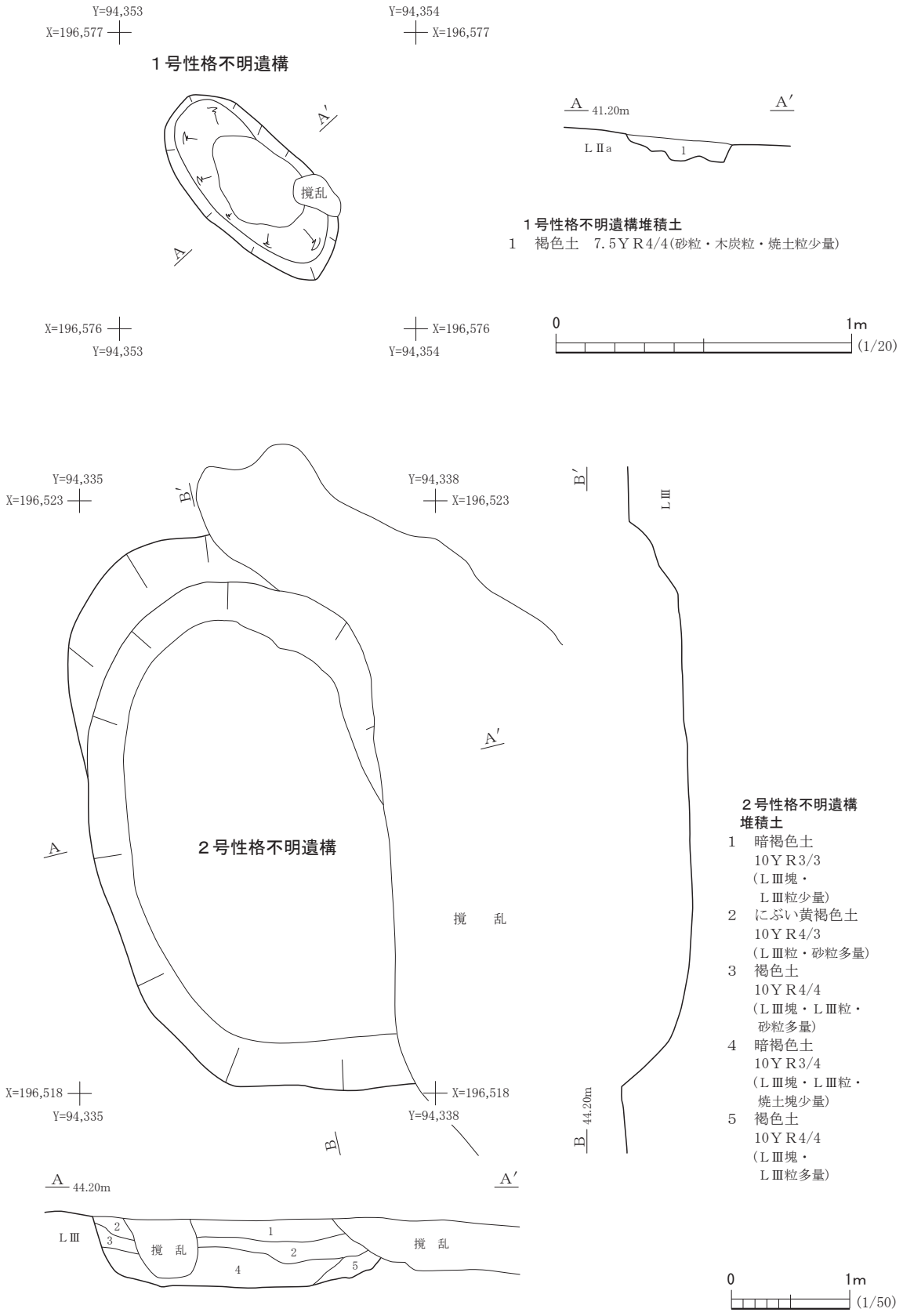


図31　１・２号性格不明遺構

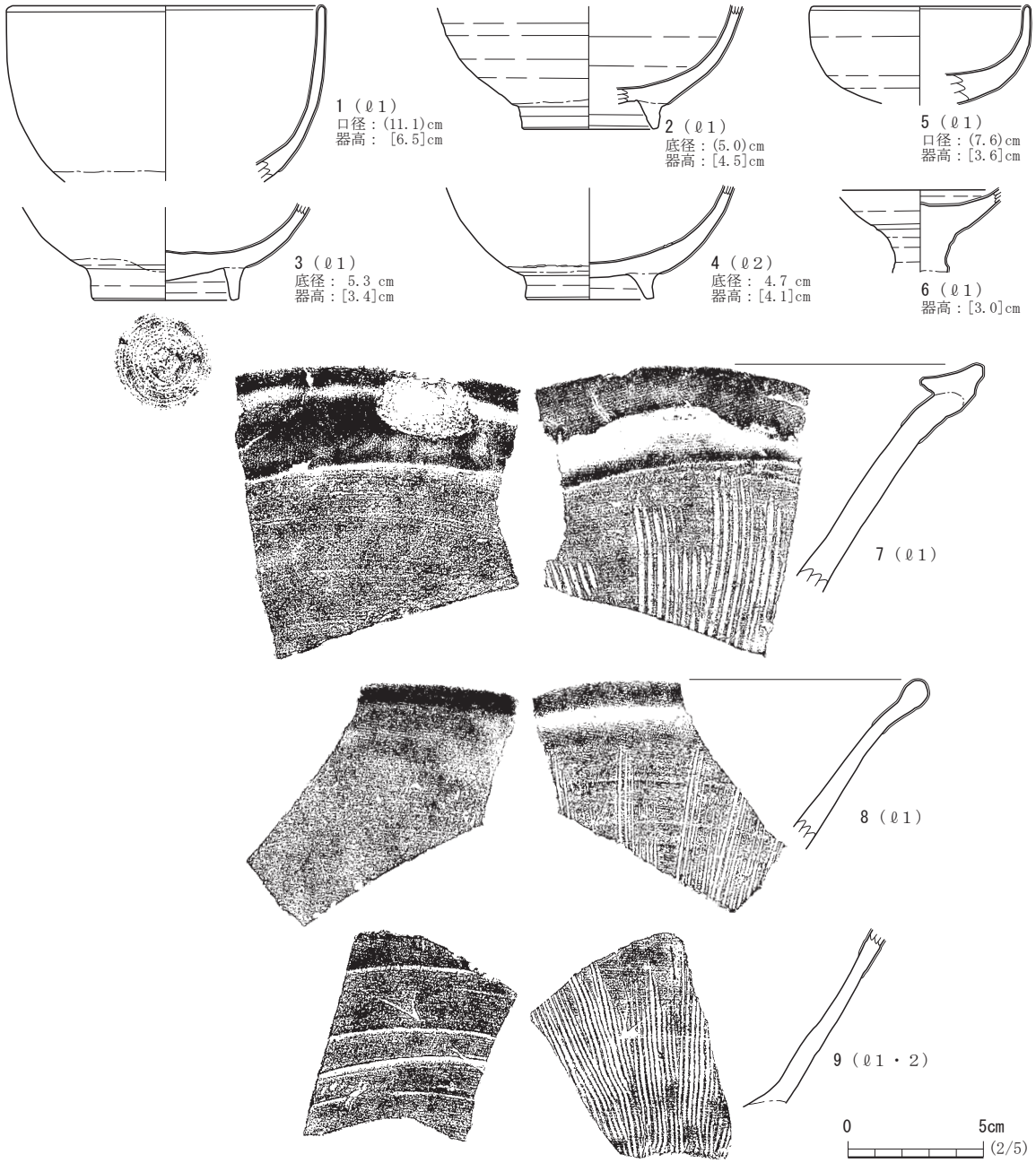


図32　２号性格不明遺構出土遺物

体的に発泡して光沢がなく外面は白濁している。４は焼成が堅緻で，釉は淡黄褐色に発色し光沢があり貫入が認められる。

図32－５・６は仏飯器で，いずれも18世紀後半～19世紀前半の在地産の製品である。５は杯部で，口縁部が直立する器形で焼成は堅緻である。全面に施された釉の発色も良く光沢がある。６は杯部と脚部の接合部である。焼成は軟調で全面に灰釉が施されているが，発色が悪く細かい発泡が認められる。

図32－７～９は擂鉢で，７が17世紀，８・９が18～19世紀の在地産の製品である。７は岸系の窯で製造されたと考えられる口縁部から体部の破片で，口縁端部に粘土帯を貼付けて内面に返し状の

突起を作っている。焼成は堅緻で赤色に発色し，口縁部付近にのみ飴色の鉄釉を施している。８・９はより時代の新しい製品で，８は口縁部から体部，９は体部から底部の破片である。７と比較すると，口縁端部に粘土帯を貼付けているものの，返し状の突起がなく，焼成は堅緻であるが，発色は淡褐色で擂り目が細かい。７同様口縁部付近に飴色の鉄釉薬が施されている。

本遺構は，長方形を基調とした竪穴状の遺構である。掘削当初の機能は不明であるが，最終的には遺物とともに人為的に埋め立てられたようである。本遺構の機能時期は，出土遺物の特徴から近世の所産と考えられる。（笠　井）

３号性格不明遺構　ＳＸ03（図33，写真20・25）

Ｃ４・Ｄ４グリッドの南側境界付近に位置し，ＬＩ直下のＬⅢ上面で検出した。１号建物跡と重複しているが，新旧関係は不明である。平面形は東西方向に長い不整な楕円形で，西側に隅丸方形の張り出し部が付属する。検出面での規模は，本体部の長さが東西290㎝，南北210㎝，張り出し部が東西84㎝，南北109㎝を測る。深さは最高で32㎝である。底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは北壁・南壁が底面から急角度で立ち上がるのに対し，東壁・西壁は緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は４層あり，堆積状況および土質からℓ１・２が人為堆積，ℓ３・４が自然堆積と判断した。

出土した遺物は，縄文土器23点，土師器２点，須恵器６点，陶磁器13点，石器16点である。遺物

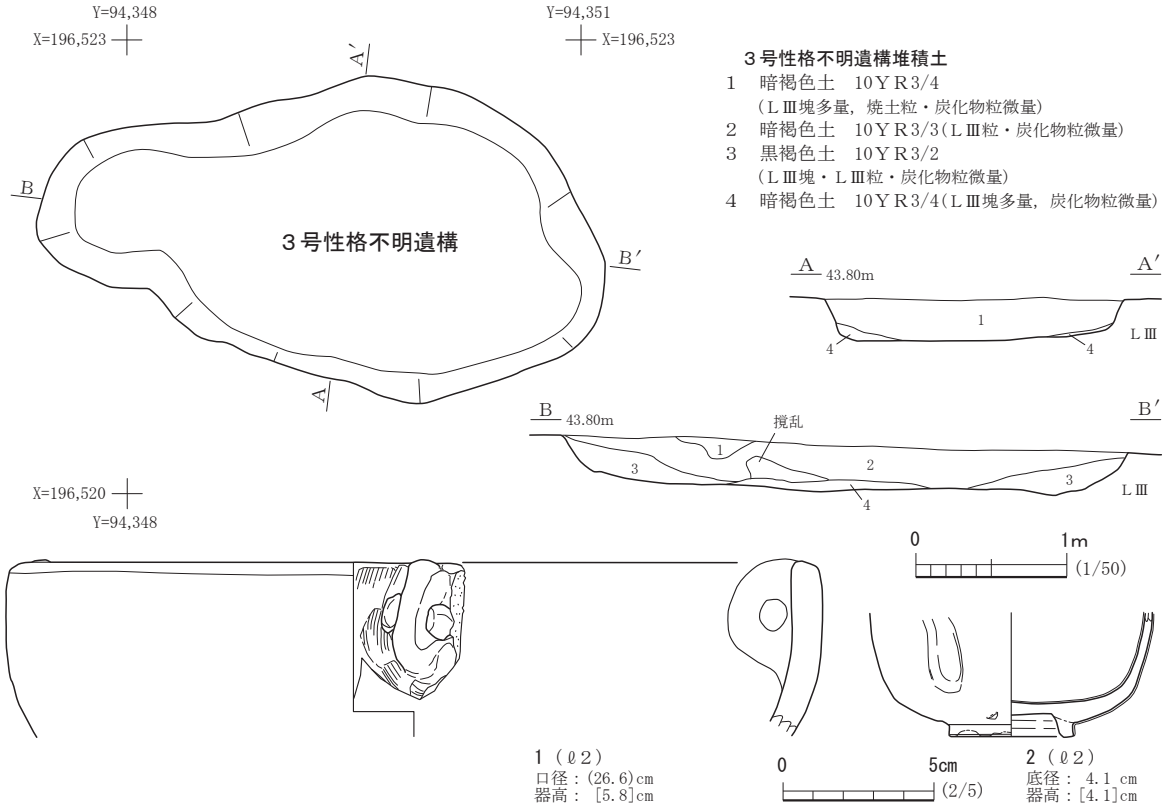


図33　３号性格不明遺構，出土遺物

はℓ２から出土しており，縄文時代から近世までの様々な時期の遺物が含まれ，遺構の機能時期に伴うと考えられる近世遺物のうち，図示し得た２点を掲載した。

１は土師質の焙烙と考えられる。口縁部が直立する器形で，全体的に器面が黒褐色である。器壁は厚く堅牢な作りで，直径１㎝ほどの粘土紐で内耳を作っている。

２は陶器の湯呑で，18世紀後半～19世紀前半の在地産の製品である。体部下半から高台部までが遺存しており，体部下半で屈曲して口縁部が直立する器形と考えられるほか，体部には指当て用のくぼみが認められる。焼成は堅緻で，高台部内面を除く全面に施された灰釉の発色も良く，光沢があり，全面に貫入が認められる。

本遺構は，ラケット状の平面形をした竪穴状の掘り込みで，形状からラケットの柄にあたる張り出し部が入口であろうか。最終的には遺物とともに人為的に埋め立てられたようである。重複する１号建物跡と同時期と考えられる遺物が出土しているため，両遺構は関わりがあったものと考えられる。本遺構の機能時期は出土遺物の特徴から近世の所産と考えられる。（笠　井）

第７節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の総数は2,434点で，その内訳は縄文土器1,984点，土師器147点，須恵器96点，陶磁器類183点，羽口１点，石器類21点，銭貨２点である。これら遺物は所属時期から縄文時代，平安時代，近世に大別できるため，ここでは時期ごとに遺物の特徴について報告していく。

層位と分布（図34）

出土遺物と基本土層の関係については「本章　第２節」で報告した通りで，純粋な遺物包含層は土層番号のＬⅡａ・ｂとした２層である。ＬⅡａは基本的には調査区全体，ＬⅡｂは調査区北部斜面に堆積しているが，果樹や耕作などによる撹乱が遺跡基底面のＬⅢまで及んでいる部分が多く，調査区北西部を除き本来の堆積状況を示す部分は極めて少ない。特に調査区南部では，部分的にわずかに遺存している程度で，連続した層の広がりとしては確認できなかった。遺物は縄文時代早期後葉～晩期の土器が出土している。したがって，ＬⅡｂについては包含密度が薄いものの縄文時代の遺物包含層と考えている。

次に出土遺物の平面分布状況を見ると，縄文時代の遺物は調査区北西部のＢ３・Ｃ３グリッドを中心に集中して出土した。その大半は縄文時代早期後葉の所産で，住居跡は確認できなかったが，焼土遺構が見つかっていることから，当該期の集落の一部であった可能性が高い。また，調査区中央南寄りのＣ６グリッド付近に縄文時代前期中葉の土器がややまとまる傾向があるが，捨て場のような状態で遺物が集中する場所は確認されなかった。平安時代の遺物は，調査区中央のＣ４・Ｃ５グリッド付近に分布の中心がある。この位置は調査区内でも標高の高い部分で，同時期の木炭焼成土坑の分布が希薄であることから建物跡の存在を想定したが，後世の削平が顕著で，それらの遺構

を確認することができなかった。近世の遺物は，調査区中央東側のＣ４・５，Ｄ４・５グリッド付近に出土位置の分布が集中する傾向にある。この位置は近世の遺構群と重なる部分であるため，表土および撹乱からの出土が多いものの，掘立柱建物跡などの遺構群に伴っていた遺物であると考えられる。

縄文時代の遺物

縄文時代の遺物には，土器と石器がある。土器は縄文時代早期後葉～晩期の各時期に比定され，縄文時代前期中葉の土器が主体を占める。石器については，いずれも土器との共伴関係が不明瞭なため時期を特定できない。

土　　器（図35～39，写真26・27）

［早　期］

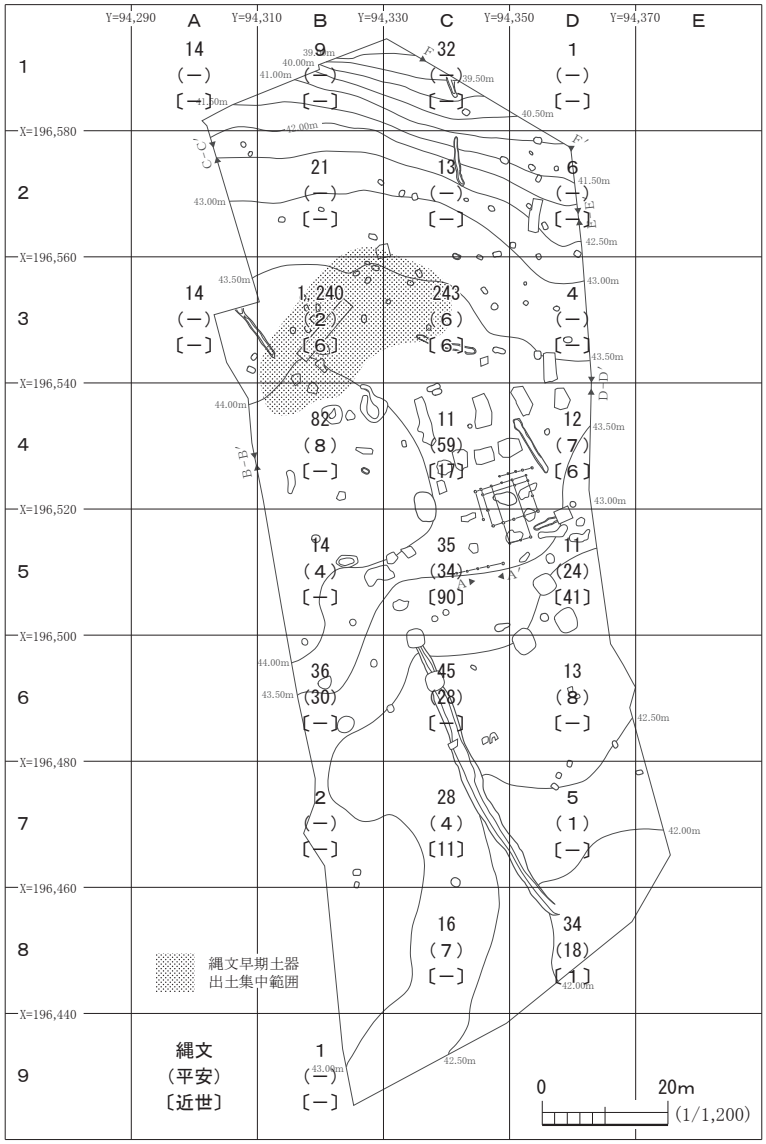


図34　グリッド別遺構外出土土器・陶磁器点数図

図35・36は早期後葉の土器で，内外面の条痕文と胎土の繊維混和痕を特徴とする。いずれも深鉢形土器で，色調は褐色系である。焼成は良好であるが，やや軟調である。図35は口縁部，図36は胴部付近と考えられる資料である。

図35－１・３～５は波状口縁の波頂部資料である。１・３には縦位に隆帯が付く。１では隆帯に刻み目を施しており，隆帯の左側に貝殻腹縁圧痕，右側に丸棒状工具による連続刺突文が施される。３は隆帯の両側に角棒状工具の端で縦位の刺突列を加えている。４は丸棒状工具の端で施された連続押引き文帯を波頂部から斜めに垂下させており，５は平坦で刻み目を施された波頂部から細い丸棒状工具による刺突文帯を垂下させている。

図35－２・７は端部断面が内

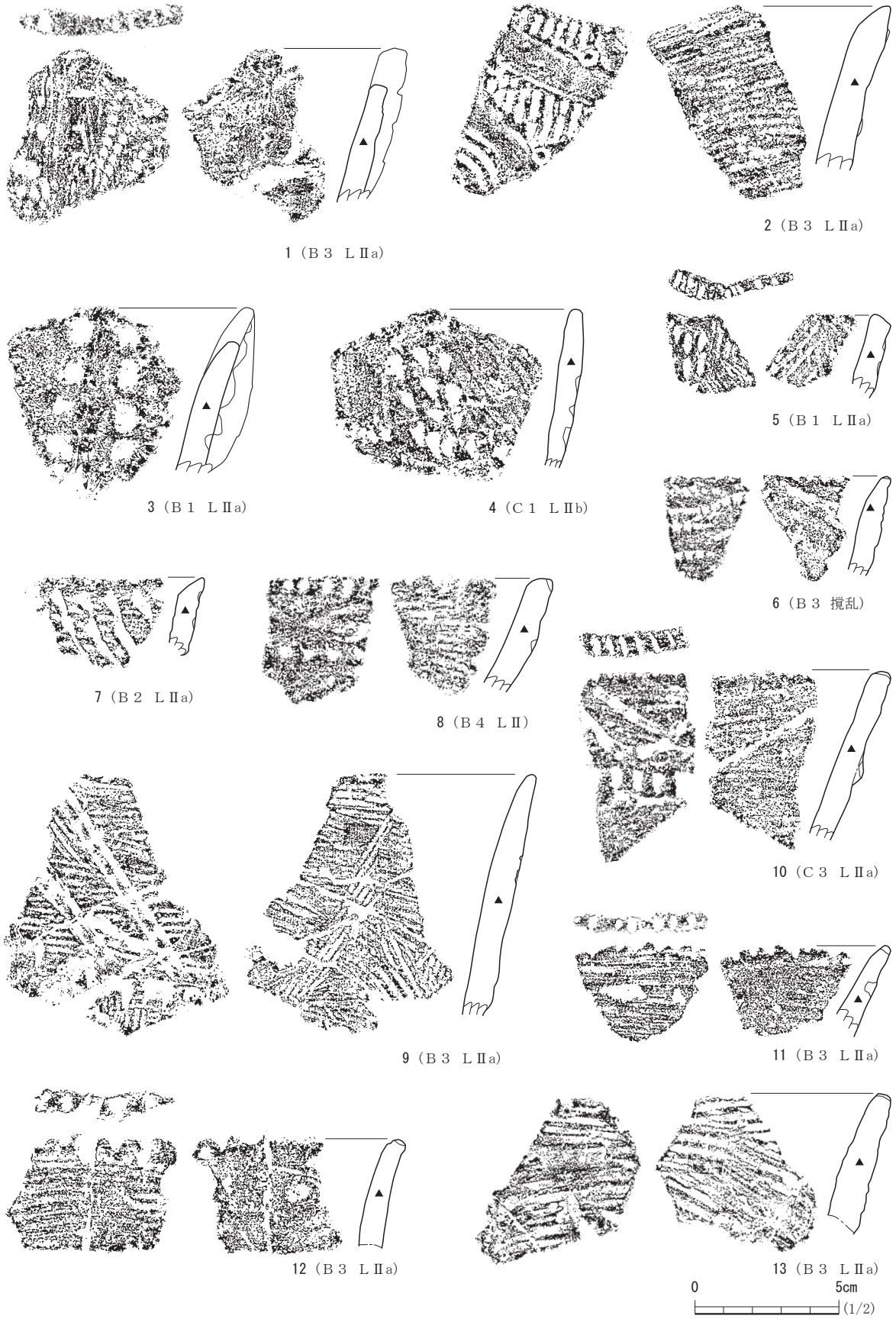


図35　縄文時代の遺物（１）

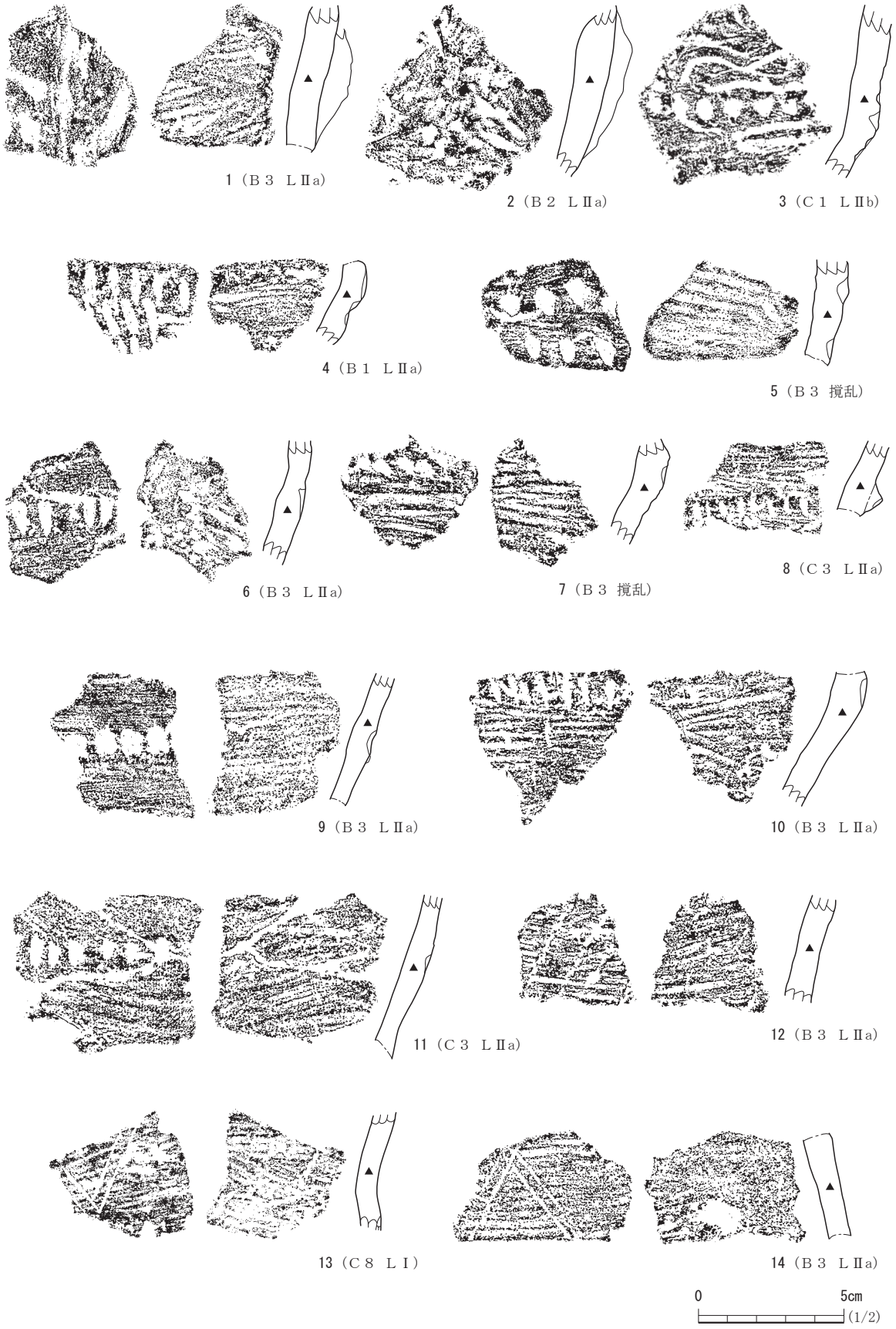


図36　縄文時代の遺物（２）

削ぎ状になるもので，端部に弱い刻み目が施される。２は微隆起線文で三角形のモチーフを描き，モチーフ内に竹管による連続押引き文を充填している。また三角形のコーナーには，円形の竹管刺突を加えているほか，破片下部には沈線による弧線文が認められる。７では丸棒状工具端部による連続押引き文を面的に施しており，２に見られるような充填文の一部と考えられる。

図35－６・８～13は平口縁になると考えられるもので，９以外の資料には端部に刻み目が施される。６は外面に貝殻側縁圧痕が連続して施される。８～10は屈曲部を持ち，８は丸棒状，９・10はヘラ状工具で屈曲部に刺突列を施す。また，９・10は口縁部文様帯に半截竹管による押引き沈線文を斜位に施している。11～13は地文のみの資料で，横位の条痕文が施されている。

図36－１・２は口縁部の端部を欠いた資料と考えられる。ともに縦位の隆帯をもち，隆帯の両側に棒状工具による刺突が施される。

図36－３～11・13は屈曲部を含む資料で，８の屈曲部には断面三角形の隆帯が貼り付けられている。いずれの資料も屈曲部に刺突列が認められ，３は円形竹管，４～６・11・13は丸棒状工具，７・９は角棒状工具，８・10はヘラ状工具による刺突が施されている。刺突はおおむね下方から斜めに施しており，４と13のみが工具側面を押し付けている。また３・13には屈曲部より上位に半截竹管による平行沈線が施されるほか，４は屈曲部より下位に棒状工具による押引き文，５は屈曲部と同じ刺突列が認められる。

図36－12・14は，文様が施されることから屈曲部上位の胴部片と考えられる。12は貝殻側縁圧痕が施されており，14は半截竹管による平行沈線で13と共通する山形のモチーフを描いている。

［前　期］

図37－１～18，図38－１～14は前期後葉の土器と考えられるものである。いずれも胎土に少量の粗粒砂を含み，焼成は良好である。また，色調は橙～明褐色系の明るいものが多い。

図37－１・２は粘土紐貼付文の認められる口縁部資料である。１は外反，２は内湾気味に立ち上がる器形で，１は平口縁，２は波状口縁であろう。１は２条の平行する粘土紐貼付文で区画した口縁部文様帯に折目のついた粘土紐を山形に２段貼付けている。２はほとんど剥落しているが，波状の口縁部に沿って平行する粘土紐を貼付け，平行線間に粘土紐を山形に充填して文様としている。図37－３～12は粘土紐貼付文の認められない口縁部資料である。３～５は平口縁で，口縁部が直立して立ち上がる器形である。いずれも口縁部には粘土帯が貼り付けられ肥厚している。また，４の資料から口縁部と胴最張部との差がほとんどない器形と想定される。４は無文の口縁部下端に，竹管による斜位の刺突が刻み状に巡らされている。胴部には斜行縄文が施されているが，口縁部との境は無文帯となっている。また，器外面には炭化物の付着が認められる。９・10も短い口縁部の下端に刻みが施され，胴部には縄文地上に菱形状の図形が細い平行沈線で描かれている。

図37－６～12は口縁部が外反する器形をとるもので，６・８～11が波状，７・12が平口縁と考えられる。６・９は口縁端部に粘土帯を貼り付けて肥厚させた複合口縁をもつもので，肥厚部直下の段に沿って半截竹管による連続爪形文を施し，これに平行させて逆方向の連続爪形文を３段にわた

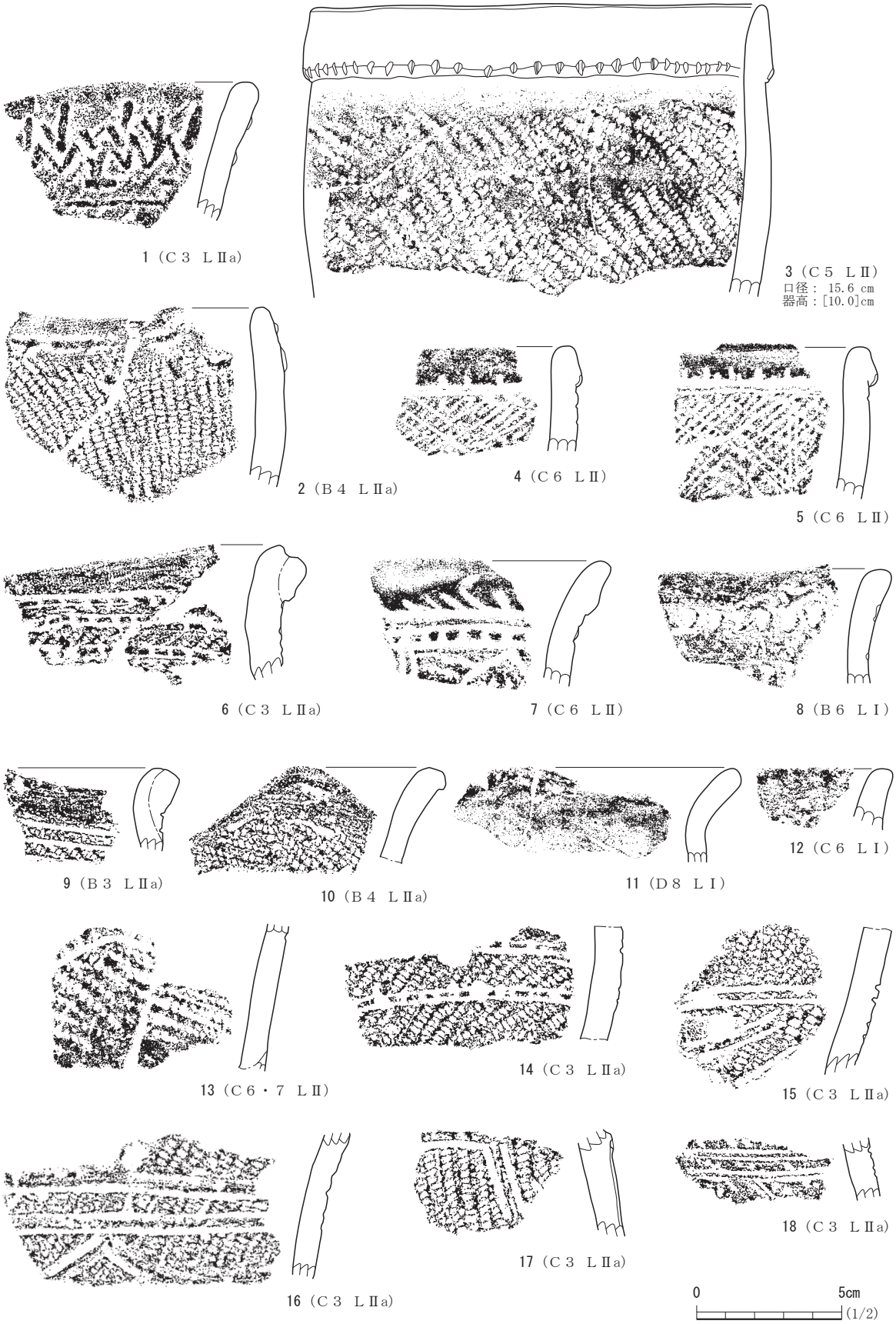


図37　縄文時代の遺物（３）

り施文している。９ではこれが連続爪形文ではなく，単なる平行沈線となっている。７は粘土帯が胴部との境に貼り付けられ，短沈線風の刻みが巡らされている。また，胴部には半裁竹管による沈線と連続刺突による図形が，縄文の地文上に描かれている。８はＣ字状の連続刺突文が施されている。10は単節斜行縄文が施されたもので，11・12は無文である。

図37－13は胴部が直線的に外傾する器形で，文様の位置から浅鉢形土器と考えている。斜行縄文を地文とし，沈線区画内に縦位の連続刺突文を施している。

図37－14～18，図38－１～11は深鉢形土器の胴部片である。このうち，図37－18・図38－４は無地文で，そのほかの資料は単節斜縄文を地文とする。図37－14は半截竹管による連続爪形文２条を平行させて横走させており，図37－15～18は半截竹管による平行沈線で横走文・山形文・斜行文を描いている。図38－１～３は単沈線による矩形文を描出している。図38－４は図37－８同様のＣ字状の連続刺突文が施されている。図38－５～11は地文のみの資料である。

図38－12～14は深鉢の底部付近である。12は外反して開く器形，13・14はほぼ垂直に立ち上がる器形である。いずれの資料も底面から付近を除く外面に単節斜縄文が施されている。

［中　期］

図38－15～20は中期の土器としたもので，出土数は極めて少ない。前期の土器よりやや厚く，胎土に含まれる粗粒砂の量も多い。いずれも橙色系の明るい色調で，焼成も堅緻である。

図38－15は内湾する口縁部片で，外面は磨かれ一部に光沢が認められる。16～20は深鉢形土器の胴部片で，16・17は沈線区画に単節縄文を充填している。18～20はいずれも単節の斜行縄文が施されている。18・19は縄文の一部を平滑に磨り消している。20は沈線が加えられているものであるが，モチーフについては不明である。

［後　期］

図39－１～12は後期前葉，13・14は後葉の土器としたものである。いずれも褐色系の色調で，胎土に含まれる粗粒砂も比較的多い。

図39－１～６は口縁部片である。１・２・４は内面に装飾文様が施されるものである。１は浅鉢形土器で，口縁端部には刻みが施された粘土紐が付加され，内面には平行沈線によって工字状の文様が横位に展開されている。外面は無文である。２・３は鉢形土器の口縁部で，内面の上端に２では１条，３では２条の沈線を巡らせている。２の外面は無文で，３の外面には刻み目の施された微隆帯が貼り付けられている。４・５は無文地に，多条の沈線で曲線的な図形を描いている。４は口縁端部が尖り出す器形で，やや太めの沈線で半円状の図形が描かれている。５は口縁端部に粘土貼り付けによる小突起が付けられ，口縁下から胴部にかけて横位の曲線文が施されている。

図39－７～12は鉢形土器の胴部片である。７・８は器面全体に細く密な多条沈線で曲線的な図形が描かれている。９・10は縄文地上に２～３条１組の平行沈線で文様を，11は無文地に沈線を施している。12は縄文地に縦位の太い単沈線を施している。

図39－13・14は貼瘤が認められる鉢形土器の胴部片である。13は貼瘤を基点に横位と斜位の沈線

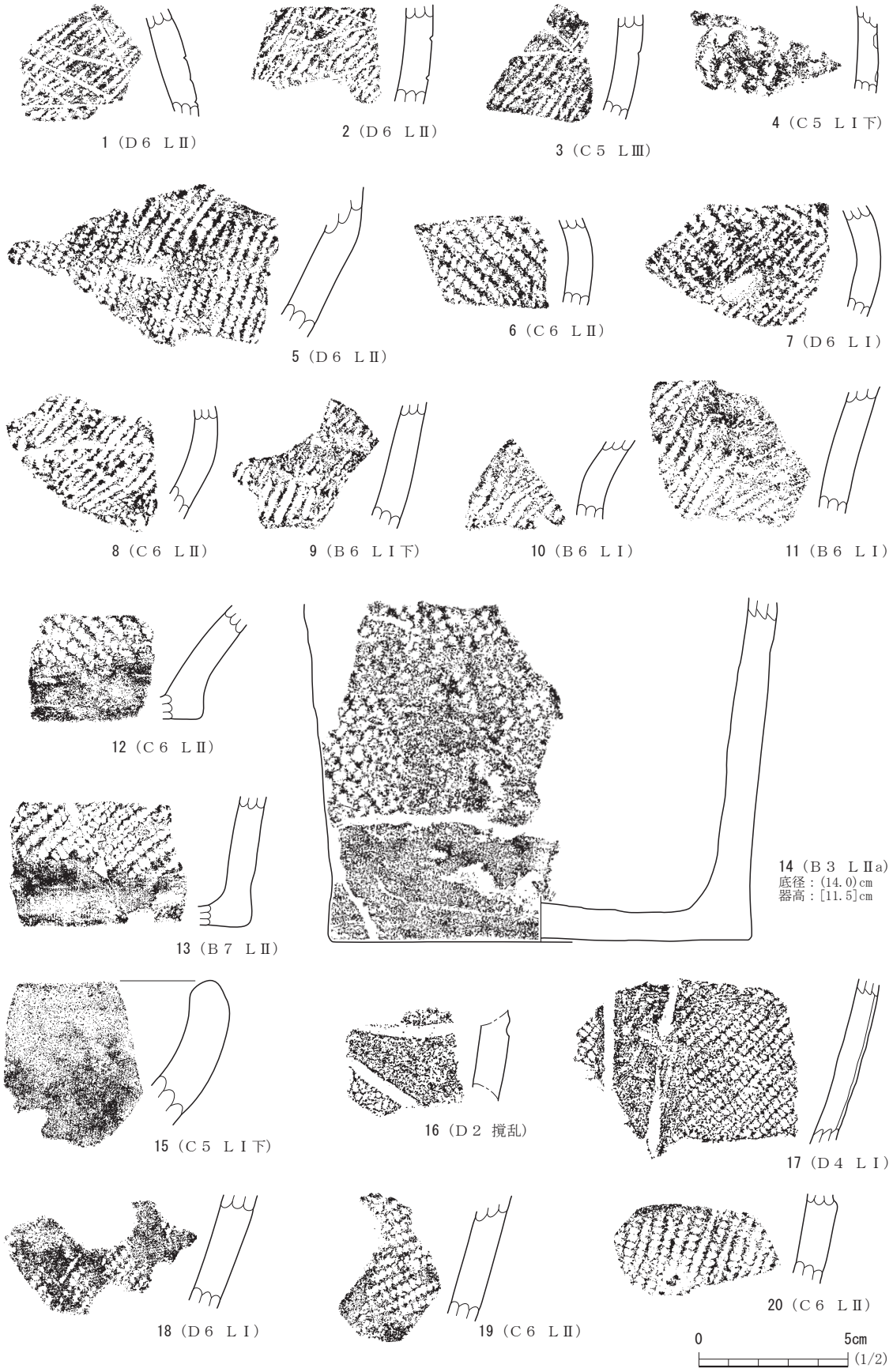


図38　縄文時代の遺物（４）

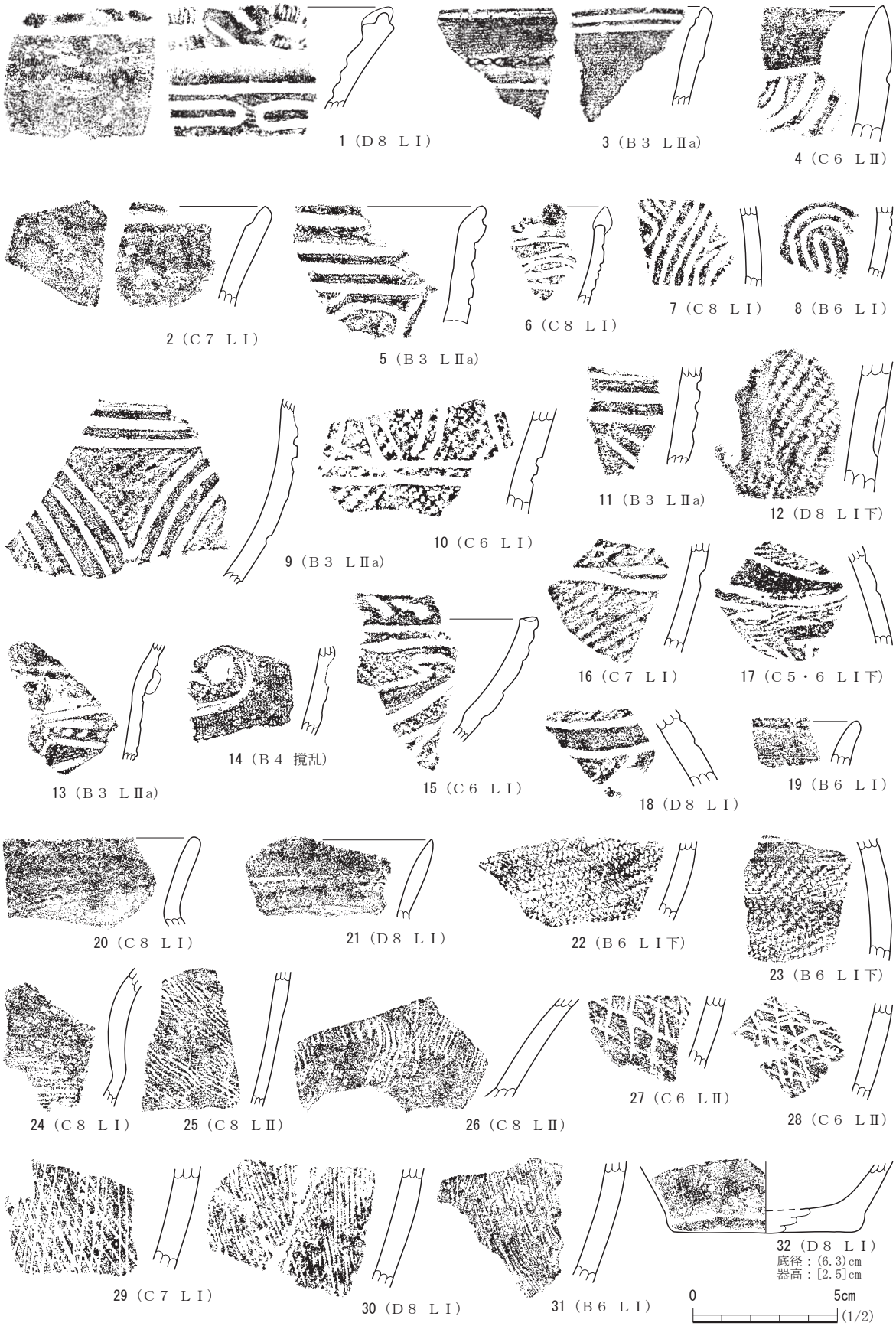


図39　縄文時代の遺物（５）

を施し，横位の沈線間に刺突を加えている。14は磨消手法による曲線区画の中に貼瘤の剥落痕が認められる。いずれの資料も器面は平滑に磨かれている。

［晩　期］

図39－15～19は晩期の土器としたものである。いずれも胎土に粗粒砂を少量含み，焼成は堅緻である。いずれも破片資料のため判然としないが，15は浅鉢形土器，ほかは鉢形土器と考えられる。15は口縁端部に刻みが，胴部には磨消手法による曲線文が施され，無文部と内面は平滑に磨かれている。また，外面の一部にはごくわずかであるが赤色顔料の付着が認められる。16はやや幅広の沈線が入り組み状に，17・18は磨消手法による曲線的な図形が描かれている。19は無文の口縁端部に縄文が施されたもので，胎土・焼成などの特徴から晩期の土器とした。

図39－20～31は後・晩期のいずれの時期か明確にできないものを一括した。20・21は無文の口縁部片で，いずれも波状を呈する。22・23は同一個体の胴部片で，上位では斜位に，下位では横位ぎみに縄文を施文している。また，焼成は極めて良好で堅緻である。24～26は同一個体の鉢形土器片で，撚糸文が施されている。24は口縁部付近で，胴部との境が屈曲し，口縁部が外反している。口縁部との境では横位，25の胴部では斜位，26の底部付近では縦位に撚糸文が施されている。また，いずれも薄く堅緻で，内面に炭化物の付着が認められる。27・28は網目状の撚糸文が施され，色調は浅黄橙色と明るく，焼成も良好である。29～31は条痕文が施された鉢形土器の胴部片である。29は斜格子状に，30・31は縦位に櫛歯状工具による条痕が認められる。31の条痕は他と比較して細く密で，刷毛目に近い。32は無文の底部片で，色調は明褐色と明るい。胎土には少量の粗粒砂を含み，焼成は堅緻である。

石　　器（図40，写真28）

図40－１～８は石鏃としたものである。１～４は有茎の石鏃で，茎部先端を欠損するものが多い。１は比較的丁寧な剥離調整が全面に施され，形状は整った二等辺三角形を呈する。２・３は茎部のえぐりが弱く，縁辺の形状が「く」の字状に整えられている。いずれも比較的丁寧な両面加工によって薄身に整形され，先端部の作り出しは鋭い。４は側縁が膨らみスペード形に近い。剥離調整は全面に施されているが，先端付近は厚みがあり先端の作り出しはやや鈍い。５～８は無茎の形態をとる石鏃で，いずれも先端部を欠損している。５は基部が平らなもので，形状は二等辺三角形を呈するが全体的に整っていない。剥離調整も比較的雑で，素材の厚みを取りきれていない。６は大型の石鏃で，基部の中央が深くえぐりこまれている。形状は二等辺三角形を基調とし，体部中央から基部方向にやや広がる。剥離調整は全面に施され，大型の割には薄身で比較的形も整っている。７は長身・細身の石鏃で，基部のえぐりは弱い。両面加工が施され，整った形に作り出されている。８は先端を大きく欠損するもので，基部のえぐりは比較的弱く緩やかに弧を描いている。主に片面加工によって整形され，裏面には素材の剥離面を大きく残している。

図40－９は石槍の先端部付近と考えられる。やや左右が非対称の形状であるが，比較的入念な剥離調整が全面に施され，鋭い先端と側縁を作り出している。10は縦長の剥片に簡単な周縁加工を施

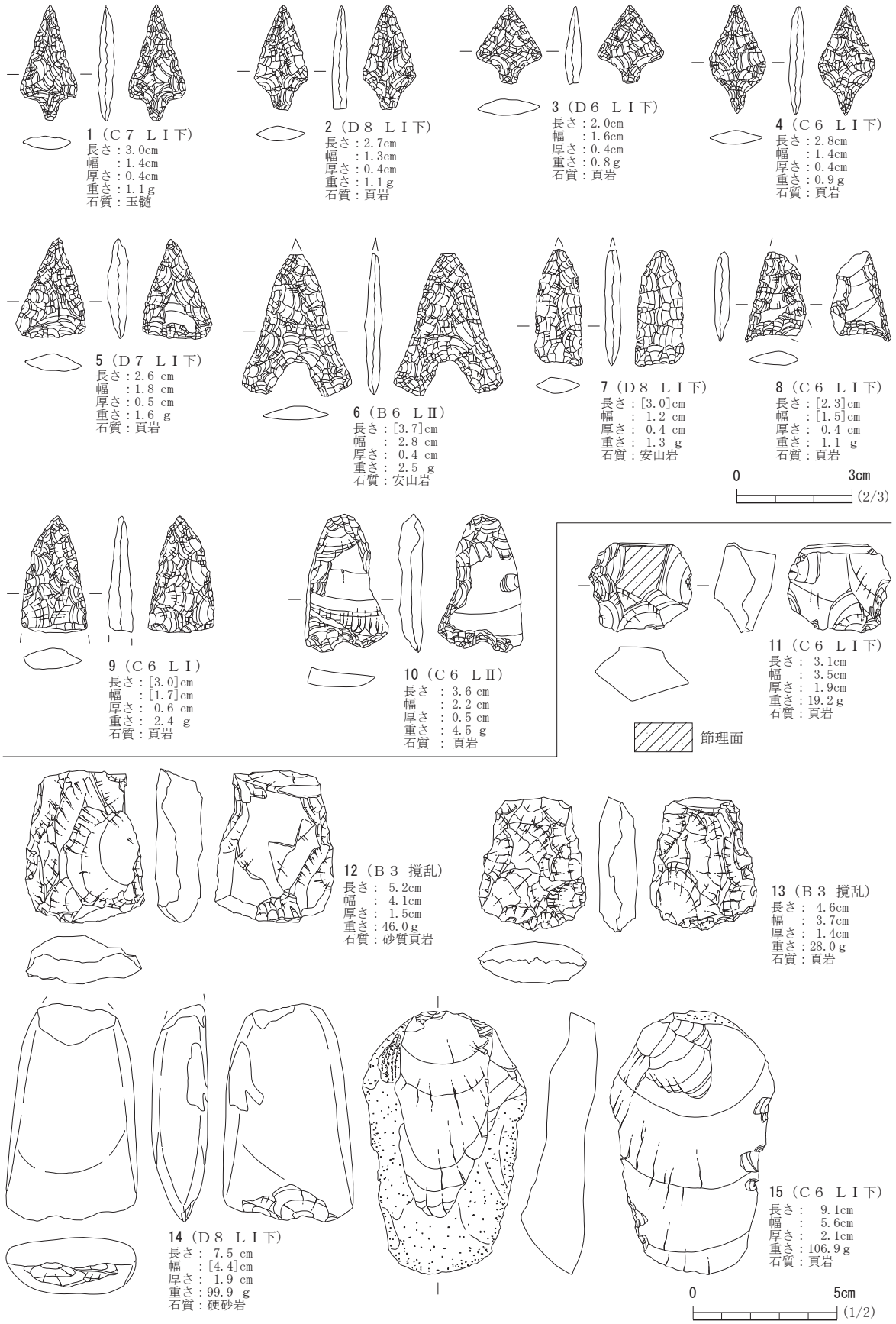


図40　縄文時代の遺物（６）

し，側縁に刃部を作り出している。素材自体の剥離面と厚みを大きく残していることから，未成品の可能性が高い。11は小型の石核で，縁辺に認められる剥離面は比較的小さい。12・13は小型の打製石斧と考えられる。素材剥片の外周から調整を加え縦長台形状に加工している。両面から調整剥離を行っているため，横断面はレンズ状である。12は刃部と基部が欠損している。14は基部を欠損する磨製石斧である。研磨整形は比較的雑で，全体が丸みを帯び稜線は不明瞭である。また，刃部には使用による刃こぼれと潰れが認められる。15は縦長の素材剥片で，比較的大型で厚みをもっている。剥離などの加工痕は認められない。

平安時代の遺物

平安時代の遺物には，土師器と須恵器がある。今回の調査で遺構外から出土した土師器の器種は杯のみである。また，須恵器では長頸瓶と甕の破片が主体である。

土 師 器（図41，写真29）

図41－１～５はいずれもロクロ成形の杯で，口縁部がわずかに外反する器形となっている。また，いずれも内面はヘラミガキ調整後，黒色処理が施されている。橙色系の明るい色調で，胎土に細粒砂を比較的多く含むものが多い。１・２は体部下端から底部外面にかけて手持ちヘラケズリ調整が施されている。いずれも底部外面は平坦に調整され，底部の切り離し技法は不明である。１の体部外面中央付近には「十」と「万」を上下に重ねたような，２の底部外面には判読不明の墨書が認められる。また，１の底部内面には，中心から放射状に広がるヘラミガキ調整が顕著に認められる。３は体部下端から底部外面にかけて，弱い手持ちヘラケズリ調整が施されているが，底部外面には回転ヘラ切り痕を残している。また，底部外面の中央付近に「十」の字形の細い刻線が認められる。被熱によって外面は灰白色～浅黄橙色に変色し，内面の広い範囲にはぜた痕跡が認められる。４はやや小ぶりな杯で，底部外面に回転糸切り痕を残している。体部下端に手持ちヘラケズリ調整が，底部内面には平行なヘラミガキ調整が認められる。本資料も被熱によって，外面は灰白色系の色調に変色し，内面にははぜた痕跡が認められる。５は底径がやや広く，浅い杯である。手持ちヘラケズリ調整は底部外面のみで，中央に向かってややくぼんでいる。また，底部外面の中央付近には墨書の一部が認められる。

須 恵 器（図41，写真30）

図41－６～11は長頸瓶で，褐灰色系の色調のものが多い。器面は両面とも比較的丁寧にロクロナデされ，それ以外の調整痕は認められない。６は強く外反する口縁部片で，口縁端部は側方につまみ出されている。７は頸部片で，口縁部に向かってしだいに外反する器形となっている。胎土に細粒砂を比較的多く含むためか，器面はざらついている。８・９は肩部片で，丸みをもって膨らんでいる。８の外面は焼成がやや軟調なためか荒れてざらつき，９の外面には粘土の輪積み痕が認められる。10は丸みを持って膨らむ体部片である。比較的焼成は良好であるが，いずれも自然釉が掛かった部分が荒れてざらついている。11は底部片で，高台部が剥落している。底面外縁に幅の広い回転

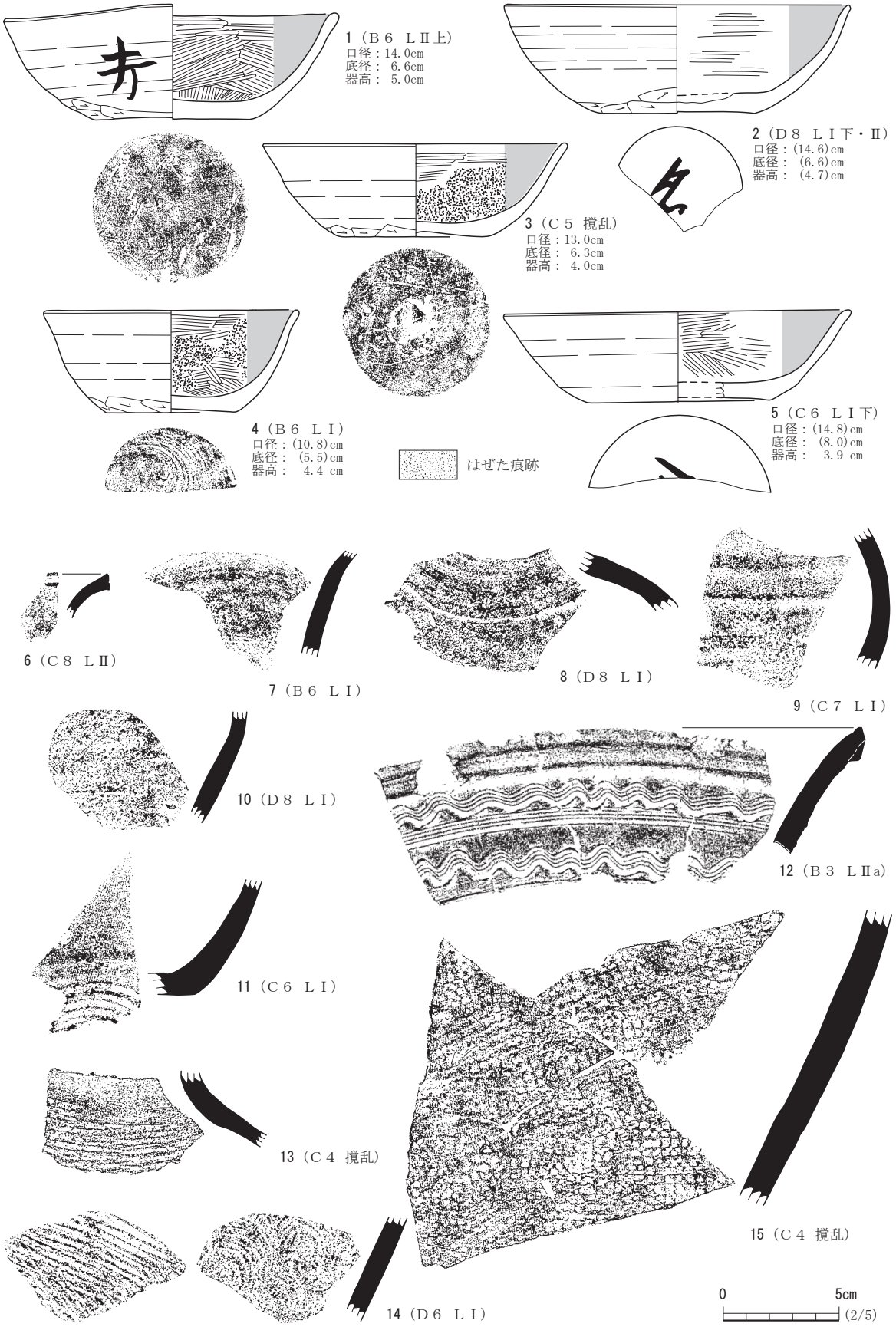

1（Ｂ６　ＬⅡ上）
口径：14.0cm
底径：　6.6cm
器高：　5.0cm
2（Ｄ８　ＬＩ下・Ⅱ）
口径：(14.6)cm
底径：　(6.6)cm
器高：　(4.7)cm
3（Ｃ５　撹乱）
口径：13.0cm
底径：　6.3cm
器高：　4.0cm
4（Ｂ６　ＬＩ）
口径：(10.8)cm
底径：　(5.5)cm
器高：　4.4 cm
5（Ｃ６　ＬＩ下）
口径：(14.8)cm
底径：　(8.0)cm
器高：　3.9 cm
はぜた痕跡
6（Ｃ８　ＬⅡ）
7（Ｂ６　ＬＩ）
8（Ｄ８　ＬＩ）
9（Ｃ７　ＬＩ）
10（Ｄ８　ＬＩ）
12（Ｂ３　ＬⅡa）
11（Ｃ６　ＬＩ）
13（Ｃ４　撹乱）
15（Ｃ４　撹乱）
14（Ｄ６　ＬＩ）
0
5cm
(2/5)

図41　平安時代の遺物

糸切り痕状の痕跡が認められるが，高台取り付けの際の加工痕と考えられる。全体に灰白色の色調を呈し，焼成が軟調なためか，軽くやや脆い。

図41－12～15は甕で，長頸瓶よりも黒めの色調である。12は口縁部片で，外反して強く開く器形である。端部に粘土帯を貼付けて複合口縁にしている。外面には４本単位の櫛状工具で波状文と横線文を交互に施している。13～15は体部片で，傾きから13は頸部付近，14・15は胴下半の破片と考えられる。13・14には外面に平行タタキ目痕が認められ，特に14には内面に同心円状のアテ具痕が認められる。15は大型の水甕の一部で器壁がかなり厚く，外面に格子状タタキ目痕が認められる。

近世の遺物

今回の調査で出土した近世の遺物には，陶磁器類・石器・石製品・羽口・金属製品・弾丸・銭貨がある。出土数では陶磁器類が圧倒的に多く，18世紀後半から19世紀前半の在地産の陶器が主体を占める。在地以外の陶磁器は非常に少ないが，図示したものも含めて17世紀の肥前産の磁器皿が５点と，陶器皿１点が出土している。

土　　器（図42－１～４，写真31）

図42－１～４は土師質土器で，色調は橙色である。いずれもロクロ成形の小皿で，底部外面に回転糸切り痕が認められる。１・２の底部は中央に向かってややくぼみ，３は高台状に作り出されている。いずれも胎土に白色の針状物質を含み，焼成は軟調で脆い。４は１～３より底径が小さく，焼成が堅緻な土器である。胎土に細粒砂を含むが，針状物質は含まれていない。また，いずれの土器も内面にスス状の黒色物質が付着していることから，灯明皿として使用されたと考えられる。

陶磁器類（図42－５～18・図43－１～４，写真32・33）

図42－５～11は在地産の陶器碗で，灰釉が施されている。５はやや大振りの碗で，高台の外縁が削られ，端部が内側に尖りだしている。色調は全体的に浅黄橙色で，焼成は軟調である。このため高台付近を除き施されている釉の発色は悪く，一部が細かく泡立っている。６も同様に大振りの碗であるが，高台部が失われている。焼成は堅緻で釉の発色も良く，光沢のある淡緑色をしている。７は小型の丸碗で，焼成も堅緻である。高台内面を除き施された釉の発色も良く，全体が光沢を帯びている。８は口縁部と体部の境が屈折する腰折碗で，焼成は堅緻で釉の発色も良好である。９～11は碗の体部下半で全体形は不明である。いずれも焼成は堅緻であるが，釉の発色は９・10が良好，11はやや鈍い。９にはトチンの剥落痕が認められる。

図42－12は在地産の徳利の胴部から底部にかけての部分で，灰釉が施される。内面にはロクロ目が残り，底部付近を除く全面に緑色の光沢を放つ釉薬が施されている。焼成は堅緻である。

図42－13は在地産の鉢で，胴部から底部にかけての部分である。釉の下にロクロ目が観察でき，内面にはトチンの剥離痕が認められる。焼成はやや軟調で，厚めの釉は淡緑色に発色している。同図14は在地産の擂鉢で，底部付近が残存する。擂り目は比較的粗いが，密である。外面はロクロ調整されるが，釉は認められない。底部付近にのみ，斜めのナデ調整が認められる。

図42－15～18は在地産の仏飯具である。15は大型のもので，脚部が長く，脚部中位に断面が三角形の突帯を貼り付けており，下方に向って開く。焼成はやや軟調で，底面を除く全面には黒褐色の鉄釉が施されている。16～18は小型の脚部で，いずれも脚部が短く，下方に向かって山形状に開いている。16・17の底面には回転糸切り痕が認められ，18は中央に向かって深くヘラケズリされている。いずれも無釉の脚部下端を除き，灰釉が施されている。

図43－１・２は肥前産の磁器高台付小皿である。体部は深めで高台の直径は小さく，また，体部に対して直角に取り付けられており，高台端部内面には砂の付着が認められる。内面には染付けによる縁取りと，草花文が描かれている。釉は厚く光沢があり，淡灰白色に発色している。

図43－３は在地産の水滴で，ほぼ完形である。型抜き成形によって，立体的な菊花状に作り出されている。焼成は比較的良好で，全面に鉄釉が施されている。

図43－４は在地産の折縁大皿で，内面中央には釉書による大柄な草花文が描かれている。胎土に細粒砂を比較的多く含むが，焼成は極めて堅緻である。また，高台付近を除いて施されている灰釉の発色も良好で光沢を帯びている。

石製品・石器（図43，写真34）

図43－５・６は石鉢である。５は高台付の碗状の器形を呈するが，全体的に歪み整っていない。器面全体に不規則な凹凸が認められ，成形の際の加工痕をそのまま残している。性格については不明であるが，かなり強い被熱により内外面の広い範囲ににぶい赤褐色の変色が認められる。６は５ほど精緻な作りではなく，鉢状の器形であると考えられる。

図43－７～９は砥石である。断面長方形の扁平で細長い形状をしている。いずれも欠損しているが，７では平面のみ，８・９では４面に擦痕が認められた。

羽　　口（図43，写真31）

図43－10は羽口の破片である。基部と吸気部がともに失われており，熱変化ラインを確認できることから，中央付近かと思われる。平安時代の所産である可能性もあるが，スペースの都合上この位置に掲載した。

金属製品（図43，写真35）

図43－11・12は青銅製品，13は鉛製品である。11は板状青銅製品である。用途は不明であるが，表に竹と虎のモチーフが陽刻されており，左端中央には「天下一作」という陽刻の文字が読める。長軸中央軸線上の対になる位置に小さなつまみがあり，綿の糸が通されていた。四角い箱の蓋であろうか。12は煙管の吸い口である。一枚板を重ねて作られている。13は弾丸である。直径1.2㎝の鉛製で球形をしており，火縄銃の弾丸と思われる。

銭　　貨（図43，写真35）

図43－14・15は寛永通寶で，いずれも銅銭である。14は被熱によって黒く変色し，歪んでいる。寶の字体から14は古寛永，15は新寛永と考えられる。（山岸・笠井）

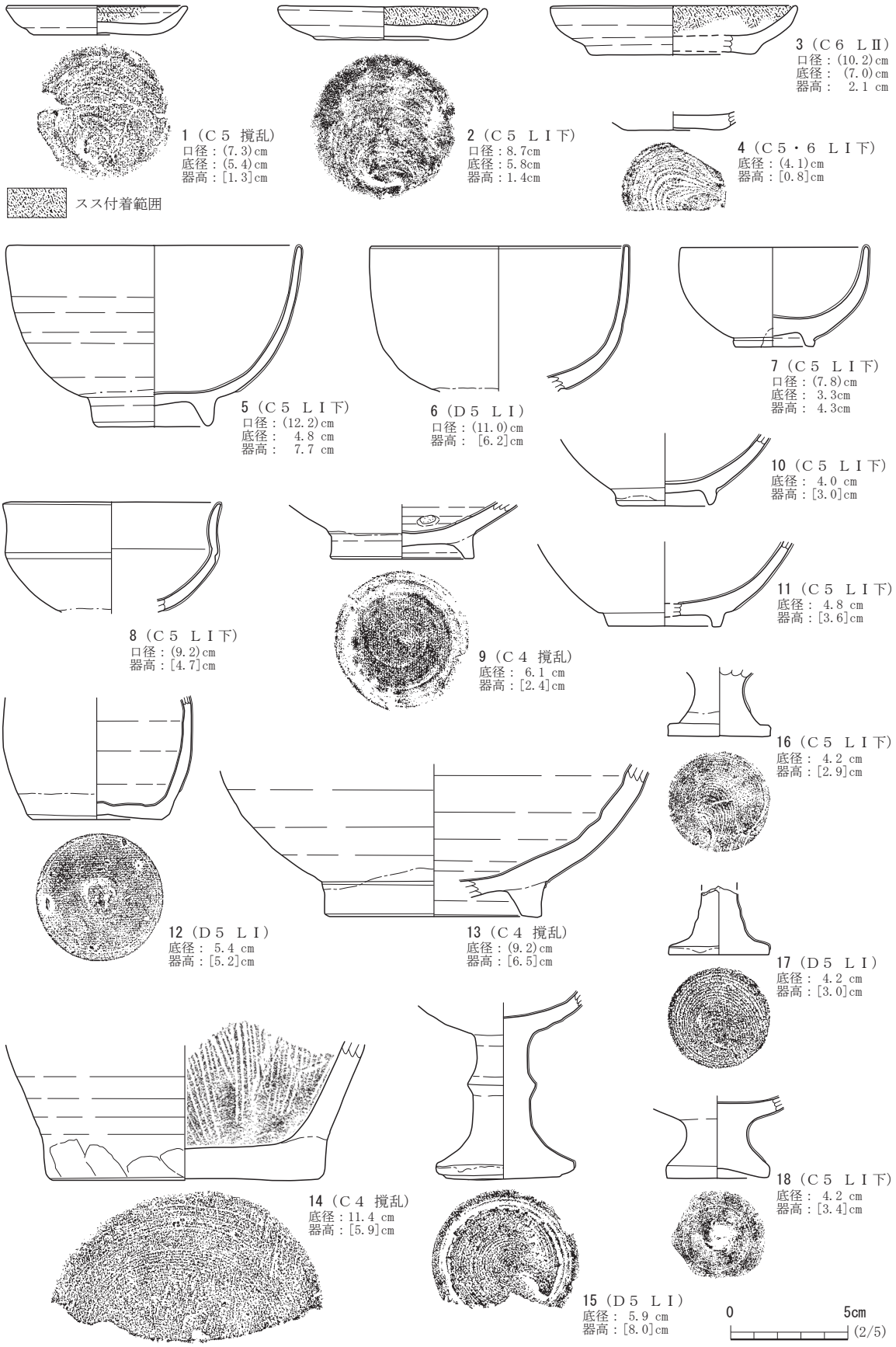

1（Ｃ５ 撹乱）
口径：(7.3)cm
底径：(5.4)cm
器高：[1.3]cm
スス付着範囲
2（Ｃ５ ＬＩ下）
口径：8.7cm
底径：5.8cm
器高：1.4cm
3（Ｃ６ ＬⅡ）
口径：(10.2)cm
底径：(7.0)cm
器高：2.1 cm
4（Ｃ５・６ ＬＩ下）
底径：(4.1)cm
器高：[0.8]cm
5（Ｃ５ ＬＩ下）
口径：(12.2)cm
底径：4.8 cm
器高：7.7 cm
6（Ｄ５ ＬＩ）
口径：(11.0)cm
器高：[6.2]cm
7（Ｃ５ ＬＩ下）
口径：(7.8)cm
底径：3.3cm
器高：4.3cm
8（Ｃ５ ＬＩ下）
口径：(9.2)cm
器高：[4.7]cm
9（Ｃ４ 撹乱）
底径：6.1 cm
器高：[2.4]cm
10（Ｃ５ ＬＩ下）
底径：4.0 cm
器高：[3.0]cm
11（Ｃ５ ＬＩ下）
底径：4.8 cm
器高：[3.6]cm
12（Ｄ５ ＬＩ）
底径：5.4 cm
器高：[5.2]cm
13（Ｃ４ 撹乱）
底径：(9.2)cm
器高：[6.5]cm
14（Ｃ４ 撹乱）
底径：11.4 cm
器高：[5.9]cm
15（Ｄ５ ＬＩ）
底径：5.9 cm
器高：[8.0]cm
16（Ｃ５ ＬＩ下）
底径：4.2 cm
器高：[2.9]cm
17（Ｄ５ ＬＩ）
底径：4.2 cm
器高：[3.0]cm
18（Ｃ５ ＬＩ下）
底径：4.2 cm
器高：[3.4]cm
0
5cm
(2/5)

図42　近世の遺物（１）

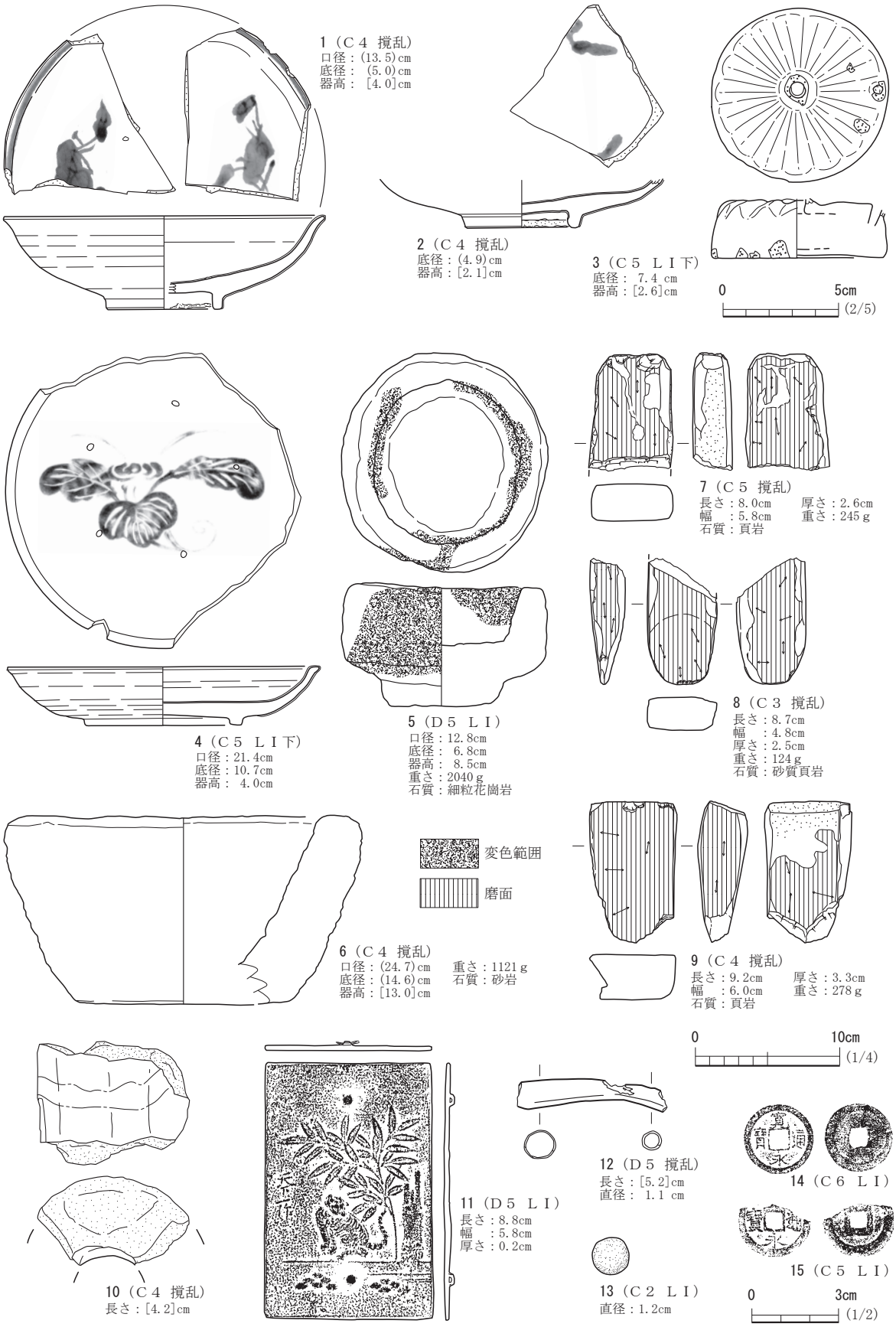

1（Ｃ４　撹乱）
口径：(13.5)cm
底径：　(5.0)cm
器高：　[4.0]cm
2（Ｃ４　撹乱）
底径：(4.9)cm
器高：[2.1]cm
3（Ｃ５　ＬＩ下）
底径：　7.4 cm
器高：[2.6]cm
0
5cm
(2/5)
4（Ｃ５　ＬＩ下）
口径：21.4cm
底径：10.7cm
器高：　4.0cm
5（Ｄ５　ＬＩ）
口径：12.8cm
底径：　6.8cm
器高：　8.5cm
重さ：2040ｇ
石質：細粒花崗岩
7（Ｃ５　撹乱）
長さ：8.0cm　厚さ：2.6cm
幅　：5.8cm　重さ：245ｇ
石質：頁岩
8（Ｃ３　撹乱）
長さ：8.7cm
幅　：4.8cm
厚さ：2.5cm
重さ：124ｇ
石質：砂質頁岩
変色範囲
磨面
6（Ｃ４　撹乱）
口径：(24.7)cm　重さ：1121ｇ
底径：(14.6)cm　石質：砂岩
器高：[13.0]cm
9（Ｃ４　撹乱）
長さ：9.2cm　厚さ：3.3cm
幅　：6.0cm　重さ：278ｇ
石質：頁岩
0
10cm
(1/4)
10（Ｃ４　撹乱）
長さ：[4.2]cm
11（Ｄ５　ＬＩ）
長さ：8.8cm
幅　：5.8cm
厚さ：0.2cm
12（Ｄ５　撹乱）
長さ：[5.2]cm
直径：　1.1 cm
13（Ｃ２　ＬＩ）
直径：1.2cm
14（Ｃ６　ＬＩ）
15（Ｃ５　ＬＩ）
0
3cm
(1/2)

図43　近世の遺物（２）

第３章　自然科学分析

第１節　樹 種 同 定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材はセルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質からおおむね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては，木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試　　料

試料は，西原遺跡より出土した炭化材５点である。

３．方　　法

試料を割折して新鮮な横断面(木口と同義)，放射断面(柾目と同義)，接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し，落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結　　果

表１に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を図44に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて，道管の径は急激に減少する。

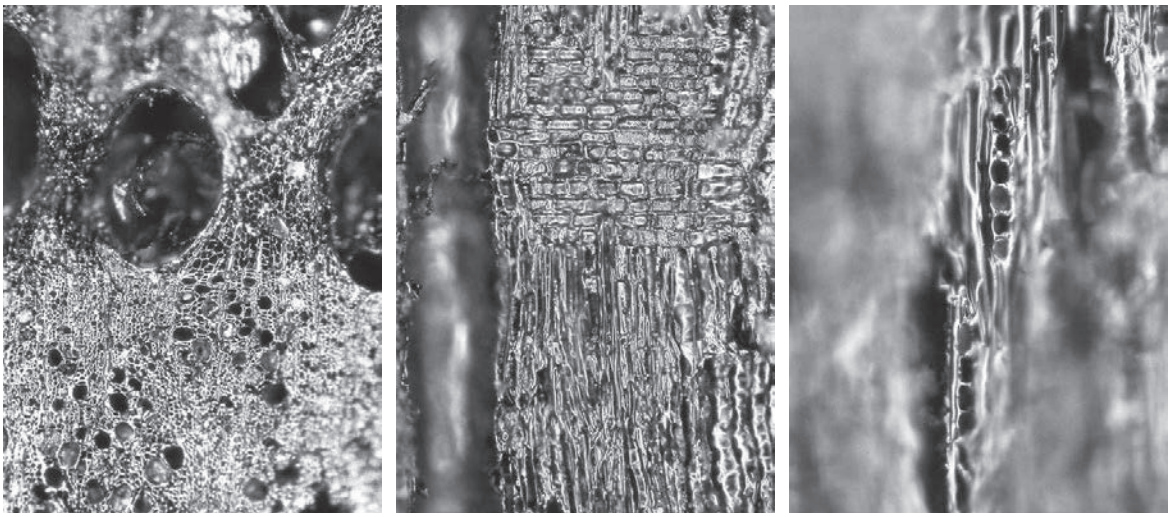
放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部・本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20m，径40㎝ぐらいであるが，大きいものは高さ30m，径２m

表１　樹種同定結果

試料番号	遺構	層位	種類	樹種
№.１	15号土坑	ℓ３	炭化物	クリ
№.２	18号土坑	ℓ２	炭化物	クリ
№.３	24号土坑	ℓ３	炭化物	クリ
№.４	30号土坑	ℓ４	炭化物	クリ
№.５	35号土坑	ℓ６	炭化物	クリ

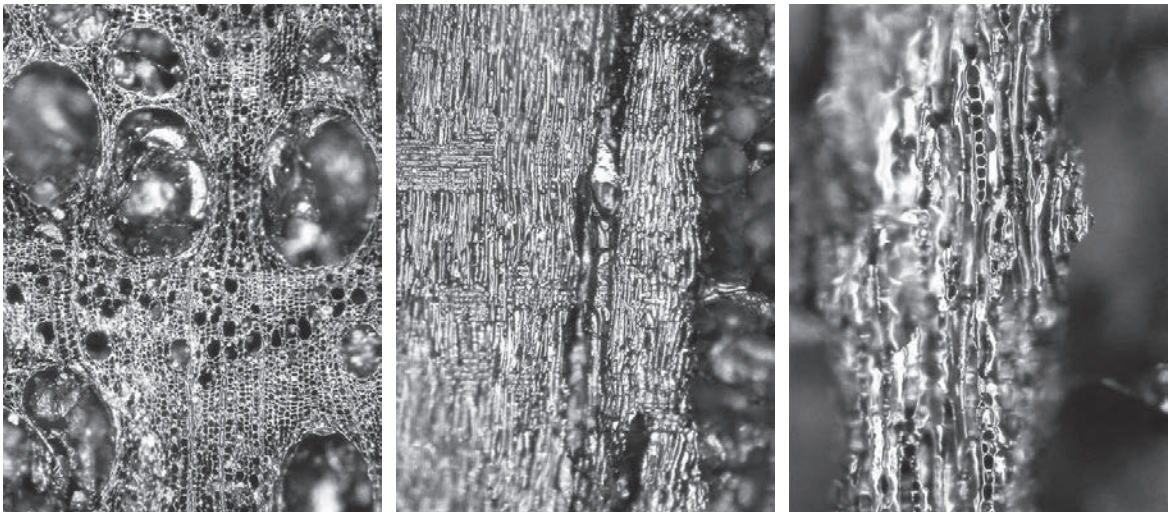


横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.1mm

１．クリ（試料No.１）

横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.4mm　接線断面 ：0.2mm

２．クリ（試料No.４）



横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.4mm　接線断面 ：0.2mm

３．クリ（試料No.５）

図44　炭化材の木材組織

に達する。耐朽性が強く，水湿によく耐え，保存性の極めて高い材で，現在では建築・家具・器具・土木・船舶・彫刻・薪炭・椎茸榾木など広く用いられる。

５．所　　見

同定の結果，西原遺跡出土の炭化材５点はすべてクリであった。クリは温帯に広く分布する落葉広葉樹であり，暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み，二次林要素でもある。当時遺跡周辺に生育し，周辺が二次林化していた可能性が考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩　1985　広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫　1988　日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久　1993　日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

第２節　放射性炭素年代

株式会社　加速器分析研究所

１．測定対象試料

測定対象試料は，西原遺跡の15号土坑のℓ３から出土した木炭（IAAA-82618），18号土坑のℓ２から出土した木炭（IAAA-82619），24号土坑のℓ３から出土した木炭（IAAA-82620），30号土坑のℓ４から出土した木炭（IAAA-82621），35号土坑のℓ６から出土した木炭（IAAA-82622），合計５点である。

２．化学処理工程

①メス・ピンセットを使い，根・土などの表面的な不純物を取り除く。
②酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が1N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。
③試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。
④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。
⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製

する。
⑥グラファイトを内径１mmのカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

３．測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４．算出方法

①年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
②^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）としてさかのぼる年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
③δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
④pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。
⑤暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

５．測定結果

^{14}C年代は，15号土坑から出土した木炭が1290±30yrBP，18号土坑から出土した木炭が1470±30yrBP，24号土坑から出土した木炭が1520±30yrBP，30号土坑から出土した木炭が1300±30yrBP，35号土坑から出土した木炭が1370±30yrBPである。それぞれ年代値が異なり，暦年較正年代（1σ）から判断すると，６世紀から８世紀に含まれる遺構である。試料の炭素含有率はすべて60%以上であり，十分な値であった。測定対象試料は，木炭の小片であり，樹皮を残す最外年輪部が確認され

なかったため，樹木の枯死年代をさかのぼる年代が示される可能性を考慮して，遺構の年代を判断する必要がある。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A.　1977　Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C.　1995　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C.　2001　Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B.　2001　'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al.　2004　IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

表２　放射性炭素年代測定結果

測定番号	遺跡名	出土地点		試料形態	Libby Age (yrBP)	δ^{13}C (‰) (加速器)	pMC (%)	δ^{13}Cの補正無し	
		遺構名	層位					pMC (%)	Age(yrBP)
IAAA-82618	西原	15号土坑	ℓ3	木炭	1,290 ± 30	-26.58 ± 0.79	85.21 ± 0.34	84.94 ± 0.31	1,310 ± 30
IAAA-82619	西原	18号土坑	ℓ2	木炭	1,470 ± 30	-25.02 ± 0.61	83.32 ± 0.33	83.31 ± 0.31	1,470 ± 30
IAAA-82620	西原	24号土坑	ℓ3	木炭	1,520 ± 30	-28.39 ± 0.61	82.81 ± 0.32	82.23 ± 0.30	1,570 ± 30
IAAA-82621	西原	30号土坑	ℓ4	木炭	1,300 ± 30	-24.18 ± 0.46	85.02 ± 0.32	85.17 ± 0.31	1,290 ± 30
IAAA-82622	西原	35号土坑	ℓ6	木炭	1,370 ± 30	-25.82 ± 0.70	84.32 ± 0.34	84.18 ± 0.32	1,380 ± 30

表３　暦年較正年代

測定番号	遺跡名	遺構名	暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-82618	西原	15号土坑	1,285 ± 32	675AD - 720AD (41.4%) 742AD - 770AD (26.8%)	659AD - 779AD (94.8%) 795AD - 799AD (0.6%)
IAAA-82619	西原	18号土坑	1,466 ± 31	572AD - 633AD (68.2%)	549AD - 646AD (95.4%)
IAAA-82620	西原	24号土坑	1,515 ± 30	535AD - 602AD (68.2%)	433AD - 494AD (19.5%) 506AD - 617AD (75.9%)
IAAA-82621	西原	30号土坑	1,303 ± 30	666AD - 710AD (47.2%) 747AD - 766AD (21.0%)	659AD - 773AD (95.4%)
IAAA-82622	西原	35号土坑	1,369 ± 32	641AD - 675AD (68.2%)	606AD - 691AD (93.4%) 751AD - 763AD (2.0%)

第４章　ま　と　め

第１節　木炭焼成土坑について

西原遺跡では，造り替えのものを含めると，総数64基の土坑を調査した。このうち，84％にあたる54基の土坑は，周壁や底面の焼土化や木炭層の存在から，木炭焼成土坑の可能性があるもので，西原遺跡を特徴付ける遺構である。本節では西原遺跡全体のまとめの前に，本遺跡の主たる遺構である木炭焼成土坑について分析を加え，本遺跡におけるこの類の土坑の在り方について検討する。なお，分析にあたっては，表４に挙げた比較的遺存状況の良好な48基を対象にした。

平面形

土坑の平面形は，遺存状況が良好と考えられる底面形状で比較する。図45－１は，横軸に土坑底面の長軸，縦軸に短軸の数値を置き，長・短軸の関係を散布図化したものである。図の左下隅から右上がりに延びる直線が長短軸比(短軸を１とした場合の長軸の比率)１：１の方形ラインで，このラインに近いほど，正方形に近く，離れるほど長細い長方形であるといえる。西原遺跡では長短軸比が1.10に達しない方形範囲の土坑は，７・24・38・51・53号土坑の５基のみで，全体の１割程度である。全体の９割近くにあたる42基の土坑は，長方形を基調とした平面形をしている。このうちやや短めな長短軸比1.50以下のものが23基，やや長めの長短軸比1.51以上2.00以下にあたるものが19基，長細い長短軸比2.01以上のものは43号土坑の１基のみである。長方形を基調とする土坑は，やや短めのものが多いが，際立って集中するわけではなく，長短軸比に分散傾向が認められる。この傾向は，平面形において，この種の土坑に構築上の規格性が希薄で，木炭の材料の長さおよび量により適宜構築していったことに起因すると考えられる。なお，西原遺跡では９号土坑が１基のみ楕円形を基調にする平面プランをもつ。

規　模

西原遺跡は全体的に後世の削平が顕著であるため，遺構の確認面が，遺構本来の掘り込み面より低い位置にある場合が多い。このため，土坑の深さは本来の掘り込み深度より浅く分析対象に適さないと考え，参考程度にとどめ，底面の面積に焦点を絞って考えていくこととする。土坑の底面積は，最小の24号土坑が2,700㎠，最大の９号土坑が12,152㎠を測り，最小のものと最大のものの面積比は１：4.5である。図45－２は，横軸に1,000㎠毎に区切った土坑の単位面積，縦軸に土坑の基数を示したもので，単位面積あたりの土坑の基数を現したものである。便宜的に底面積5,000㎠以下を小型，5,001～10,000㎠を中型，10,001㎠以上を大型とすると，小型が全体の25％にあたる12基，中型が67％にあたる32基，大型が８％にあたる４基である。各規模の全体に対する比率は最も少ない大型を１とすると，小型：中型：大型は３：８：１である。小型の土坑は，長軸長が90㎝以下，短軸長が60㎝前後で，方形の平面形をもつ５基の内４基が含まれる。中型は，長軸長80～120㎝ほど，短軸

長60～80㎝ほどで，西原遺跡の３分の２の木炭焼成土坑はこの規模に収まる。中型の中でもやや小ぶりな5,001～7,000㎡の規模のものが多い。平面形はやや長めのものから長細い長方形のものを含む。大型は，長軸長120㎝前後，短軸長90㎝前後で，長短軸比が1.50以下のやや短めの長方形を基調とするものと，楕円形の平面形である９号土坑とから構成されている。

木炭層

木炭層は，木炭片や木炭粒を多量に含む土層の通称で，多くの場合土坑底面の直上に５～10㎝程度の厚さで水平に堆積する。木炭層に含まれる木炭は，製品である木炭を取り出した後の残留した木炭片や粉炭が主要素であると考えられており，木炭層の有無はこの類の土坑の性格を決定する根拠となっている。西原遺跡で，木炭層を確認している土坑は，54基中47基である。木炭層の厚さは最薄の32・54号土坑で２㎝，最厚の49号土坑では20㎝を測り，平均値は７㎝，標準偏差は３㎝である。木炭層はおおむね水平に堆積するが，15・36号土坑のように，底面の中央付近で木炭層が認められず，壁際に部分的に堆積する場合も認められる。

焼土化

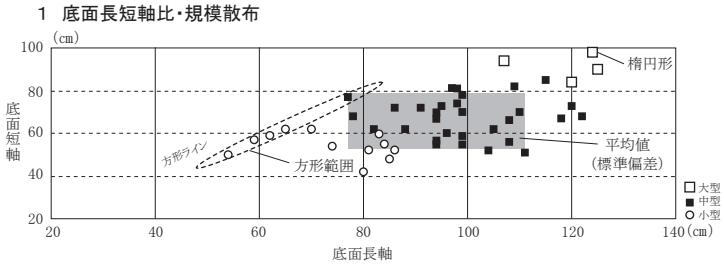
土坑を木炭焼成土坑と判断する基準の一つに，周壁の焼土化が挙げられる。これは，木炭の材料となる木材が燃焼の際放出する熱と炎により形成されるもので，周壁上部に認められることが多い。ここで問題となるのは，底面が焼土化する場合である。平成16年10月に南相馬市原町区の割田地区遺跡群で調査の際に行われた木炭焼成土坑の焼成実験によると，４時間の燃焼の後，丸一日蒸し焼きにし，中身を取り出し土坑内の状況を観察したところ，周壁には焼土化が認められたが，底面には焼土化を確認できないという結果が出た。同様の状況は平成18年度に福島県文化財センター白河館で実施された木炭焼成土坑の焼成実験結果にもほぼ同様の所見が認められることから，木炭層より上位に形成される焼土化と下位に形成される焼土化，さらに木炭層が存在しない土坑の焼土化の形成には，それぞれ異なる過程を想定する必要がありそうである。西原遺跡では，分析対象とした48基の木炭焼成土坑のうち，木炭層と周壁のみの焼土化が認められるものは27基，木炭層が認められ，不明のものも含めて焼土化が認められないものが８基あり，全体の７割にあたるこれら35基の土坑については，通常考えている木炭焼成土坑と見て間違いないと思われる。次に，周壁・床面の両方に焼土化が認められ，木炭層も認められるものが５基存在している。このような土坑は，木炭を焼成する前に土坑内を徹底的に空焚きしたか，別の用途（土師器焼成など）で使用したものを流用した可能性が考えられる。最後に木炭層が認められないが，焼土化が認められるもので８基ある。これら８基については，木炭焼成土坑であった可能性を否定することは出来ないが，土師器焼成・墓などの別の用途で構築された可能性が高いと考えられる。

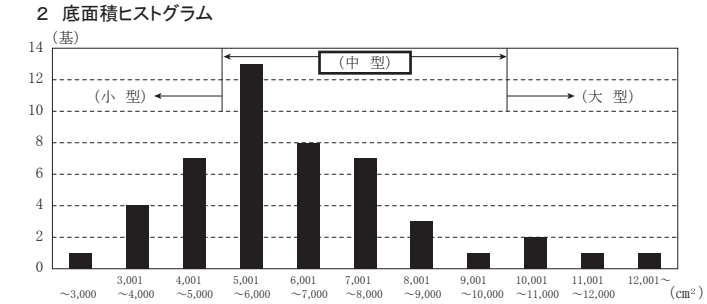
木炭の樹種

西原遺跡で調査した木炭焼成土坑のうち，木炭の遺存状況が良好な５基（ＳＫ15・18・24・30・35）出土の木炭について樹種同定を実施した（第３章第１節）。同定結果はすべてクリであった。同定資料数が少ないため，西原遺跡で作られた木炭のすべてがクリを用材としていたとは断定できな

表４　木炭焼成土坑分析一覧

遺構名	長軸(cm)	短軸(cm)	長短軸比	面積(cm²)	深さ(cm)	木炭層	壁焼土化	底焼土化
SK01	115	85	1.35	9,775	15	○	○	○
SK02	83	60	1.38	4,980	7	●	○	○
SK03	78	68	1.15	5,304	20	○	○	●
SK04	104	52	2.00	5,408	10	○	○	●
SK05	88	62	1.42	5,456	20	●	○	●
SK06	99	59	1.68	5,841	25	○	○	●
SK07	65	62	1.05	4,030	25	○	○	○
SK08	86	72	1.19	6,192	10	●	○	○
SK09	124	98	1.27	12,152	26	○	●	●
SK14	98	81	1.21	7,938	10	○	●	●
SK15	125	90	1.39	11,250	42	○	○	○
SK16	91	72	1.26	6,552	32	●	○	●
SK17	98	74	1.32	7,252	17	○	●	●
SK18	84	55	1.53	4,620	16	○	○	●
SK19	94	67	1.40	6,298	16	○	○	○
SK20	99	78	1.27	7,722	19	○	○	●
SK21	109	82	1.33	8,938	31	○	○	●
SK22	94	55	1.71	5,170	6	○	○	●
SK23	80	42	1.90	3,360	18	○	○	●
SK24	54	50	1.08	2,700	28	○	○	●
SK26	95	73	1.30	6,935	30	○	○	●
SK27	118	67	1.76	7,906	20	△	●	○
SK29	99	55	1.80	5,445	15	△	○	○
SK30	108	66	1.64	7,128	20	○	○	●
SK31	99	55	1.80	5,445	45	○	○	○
SK32	74	54	1.37	3,996	20	○	○	●
SK33a	120	73	1.64	8,760	20	○	○	●
SK34	99	70	1.41	6,930	20	○	○	●
SK35	97	81	1.20	7,857	30	○	○	●
SK36	96	60	1.60	5,760	25	○	○	●
SK38	77	77	1.00	5,929	15	○	―	●
SK39	82	62	1.32	5,084	15	○	―	●
SK40	70	62	1.13	4,340	10	○	○	●
SK41	110	70	1.57	7,700	30	○	●	●
SK42	85	48	1.77	4,080	15	△	○	●
SK43	111	51	2.18	5,661	20	○	○	●
SK44	94	70	1.34	6,580	30	○	○	●
SK45	120	84	1.43	10,080	15	○	○	●
SK46	105	62	1.69	6,510	20	○	○	●
SK47	107	94	1.14	10,058	30	○	○	●
SK48	94	57	1.65	5,358	25	○	○	●
SK49	81	52	1.56	4,212	30	○	○	●
SK50	88	62	1.42	5,456	16	○	○	●
SK51	59	57	1.04	3,363	16	○	○	●
SK52	122	68	1.79	8,296	18	○	○	○
SK53	62	59	1.05	3,658	10	○	―	●
SK55	86	52	1.65	4,472	18	○	○	●
SK57a	108	56	1.93	6,048	17	○	●	●
平均値	94	66	1.46	6,333	21	○有り ●無し △可能性有り ―不明		
標準偏差	17	13	0.28	2,107	8			





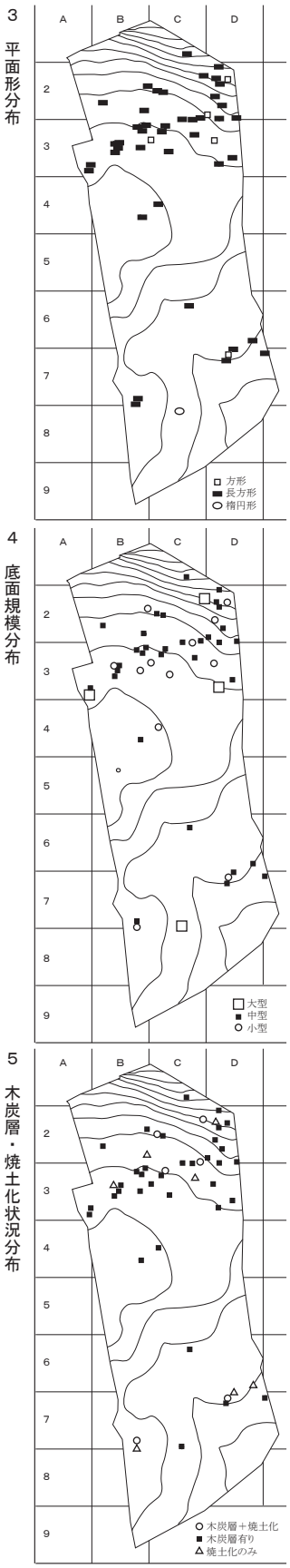


図45　木炭焼成土坑分析

いが，割田地区遺跡群では木炭焼成土坑出土木炭155点のうち約９割にあたる139点がクリであり，南相馬市小高区の四ツ栗遺跡では13点中11点がクリであることを勘案すると，西原遺跡でもクリが主要な木炭の用材であった可能性が高い。なお，18・24号土坑は小型，30・35号土坑は中型，15号土坑は大型の土坑であるが，出土木炭の用材がすべてクリであることから，土坑の規模により，木炭の用材を使い分けることはしていなかったようである。

年　代

西原遺跡の木炭焼成土坑から出土した遺物で，遺構の年代を想定できるのは５号土坑出土の８世紀末～９世紀前半代の所産と考えられる須恵器長頸瓶だけである。そこで，樹種同定と同様の資料について放射性炭素年代測定を実施した（第３章第２節）。測定結果によると，小型の土坑である18・24号土坑が６～７世紀，中型土坑である30・35号土坑と大型土坑である15号土坑が７～８世紀で，出土遺物の年代観よりも100～200年古く出ている。同様の傾向は先述した割田地区遺跡群や四ツ栗遺跡の年代測定結果でも指摘されており，今後さらなるデータの蓄積と検証が必要である。

分　布

西原遺跡の木炭焼成土坑の分布状況は図45－３～５に示した。図45－３は平面形に着目した分布図である。方形プランのものは，調査区北部の土坑が密集する斜面地では10～20ｍの間隔を置いて分布する。長方形プランのものは調査区北部では２～４基が密集し，それぞれの単位が５ｍほどの間隔で分布する傾向があり，調査区南部では３～４ｍの間隔で分布する。図45－４は規模に着目した分布図である。調査区北部では大型土坑がそれぞれ30～50ｍの間隔で分布し，間隔を埋めるように中型および小型土坑が認められる。中型土坑の分布状況は長方形プランの土坑分布と重なる部分が多く，２～３基が密集し，密集単位ごとに５～15ｍほどの間隔をおいて分布している。小型土坑は密集せず，10～20ｍの間隔で分布する。調査区南部は，土坑数が少ないため，分布の傾向を見出しにくいが，中型と小型の土坑が混在し，比較的隣接する距離に造られているようである。図45－５は木炭層と焼土化に着目した分布図である。木炭焼成とは異なる別の用途に使用した可能性のあるものを○および△で示した。■は木炭焼成土坑と断定できるものである。調査区北部では■が密集し，○△が10～20ｍの間隔を置いて分布する様子が見てとれ，調査区南部では○△が散在する■の間に近接して分布する傾向を見出すことができる。

第２節　遺 跡 の 変 遷

西原遺跡で検出した遺構は，掘立柱建物跡１棟，柱列跡２カ所，土坑62基，溝跡６条，井戸跡２基，焼土遺構２基，集石遺構２基，性格不明遺構３基で，出土遺物は縄文土器，土師器，須恵器，陶磁器類，石器類，銅製品，弾丸，銭貨である。以下遺跡の変遷を説明し全体のまとめとする。

縄文時代

西原遺跡で最初に人々の営みの痕跡を確認できるのは，縄文時代早期後葉からである。調査区北

部を中心に，胎土に繊維混和痕と器壁の内外面に施された貝殻条痕を特徴とする土器片が散布する。このような特徴をもつ本遺跡出土の早期後葉の土器群(図35・36)は，図35－２のように，無地文の文様帯に沈線で区画し，刺突文を充填する鵜ヶ島台式の特徴をもつものが含まれるが，全体的に文様帯には条痕の地文をもつものが多く，文様モチーフも簡素で，鵜ヶ島台式に特徴的な胴部の段も図36－６・７・９～11のように不明瞭なものが多く認められることから，次代の茅山下層式の範疇でとらえられる土器群と考えられる。この時期の土器は，調査区北部でも，Ｂ・Ｃ３グリッドを中心とする狭い範囲に集中して出土する傾向があり，この付近に集落の存在が期待されたが，残念ながら住居跡を確認することができず，この時期の遺構としては，２基の焼土遺構(ＳＧ01・02)と土坑１基(ＳＫ28)があるのみである。焼土遺構は地床炉であると考えられるため，この時期の西原遺跡は集落の一部であったようである。

次に確認できるのは，縄文時代前期後葉の土器群(図37・38－１～14)である。図37－１・２のように細かい粘土紐を貼り付けて，鋸歯状や幾何学的モチーフを描く大木５式の特徴をもつものが含まれるが，大半は半截竹管やヘラ状工具により沈線文および連続刺突文で横走する平行沈線や，波状紋を描く大木６式と考えられる土器群である。この時期の土器群の出土地点は早期の土器群に比べやや南側に寄り，調査区中部のＢ・Ｃ・Ｄ，３～６グリッド辺りに広範囲に分布する。この時期の遺構については不明であるが，遺物の散布範囲で検出された60・61号土坑はこの時期の所産であろうか。この時期の西原遺跡は集落の縁辺部か狩場であったのだろう。

続く中期～晩期にかけての土器群(図38－15～20，図39)は，出土点数がきわめて少なく，まとまった内容ではない。中期は後葉～末葉の大木９か10式，後期は前葉の綱取Ⅱ式と後葉の新地式，晩期は中葉の大洞Ｃ２式と考えられる遺物が認められ，断続的に人々が西原遺跡にかかわっていたことがうかがわれる。土器群の分布は，中期が調査区中部，後期前葉が南部，後期後葉が中部，晩期中葉が南部を中心に出土しており，石鏃を主体とする石器の大半は調査区南部を中心に出土していることから，縄文時代後期前葉か晩期中葉の土器群に伴うものと考えられる。これらの時期の遺構は発見されていないことから，この時期の西原遺跡も前期後葉と同様に，集落の縁辺部か狩場であった可能性が高い。

平安時代

縄文時代以降，西原遺跡での人々の生活の痕跡は途絶え，次に痕跡が認められるのは平安時代である。調査区南部を中心に８世紀末～９世紀前半の所産と考えられる土師器・須恵器が出土している。土師器は杯が主体であり，須恵器は甕・長頸瓶が主体である。

この時期の遺構としては，第１節で検討した木炭焼成土坑がある。西原遺跡で調査した遺構の大半がこの類の土坑であり，調査区北部を中心に分布する。遺構の性格上，遺物が伴う例が少なく，今回調査した54基中，時期を特定できる遺物を伴う土坑は，５号土坑のみである。５号土坑出土の須恵器長頸瓶(図８－１)は口縁部が失われているものの，鶏卵形で胴部上半が丸く張り，頸部が細く，胴部に対して小さいことから，８世紀末～９世紀前半代の所産と考えられる資料であり，この

資料の年代および，遺構外出土の平安時代の遺物の年代と考え合わせて，西原遺跡の他の木炭焼成土坑の年代を，９世紀前半頃と想定している。

以上のことから，平安時代の西原遺跡は，調査区北部を中心に木炭生産の場であったと考えることができる。また，今回の調査では，調査区内に竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの集落に伴う遺構を検出することはできなかったが，調査区南部の表土中から出土した土師器杯には遺存状況の良好なものも含まれるため，近辺に集落が存在することが想定される。

近　　世

９世紀以後，平安時代後半～近世前半に関しては，西原遺跡で遺構・遺物が確認されない時代が続き，その当時の状況は不明である。近世後半の18～19世紀になって，ようやく遺物・遺構が認められるようになることから，この時期再びこの地が生活の場となったことがうかがえる。

この時期の遺構としては，掘立柱建物跡１棟と，それに付随すると考えられる柱列跡２カ所，井戸跡２基，溝跡６条，墓穴と考えられる土坑１基ほかを調査した。建物跡は，調査区中部に位置し，桁行４間，梁行２間の主屋を中心に土間や縁側が付属する民家と考えられる建物跡である。柱列跡は建物跡の北側と南西側で検出されたもので，両遺構ともに東西方向に延びている。位置関係から建物跡に伴う塀の一部であろう。井戸跡は建物跡の南方12mほどの位置にあり，やはり建物跡に付随する施設と考えられる。溝跡は底面が平坦であることから，道路であった可能性が考えられる。墓穴と考えられる62号土坑は建物跡の東方６mの位置にあり，副葬品と考えられる80枚以上の銭貨，鏡１面，簪（かんざし）と考えられる棒状の鉄製品１本が出土した。

近世の遺物は，在地産と見られる陶磁器類が主体で，椀・鉢・擂鉢・徳利などの日用什器や，仏飯具が，表土および近代以降のゴミ穴を含む土坑から出土している。出土遺物の中には，17世紀の肥前産の磁器高台皿（図43－１・２）があり，他の遺物よりも年代的に古いが，比較的高級品であることから，伝世してきたものが，この地に棄てられたと考えられる。

陶磁器類の年代は18世紀後半～19世紀前半に限られることから，比較的短い期間のみ宅地および墓地として機能していたようである。（笠　井）

引用・参考文献

i 吉田秀享　2007　「平成18年度文化体験プログラム支援事業－古代の鉄づくり－報告」『研究紀要2007』福島県文化財センター白河館

ii 門脇秀典　2007　「第10編　第１章第１節12．製炭遺構の検討」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ｘ』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

iii 吉野滋夫　2009　「第１編　四ツ栗遺跡（３次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告55』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

第２編　宿仙木（しゅくせんぎ）Ａ遺跡（２次調査）

遺跡記号	ＳＭ－ＳＳＧ・Ａ
所在地	相馬市大字黒木字宿仙木
時代・種類	縄文時代－集落跡，平安時代－集落跡
調査期間	平成21年10月２日～12月18日
調査員	吉田秀享・笠井崇吉・三浦武司 髙橋　岳・水野一夫・本田拓基

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

宿仙木Ａ遺跡は，太平洋に面した福島県浜通り地方北部の相馬市大字黒木字宿仙木に所在する遺跡である。ＪＲ常磐線相馬駅から北西約3.5kmに位置する。小泉川上流域の丘陵地に立地する。調査を開始する前の現況は山林と畑であった。

相馬市黒木地区は，阿武隈高地から太平洋に向かって流れる小泉川上流域の平坦部に位置する。南北西は丘陵地に囲まれている。黒木地区を横断するように，小泉川の支流である水無川と御門川が東流している。御門川の源は堂ヶ平堤で，宿仙木Ａ遺跡の南に位置する。宿仙木Ａ遺跡が位置する宿仙木地区は御門川の北の丘陵上にある。

宿仙木Ａ遺跡は地質分類学上，竜ノ口層および最低位段丘上に立地する。遺跡の西には南北に走る双葉断層が位置し，第三系を中心とする丘陵地帯との境界をなす。その東には新第三紀中新世以降に隆起した割山地塁があり，この層上には新第三系中新統の初野層と新第三系鮮新統の久保間層が認められる。久保間層上に竜ノ口層が堆積し，隆起して東流する河川や降雨により浸食を受け，現在のような東西に延びる樹枝状の丘陵の原型が形成された。東側には第四期更新世または洪積世に形成された段丘堆積物が広がる。

宿仙木Ａ遺跡が所在する地形は，北調査区は小河川によって開析された丘陵の北斜面および平坦面で，調査区の標高は50～55.5ｍを測る。南調査区は丘陵南斜面および平坦面で，調査区の標高は51～54.5ｍである。（三　浦）

第２節　調 査 経 過

宿仙木Ａ遺跡は，平成13年度に県営かんがい排水事業建設事業工事に伴う表面調査で周知の遺跡となり，登録された遺跡である。

平成14年度に，県営かんがい排水事業建設事業および遺跡範囲の延びる広域農道整備事業部分と合わせて1,004㎡が発掘調査の対象となり，５～８月にかけて第１次の発掘調査が実施された。１次調査では，遺跡西部に幅約６ｍ，長さ約80ｍの調査区を設け，平安時代の竪穴住居跡１軒（ＳＩ１），縄文時代を主体とする土坑14基（ＳＫ１～14）を調査し，縄文時代後期前半を主体とする縄文土器片68点，弥生時代中期の土器片２点，平安時代の土師器62点，須恵器４点，江戸時代の陶磁器片33点，石器２点，金属製品２点が出土した（『県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅱ・広域農道整備事業相馬２期地区遺跡発掘調査報告』）。

平成17・18・20年度に，常磐自動車道建設に伴う試掘調査が３次にわたり実施され，合計4,900㎡

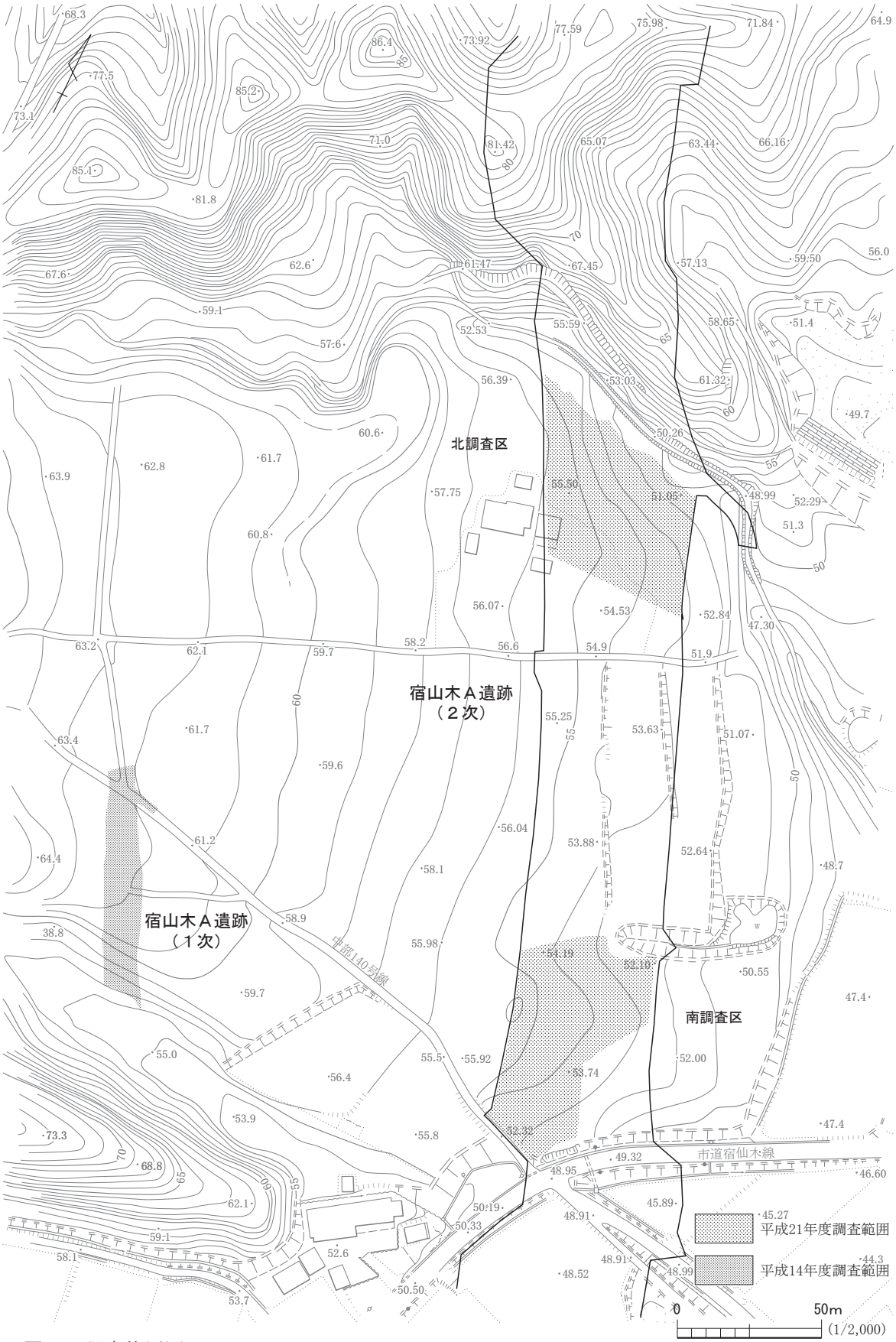

北調査区
宿山木Ａ遺跡
（２次）
宿山木Ａ遺跡
（１次）
南調査区
中部140号線
市道宿仙木線
平成21年度調査範囲
平成14年度調査範囲
0
50m
(1/2,000)

図１　調査位置図

の範囲が発掘調査の保存対象となった(『福島県内遺跡分布調査12・13・15』)。

平成21年９月25日付で福島県教育委員会から財団法人福島県文化振興事業団へ常磐自動車道関連試掘調査の結果保存対象となった4,900㎡に対し発掘調査の指示があり，事業団側は当初１人の調査員を当てて発掘調査を開始することとなった。調査に先立ち10月６日から２週間にわたり，調査範囲に繁茂した竹や茨の伐採を実施し，表土除去のための重機の搬入を可能とした。

発掘調査は10月15日～12月18日までの延べ44日を費やして実施した。以下概要を記載する。

第１週目(10月15・16日)から調査員１人を配置し，北調査区から重機による表土除去作業を開始した。第２週目(10月19～23日)には調査員が３人体制となり，調査が本格化する。20日から作業員19人の雇用を開始し，北調査区の表土除去の終了した部分から遺構検出を開始した。２号住居跡と遺物包含層の上面を認めた。２号住居跡は平面形を確認し，掘り下げを開始した。遺物包含層は範囲を確定し，記録作成を行った。北調査区の表土除去は継続し，さらに週後半から重機を追加して南調査区の表土除去作業を開始した。第３週目(10月26～30日)には台風20号に伴う雨により，週の前半は調査を休止した。天候回復後，北調査区では重機による表土除去作業，２号住居跡精査，遺物包含層掘り下げ，遺構検出作業を平行して実施した。週末には南北両調査区で表土除去作業が終了した。

第４週目(11月４～６日)には，南相馬市の調査が終了した調査員１名が増員され，４人になるとともに，作業員11名を増員した。北調査区では２号住居跡精査と遺物包含層の掘り下げを継続した。新たに３号住居跡を検出し，精査を開始した。また，遺物包含層の下に河川堆積層が存在することが判明したため，堆積状況と遺物の有無を確認するため適宜トレンチ調査を実施した。その結果，遺物を包含する堆積物と包含しない堆積物が互層になっていることが判明した。南調査区では測量基準杭打設，遺構検出を開始した。南調査区北側において１号鍛冶炉跡を確認した。

第５週目(11月９～13日)では，北調査区において新たに調査区北端から４号住居跡を検出した。遺物包含層は人力による掘り下げと重機による河川堆積無遺物層の除去作業を慎重に行った。南調査区では遺構検出作業と平行して，15号土坑などの土坑を検出した。本週から出土遺物の水洗い・ネーミング・接合作業を開始した。

第６週目(11月16～20日)には南相馬市の調査を終了した調査員１名が増員され，５人体制となった。北調査区では，２・３号住居跡の調査が終了した。４号住居跡精査および重機による河川堆積無遺物層除去作業は続行している。北調査区の平坦部の遺構検出作業により，22～25号土坑を検出した。南調査区では遺構検出を継続し，５号住居跡・15～25号土坑・２号鍛冶炉跡を検出した。

第７週目(11月24～27日)，北調査区は前週の調査を継続している。南調査区では，新たに１号溝跡の検出および精査を行った。

第８週目(11月30日～12月４日)には北調査区では，遺構精査および記録作業が終了した。週末までには重機による河川堆積無遺物層除去作業も終了した。南調査区においても，遺構検出作業および遺構精査を終了した。発掘調査の目途がついたことにより，作業員の中からさらに５人ほどを遺

物の整理作業に配置した。

第９週目(12月７～11日)週の前半は，空中写真撮影に向けての清掃作業を行った。８日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。撮影後，北調査区では空中写真撮影待ちであった４号住居跡下の河川堆積無遺物層除去作業を実施した。また，他に遺構の有無を確認するために，再検出を行った。南調査区においても，空中写真撮影待ちであった遺構の断ち割りを実施し，記録した。再検出により，新たに検出した26号土坑の精査を開始した。

第10週目(12月14～18日)週の前半は調査区の地形測量，26号土坑の記録作成を行った。平行して器材撤収と整理・整備を行った。週の後半は器材搬出と遺物の梱包作業などを行い，また現地連絡所のプレハブ・仮設トイレを撤去した。18日，雪の舞う中すべての作業を終了して，東日本高速道路株式会社相馬工事事務所へ調査現場の引渡しを行った。（笠　井）

第３節　調 査 方 法

平成21年度に調査を実施した宿仙木Ａ遺跡２次調査では，１次調査から６年を経過し，調査区も大きく東に位置することから，グリッドは２次調査において新たに設定し，調査を行った。遺構番号は１次調査からの連続した番号とし，竪穴住居跡は２号から，土坑は15号から付している。

グリッドの設定　グリッド設定は，世界測地系公共座標に一致させている。一辺５ｍ方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図２～４中に示した。１次調査時のグリッド設定とは異なっている。１次調査区よりも２次調査区の範囲が大きく北東方向へ位置することから，個別のグリッドは東西方向に西から東へアルファベットAA・BB…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，AF６グリッドと呼称している。１次調査区と２次調査区を網羅したグリッド配置図は，図２に掲載した。

基準線の設定　遺構の平面図を作成する際，各グリッドを１ｍの方眼に分割し，これを基準線とした。基準線の座標上の位置については，各グリッドの北西端部を原点(Ｅ０，Ｓ０)とし，ここから東へ１ｍ行くごとにＥ１～４，南へ１ｍ行くごとにＳ１～４として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて，調査区域内すべての基準線の座標位置を表示した。例えば，AF10－Ｅ２・Ｓ３とは，AF10グリッドの北西端の杭から，東に２ｍ，南に３ｍ離れた位置を示す。

発掘作業　発掘作業では，表土は重機を用いて除去した。その後，人手により包含層を除去し，遺構・遺物の検出作業を行った。北調査区の沢部では，河川堆積物の掘り込みにおいて重機を用いて慎重に無遺物層の掘り下げを行った。遺構の掘り込み作業にあたっては，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。

遺物の採り上げ　遺構内から出土した遺物の採り上げに際しては，層位を確認した上で採り上げた。遺構外の遺物については，出土グリッドの呼称と併せて，遺物の出土層位も付した。層位名を

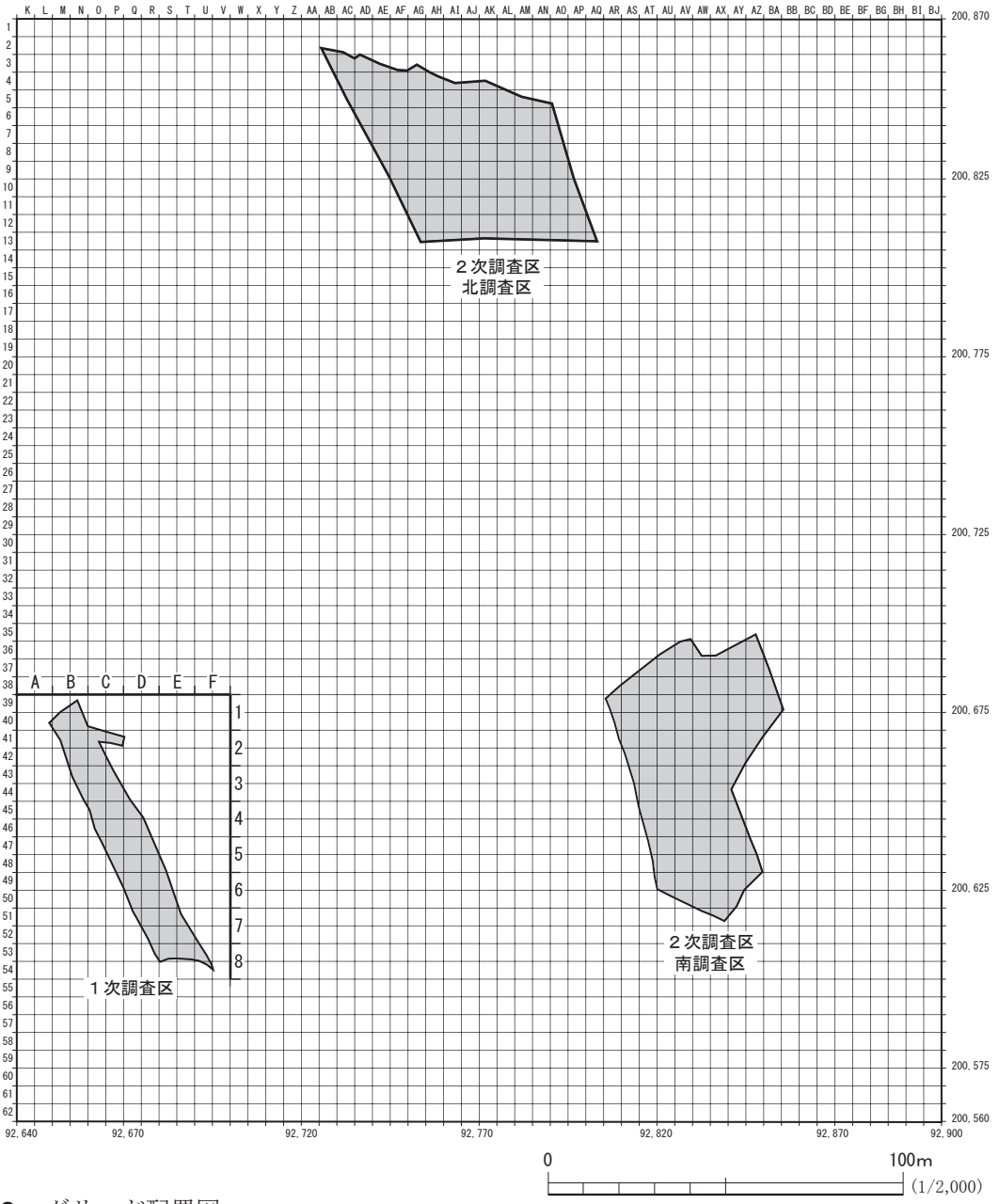


図２　グリッド配置図

付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。遺構内堆積層は，算用数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

記録作成　調査の成果は，実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は，住居跡・溝跡が1/20，土坑は1/10で作成した。調査区内の地形図および遺構配置図は，1/200で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1999）を基準とした。調査現場での写真撮影は，35㎜一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管　２次調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。　（三　浦）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

遺跡の概要（図３・４，写真１～４）

宿仙木Ａ遺跡の２次調査で検出された遺構は，竪穴住居跡４軒，土坑12基，鍛冶炉跡２基，溝跡１条，焼土遺構１基である。出土遺物は縄文土器2,090点，土師器172点，須恵器９点，石器17点，鉄器７点である。遺物の年代は縄文時代～平安時代まで認められ，縄文時代前期が主体である。

２次調査の調査区は，阿武隈高地から東へ舌状に延びる丘陵を南北に縦断するように設定されている。丘陵北斜面と平坦部を北調査区，丘陵南斜面と平坦部を南調査区と呼称する。北調査区と南調査区の間は，後世の削平により試掘調査により要保存範囲から除外されている。

遺構分布は北調査区では竪穴住居跡３軒，土坑４基と遺物包含層が認められた。住居跡は縄文時代後期が１軒，残りの２軒は平安時代に属する。縄文時代の住居跡は北斜面の際に構築されている。平安時代の２号住居跡は平坦面に，４号住居跡は北向きの緩斜面に構築されている。土坑は西端の平坦面から22号土坑が，南寄りの平坦面から23～25号土坑が並んで認められた。遺物包含層は沢部に面した北斜面に広範囲にわたって確認できた。

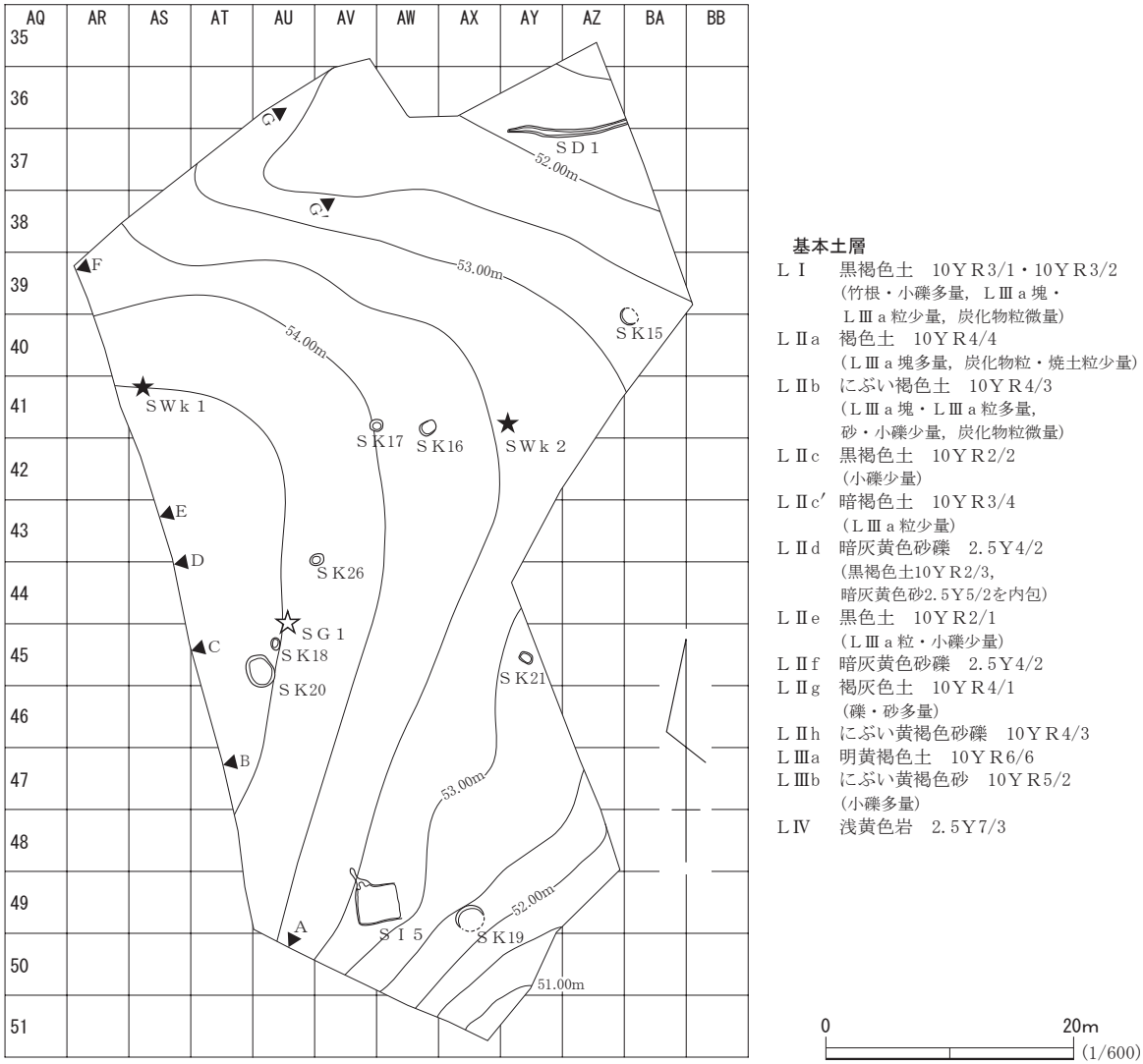
南調査区では竪穴住居跡１軒，土坑９基，鍛冶炉跡２基，焼土遺構１基，溝跡１条が確認された。住居跡は奈良時代に属し，南向き斜面に構築されている。土坑は調査区中央から南において散在して認められる。鍛冶炉跡は平坦面から下り傾斜になる変換点に位置し，焼土遺構は平坦面に認められた。溝跡は調査区東端で確認し，調査区外に向かって延びている。

宿仙木Ａ遺跡での遺構・遺物の分布は希薄であるが，１・２次調査を通して縄文時代早期・前期・後期，弥生時代，奈良・平安時代の生活の痕跡は確認できた。（三　浦）

基本土層（図３・４，写真５）

宿仙木Ａ遺跡の２次調査区は，耕作や撹乱が遺跡の基底層であるＬⅢ面にまで及んでいる部分が多く，本来の堆積状況を示す部分は極めて少ない。調査区内の土層観察にあたっては，耕作土・盛土も含めた表土ＬⅠ，表土と遺跡基底層間に存在する土壌ＬⅡ，基底層ＬⅢ，基底層下の岩盤層ＬⅣの４層に大別し，必要に応じて各層を細分した。

ＬⅠは主に表土・耕作土などで，層厚は北調査区で20～50㎝，南調査区では15～90㎝である。調査区内では，北調査区が山林と畑，南調査区が山林として利用されていたため部分的に色調が異なり，黒褐色～褐色と一定していない。部分的に細分が可能であるが，ＬⅠとして一括した。また，縄文時代～現代の遺物を少量含むが，耕作などで再包括されたものである。



南調査区

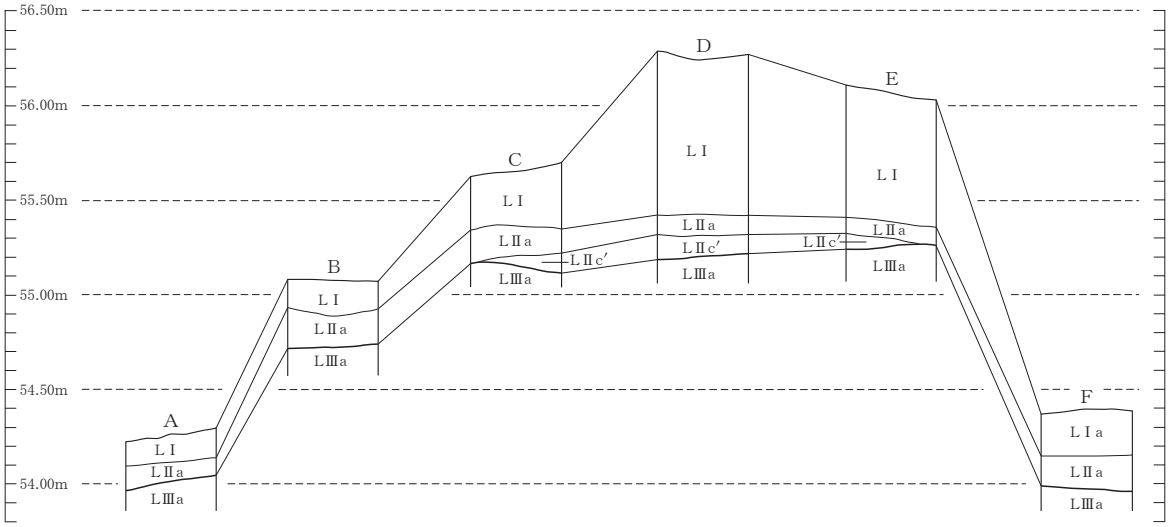


図３　遺構配置図，基本土層（１）

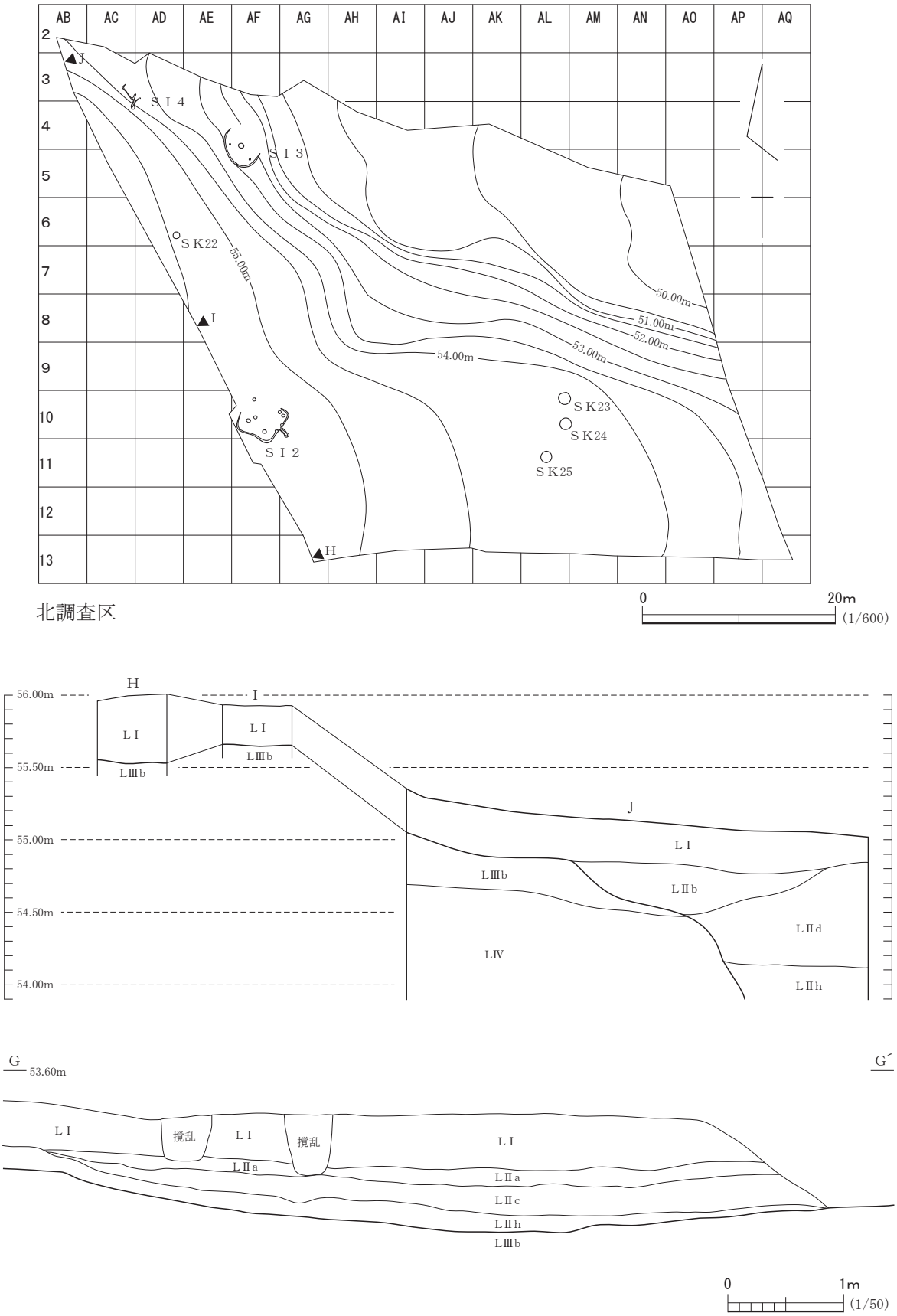


図４　遺構配置図，基本土層（２）

ＬⅡは分布に偏りがあり，内容も多様である。色調・包含物の違いにより後述する９層に細分した。

ＬⅡａ　南調査区の全域に広く堆積する褐色土層で，10～20㎝の層厚で堆積する。炭化物粒・焼土粒を含み，主に平安時代の遺物を伴う。

ＬⅡｂ　北調査区北部の河川跡に続く北向き斜面の上部に堆積するにぶい黄褐色土層で，層厚は35㎝前後である。主に平安時代の遺物を伴う。

ＬⅡｃ　北調査区北部の河川跡に続く北向き斜面と，南調査区北部の沢地形上に堆積する黒褐色土層で，層厚は10～30㎝ほどである。主に縄文時代の遺物を伴う。特に北調査区では遺物包含層を形成しており，詳細については第５節で報告する。

ＬⅡｃ′南調査区中央から西側にかけてＬⅡａとＬⅢａの間に堆積する暗褐色土層で，層厚は10～15㎝ほどである。無遺物層である。

ＬⅡｄ　北調査区北部の河川跡で，ＬⅡｅ上部に堆積する水成堆積層である。黒褐色土・暗灰黄色砂礫・暗灰黄色砂から構成される無遺物層で，層厚は最も厚い部分で70㎝にも及ぶ。

ＬⅡｅ　北調査区北部の河川跡の南岸沿いに細長く堆積する黒色土層である。層厚は10～40㎝ほどで，縄文時代の遺物を伴う(図18)。

ＬⅡｆ　北調査区北部の河川跡で，ＬⅡｇの上部に堆積する水成堆積層である。暗灰黄色砂礫から構成される無遺物層で，層厚は最も厚い部分で80㎝にも及ぶ(図18)。

ＬⅡｇ　北調査区北部の河川跡の南岸沿いにわずかに堆積する褐灰色土層である。縄文時代の遺物を少量伴う。層厚は20～30㎝程度である(図18)。

ＬⅡｈ　北調査区北部の河川跡および南調査区北部の沢地形に堆積するにぶい黄褐色土層である。水成堆積を示す。北調査区では，この層から下は無遺物の砂礫層となり，ＬⅣまで続く。南調査区では層厚20㎝ほどでＬⅢｂの直上に位置する。

ＬⅢ・Ⅳは遺跡の基底となる土層である。性質の違いからＬⅢについてはａ・ｂに２分した。

ＬⅢａ　遺跡のほぼ全域に堆積する明黄褐色粘質土層で，遺構検出はほぼこの層の上面である。層厚は50～80㎝ほどである。

ＬⅢｂ　ＬⅢａの下位に位置するにぶい黄褐色の砂礫層で，北調査区北部の河川跡に続く北向き斜面と南調査区北部の沢地形の底部に露出する。

ＬⅣ　ＬⅢｂの下位に位置する浅黄色の軟質岩盤層。河川跡の基底をなす。竜ノ口層にあたると考えられる。

（笠　井）

第２節　竪穴住居跡

本調査区からは竪穴住居跡が４軒認められた。１号住居跡は１次調査において報告済であることから，本報告では２号住居跡以降の番号を付した。３号住居跡が縄文時代後期中葉，２・４号住居跡が平安時代，５号住居跡が奈良時代である。平安時代の住居跡は小型でカマドの構築方法など類似点が多い。１次調査においても小型の住居跡が認められているため，本遺跡において当該期の小規模な集落が営まれていたと想定できる。

２号住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図５・６，写真６・７）

本遺構は北調査区の西端のAF10・11，AG10グリッドの平坦面に位置する竪穴住居跡である。ＬⅢａ上面より，方形の褐色土の広がりを認めた。本遺構の北東部は削平され遺存していない。本遺構と重複する遺構はなかった。十字に土層観察用のベルトを設定して調査を進めた。

住居内堆積土は４層に分けられた。いずれの層も流れ込みの状況が認められたことから，自然堆積と判断した。ℓ１は中央部にのみ認められる暗褐色土，ℓ２は遺物を多く含んでいる黒褐色土である。ℓ３は床面北西から中央部にかけて認められる褐色土である。ℓ４は北西壁周辺にのみ見られる黄褐色土で，壁面の崩落土と考えられる。

平面形はやや歪みが認められるが，方形となる。北・東壁の一部と床面の一部は，遺存していない。遺存部での規模は北西－南東方向がわずかに長く，長軸長458㎝，短軸長421㎝を測る。検出面から床面までの深さは，最大で26㎝を測る。壁面は南東壁では急峻に立ち上がるが，北西壁では緩やかに立ち上がる。住居の西隅では壁の立ち上がりはわずかであった。カマドは南東壁の中央に認められた。床面はほぼ平坦に造られている。踏み締まりや貼床は確認できなかった。住居内の施設はカマド１基，小穴４基，焼土化範囲１カ所を確認した。

カマドは南東壁のほぼ中央に構築されている。遺存状況は悪かったが，燃焼部と煙道，カマド袖の一部を確認した。遺存している範囲でのカマドの規模は，カマド袖の先端から煙出しまで155㎝を測る。煙道の長さは72㎝を測る。燃焼部の規模はカマド袖の先端から燃焼部奥壁まで54㎝を計測する。燃焼部の範囲は43×27㎝の楕円形状に被熱している。底面下，最大７㎝の厚さまで被熱痕跡が認められた。右袖と燃焼部の底面はよく焼けており，使用頻度は高かったと推察される。右袖の先端には，拳大の礫が据えられていた。煙出しの平面は，楕円形である。煙道はＬⅢｂを掘り込んで造られているが，軸線はわずかに西に振れている。煙出しの底面は煙道の底面より８㎝ほど低く掘り込まれている。

カマドの堆積土は８層に分けた。本住居跡機能時から廃棄後に堆積したℓ１～４とカマド構築土であるℓ５～８に大別される。ℓ１・３は褐色土であり，自然流入土と判断した。ℓ２は明赤褐色

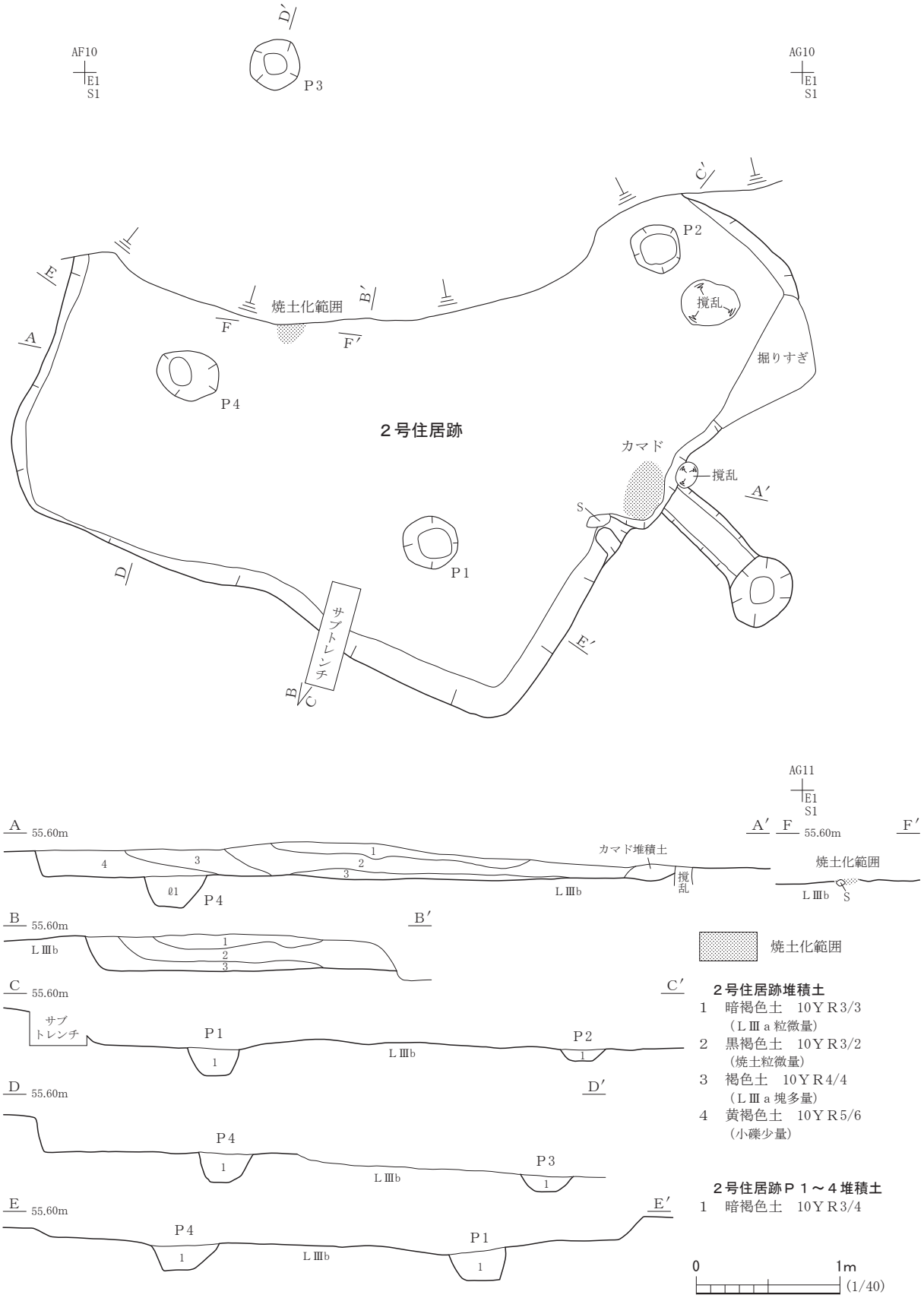
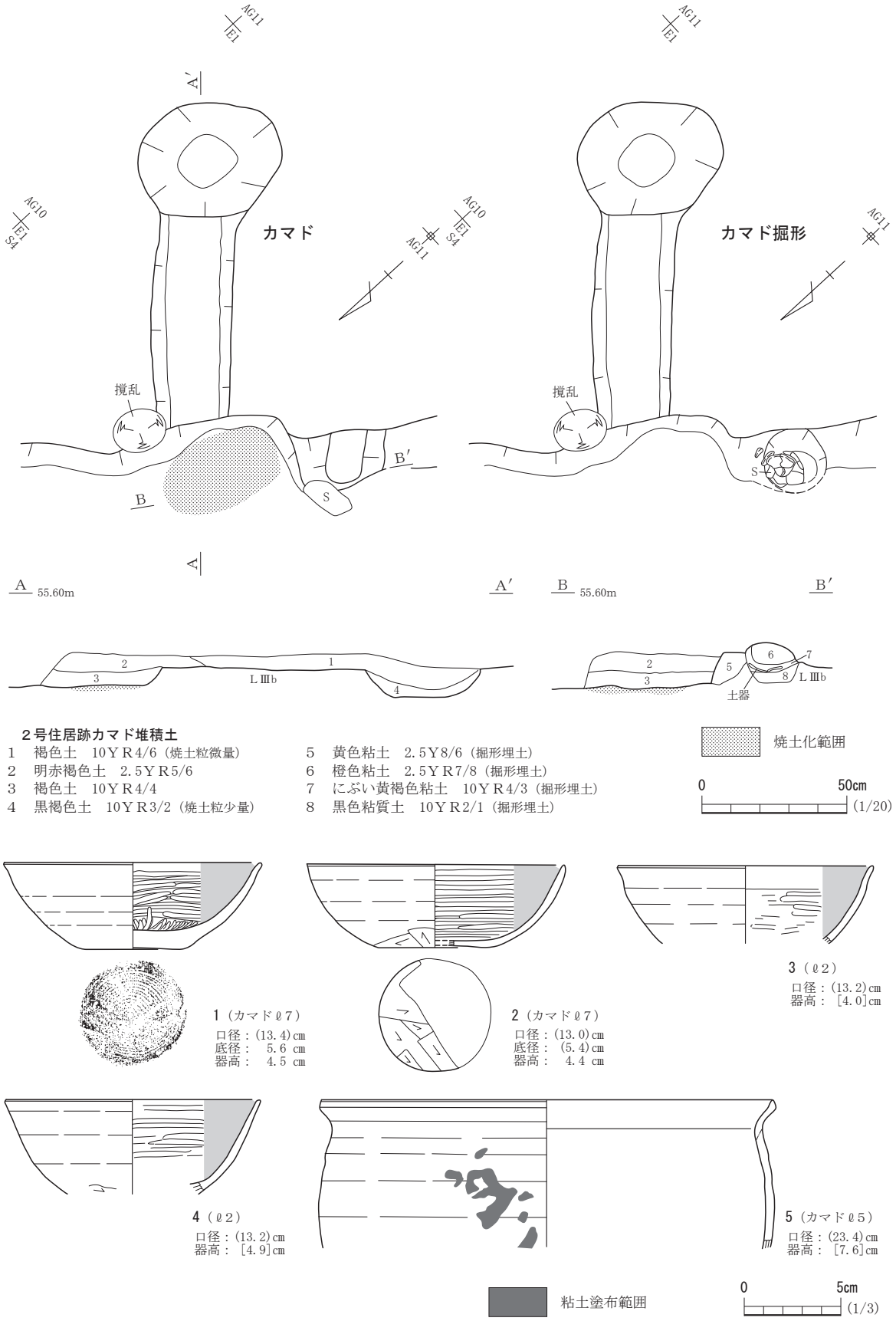

AF10
E1
S1
AG10
E1
S1
AG11
E1
S1
P3
P2
P4
P1
焼土化範囲
撹乱
掘りすぎ
２号住居跡
カマド
撹乱
サブトレンチ
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
S
55.60m
カマド堆積土
撹乱
ⅠⅢb
焼土化範囲
サブトレンチ
焼土化範囲
２号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3
（ⅠⅢａ粒微量）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（焼土粒微量）
3　褐色土　10ＹＲ4/4
（ⅠⅢａ塊多量）
4　黄褐色土　10ＹＲ5/6
（小礫少量）
２号住居跡Ｐ１～４堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
0
1m
(1/40)

図５　２号住居跡



２号住居跡カマド堆積土

1　褐色土　10ＹＲ4/6（焼土粒微量）
2　明赤褐色土　2.5ＹＲ5/6
3　褐色土　10ＹＲ4/4
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2（焼土粒少量）
5　黄色粘土　2.5Ｙ8/6（掘形埋土）
6　橙色粘土　2.5ＹＲ7/8（掘形埋土）
7　にぶい黄褐色粘土　10ＹＲ4/3（掘形埋土）
8　黒色粘質土　10ＹＲ2/1（掘形埋土）

図６　２号住居跡，出土遺物（１）

土であることから，天井崩落土および流入土と考えられる。ℓ４は黒褐色土であり，機能時から堆積した層の可能性も考えられる。ℓ３は天井崩落土と判断したℓ２の下に堆積していることから，カマドの天井が崩落するまでに，ある程度の時間差があったと考えられる。ℓ５～８は粘土または粘質土であり，カマド袖の構築材である。ℓ６～８は小穴状に掘り込まれた掘形内に堆積していた。ℓ８上に土師器杯を重ねて埋設している状況が確認できた。遺物上にはℓ６・７の土色が異なる粘土を貼って，カマド袖としている。

小穴は床面上から４基検出され，南東の小穴から反時計回りにＰ１～４と呼称した。周壁から約90㎝離れた位置に等しく認められた。小穴内の堆積土はすべて暗褐色土の単層である。円形を基調とし，径36～40㎝を測る。床面からの深さは約20㎝程度であるが，Ｐ２が８㎝と浅い。これらの小穴は位置や規模から，上屋構造を支える柱穴と考えられる。

焼土化範囲はＰ４から北東方向へ46㎝，床面中央からわずかに北西寄りの床面上で検出した。半分程度は削平により，遺存していない。遺存範囲は20×19㎝の円形である。被熱の厚さは，最大で11㎝を測る。周囲から鍛造剥片や鉄滓は認められなかった。

遺　　物（図６・７，写真21・22）

本遺構からは土師器片102点，須恵器片２点，鉄器４点，縄文土器片15点が出土している。出土した遺物のほとんどが土師器片であり，そのなかでも杯と考えられる破片資料が大半を占める。このうち土師器５点，鉄器４点，縄文土器片４点を図示した。縄文土器片は本遺構に伴う資料ではなく，周囲からの流れ込みによる出土である。

図６－１～４はロクロ成形の土師器杯である。いずれも内面には細かいミガキ調整と黒色処理が施される。１はカマド袖の掘形埋土から出土した。体部から口縁部にかけて丸みを帯びて立ち上がり，口唇部に至ってわずかに外反する。底部の器壁が厚く，重量感のある資料である。底部には明瞭に回転糸切り痕が残る。２もカマド袖の掘形埋土から出土した。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がった器形である。体部下端はケズリ調整，底部は回転糸切り後の再調整が行われている。３は体部のみの資料である。口唇部は外反する。再酸化され，内面の黒色処理は一部消失している。４は体部から口縁部にかけて直立する器形である。５は小型甕の胴部上半から口縁部にかけての資料である。胴部にはわずかだが，粘土塗布範囲が認められる。

図７－１～４は縄文土器である。すべて流れ込みによる資料である。すべての胎土に繊維混和痕が観察できる。１～３は深鉢形土器の胴部資料である。１は口縁部に近い胴部資料で，半截竹管状工具による横位の連続刺突が施される。２は単節斜縄文が施文された底部に近い資料である。３はＳ字状連鎖沈文が施された資料である。４は土器片を用いた円板である。

図７－５～８は鉄器を図示した。すべて釘と考えられる。全形が残っている資料はなく，すべて部分的である。断面はすべて方形の角釘である。５は軸のみで，頭部と先端が欠損している。打撃によるものであろうか，先端部は緩やかに湾曲している。６～８は頭部が認められる資料で，頭部が打撃によって潰れた６や激しくサビ化した７・８が観察される。

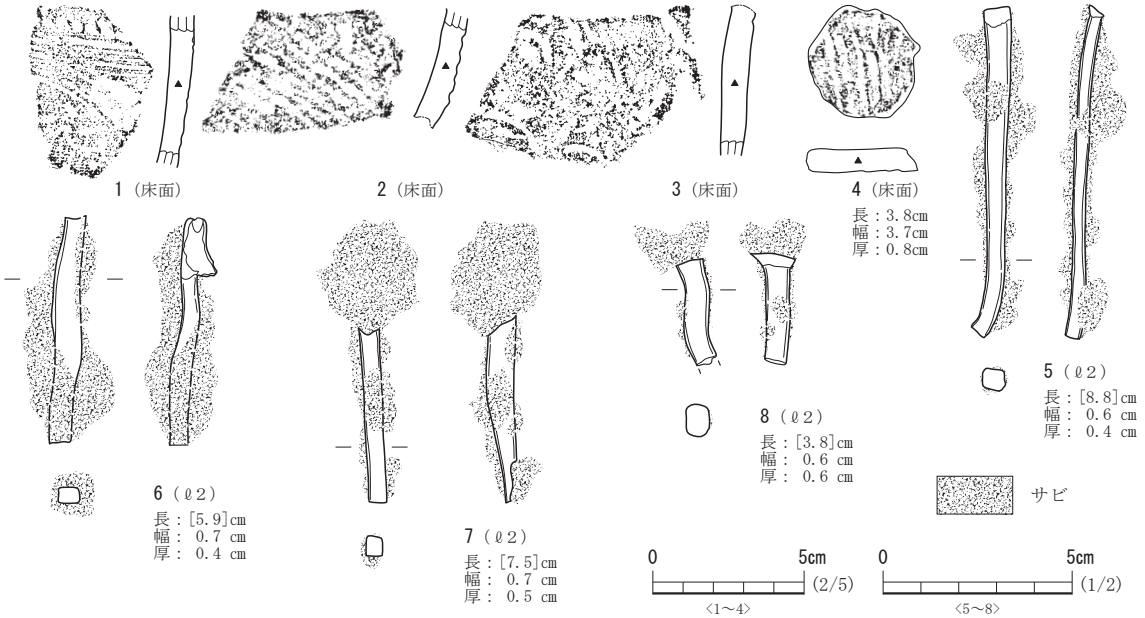


図７　２号住居跡出土遺物（２）

ま と め

本遺構は平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。４号住居跡と同様に南壁にカマドを有する。床面上から焼土化範囲が認められたことから，鍛冶炉跡の可能性も考慮して調査を行ったが，鍛冶の痕跡は認められなかった。しかし，本調査区からは２基の鍛冶炉跡と羽口が出土していることから，鍛冶炉跡であった可能性が高い。本住居跡のカマドは，４・５号住居跡に付設していたカマドと構造や構築方法が類似することから，同時期に並存していた可能性が考えられる。カマド掘形出土の土師器杯の特徴から，９世紀前半～中頃の時期と考えている。（本　田）

３号住居跡　ＳＩ３

遺　　構（図８，写真８・９）

本遺構は北調査区AE４・５，AF４・５グリッドに位置する。３号住居跡を確認した一帯は，南東から北西に延びる河川の北向き段丘面にあたる。３号住居跡は遺物包含層と重複し，本遺構が新しい。遺構の東側は，４分の１が崩落によって遺存していない。

遺構は，ＬⅡｃの遺物包含層の精査中に，ＬⅡｄ・ＬⅢｂの上面にて不整楕円形の平面形を検出した。斜面に平行するように土層観察用のベルトを設定した。底面が平坦になり，壁面が立ち上がることから，竪穴住居跡として精査を行った。

遺構の堆積土は黒褐色系の土色で，１～３㎝大の小礫を多く含む。堆積土は３つに分層することができた。ℓ１・２は西側斜面からの自然流入土と判断した。ℓ１・２の堆積土は，土質の状態からＬⅢｂ由来の自然流入土と考えられ，植物の腐植もしくは水性による土色変質によって黒褐色化したと思われる。ℓ３は壁面に認められた三角堆積土である。

平面形は，遺存部分から判断すると楕円形であったと推測される。住居跡の長軸方向はN34°Ｗ

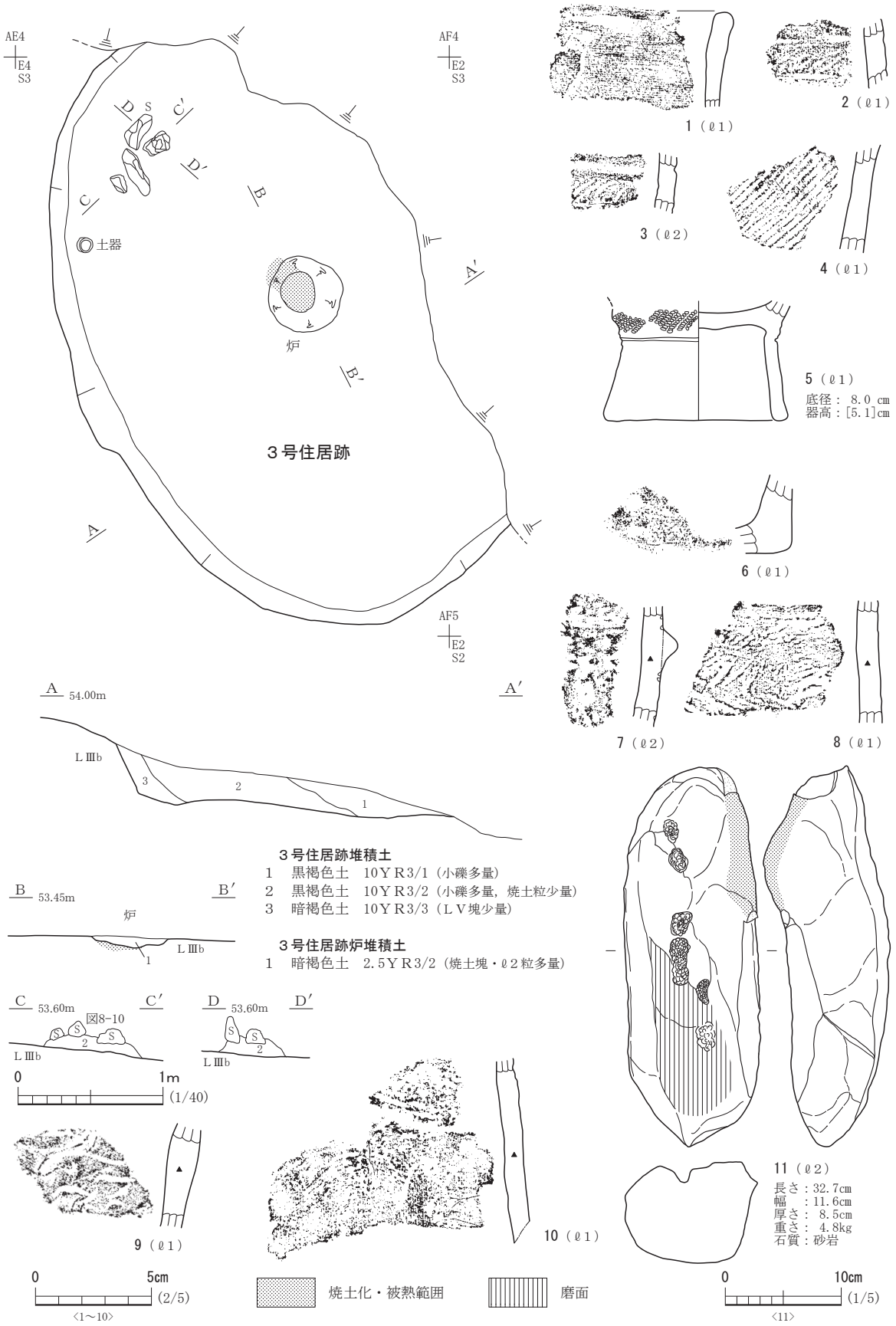


図８　３号住居跡，出土遺物

であり，河川跡の流路方向とほぼ平行する。遺存部の規模は長軸長433㎝，短軸長267㎝を測る。検出面から床面までの深さは，西壁付近で38㎝，南東壁付近で20㎝を計測する。周壁は65～70°の角度で立ち上がる。床面は平坦に造られているが，礫の露出によりわずかな凸凹がある。西壁付近の床面には硬化面が認められた。床面には整地土の混入が認められなかったため，掘り込んだＬⅡｄとＬⅢｂの層を直接床面として利用している。遺存する床面積は約7.9㎡である。

床面中央には地床炉が検出された。地床炉は径約53㎝，床面から深さ７㎝の浅いくぼみ状である。底面には，被熱による40×20㎝の焼土化が認められた。焼土化範囲は底面中央から北東に延びる長楕円形で，２～５㎝の深さまで認められる。

床面には木の根による小穴の撹乱が多くみられた。当初，柱穴の可能性があると判断した小穴に関しては位置状況と土質を記録したが，最終的には断ち割りによる断面観察を行い，木の根であると判断した。３号住居跡の記録終了後には，再度，床面を全体的に20㎝下げて柱穴の有無を精査したが，明確な柱穴は検出できなかった。

北西壁際には10～35㎝大の礫が４個まとまって出土している。これらの礫は木の根の痕跡と重複する位置関係にあり，おそらく植物の影響で床面から上へ持ち上がったものと推測される。これらの礫は，被熱の痕跡がわずかに認められることから炉の構築材の一部ではないかと考えた。このうちの１点は台石であり，炉の縁石と思われる。

遺　　物（図８，写真23）

遺構内からは縄文土器片104点，石器２点が出土している。土器片10点，石器１点を図示した。

１～５は，本遺構に伴うと考えられる縄文時代後期中葉の加曾利Ｂ式期の資料である。１は無文の口縁部資料である。口唇部がわずかに肥厚する。器面は丁寧に磨かれている。２～４は胴部資料である。２・３は横位の沈線内に磨り消し縄文が施される。胎土や色調から，同一個体と考えている。４は斜縄文が施文されている。５は台付き土器の器台部分である。外面には横位沈線上に縄文施文が認められる。北東壁際の床面直上から出土している。

６～９は縄文時代前期前葉の土器片であることから，周囲の遺物包含層から流入したものと判断できる資料である。６は底部資料である。７～10は胎土に繊維混和痕が認められる。７は口縁部に近い資料である。横位隆帯をもち，隆帯を挟んだ上下に半截竹管による連続刺突が観察できる。８は単節の斜縄文を施文後，指頭により器面をナデ付けて施文した縄文を部分的に磨り消している。９はＳ字状連鎖沈文が施文されている。10は底部に近い胴部資料である。

11は台石である。被熱の痕跡が認められ，炉の縁石として利用されていたと推測できる。重量は4.8㎏であり，石材は砂岩である。10は炉の縁石と考えられることから，本住居跡に伴う資料であると判断している。

ま と め

３号住居跡は，中央に地床炉を伴う竪穴住居跡である。平面形は長楕円形で，東側一部が崩落してしまっている。床面には柱穴は認められなかった。時期は遺物包含層ＬⅡｃの形成より相対的に

新しい。また床面直上出土の加曾利Ｂ式期の縄文土器片から判断して，縄文時代後期中葉と考えられる。（髙　橋）

４号住居跡　ＳＩ４

遺　　構（図９，写真10・11）

本遺構は北調査区の北西端部，AC３・４，AD３・４グリッドに位置する竪穴住居跡である。傾斜地に立地し，検出位置によりＬⅡｃ・ｄ，ＬⅢｂで検出した。調査は焼土化範囲と礫の露出を手がかりに，平面形を想定して土層観察用のベルトを設定して行った。南へ延びる煙道とカマドの袖と考えられる礫と粘土が確認できたことから，住居跡と判断した。本遺構の大半は，ＬⅡｄ・ｅ上に造られている。カマドの煙道部はＬⅡｅとＬⅢｂとの層境に位置し，ＬⅢｂを掘り下げて構築されている。他の遺構との重複はない。

遺構内堆積土は３層に分かれた。いずれも自然堆積である。ℓ１は暗褐色土の流入土，ℓ２は褐色土で南西からの流入土，ℓ３は底面上に三角堆積する黄褐色土で壁面崩落土である。

本住居跡の平面形は，カマドが遺存するのみで，住居跡の大部分は撹乱により破壊されていた。一部に残る南壁の立ち上がりでは，カマド袖が斜めに取り付くことから，壁面隅にカマドが付設されている可能性も考えられる。遺存する床面は平坦に造られている。床面上からはカマド１基のみを確認した。壁面は床面から82°で立ち上がる。

カマドは南壁から認められた。東袖の一部は撹乱により破壊されている。カマドは燃焼部と煙道部が認められた。カマド内堆積土は４層に分層できた。ℓ１・２は流入土で，南西部急傾斜に見られるＬＶに近似する土壌である。ℓ３はカマド袖構築土で，きめの細かい粘質土である。被熱され燃焼部側は赤褐色に変色している。ℓ４は掘形埋土であろう。カマド袖の間は32㎝，残存する袖の高さは18㎝を測る。燃焼部は奥壁より52㎝を測る。燃焼部中央には，自然角礫を用いた支脚が埋められていた。燃焼部は支脚よりも前面が，よく火を受けている。煙道は燃焼部奥壁から煙出し端部までは98㎝を測る。煙出し部は煙道の中心よりも，わずかに東に位置がずれている。

遺　　物（図９）

本遺構から土師器片15点，縄文土器片３点が出土した。すべて小破片である。時期が推測できる土師器杯を１点のみ図示した。１は底部が再調整されたロクロ成形の杯である。底部の中心にはわずかに回転糸切り痕が見て取れる。その周囲には，ケズリ調整が施されている。内面はわずかに黒色処理の痕跡が認められるが，再酸化して黒色処理はほとんど消し飛んでしまっている。

ま と め

本遺構は南壁にカマドをもつ竪穴住居跡である。住居跡の大部分は破壊され，柱穴は遺存していない。粘土を用いるなどカマドの構築方法は，２・５号住居跡と類似する。遺構の時期は，出土した土師器杯の特徴から，９世紀前半～中頃と考えられる。（水　野）

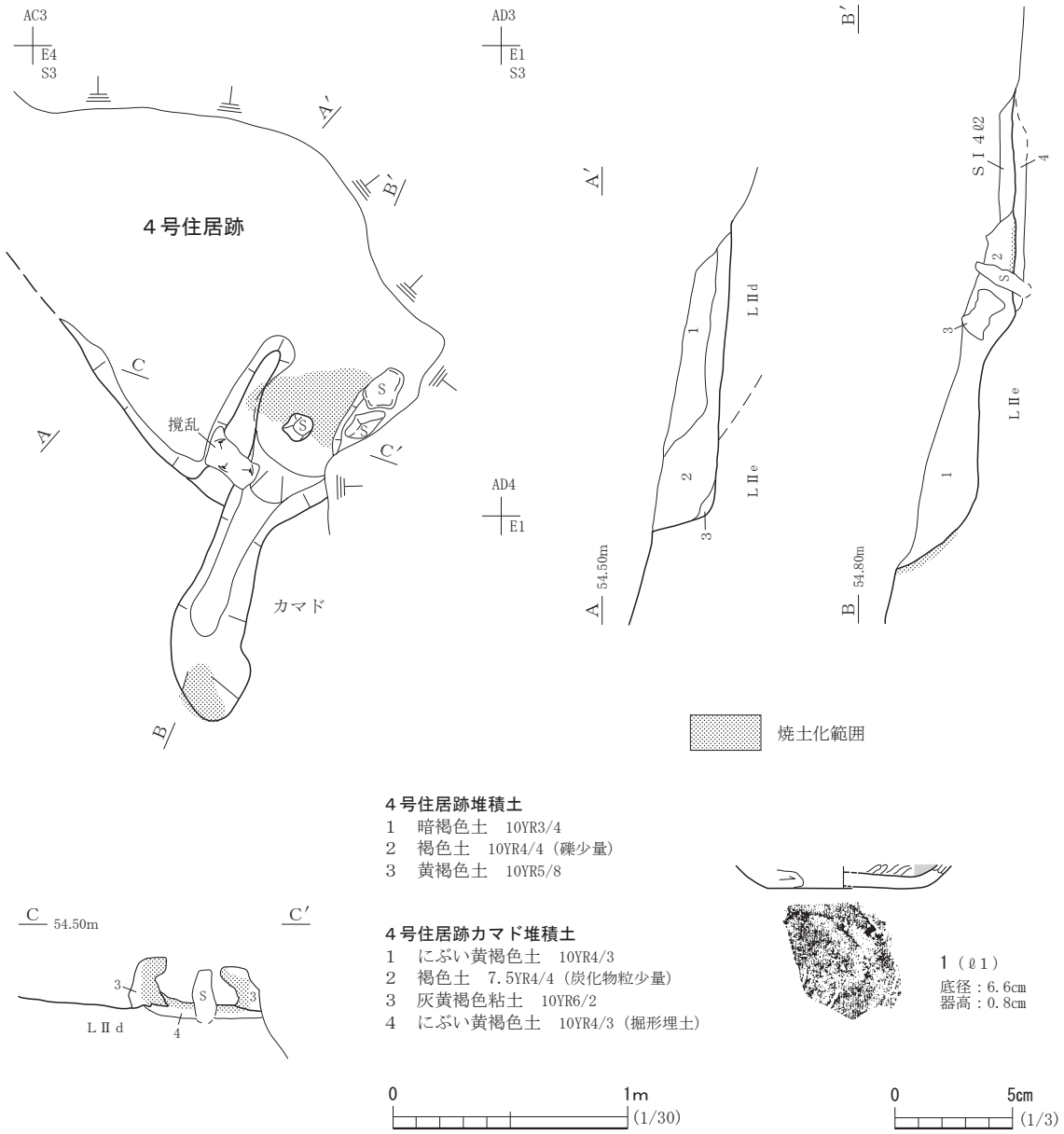


図９　４号住居跡，出土遺物

５号住居跡　ＳＩ５

遺　　構（図10，写真12・13）

本遺構はAV49・AW49グリッドに位置する竪穴住居跡である。南調査区の南向き緩斜面に立地する。東５ｍには19号土坑が認められる。本住居跡は試掘調査時におけるトレンチ調査により，褐色土の落ち込みと土師器片とともに確認されていた。ＬⅡａ中からぼんやりと平面形は認められた。試掘調査時の所見では，縄文時代後期の住居跡との重複関係が想定されていたため，平面形と重複関係の有無を明確に確認するために，ＬⅡａを人手により丁寧に除去した。そのためＬⅢａが遺構

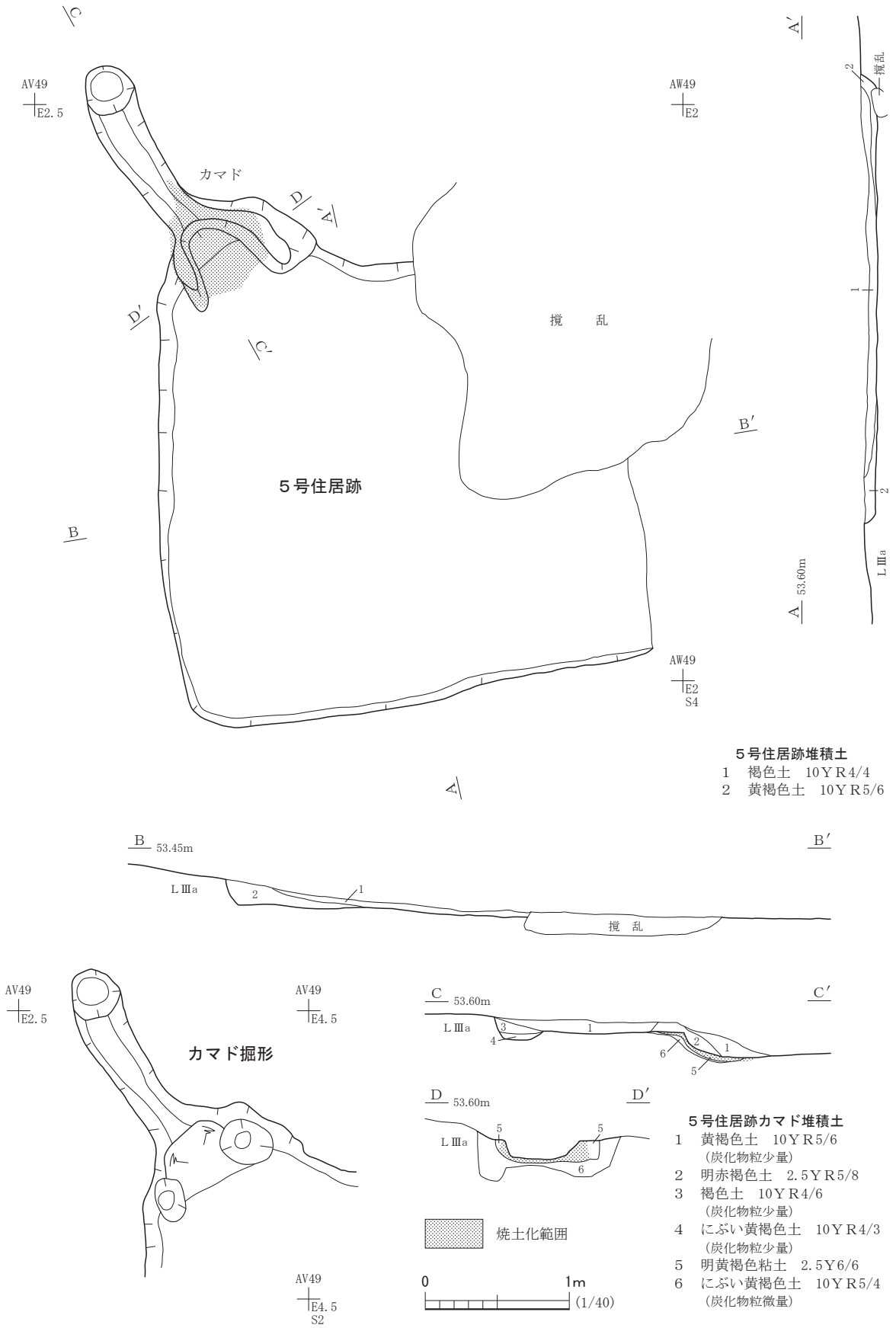

C
AV49
E2.5
カマド
D
A
D′
C′
AW49
E2
撹　乱
B′
５号住居跡
B
AW49
E2
S4
A′
撹乱
2
1
2
LⅢa
A
53.60m
A
５号住居跡堆積土
1　褐色土　10ＹＲ4/4
2　黄褐色土　10ＹＲ5/6
B
53.45m
B′
LⅢa
2
1
撹　乱
AV49
E2.5
AV49
E4.5
カマド掘形
AV49
E4.5
S2
C
53.60m
C′
LⅢa
3
1
4
2
1
6
5
D
53.60m
D′
LⅢa
5
5
6
焼土化範囲
0
1m
(1/40)
５号住居跡カマド堆積土
1　黄褐色土　10ＹＲ5/6
（炭化物粒少量）
2　明赤褐色土　2.5ＹＲ5/8
3　褐色土　10ＹＲ4/6
（炭化物粒少量）
4　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（炭化物粒少量）
5　明黄褐色粘土　2.5Ｙ6/6
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
（炭化物粒微量）

図10　５号住居跡

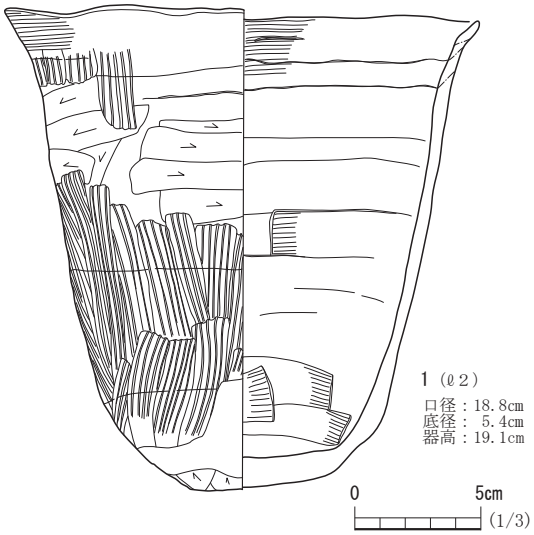


図11　５号住居跡出土遺物

検出面である。検出作業の結果，他遺構との重複関係は認められなかった。

住居内の堆積土は２層に分層した。いずれも住居廃絶後に堆積した層である。ℓ１は褐色土で混入物などが少ないことから，ＬⅡａに起因した流入土と考えられる。ℓ２はＬⅢａに起因する黄褐色土を主体とした層で，壁面に三角状に堆積することから壁面崩落および流入土とした。

東壁が木根により認められなかったが，おそらく平面形は方形を基調としていると考えられる。カマドが北西隅に造られ，わずかに張り出す。遺存する規模は南北306㎝で，張り出すカマド袖までの位置からでは330㎝を測る。東西の長さは推測した床面までは335㎝である。検出面から床面までの深さは，最も遺存のよい西壁においても19㎝である。壁面の立ち上がりはわずかしか認められなかったが，垂直に近い角度で立ち上がっていると推定できる。床面は平坦に整えられている。付属施設として床面上から，カマド１基を検出した。

カマドは住居内の北西隅に認められ，カマド燃焼面と両袖部分が認められた。カマドの内の堆積土は６層に分層した。ℓ１～４は住居跡廃絶後に堆積した流入土である。ℓ１は黄褐色土で，壁面崩落土および流入土である。ℓ２は明赤褐色土で，天井崩落土を含んだ層である。ℓ３・４は煙道に堆積した層である。ℓ４はカマド使用時に堆積した層であることも考えられる。ℓ５・６はカマドの構築土である。ℓ５はカマドの袖を構築していた明黄褐色粘土である。ℓ６は掘形埋土である。

カマドの規模は袖幅100㎝，袖の先端から煙道までは182㎝を測る。燃焼面の範囲は左袖先端から50㎝北へ広がる。燃焼面の規模は，長さ90㎝，最大幅70㎝を測る。燃焼面上には支脚などは認められなかった。燃焼部の底面は奥壁に向かって緩やかに傾斜する。燃焼部はよく焼けており，硬化している状況であった。

遺　　物（図11，写真21）

本遺構から46点の土師器片が出土した。ほぼこれらの破片が接合し，図11の土師器甕となっている。住居跡中央より出土した。非ロクロ成形の小型甕である。胴部はケズリ後にハケ目調整を施し，器面の厚さを減じている。口縁部はケズリ後ハケ目調整，さらにヨコナデにより口縁部を整えている。内面にはススの付着が認められ，煮炊き具として用いられていたことがわかる。表裏の調整や器形の特徴から，栗囲式の範疇に属すると考えられる。

ま と め

本住居跡は東壁が認められなかったものの，方形を基調とした竪穴住居跡であると想定できる。１辺３ｍ程度の小型の住居跡である。カマドは北西隅に確認できた。粘土でカマド袖を構築してい

る状況は，２・４号住居跡と類似し，関連性が高いと考えられる。床面上からは柱穴は認められなかった。

掲載した甕以外に時期を特定できる資料は出土していない。甕の特徴から，栗囲式に属する可能性が高いと考えられる。本住居跡の時期は出土した甕の特徴より，奈良時代と想定した。該期の時期の遺構は本遺跡において唯一の遺構である。（三　浦）

第３節　土　　坑

宿仙木Ａ遺跡の２次調査では，土坑12基の調査を実施した。１～14号土坑は１次調査において報告済であることから，本報告では15号土坑以降の番号を付した。縄文時代の土坑は機能が不明のものが多いが貯蔵穴としての機能を有していたと考えられ，平安時代の土坑は木炭焼成土坑と考えられる。木炭焼成土坑の周壁は地形の改変によりその大半は削平され，底面の木炭層のみを確認した。

15号土坑　ＳＫ15（図12，写真14）

本遺構は，南調査区東端のAZ39・40，BA39・40グリッドに位置する。地形は後世の削平により平坦となっている。検出面はＬⅢａ上面で，不整な炭化物の範囲として検出した。

平面形はすでに大きく削平を受け，東半分は認められない。遺存する部分から想定すると，円形または楕円形状であったと考えられる。規模は長軸長145㎝，短軸長103㎝を測る。検出面から底面までの深さは10㎝である。底面はほぼ平坦で，西壁と南壁の一部以外は地形の改変の際にほとんど壊されている。堆積土は，炭化物を多量に含んだ暗褐色土のみの単一層で，木炭層である。炭化物以外に遺物は認められなかった。

本遺構は木炭層が認められることから，木炭焼成土坑であると考えられる。周壁は大きく壊され，木炭層のみが認められる状況であった。時期については出土遺物がなく判然としないが，平安時代の可能性を考えている。（三　浦）

16号土坑　ＳＫ16（図12，写真14）

本遺構は，南調査区のほぼ中央，AW41グリッドの平坦面に位置している。すぐ西側に17号土坑が認められる。検出面はＬⅢａ上面で，不整形な炭化物の範囲として認識した。

平面形は東半分が削られて遺存していない。残存部分から想定すると円形と考えられる。残存規模は長軸長112㎝，短軸長65㎝を測る。検出面から底面までの深さは，最も残りが良い部分で７㎝である。底面は南東に向かって緩やかに傾斜している。周壁はほとんど遺存せず，東壁と北壁の一部のみがわずかに立ち上がる。

堆積土は，炭化物を多量に含んだ黒色土の単層である。木炭層と考えられる。炭化物以外に遺物は，認められなかった。

本遺構は，木炭層が認められることから，木炭焼成土坑であると考えられる。周壁は大きく壊され，木炭層のみが認められる状況であった。時期については木炭以外に出土遺物がなく判然としないが，平安時代の可能性を考えている。（三　浦）

17号土坑　ＳＫ17（図12，写真14）

本遺構は，南調査区北側のAV・AW41グリッドの平坦面に立地している。すぐ東側に16号土坑が位置する。検出面はＬⅢａ上面で，炭化物を多量に含んだ黒色土の円形として認識した。

平面形は直径約100㎝の円形である。検出面からの深さは９㎝である。中央に大きな撹乱があり，底面の遺存状況は悪い。周壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は，炭化物を多量に含んだ黒色土１層のみである。木炭層と考えられる。炭化物以外に遺物は認められなかった。

本遺構は，木炭層が認められることから，木炭焼成土坑であると考えられる。周壁は大きく壊され，炭化物層のみが認められる状況であった。時期については木炭以外に出土遺物がなく判然としないが，平安時代の可能性を考えている。（三　浦）

18号土坑　ＳＫ18（図12，写真14）

本遺構は，南調査区中央西寄りのAU45グリッドの平坦面に位置している。すぐ北側に１号焼土遺構，南西側に20号土坑が位置する。検出面はＬⅢａ上面で，炭化物を多量に含んだ黒色土の楕円形として認識した。

本遺構は北壁の一部と底面が撹乱を受け，遺存していない。遺存している平面形は楕円形である。遺存規模は長軸長102㎝，短軸長74㎝を測る。検出面からの深さは７㎝である。底面は平坦に造られている。底面から壁面にかけては，緩やかに立ち上がる。

堆積土は２層認められた。ℓ１は中央にわずかに認められる層で，レンズ状堆積をなすことから流入土と考えられる。ℓ２は炭化物を多量に含んだ黒色土で，木炭層である。炭化物以外に遺物は認められなかった。

本遺構は，木炭層が認められることから，木炭焼成土坑であると考えられる。周壁は壊され，炭化物層のみが認められる状況であった。時期については木炭以外に出土遺物がなく判然としないが，平安時代の可能性を考えている。（三　浦）

19号土坑　ＳＫ19（図12・14，写真15・24）

本遺構は，南調査区南端のAX49グリッドの南向き斜面に位置している。西側４ｍには５号住居跡が認められる。検出面はＬⅢａ上面で，炭化物を含んだにぶい黄褐色土の楕円形として認識した。

本遺構は斜面に立地しているため，斜面下側の南壁は遺存していない。遺存する平面形は楕円形である。構築当時は円形であったと考えられる。遺存規模は長軸長229㎝，短軸長182㎝を測る。検

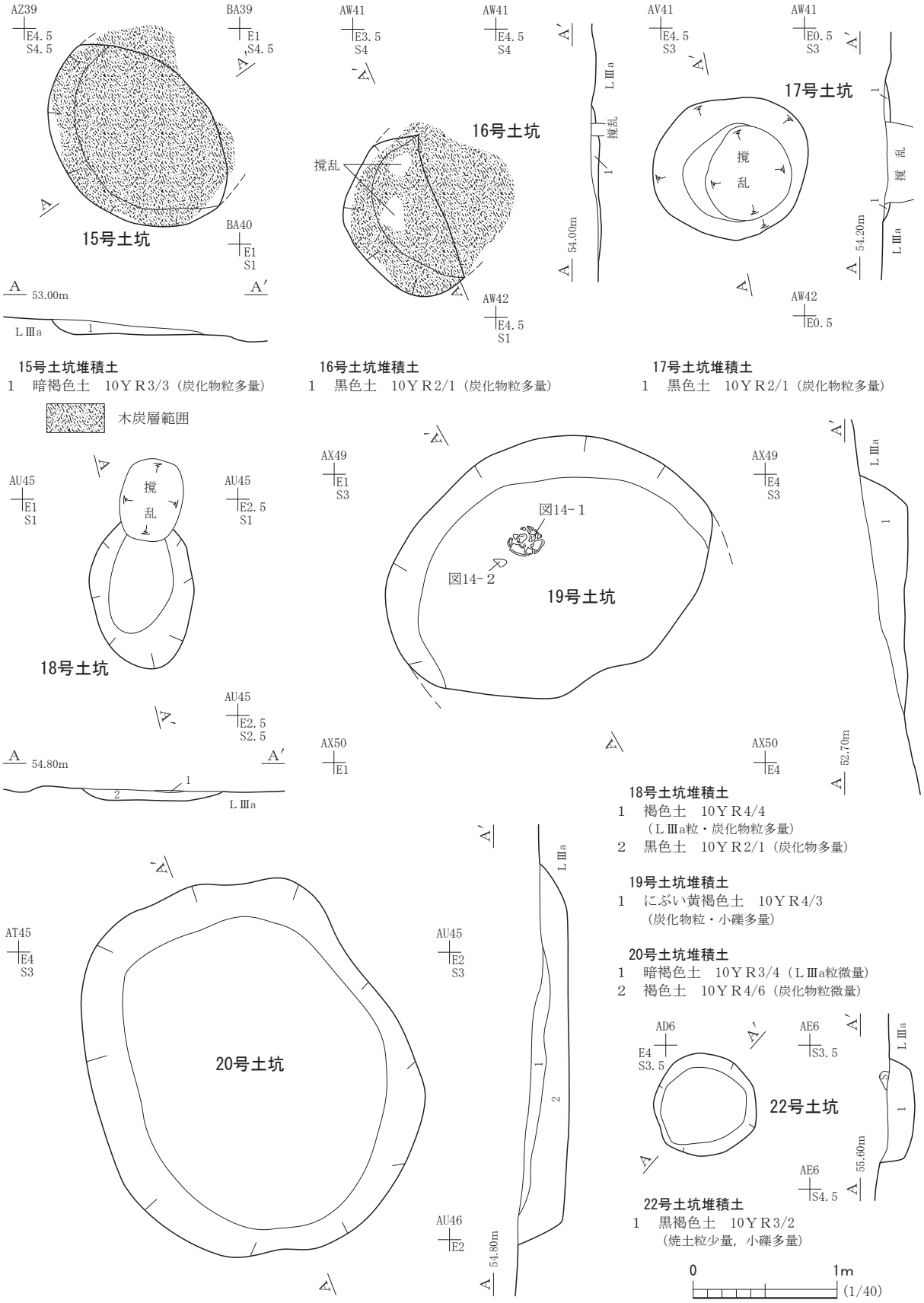


図12　15～20・22号土坑

出面からの底面までの深さは北壁34㎝である。底面は平坦に造られている。底面から壁面にかけては，垂直に近い角度で立ち上がる。

堆積土は，にぶい黄褐色土の単層のみである。混入物などがあまり見られない均質な土層であるため，自然堆積である可能性を考えている。

本遺構からの出土遺物は，縄文土器片35点が出土した。そのうち６点を図示した。

図14－１は底面の北寄りに置かれた状態で出土した浅鉢である。完形品ではなく，半分しか遺存していなかった。底部から体部にかけて丸みをもって立ち上がり，口縁部はほぼ直立する器形となる。口唇部は内面が肥厚する。頂部には小突起が認められ，突起間の距離からおそらく２個の突起が付いていたと推定できる。入組文や「つ」字状の磨り消し縄文手法を用いて文様を描く。底面には網代痕が認められる。内面はよく磨かれ，光沢を放つ。

図14－２～４は異形土器の資料である。３・４は胎土や色調から同一個体である。５は無文の深鉢形土器の口縁部資料である。６は深鉢形土器の破片資料と判断したが，直線的に立ち上がる浅鉢の可能性も残る。口唇部が角頭状になる。

本遺構の時期は，出土遺物より縄文時代後期中葉である。本土坑の機能として，規模や形から，貯蔵穴として利用されていたと考えるのが適当であろう。しかし，柱穴や炉は認められないものの，３号住居跡のような小型の住居跡であった可能性も言及しておきたい。（三　浦）

20号土坑　ＳＫ20（図12・14，写真15・25）

本遺構は，南調査区南西寄りのAT45，AU45・46グリッドの平坦面に位置する。炭化物を含んだ暗褐色土としてＬⅡｃ′上でかすかに確認できた。平面形を明確にするために，ＬⅢａ上面まで掘り下げて検出した。重複する遺構は認められず，すぐ北東に18号土坑が位置する。

平面形は楕円に近い隅丸長方形を呈し，北西－南東方向に長軸をもつ。長軸方向はＮ22°Ｗである。検出面での規模は長軸長265㎝，短軸長221㎝を測る。検出面から底面までの深さは32㎝である。底面は平坦に造られている。周壁は底面から30～60°の角度で立ち上がる。

遺構内堆積土は２層に分けた。ℓ１は暗褐色土，ℓ２は褐色土層でレンズ状堆積をなすことから，自然流入土と判断した。いずれの層からも遺物が出土している。

遺物は，堆積土中から縄文土器片275点，珪質頁岩の剥片６点が出土した。すべて縄文時代前期前葉の所産と考えられる。すべて繊維混和痕が認められる土器であり，器壁が薄く脆い。慎重に取り扱っていたものの，遺物採り上げ時，さらには水洗い時にも割れてしまうような状態であった。図化に耐えるものが少ないが，比較的遺存状態の良好な15点を図化した。胎土や色調の特徴から，同一個体となる資料が多いと考えられるが，小破片のため接合しなかった。

図14－７は波状口縁である。波頂部から垂下する隆帯が貼付されている。器面には横位に３段の縄圧痕が施される。８～17・19～21は非常に器壁が薄く脆い。８～13は口縁部資料である。非結束の羽状縄文が施文される。９～12は胴部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり，口縁部に至っ

て「く」の字に屈曲し内径する器形となる。口唇部は角頭状になる。13は口縁部が大きく外反する器形である。

図14－14は口縁部に近い資料と考えられる。隆帯状の横位の粘土が貼付されている。15～21には胴部資料を掲載した。17は方向を違えた羽状縄文が施文されている。

本遺構は隅丸長方形の平面形をもつ比較的大型の土坑である。小型の住居跡であることも考慮して底面の精査を行ったが，柱痕など住居跡の根拠を示す施設は認められなかった。遺構の時期は，出土遺物から縄文時代前期前葉と判断した。（三　浦）

21号土坑　ＳＫ21（図13・15，写真15・24）

本遺構は南調査区中央東寄りのAY45グリッドの平坦面に位置する。炭化物を含んだ褐色土の隅丸長方形として認識した。本遺構の周囲は後世の削平が著しく，ＬＩ直下のＬⅢａ上面で検出している。重複する遺構は認められず，周囲10ｍに他の遺構は認められない。

平面形は隅丸長方形を基調としており，北西－南東方向に長軸をもつ。長軸方向はＮ50°Ｗを指す。検出面での規模は長軸長115㎝，短軸長85㎝を計測する。検出面から底面までの深さは12㎝を測る。底面は平坦に造られている。壁面は削平を受けているため，わずかしか認められないが，底面から30～45°の緩やかな角度で立ち上る。

遺構内堆積土は２つに分層した。レンズ状堆積と三角堆積が認められることから，いずれの層も自然堆積土と判断した。ℓ１は褐色土で流入土，ℓ２は黄褐色土で壁面崩落土である。

遺物は，堆積土中から縄文土器片31点，流紋岩の砕片２点が出土した。すべて繊維混和痕が認められる。器形は深鉢形土器になると思われる。

比較的遺存状態の良好な図15－１～３の３点を図化し掲載した。１は縄文地文上に沈線で文様を描く。胴部上半の資料である。２・３は斜縄文のみが施文された資料である。２の内面には条痕文が明瞭に残る。

本遺構は隅丸長方形の平面形の土坑である。機能については壁面が大きく削平されていて明確にはできないが，規模や形態から貯蔵穴である可能性を考えている。時期は出土遺物から，縄文時代早期末葉と考えられる。（三　浦）

22号土坑　ＳＫ22（図12，写真16）

北調査区北西寄りのAD６グリッドに位置し，ＬＩ直下のＬⅢａ上面で検出した。重複する遺構は認められず，北東９ｍに３号住居跡が所在する。

平面形は円形を呈する。検出面での規模は直径71㎝，検出面からの深さは19㎝を測る。底面は中央に向かって緩やかにくぼんでおり，周壁は底面から60～70°の角度で立ち上がる。

遺構内堆積土は１層のみで，小礫・焼土粒を含む黒褐色を基調とした土壌である。自然流入土と判断した。

遺物は堆積土中から縄文土器片２点が出土した。いずれも胎土には，繊維混和痕が観察できる。細片であるため，図化していない。

本遺構は円形の平面形をもつ小型の土坑である。機能については不明である。遺構の所属時期は判然としないが，繊維混和痕が認められる土器片や堆積土の色調，近接する遺物包含層出土の土器片から，縄文時代前期中葉の可能性が高い。（笠　井）

23号土坑　ＳＫ23（図13・15，写真16・24）

北調査区南東寄りのAM10グリッドに位置し，ＬＩ直下のＬⅢｂ上面で検出した。重複する遺構は認められず，南側１ｍに24号土坑，南西側５ｍに25号土坑が所在する。

平面形は円形を呈するが，北東側３分の１ほどが木根による撹乱を受け破壊されている。検出面での規模は直径約130㎝，検出面からの深さは20㎝を測る。底面はほぼ平坦で，緩やかに周壁に移行する。周壁は底面から50～60°の角度でしだいに傾斜を急にして立ち上がる。

遺構内堆積土は２層に分かれ，堆積状況から自然流入土と判断した。遺物は堆積土中から縄文土器片７点，石器１点が出土した。１点のみ早期後半の貝殻条痕文系土器であり，残りは前期中葉の大木２ｂ式土器と考えられる。土器は細片であるため図化できず，石器を図15に掲載した。

図15－９は凹石である。おおよそ半分は欠損している。砂岩の自然礫を用いている。表裏両面に敲打によるくぼみが観察される。片面には磨面が認められた。

本遺構は円形の平面形をもつ土坑である。遺構の性格は不明である。遺構の所属時期は，出土遺物の年代観から縄文時代前期中葉の所産と判断した。（笠　井）

24号土坑　ＳＫ24（図13・15，写真16・24）

北調査区南東寄りのAL10グリッドに位置し，ＬＩ直下のＬⅢｂ上面で検出した。重複する遺構は認められず，北側１ｍに23号土坑，南西側2.5ｍに25号土坑が所在する。

平面形は不整円形を呈する。検出面での規模は南北116㎝，東西113㎝を計測する。検出面からの深さは42㎝を測る。底面はやや丸みを帯びて，緩やかに周壁に移行する。周壁は南北西壁がオーバーハングしながら立ち上がり，検出面に至る。東壁のみ底面から70°の角度でしだいに傾斜を急にして立ち上がる。

遺構内堆積土は３層に分かれ，堆積状況から自然流入土と判断した。ℓ１・３は流入土，ℓ２は周壁の崩落土と考えられる。

遺物は堆積土中から縄文土器片17点が出土した。すべてについて断定できないが，おおむね縄文時代後期中葉の加曾利Ｂ式土器と考えられる。４点を図示した。

図15－４は深鉢の頸部付近の破片資料で，「く」の字状に大きく屈曲する器形を呈する。肩部に横帯縄文が施文され，破片の上端付近には横位の沈線が走る。

図15－５～７は深鉢の胴部資料である。胎土や色調から，同一個体と判断している。磨り消し縄

文手法により，文様を描く。

本遺構は円形の平面形をもつ土坑である。遺構上部が後世の削平により失われているため断定できないが，周壁がオーバーハングする状況からフラスコ状土坑である可能性が高い。貯蔵穴として利用されていたと考えられる。遺構の所属時期は，出土遺物からの特徴から縄文時代後期中葉の所産と判断した。（笠　井）

25号土坑　ＳＫ25（図14，写真16）

北調査区南東寄りのAL11グリッドに位置し，ＬＩ直下のＬⅢｂ上面で検出した。重複する遺構は認められず，北東側 2.5mに24号土坑，５ｍに23号土坑が所在する。

平面形は不整円形を呈する。検出面での規模は南北118㎝，東西110㎝を計測する。検出面からの深さは29㎝を測る。底面は東側に傾斜しており，西側は緩やかに周壁へ移行する。半截時に底面の

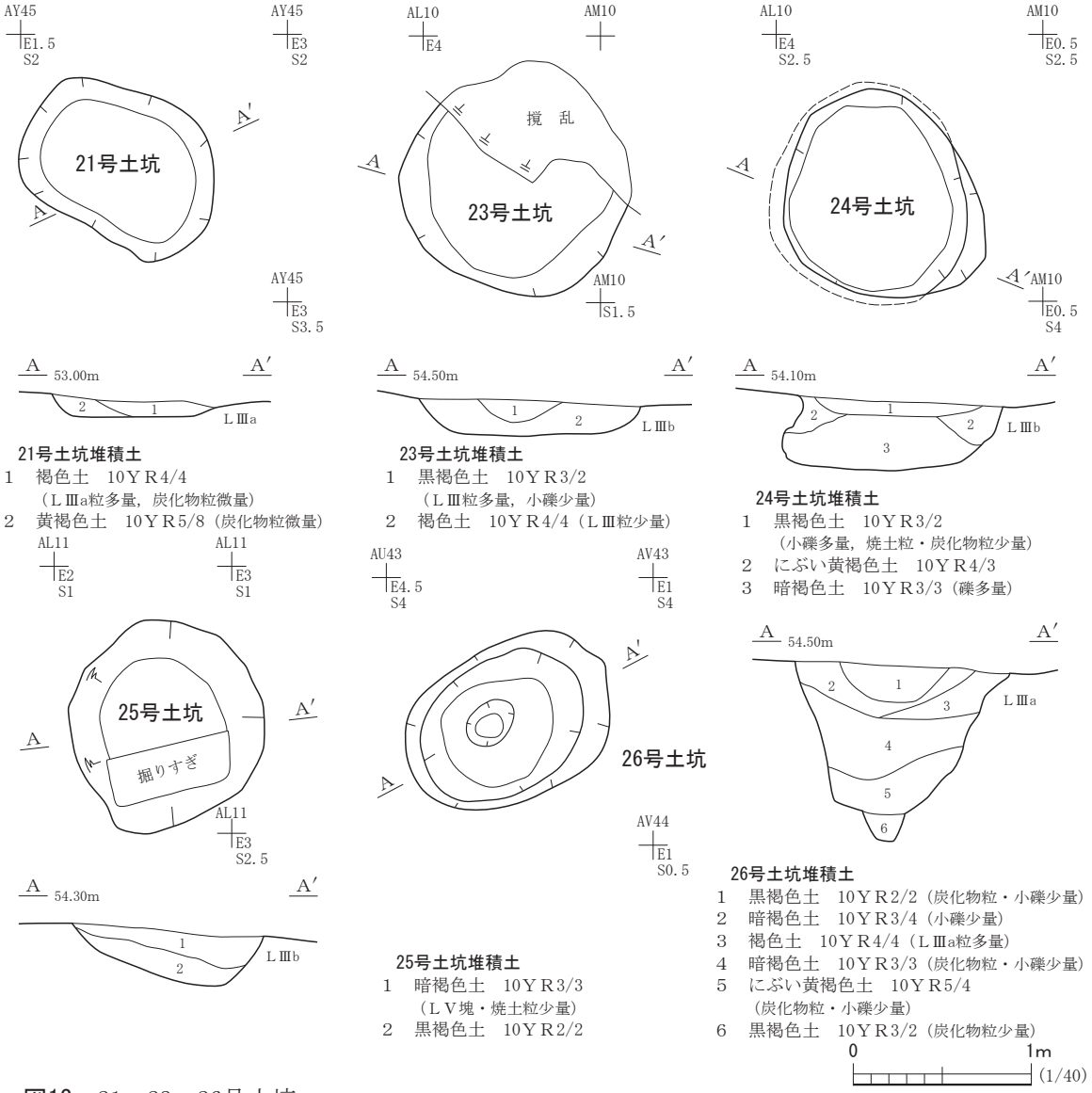


図13　21・23～26号土坑

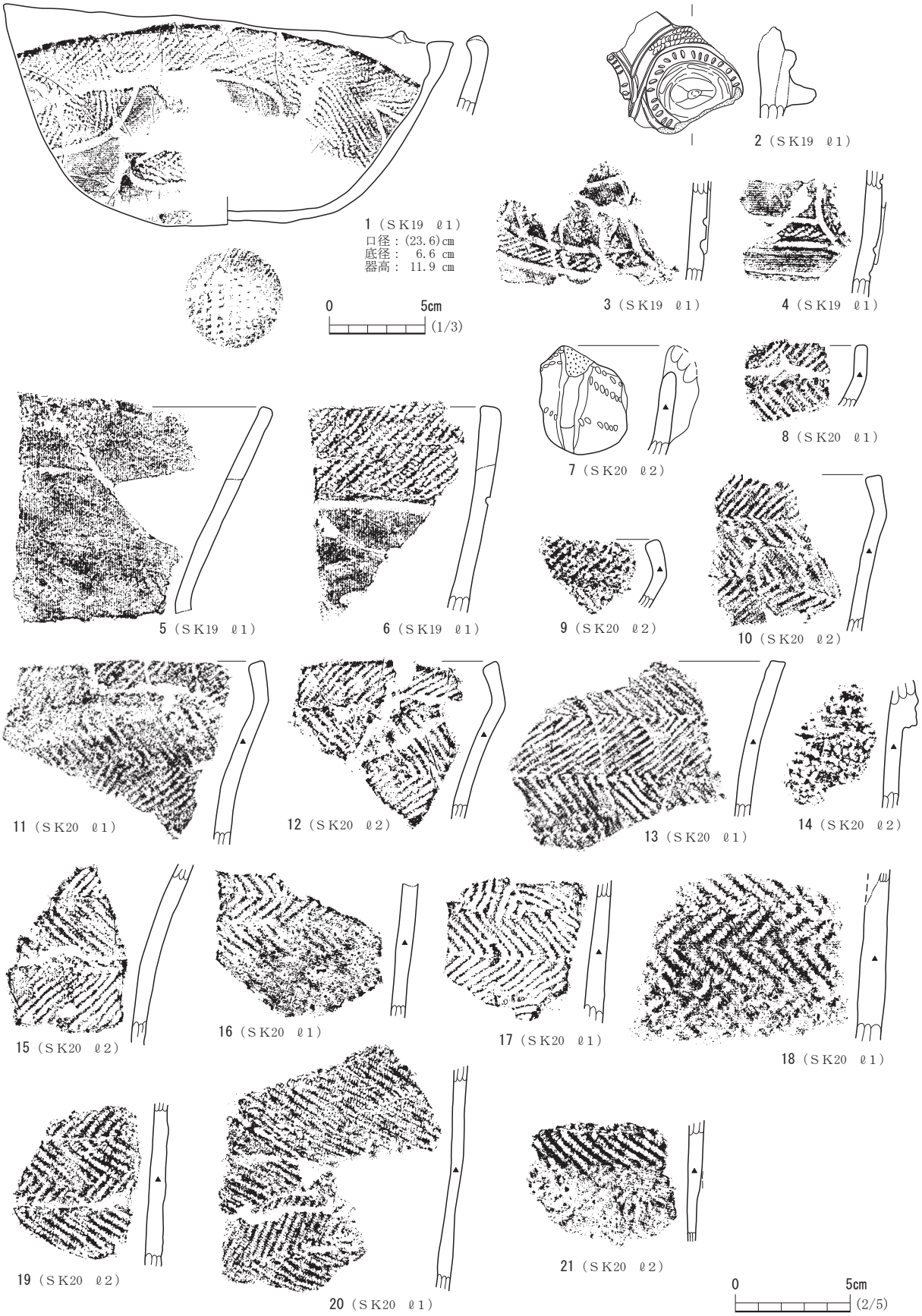

1（ＳＫ19　ℓ1）
口径：(23.6)㎝
底径：　6.6 ㎝
器高：　11.9 ㎝
0　5cm
(1/3)
2（ＳＫ19　ℓ1）
3（ＳＫ19　ℓ1）
4（ＳＫ19　ℓ1）
5（ＳＫ19　ℓ1）
6（ＳＫ19　ℓ1）
7（ＳＫ20　ℓ2）
8（ＳＫ20　ℓ1）
9（ＳＫ20　ℓ2）
10（ＳＫ20　ℓ2）
11（ＳＫ20　ℓ1）
12（ＳＫ20　ℓ2）
13（ＳＫ20　ℓ1）
14（ＳＫ20　ℓ2）
15（ＳＫ20　ℓ2）
16（ＳＫ20　ℓ1）
17（ＳＫ20　ℓ1）
18（ＳＫ20　ℓ1）
19（ＳＫ20　ℓ2）
20（ＳＫ20　ℓ1）
21（ＳＫ20　ℓ2）
0　5cm
(2/5)

図14　土坑出土遺物（１）

一部を壊してしまった。周壁は，西側が緩やかなのに対し，東側はやや急で底面から40～50°ほどの角度でしだいに傾斜を急にして立ち上がる。

遺構内堆積土は２層に分かれた。西側から流れ込んだ堆積状況から，いずれの層も自然流入土と判断した。遺物は堆積土中から縄文土器片１点が出土したのみである。縄文時代早期後葉の繊維混和痕が認められる土器片である。

本遺構は円形の平面形をもつ土坑で，性格については不明である。遺構の時期は，出土遺物の特徴から縄文時代早期後葉の所産としたいが，混入である可能性が高く断定できない。　　（笠　井）

26号土坑　ＳＫ26（図13・15，写真17・24）

本遺構は，南調査区南端のAU43・44，AV43・44グリッドの平坦面に位置している。南側５ｍには１号焼土遺構が認められる。ＬⅡｃ′面ではかすかな黒褐色土の範囲であり，平面形を明確にするためにＬⅢａ面まで掘り下げている。検出面はＬⅢａ上面で，炭化物を含んだかすかな黒褐色土の楕円形として認識した。

本遺構の平面形は楕円形である。規模は長軸長123㎝，短軸長85㎝を測る。検出面からの底面までの深さは84㎝である。底面はやや丸みを帯びている。底面中央には30×23㎝の黒褐色土の円形の落ち込みが認められた。この落ち込みは底面からの深さが15㎝を測る。検出面である底面から中央に向かってすぼまる形態となる。底面から壁面にかけては，緩やかな段をもちながら立ち上がり，検出面へ至る。

遺構内堆積土は，６層に分けた。ℓ１～５は自然堆積であると考えられる。ℓ１～４は流入土，

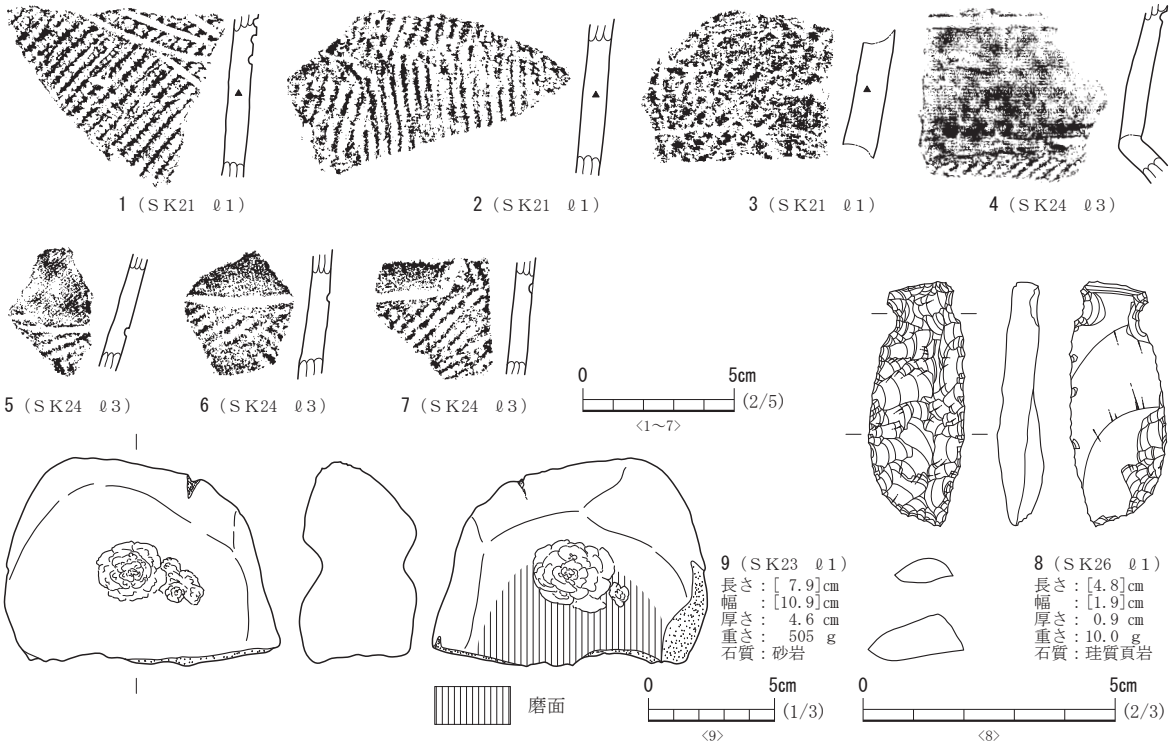


図15　土坑出土遺物（２）

ℓ５はにぶい黄褐色土で，色調より壁面崩落土および流入土と考えられる。

本遺構からの出土遺物は，石器１点のみである。図15－８は頁岩製の縦形の石匙である。背面には細かい連続した調整剥離を施している。腹面には，右側縁にわずかに調整剥離を加えて両面調整の刃部を作り出している。左側縁には剥離を加えず，片面調整の刃部としている。刃部の断面形は三角形を呈する。

本土坑の機能として，規模や形から落し穴と考えている。本遺構の時期は，明確に時期を決定できる資料が認められない。つまみ部が矮小な石匙は，縄文時代前期に見受けられる特徴でもあるが，土器片などの時期を特定できる資料が出土していないため詳細は不明である。（三　浦）

第４節　鍛冶炉跡・焼土遺構・溝跡

本節では，それぞれの遺構数が少ないため節立てせず，鍛冶炉跡と焼土遺構，さらに溝跡をあわせて報告する。鍛冶炉跡は平安時代，焼土遺構は縄文時代，溝跡は近世以降と時期は異なる。鍛冶炉跡は２基認められ，いずれも小穴の底面や壁面に赤色の熱変化範囲が認められた。焼土遺構・溝跡はそれぞれ１基ずつ認められた。

１号鍛冶炉跡　ＳＷｋ１（図16，写真18）

本遺構は，南調査区西端のAS41グリッドに位置する。北東へ緩やかに傾斜する変換点に立地する。ＬⅢａ上面から，淡い明赤褐色土の円形として検出した。周囲には風倒木痕以外認められず，最も近い17号土坑で20ｍ東に位置する。

平面形は北東－南西方向にわずかに長い軸をもつ隅丸長方形である。長軸方位はＮ35°Ｅを指す。規模は，長軸長36㎝，短軸長30㎝を測る。検出面からの深さは10㎝である。壁面は南西・南東壁では垂直に近い角度で立ち上がる。北東・北西壁は緩やかな傾斜となる。底面は平坦に造られている。底面から壁面にかけて焼土化範囲が認められる。厚さは２㎝程度である。

堆積土は，明赤褐色土の単一層である。ＬⅢａ塊や焼土塊などが含まれるが，周囲からの流入土と理解している。堆積土内から遺物は出土していない。

本遺構は，小穴の底面に焼土化範囲が認められたことから，鍛冶炉跡として報告した。当初，縄文時代の地床炉である可能性も考慮しながら調査を進めたが，掘り込みの深度や壁面の状況などから，鍛冶炉跡の可能性が高いと判断した。堆積土中から，羽口や鉄滓，鍛造薄片などの製鉄関連遺物は認められなかった。時期は遺物がなく判然としないが，北調査区において羽口が出土していることや平安時代の住居跡が検出されていることから，平安時代に機能したと考えている。（三　浦）

２号鍛冶炉跡　ＳＷｋ２（図16，写真18）

本遺構は，南調査区東寄りのAY41グリッドに位置する。北東に緩やかに傾斜する変換点に立地す

る。ＬⅢａ上面から，淡い黄褐色土の不整円形として検出した。５ｍ西に17号土坑が位置する。

平面形は不整な円形である。規模は南北36㎝，東西42㎝を測る。検出面からの深さは15㎝である。壁面は60°ほどの角度で立ち上がる。底面は平坦に造られている。底面中央部には焼土化範囲が認められた。被熱の痕跡はあまり明確ではなく，厚さは１㎝程度である。

堆積土は，黄褐色土の単層である。土色や土質が均質なことから，周囲からの流入土である。堆積土内から遺物は出土していない。

本遺構は，不整な円形をした小穴の底面に被熱して赤色に焼土化した範囲が認められる鍛冶炉跡である。焼土化範囲が認められたことから，１号鍛冶炉跡と似た構造的特長を有する。堆積土中から，羽口や鉄滓，鍛造薄片などの製鉄関連遺物は認められなかった。時期は遺物がなく判然としないが，１号鍛冶炉跡と同様に平安時代と考えている。（三　浦）

１号焼土遺構　ＳＧ１（図16，写真18）

本遺構は，南調査区中央やや西寄りのAU44・45グリッドに位置する。平坦面に立地する。木痕除去後に木の根の下から焼土化範囲を検出した。本遺構の南半分は木の根により遺存していない。竪穴住居内の地床炉の可能性も考慮して，周囲の精査を行ったが柱穴は認められず，屋外焼土遺構と

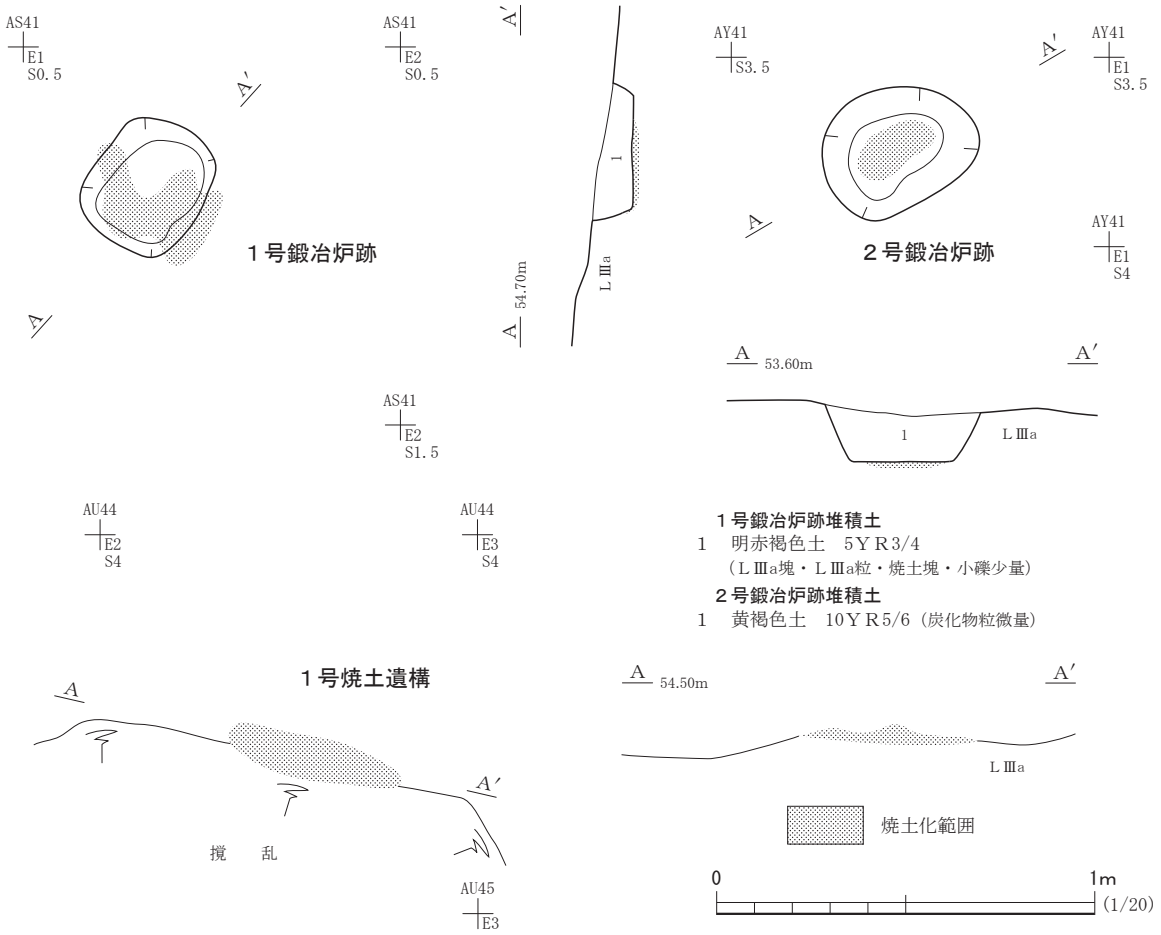


図16　１・２号鍛冶炉跡，１号焼土遺構

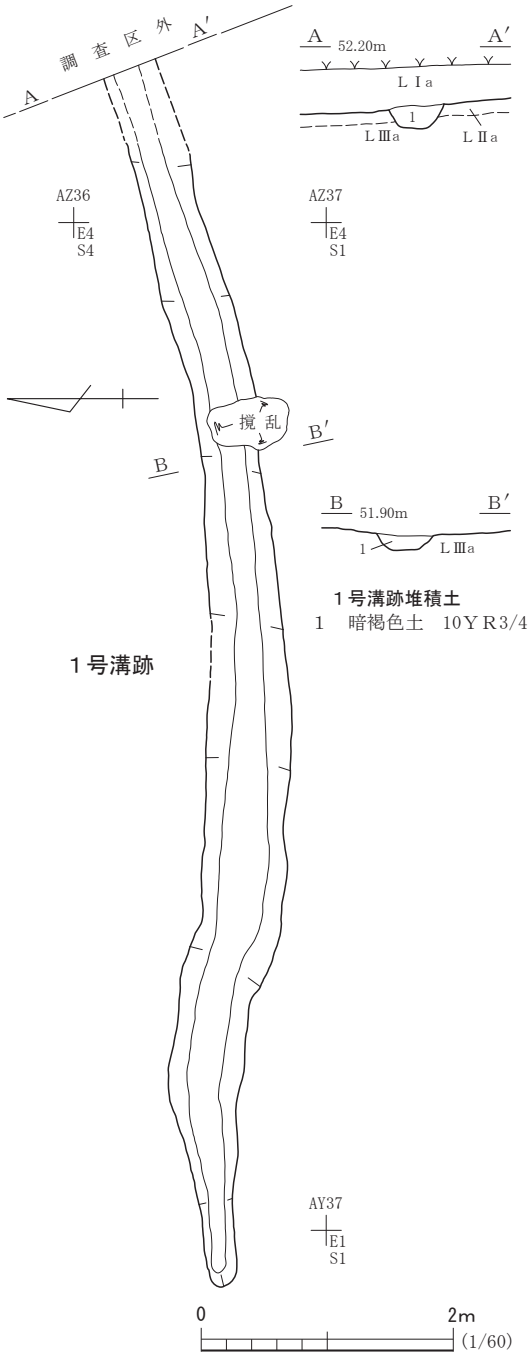


図17　１号溝跡

して報告する。ＬⅢａ面より検出した。近接して南西に18号土坑が位置する。

遺存する平面形は，細長い楕円形である。規模は長さ47㎝，幅11㎝を測る。被熱範囲の厚さは最も厚い部分で５㎝を計測する。

本遺構は，周囲に柱穴がなく単独で存在することから，屋外焼土遺構と判断した。出土遺物はなく，時期は不明である。　（三　浦）

１号溝跡　ＳＤ１（図 17，写真 18）

本遺構は，南区南東側のAY37，AZ36・37グリッドに位置する。平成20年に実施された試掘調査により認められた。ＬＩ直下のＬⅡａから掘り込まれているが，周囲はＬⅢａまで掘り下げて検出を行っているために，検出面はＬⅢａ上面となっている。本遺構は東から西へ向かい，わずかに湾曲している溝跡である。調査区から，さらに東へ延びている。

溝跡の規模は，長さは東壁から西端まで直線距離にして約9.8m，幅は上端で最大66㎝，検出面からの深さは20㎝である。西へ向かうにつれて浅くなる。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦に造られ，西へ向かって緩やかに傾斜する。

堆積土は，暗褐色土の単層である。混入物などが認められないことから，自然堆積と考えられる。本溝跡内から遺物は出土していない。

本溝跡は，東から西へ向かって流れていたと考えられる溝跡である。時期は，掘り込み面が表土直下と浅く，近世以降の可能性を考えている。本溝跡の機能としては，竹林の北端を巡るような地境溝の可能性が高い。　（三　浦）

第５節　遺物包含層・遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の総数は1,635点で，その内訳は縄文土器1,601点，土師器９点，須恵器７点，羽口１点，石器類10点，金属製品７点である。これら遺物の大部分は縄文土器であり，そのほとんどが，北調査区北部の河川跡に流れ込む遺物包含層（ＬⅡｃ）から出土したものである。ここではまず，多くの遺物が出土した遺物包含層と河川跡の状況について説明する。

河川跡・遺物包含層（図18，写真19・20）

河川跡は北調査区の北端でその一部を確認した。宿仙木Ａ遺跡の北端には現況で幅３ｍほどの小川が蛇行しながら東流しており，今回の調査で確認した河川跡はこの小川の痕跡である。調査区内ではその南岸を検出し，北西から南東方向へ蛇行する崖線を形成していた。調査区内での規模は，北西－南東方向に76ｍ，最大幅16ｍを測る。河川跡の基底部は，崖面中位以上がＬⅢｂで中位以下から河床面にかけてはＬⅣである。崖面は，確認した部分については1.5～２ｍ前後の高さがあり，30～60°の角度で立ち上がっている。

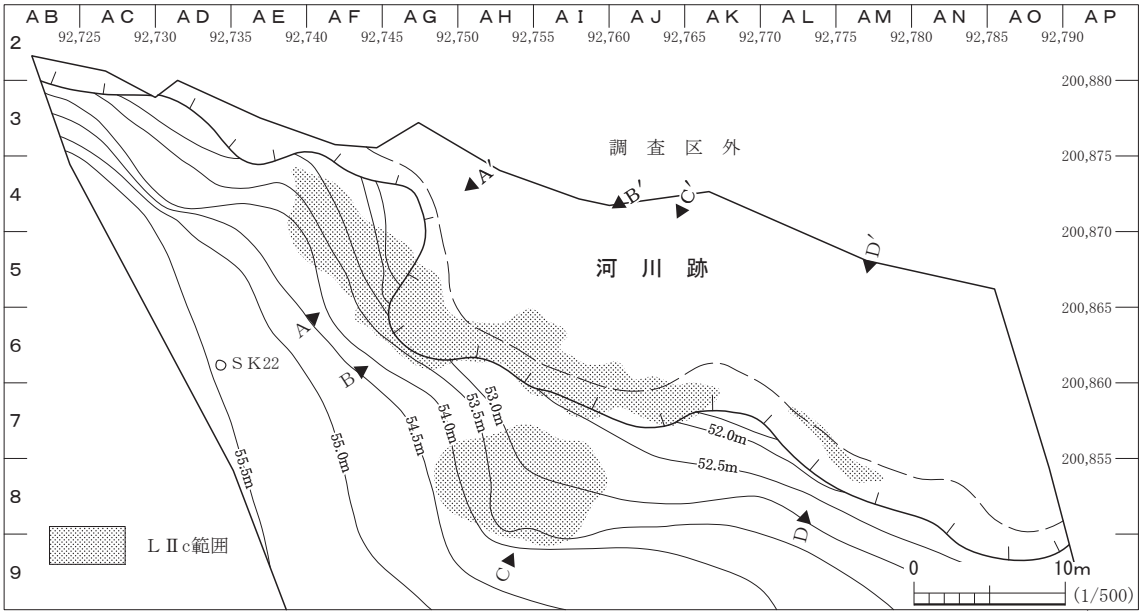
堆積土はＬⅡｂ～ｈの７層に分かれる。このうち，ＬⅡｄ・ｆ・ｈは砂および砂礫で構成される水成堆積物と考えられ，これらが堆積した時期の河川跡は水量が多く，上流からの土砂の流出量が多かったものと考えられる。これに対し，ＬⅡｂ・ｃ・ｅ・ｇは，黒色および黒褐色を基調としており，有機物を多く含む土壌からなる。その分布は南岸の縁に偏り，河川跡の水流が穏やかに流れていた時期に崖線上から流入堆積したものと考えられる。

遺物が出土するのは，ＬⅡｂ（縄文土器23点，土師器８点，須恵器２点）・ＬⅡｃ（縄文土器874点，土師器１点，須恵器１点，石器５点）・ＬⅡｅ（縄文土器77点）・ＬⅡｇ（縄文土器４点）からである。出土遺物の特徴からＬⅡｂは平安時代，ＬⅡｃ以下は縄文時代の堆積土と考えられる。このうち遺物包含層と考えられる内容をもつのはＬⅡｃである。ＬⅡｃは，河川跡南岸縁にあたるAE４・５，AF４～６，AG５・６，AH６，AI６・７，AJ６・７，AK７，AL７，AM８グリッドの範囲に細長く分布し，また河川跡から南西方向へ延びる沢地形にあたるAG７・８，AH・AI７～９に楕円形状に分布する。細長く分布する部分の規模は，長さ約45ｍ，幅１～５ｍ，層厚10～30㎝を測り，楕円形の部分は東西11.5ｍ，南北８ｍ，層厚30㎝を測る。

遺物の分布はAG５グリッドで全体の半分以上の遺物が出土しており，隣接するAF５・AG６グリッドを合わせると全体の８割以上が集中している。遺物は縄文時代前期中葉の大木２ｂ～３式が主体をなし，縄文時代後期中葉の加曾利Ｂ式が混入する。

２次調査において出土遺物の多数が遺物包含層・河川跡からの出土であり，出土する遺物の時期も大差なく，さらに南調査区の遺構外出土遺物は少数であることから，これらの遺物についても含めて報告する。

（笠　井）



LⅡb　にぶい褐色土　10ＹＲ4/3
（LⅢa塊・LⅢa粒多量，砂・小礫少量，炭化物粒微量）
LⅡc　黒褐色土　10ＹＲ2/2（小礫少量）
LⅡd　暗灰黄色砂礫　2.5Ｙ4/2
（黒褐色土10ＹＲ2/3，暗灰黄色砂2.5Ｙ5/2を内包）
LⅡe　黒色土　10ＹＲ2/1（LⅢa粒・小礫少量）
LⅡf　暗灰黄色砂礫　2.5Ｙ4/2
LⅡg　褐灰色土　10ＹＲ4/2（礫・砂多量）
LⅡh　にぶい黄褐色砂礫　10ＹＲ4/3

	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AI	AJ	AK	AL	AM	AN
2													
3													
4					5								
5				17	154	444							
6						170	3						
7						8		37	2				
8						5	15	8			2		
9							1	3					

LⅡcのグリッド別縄文土器出土点数

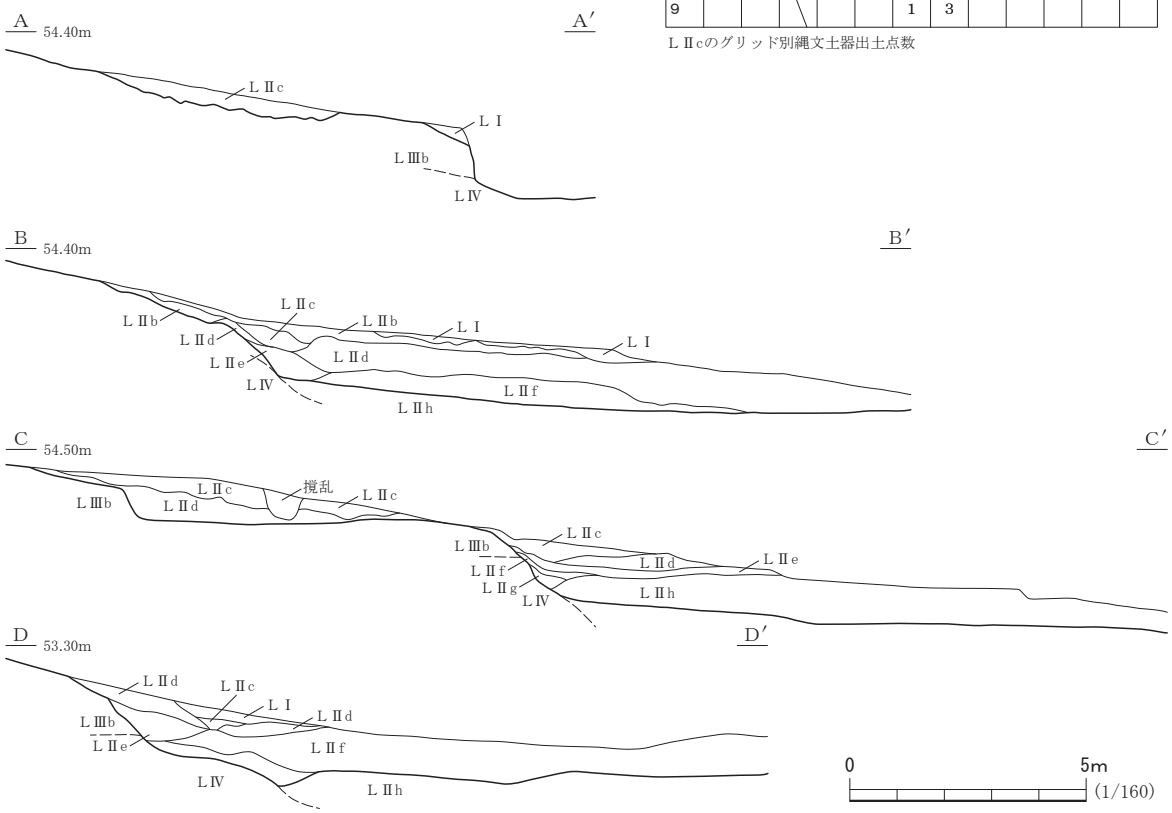


図18　河川跡，遺物包含層

土　　器（図19～24，写真26～32）

本調査区の遺物包含層より出土した土器は，縄文土器が大半を占める。わずかに土師器・須恵器が出土している。時期的には縄文時代の土器は主に前期中葉，後期中葉に限られる。土師器・須恵器は９世紀前半から中頃の特徴を有す。出土土器は便宜上，以下のような大まかな時期分類を行った。記載にあたっては土器分類によって報告する。

Ⅰ群土器(図19－１，写真26)　縄文時代早期後半に属す土器である。１点のみ出土している。深鉢形土器の口縁部資料で，表・裏面に条痕が施文されている。胎土には繊維混和痕が観察できる。

Ⅱ群土器　縄文時代前期中葉に属する土器である。大木２ｂ式～大木３式土器が大半を占める。連続性が強く感じられ，各型式に分類することが困難である。そのため特徴的な施文方法によって事実報告を行い，第３章においてまとめることとする。Ⅱ群土器は，さらに５つに細分した。

１類：口縁部に隆帯をもち，隆帯に指頭などで円形もしくは楕円状の刺突を施すもの

２類：主文様を連続刺突文(押し引き)で描くもの

３類：主文様を刺突文で描くもの

４類：主文様を沈線文で描くもの

５類：地文のみ

大半は大木２ｂ式土器から大木３式土器に含まれる一群である。主に胴部上半から口縁部にかけての資料である。焼成は比較的堅緻で，胎土にはほとんどの資料で繊維痕和痕が観察できる。器面の色調は褐灰色から暗褐色である。

１類(図19－２～18，写真26)　器形をうかがえる資料はないが，いずれも深鉢形土器になると思われる。４・５のように胴部上半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形と，７のように胴部上半から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる器形が認められる。また，14のように胴部が屈曲して口縁部が内傾する器形も存在する。

横位隆帯の上の狭小な口縁部に，縦位または斜位の沈線が施されるもの（２～５・７～11・13・15・18），無文のもの（６・12），横位の押し引き文（14・16）が認められた。また，これらの沈線や押し引き文を描く施文具には，３種類が認められた。３～４㎜幅の円形竹管状の工具を用いて沈線を描くもの（２・３・５・８～11），幅１㎜程度の先端が尖った棒状工具を用いて描くもの（４・７），半截竹管を用いて沈線を描くもの（13・14・18）がある。隆帯上には指頭による連続押圧が施される。刺突により円形や楕円形を呈す。13では棒状工具，16は縄圧痕による刺突と考えられる。

胴部には地文として，Ｓ字状連鎖沈文が施される資料が大半である。原体に節が明瞭に認められるもの（２・３・18）もある。14はＳ字状連鎖沈文というよりは，葺瓦状撚糸文とみられる。16の胴部には単節の斜縄文が観察できる。15は波状口縁で，横位隆帯および波頂部から垂下する隆帯にも指頭圧痕が施される。口唇部には連続する細沈線が施され，横位の隆帯以下には半截竹管工具による斜位の沈線が施文される。16は口唇部を指頭による押圧で，小波状口縁を形成している。隆帯上の狭い施文帯には幅1.2㎝の半截竹管状工具により，連続する刺突を施している。

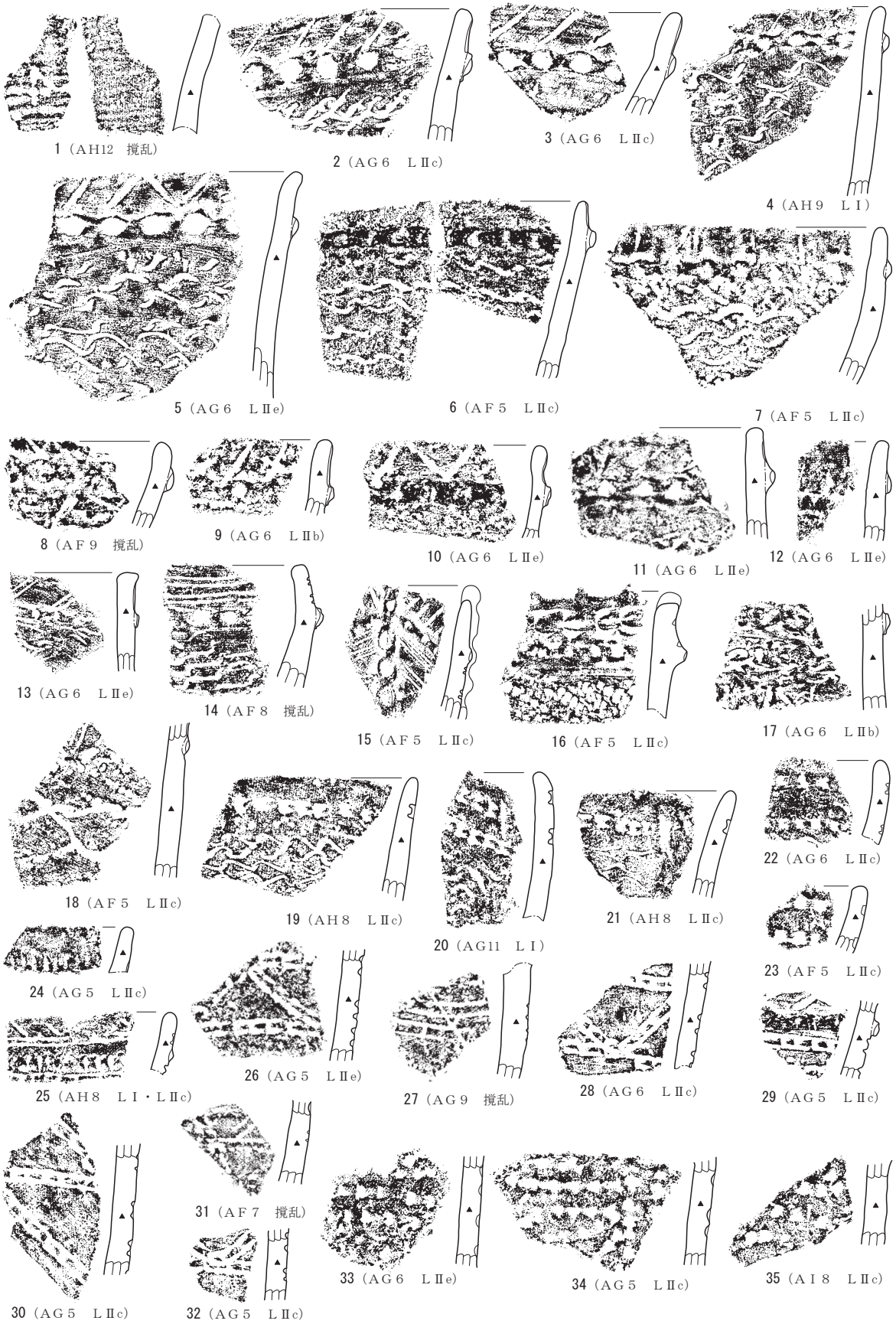


図19　遺構外出土遺物（１）

２類（図19－19～35，20－１～11，写真27・28）　１類同様，器形をうかがえる資料はないが，口縁部器形は図19－19のように直線的に立ち上がる器形，20のように内湾しながら立ち上がる器形，21のように外反する器形がある。

図19－19～25は口縁部資料で，主に連続する横位の刺突文が施文される。19・22は１列の横位の連続刺突文，20は２列の連続刺突文が施される。20は波状口縁である。25は口縁部上から斜位の沈線，半截竹管状の工具による横位押し引き文，棒状工具による縦位の連続刺突文，さらには半截竹管状の工具による横位の連続刺突文が施されている。19～21の胴部にはＳ字状連鎖沈文が施文されている。図19－26～32，図20－１～11は連続する刺突文を斜位や横位に施文して，何らかのモチーフを描くものを集めた。26・28～30・32は６～７㎜幅の半截竹管状工具を用いている。27・31は幅５㎜程度の工具を用いている。33～35は竹管の外皮側を鋭角に倒した状態で施文した連続刺突文である。横位・斜位や縦位にも施文される。胎土の色調や粒度から，同一個体の可能性が高い。

図20－１～10は４～５㎜程度の半截竹管状工具により細かい連続刺突を施している。図20－１～10は，図19－26～32の連続刺突とは異なり，非常に細かい刺突が施され「押し切りをする」と言う表現が適当であろう。胎土は堅地で繊維混和痕は認められなかった。色調は黄褐色を示す。１は口縁部資料で，器形は浅鉢になるのであろうか。口縁頂部には沈線が認められることから，口唇部に沈線が巡っていたと想定できる。体部には少なくとも２条の連続刺突が認められる。２も浅鉢の資料であろうか。横位の連続刺突文を境にして上位は無文，下位は単節斜縄文を施している。３～９は地文とする単節斜縄文上に，連続刺突文によって幾何学状の文様を描く資料である。３～６は胎土や色調から同一個体と考えられる。７も細かい連続刺突文により，木葉文状の幾何学文を描出する。８の横位の連続刺突の上位には円形刺突が確認できる。８・９は胎土や色調から同一個体と判断した。10は横位の連続刺突文が施文されるが，押し込みが浅く沈線に近い。11も連続刺突により文様を描くが，器壁は厚く図20－１～10の胎土とは色調が異なる。

３類（図20－12～23，写真28）　２類の連続刺突文とはやや区別が困難であるが，刺突間に隙間が認められる資料を本類とした。胎土中には繊維混和痕は顕著でなく，わずかに観察できるほどである。13・14は口唇部がわずかに外反する口縁部資料である。13は波状口縁となる。いずれも口縁部直下には横位の細沈線施文後に棒状工具による縦位の刻みを施している。さらに胴部には幅６㎜程度の半截竹管状工具を用いて縦位に浅い連続刺突を施している。15～17は口縁部または口縁部に近い胴部に，Ｃ字状の刺突が施される資料である。15は３条の刺突列が施され，最上列には刺突後に横位沈線を引いている。胴部には斜縄文が施文される。16は２列の刺突列上に横位沈線を引いている資料である。17はわずかに貼付した隆帯上と隆帯下位に５㎜幅の半截竹管状工具により横位に３条の刺突列が施される。胴部には斜縄文が施文される。

18は口縁部直下に細い横位隆帯を貼付し，隆帯上に竹管の外皮側を鋭角にした状態で刺突を施している。また，胴部にも同様の工具で横位に刺突列を施文している。19は縄文地文上に半截竹管状工具により，深く刺突している。20・21は直線的に立ち上がり，口唇部がわずかに外反する器形と

なる。無文地に指頭による刺突が観察される。胎土や色調の特徴から，同一個体である。22は指先でつまむようにして２条の刺突を施文している。23は直線的に立ち上がる器形で，口縁部には指頭により横位刺突を施している。胴部には単節の縄文が施文される資料である。

４類（図20－24～28，写真28）　主に沈線により主文様を描出するものを本類とした。資料点数は少ないが，施文法などはバラエティに富む。24は口唇部が丸みを帯びる口縁部資料で，細い棒状工具により横方向に２条の刺突を施している。胴部には沈線により網目状撚糸文をモチーフとした斜格子が描かれている。25は波状口縁をなす，口縁突起である。肥厚した突起頂部から沈線が描かれる。26は丁寧に磨かれた器面に楕円状のモチーフを描出している。27は楕円状のモチーフを描出した沈線間に，竹管により刺突を加えている。28は半截竹管状工具により楕円状のモチーフを描く。

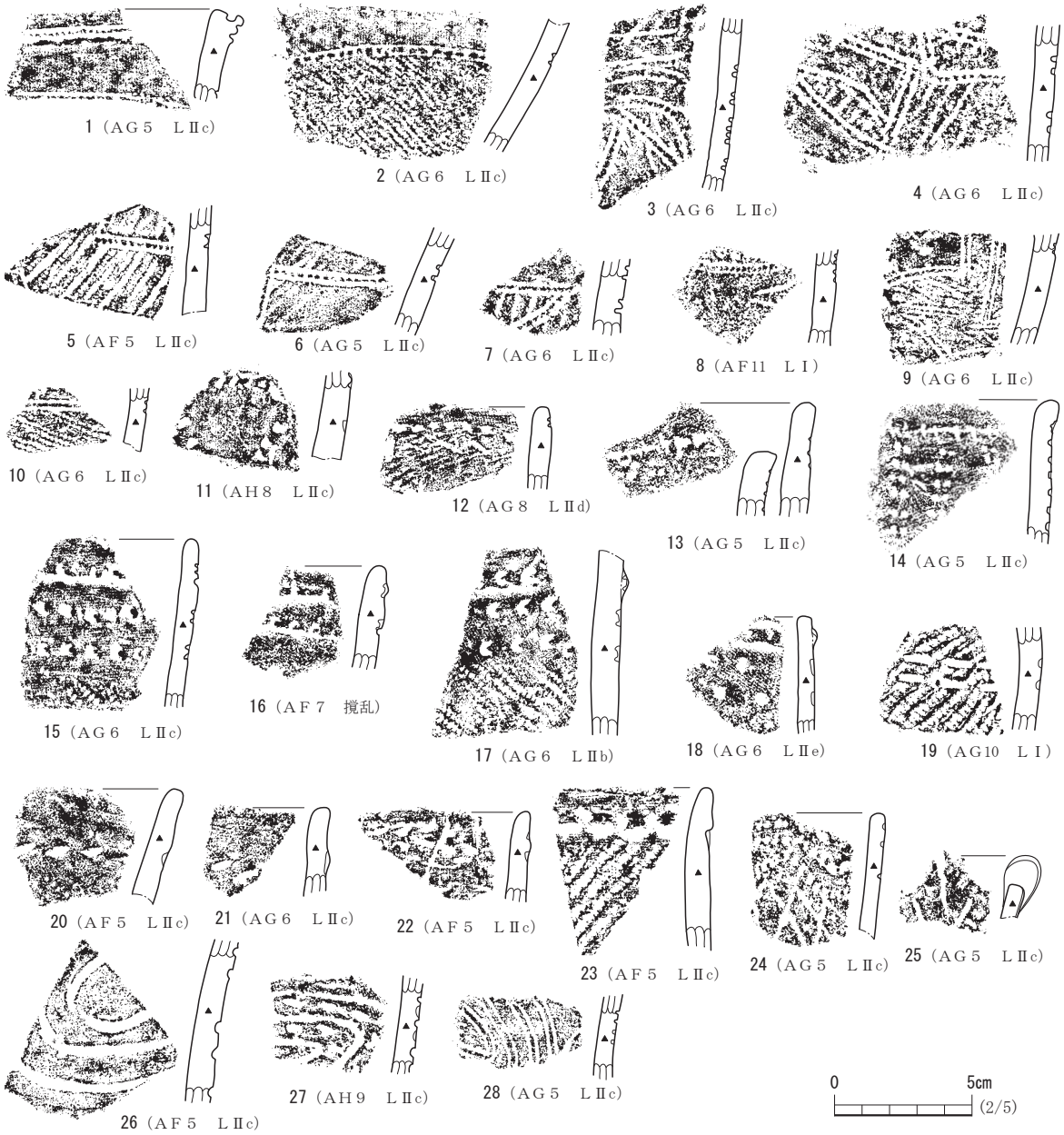


図20　遺構外出土遺物（２）

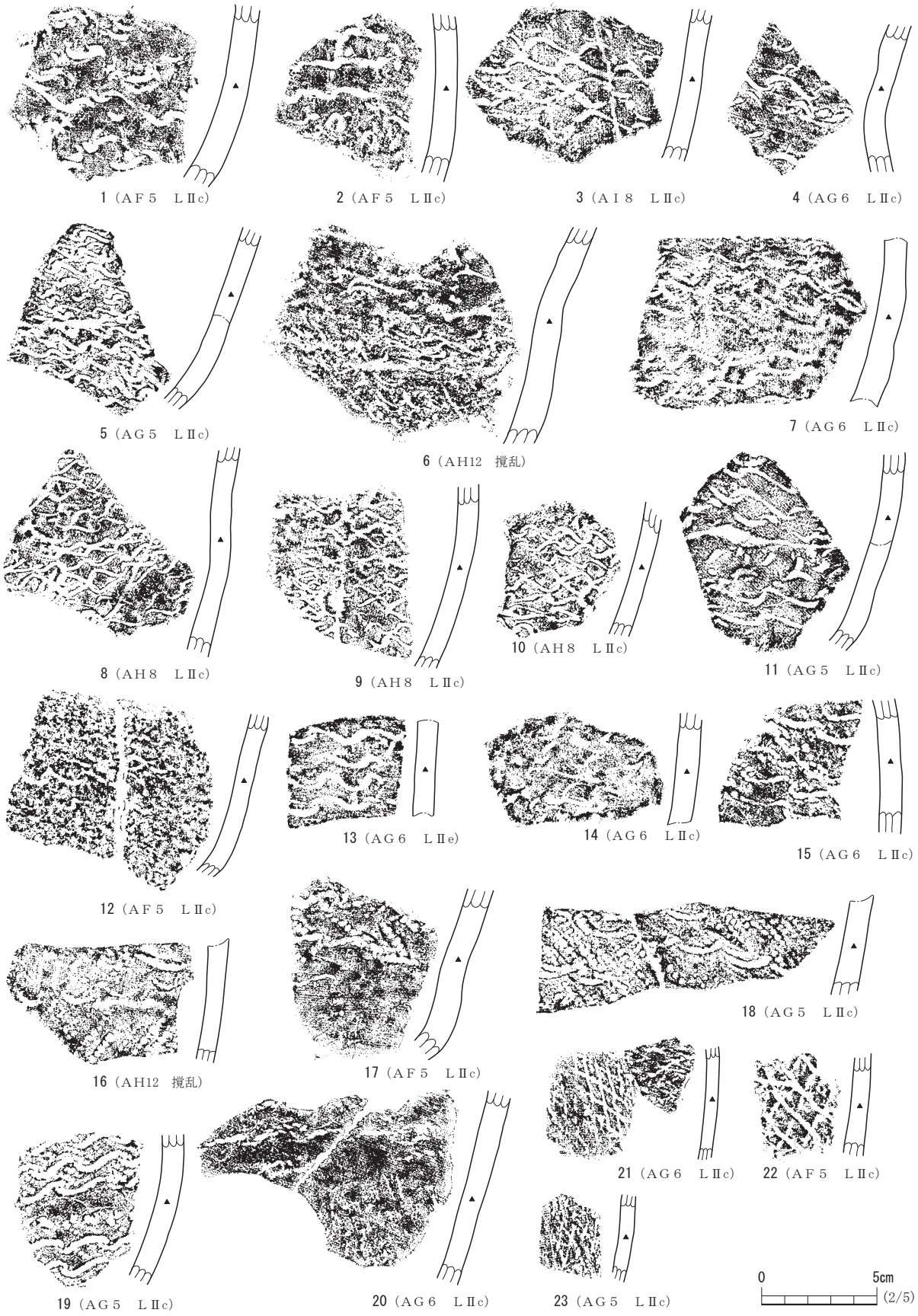


図21　遺構外出土遺物（３）

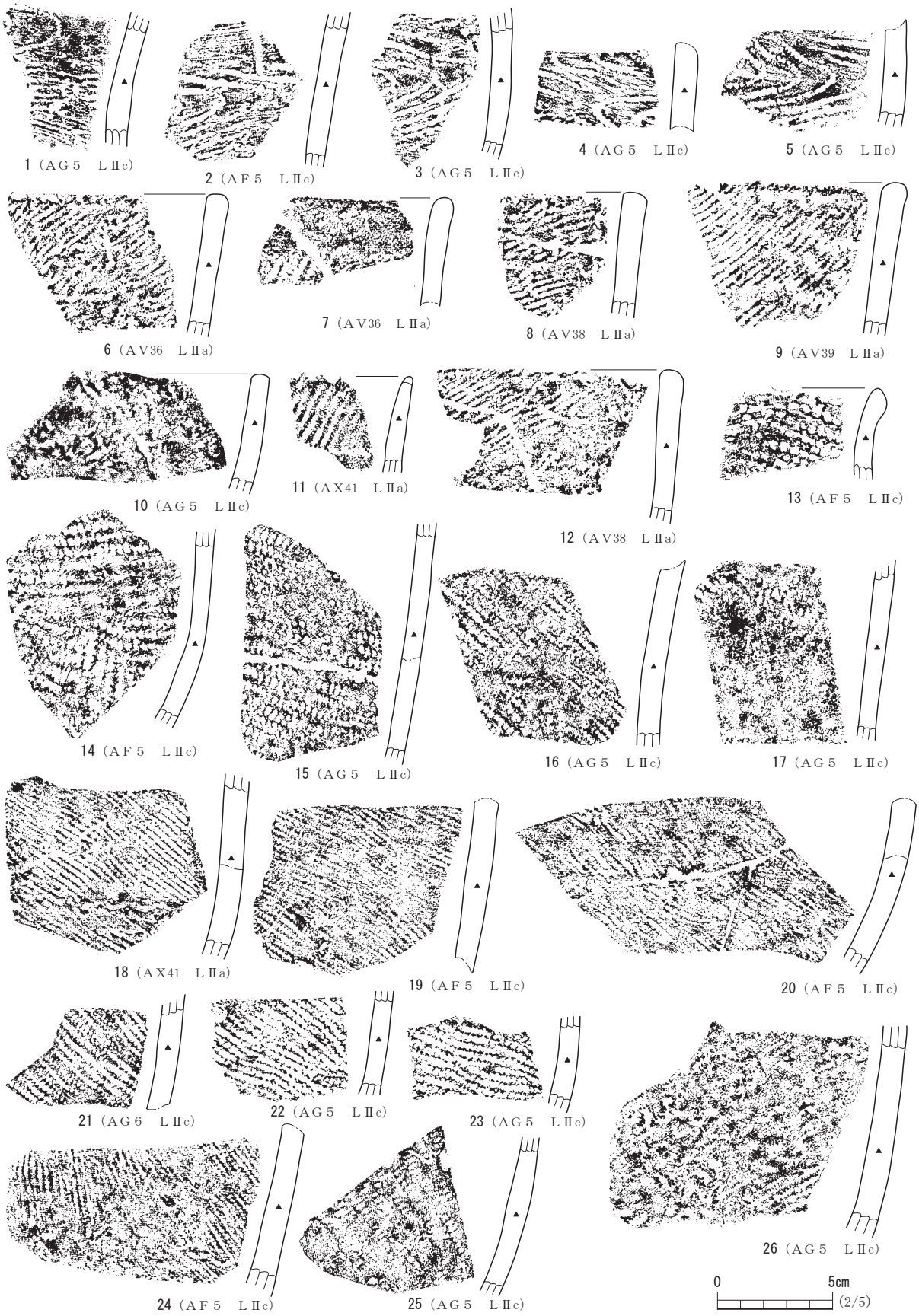


図22　遺構外出土遺物（４）

描かれた楕円の中央には半截竹管状工具による刺突が認められる。

５類（図21・22・23－１～５，写真29・30）　地文のみのものを本類とした。図21－１～20は大木２ｂ式土器のメルクマールとされる，Ｓ字状連鎖沈文が施文されている胴部資料である。遺物包含層および遺構外出土遺物として出土した資料の大半は，このＳ字状連鎖沈文と縄文が施文された資料である。４・６・８・17などから胴部には，屈曲が認められるようである。図21－15～20の資料には，撚糸の中に縄の節が明瞭に認められる。

図21－21～23は網目状撚糸文が施された資料である。図22－１～５は木目状撚糸文が施文された資料で，胎土や色調の特徴から，同一個体の可能性が高い。網目状撚糸文と木目状撚糸文の資料数

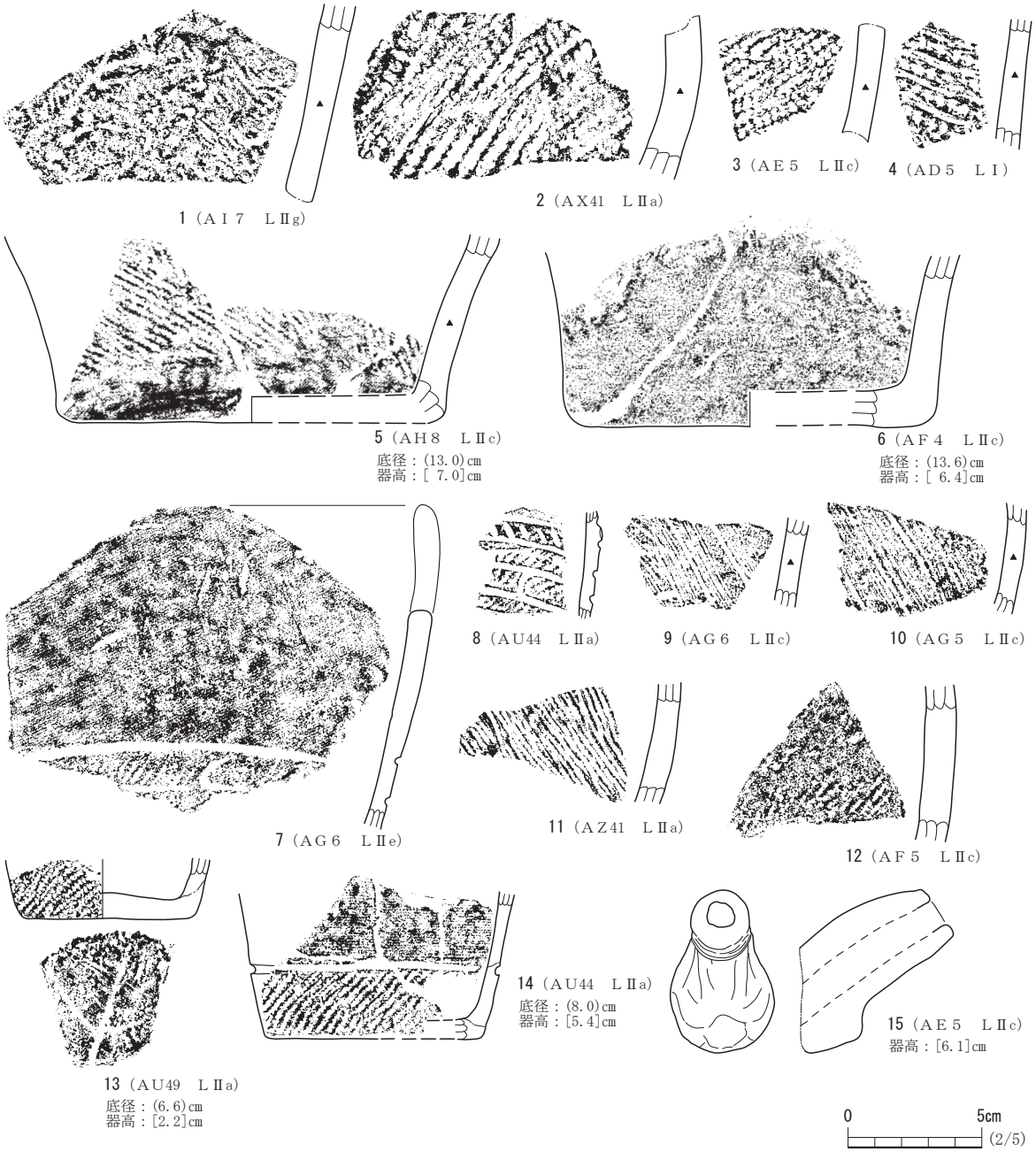


図23　遺構外出土遺物（５）

は少なく，破片も小さいため全形の把握は困難である。

図22－６～26，図23－１～５に縄文が施文された資料を掲載した。６～13は口縁部資料である。直線的に立ち上がる器形（６・８・９・12），外反する器形（７・11・13），内湾する器形（10）が認められる。資料の多くは器面に単節の斜縄文が認められ，胎土には繊維痕和痕が観察できる。図22－11は口唇部に刻みが施されている。13は単節の横位縄文が認められる。図23－３は器表面が荒れていて明瞭ではないが，複節の斜縄文と考えられる。４は直前段合撚と考えられる。５は底部に近い胴部資料で，やや丸みを帯びて底部に至る。６は無文の底部資料である。

Ⅲ群土器（図23－７～15，写真31）　縄文時代後期の土器を掲載した。７は大波状口縁になる資料である。横位２条の沈線間には，磨り消し縄文が認められる。８は区画された沈線間に刺突を施し，また沈線間を連絡する資料である。９・10は条線が施された胴部資料である。長石や金雲母が混入する特徴的な胎土である。同一個体の可能性が高い。11・12は斜縄文が施文された胴部資料である。13・14は底部資料である。13は底部に木葉痕が認められる資料である。14は小型土器の底部資料である。横位の沈線下位に磨り消し縄文が認められる。15は注口土器の注口部である。

Ⅳ群土器（図24－１～３，写真32）　Ⅳ群土器としたのは，平安時代の土師器と須恵器である。少数のため一括して掲載する。

土師器は遺構外からの出土点数は少なく，また小破片であるため図示可能な１点のみ掲載した。１は内面が黒色処理されたロクロ成形の土師器杯である。体部からやや内湾しながら立ち上がり，口唇部は先細りとなって立ち上がる器形である。器面が荒れていて明確ではないが，底面はケズリによる再調整が行われていると思われる。

須恵器も出土点数が少なく図示できた資料は２点である。２は口縁部が大きく開く甕の口縁部資料である。外面には自然釉が観察できる。３は甕の胴部資料である。外面に平行タタキ目，内面には同心円文状のアテ具痕が残る。

土 製 品（図24－４，写真32）

土器片製の円板を図示した。土器片の周縁を打ち欠いて円形に製作している。短沈線により鋸歯状に施文した土器片を用いている。胎土には繊維混和痕が観察できる。縄文時代早期後葉頃の土器を材料としている。

羽　　口（図24－５，写真32）

５は吸気部が欠損した羽口である。遺物包含層内から出土している。先端部内径2.0㎝，遺存長12.0㎝である。先端部には溶着滓が付着し，熱による変色範囲も確認できる。

鉄 製 品（図24－６，写真32）

６は断面形が１㎝ほどの四角形であり，軸も長いことから鋳と判断した。両先端は遺存していない。一端には木質が大きく残る。ＬＩからの出土であり，近世までさかのぼる可能性も考えられる。

石　　器（図24－７・８，写真32）

遺構外から出土した石器類は10点である。剥片石器・礫石器ともに出土量が少ないのが特徴的で

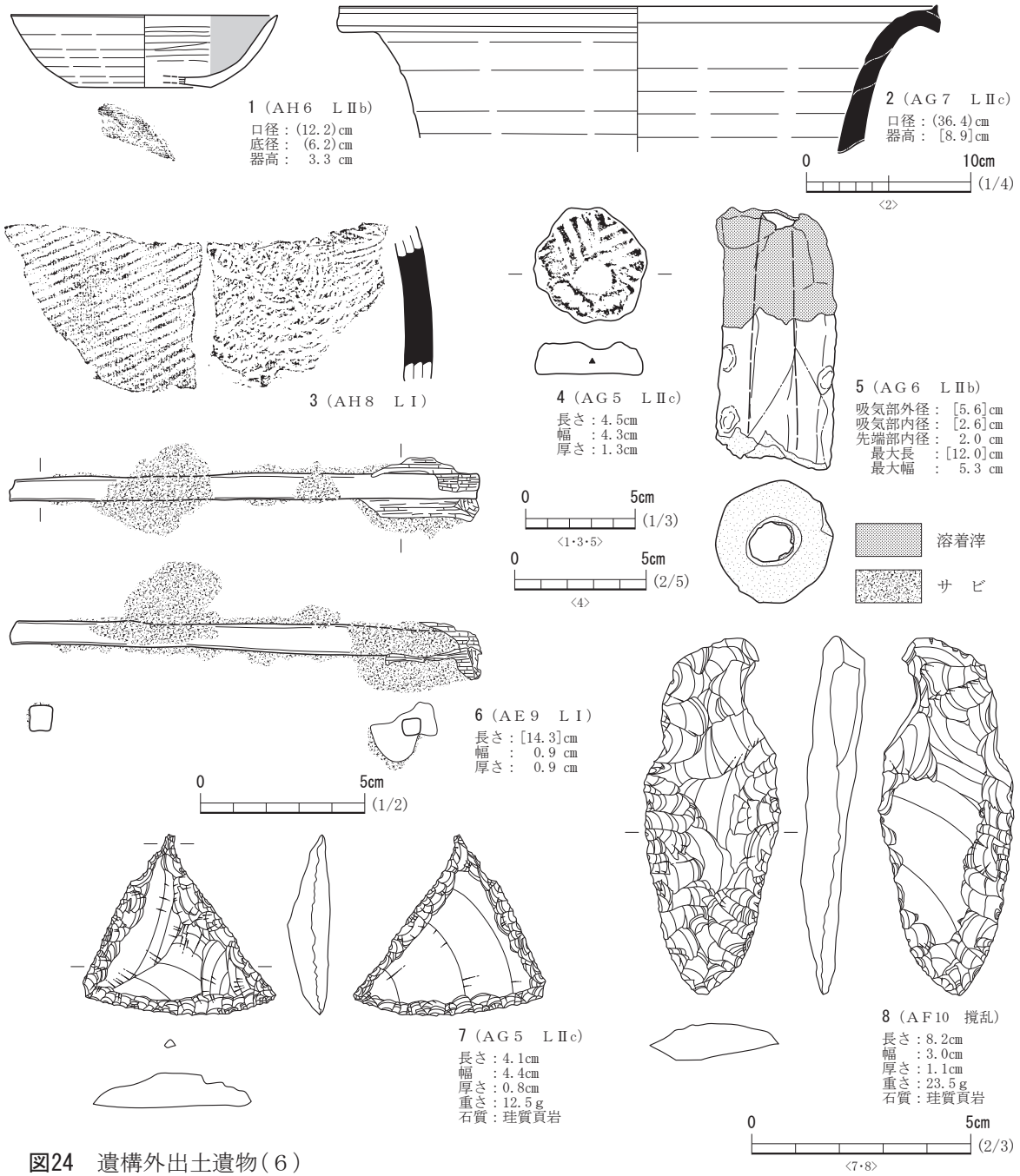


図24　遺構外出土遺物（６）

ある。製品として認められた２点について記載した。そのほかは剥片７点，礫石器１点である。７は遺物包含層内から出土した。つまみは貧弱ではあるが，調整剥離が施されていないことや縁辺に連続する細かい調整剥離が観察できることから，石匙と判断した。縦長の素材を横方向に用いており，形態は三角形状となる。表裏の側縁には調整剥離が巡る。石質は珪質頁岩である。

８は石匙である。縦長剥片を素材とし，打面側につまみ状のえぐりを有する。先端から両側縁には剥離調整を施している。裏面は片側に連続した調整剥離を加え，角度を作り出している。風倒木痕より出土した。石質は珪質頁岩である。（三　浦）

第３章　ま　と　め

宿仙木Ａ遺跡２次調査で検出した遺構は，竪穴住居跡４軒，土坑12基，鍛冶炉跡２基，焼土遺構１基，溝跡１条である。竪穴住居跡は１軒が奈良時代，２軒が平安時代，１軒が縄文時代である。土坑は８基が縄文時代，４基が平安時代に属すと考えている。鍛冶炉跡は時期を決定できる資料は出土しなかったが，いずれも平安時代とした。また，溝跡は近世以降と考えている。焼土遺構については，時期不明である。遺物では遺構および遺物包含層より，縄文土器片2,090点，土師器172点，須恵器９点，石器17点，羽口１点が出土している。

宿仙木Ａ遺跡２次調査は，遺跡のほぼ中央部を南北に縦断しているような調査区である。相馬農水関連の１次調査と合わせても宿仙木Ａ遺跡における調査面積は5,904㎡であり，推定される遺跡面積75,000㎡の13分の１である。調査した面積はわずかであり，遺跡について断片的にしか明確になっていない。

２次調査における縄文時代の痕跡は，縄文時代早期・前期・後期の遺構または遺物が認められた。１次調査については既に報告済である(『県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅱ・広域農道整備事業相馬２期地区遺跡発掘調査報告』)。以下では，１・２次調査において明らかとなった遺構・遺物の特徴について大まかな時期ごとに概観し，調査のまとめとする。

１．縄文時代早期

縄文時代早期に属す遺構は土坑２基(21・25号土坑)が認められた。21号土坑堆積土内より縄文条痕文系土器(図15－１～３)が出土していることから，早期末葉頃と考えている。また，25号土坑も同様の時期と判断した。北・南調査区に１基ずつ認められている。該期の資料は遺構外から出土資料も小破片であり，量も少ない。

さらには条痕－条痕文土器(図19－１)１点が遺構外からも出土している。宿仙木Ａ遺跡では，現時点においては縄文時代早期後半までさかのぼる人類の痕跡が認められた。遺跡の中央部が大きく削平を受けている現状では早計かもしれないが，本遺跡は当時においては集落というよりはキャンプサイト的な利用であったと考えられる。

２．縄文時代前期

本調査区における縄文時代の主体となる縄文時代前期の時期には，土坑３基(20・22・23号土坑)と遺物包含層が確認されている。また，わずかであるが遺構外からも該期の資料が出土している。

20号土坑は長軸・短軸ともに２ｍを超える比較的大型の土坑である。出土した遺物は図14－８～21などの羽状縄文が施された土器で，口縁部が屈曲して内傾する器形である。このような特徴より，

前期前葉の花積下層式土器と判断している。口縁部文様帯は認められず地文のみであるが，図14－14から，花積下層式土器の新段階と考えられる。また，器壁が薄いことから脆く，繊細な土器片である。床面上からは柱跡や炉などの付属施設は認められなかったが，平面形や規模から住居跡であった可能性も疑える土坑と考えている。

遺物包含層および22・23号土坑は，北調査区から近接して認められた。住居跡は認められていないが，遺物包含層の主体となる時期が前期中葉であり，本遺跡出土縄文土器の大部分を占める。これらの出土遺物は，大木２ｂ式期から大木３式期に属すものと考えられる。これらの土器は北側調査区の遺物包含層より，まとまって出土している。以下では，縄文時代前期中葉の土器について概観する。

本調査区において出土した縄文時代前期中葉の資料は，大木２ｂ式期から大木３式期の土器群と考えられ，少なくとも２つの土器型式が包括されている。第２章５節で報告した資料は，施文方法から５類に分類して報告している。これは大木２ｂ式土器～大木３式土器への連続性が看取でき，それぞれの型式に当てはめることが困難であったためである。

この大木２ｂ式土器から大木３式土器は，県内を概観しても報告例が多い資料ではない。また，破片資料が多く，器形が確認できる資料も少ない。大木２ｂ式土器・大木３式土器は，土器型式の概念が各報告者によって多少のバラつきが認められるという現状がある。

１類土器は口縁部に連続する斜位または縦位の沈線を有し，刻み目をもつ隆帯が貼付される口縁部資料と胴部にＳ字状連鎖沈文を地文とする土器が大半を占める。これらの特徴は興野義一による大木２ｂ式土器に当てはまる特徴と一致する。本遺跡出土の大木２ｂ式土器は口縁部文様帯に文様が集約される点，横位の隆帯が多くの資料に貼付される点，地文にＳ字状連鎖沈文が施される点が特徴的である。口縁部文様帯には沈線文・刺突文・連続刺突文の３種が主に認められる。本遺跡出土資料では，連続刺突文が主流の文様構成をとる。胴部文様はＳ字状連鎖沈文が施文される。おそらく１類土器でかつ，Ｓ字状連鎖沈文を有する土器は，大木２ｂ式土器と判断できる。図19－16は１類土器の要素を取り入れつつ，口縁部には沈線ではなく半截竹管状工具による連続刺突，胴部には縄文が施文された例である。大木２ｂ式土器の胴部文様は，Ｓ字状連鎖沈文ばかりで縄文施文がまったくないとは言及できないため，諸要素から，大木２ｂ式土器の範疇で捉えられると考えている。図19－14は胴部にＳ字状連鎖沈文が認められるが，屈曲する器形で口縁部文様帯に横位の連続刺突が施文されることから，大木２ａ式期の要素が残る。同図15は縦位にも隆帯が認められることから，大木３式土器と考えられる。

２類の半截竹管状の工具を用いた連続刺突文により主文様を描く資料のうち，幾何学文を描出する図19－24～35，細かく刻むように連続刺突する図20－１～10の資料は，大木３式土器に含まれる資料と考えられる。図19－19～22に認められたような横位に展開するだけの連続刺突から，連続刺突によりモチーフを描くようになった段階である。また，口縁部のみの文様帯が，胴部上半にまで文様帯の範囲を広げている。特に図20－３～10は諸磯ａ式土器に認められる文様構成も含まれてい

る。さらに，図20－８のように円形竹管による刺突文が施された土器も確認されている。

３類のＣ字状の刺突を施した土器(図20－15～17)については，胴部には斜縄文を施す点，口縁部文様帯が幅広になることなどから，大木３式土器の特徴が垣間見える資料である。図20－13・14は胴部にまで刺突が及んでいることから，大木３式の範疇で考えられる。

４類とした沈線文により描出する土器については，曲線文を描き沈線間に刺突を施すなどの特徴が認められるため，大木３式土器に含まれる資料である。しかし，本調査において出土した資料数は少ない。

地文のみ集めた５類土器のうち，Ｓ字状連鎖沈文が施文されている土器は，ほぼ大木２ｂ式土器と考えられる。しかし，会津高田町鷺沢遺跡遺物包含層出土資料(引用・参考文献ⅱ，図18－１)や小野町小滝遺跡遺構外出土遺物(引用・参考文献ⅲ，図53－１)においては，Ｓ字状連鎖沈文が施文されながらも刺突された隆帯または連続刺突文によって幾何学文様を描出している。これらは，大木２ｂ式土器最大のメルクマールであるＳ字状連鎖沈文を有しながらも，大木３式土器の様相をもつ資料とされている。このことから少なくとも大木３式土器の古い段階には，Ｓ字状連鎖沈文が残ることを意味している。図21－21～23の網目状撚糸文は，大木２ａ式土器から大木３式土器にも存在するとされる。南相馬市鹿島区の宮前遺跡においても網目状撚糸文が認められ，大木２ｂ式土器においても客体的ながら，網目状撚糸文は存在すると考えておいたほうがよい。また，木目状撚糸文が施文された土器(図22－１～５)も網目状撚糸文同様，大木２ｂ式期にも存在する可能性が考えられる。地文が単節斜縄文の土器は，断定できないが大木３式土器に含まれる可能性が高いと考えられる。しかし，図19－16の胴部に縄文施文が観察できることから，大木２ｂ式土器に縄文が施文される可能性がある。

以上のことより，本調査区から出土した，口縁部文様帯に文様が集約され，横位の隆帯をもち，かつＳ字状連鎖沈文を所有する資料は，おおむね大木２ｂ式土器の範疇に納まるであろう。２・３類は胴部上半にまで文様が施文されていること，４類は大木２ｂ式土器に認められていない文様構成を用いていることから，大木３式土器に比定されると考えている。本報告中において２～４・６類とした土器の多くは，おおむね大木３式土器に該当すると考えられる。

本調査区において出土した資料やこれまでの蓄積による検討の結果，大木３式土器は，『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅶ　八方塚遺跡(第１次調査)』(山内1999)において山内が提案したように，大木２ｂ式土器において狭小な文様帯であったものが，幅広となり，胴部上半にまで文様帯が広がり，半截竹管による連続刺突文や沈線が展開するような構成が認められた段階において，大木３式土器の範疇と判断すべきではないだろうか。もちろんこのような文様構成の流れは，関東の諸磯ａ式土器にも通じるものがあると考えられる。

相馬市域を含め，県内においても数少ない大木２ｂ式～３式期の資料がまとまって出土したことは，該期を整理検討していく上での貴重な資料であると考えている。しかし，大木２ｂ式土器～大木３式土器については，各要素の折衷的な土器が多く，非常に緊密性・連続性が感じられる。ま

た，断片的な資料が多いのもこの土器群の特徴である。これだけの遺物包含層を形成する集落が，１・２次調査を通じて宿仙木Ａ遺跡からは認められていない。宿仙木Ａ遺跡の未調査区に本時期の集落が眠っていることを信じ，縄文時代前期中葉の空白期を埋める，さらなる資料の増加を期待したい。

３．縄文時代後期

２次調査では，１次調査で認められた後期初頭に属する資料は，まったく出土していない。２次調査では，後期中葉の遺構・遺物を確認している。出土した遺物から，加曾利Ｂ２式期と考えられる。該期の遺構は，住居跡１軒（ＳＩ03），土坑１基（ＳＫ19）である。３号住居跡は北調査区の段丘際から認められた。4.3×2.7ｍのそれほど大きな住居跡ではないが，床面上には地床炉を有していた。しかし，住居跡内からの遺物量は少ない。19号土坑は南調査区の南端から認められた。傾斜地に造られた比較的大型の土坑である。図14－１の浅鉢が土坑ほぼ中央から出土している。遺構外からの出土資料は，図23－７～15に示したが，きわめて少数である。遺物量は少ないが，住居跡や土坑が認められることから小規模な集落が営まれていたと推測できる。

１次調査では竪穴住居跡は認められなかったが，後期初頭の土坑群が認められている。（『県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅱ・広域農道整備事業相馬２期地区遺跡発掘調査報告』）中において土坑と報告した中には，堆積土の状況から掘立柱建物跡の柱穴の可能性が想定できる土坑も散見できる。また上部の削平が著しいことから鑑みて，該期には掘立柱建物跡を含む小規模な集落が存在していたと考えられる。

このことから同遺跡内において，後期初頭と中葉では，時期により居住域を異にしていたことが理解される。初頭も中葉も遺物量が少ないことから，規模が小さい集落であったと考えられる。

４．奈良・平安時代

奈良・平安時代には３軒の住居跡（２・４・５号住居跡），土坑４基（15～18号土坑），鍛冶炉跡２基（１・２号鍛冶炉跡）が該当する。住居跡は出土遺物から，５号住居跡は７世紀後半～８世紀初頭，２・４号住居跡は９世紀前半～中頃と判断した。１次調査においても同時期の住居跡１軒が調査されている。住居跡は遺存状況が悪く，破壊を受けている遺構が多い。１次調査で報告された１号住居跡を含めた住居跡の特徴をまとめた。

①規模が小さい。１号住居跡は約2.4×2.2ｍ，２号住居跡は約4.6×4.2ｍ，５号住居跡は約3.3×3.3ｍと小型の住居規模である。

②住居内施設が少ない。住居内にはカマドは認められるものの，柱穴が検出できた住居跡は２号住居跡のみである。床面上には柱穴は検出できず，また住居外にも認められなかった。上屋構造は不明のままである。

③カマドの使用痕跡が弱い。カマドの燃焼面の被熱は比較的弱く，短期間の使用であったことを

示していると思われる。

④出土遺物が少ない。削平を受けていることにも起因すると考えられるが，住居内からの遺物量が非常に少ない。このことも住居利用期間の短さということを表しているようである。

１号住居跡は，斜面下に煙道をもち，掘形構造を有している。このことは住居を掘り込んでいる層が礫層であるために床を貼り，固い礫層を掘り下げないで煙道を構築したためと理解している。奈良時代と平安時代の時期差はあるが，住居内構造には類似点が看取される。

住居内から出土した遺物はわずかである。奈良時代に属する資料は，５号住居跡から出土した非ロクロ成形の土師器甕のみである（図11）。平安時代に属する資料として，回転糸切り無調整（図６－１）のものと手持ちヘラケズリ再調整（図６－２，図９，図22－１）のものが観察できた。また，土師器甕はロクロ成形（図６－５）である。須恵器は図７－１の１点のみである。

奈良・平安時代に属すると考えられる土坑は，すべて木炭焼成土坑である。出土遺物がないため時期の断定はできないが，長年にわたるこれまでの調査資料の蓄積により，おおよそ奈良時代から平安時代頃に当てはまるであろうと考えている。大部分が破壊されていて，検出時には木炭層を残すのみであった。すべて南調査区より認められた。北調査区からも平安時代の住居跡が造られていることから，おそらく北調査区や北調査区と南調査区の間にも木炭焼成土坑は構築されていたはずである。しかし，掘り込まれた土層は，現代の耕作時に削り取られてしまったために土坑の痕跡は消失してしまったと思われる。

鍛冶炉跡も南調査区から検出した。円形に掘りくぼめた簡易な構造である。壁面や底面には焼土化範囲は認められたが明瞭でなく，短期間の使用であったことが推測される。堆積土中からの出土遺物がなく判然としないが，平安時代の住居跡が認められることから，同時期と考えている。北調査区からは羽口が出土し，１次調査では鉄滓が認められていることからも，宿仙木Ａ遺跡において鍛冶などの製鉄関連の作業を行っていた傍証となろう。平安時代の宿仙木Ａ遺跡では，鍛冶などを行う小規模な集落を形成していたと考えられる。（三　浦）

引用・参考文献

ⅰ会津高田町教育委員会	1984	『胄宮西遺跡　－縄文時代早期・前期集落の調査』
ⅱ(財)福島県文化センター	1992	「鷺沢遺跡」『国営会津農業水利事業遺跡調査報告Ⅻ』
ⅲ(財)福島県文化センター	1993	「小滝遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告21』
ⅳ(財)福島市振興公社	1993	「宇輪台遺跡」『第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告』
ⅴ(財)福島市振興公社	1995	「下ノ平Ｄ遺跡」『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』
ⅵ(財)福島市振興公社	1997	『中谷地Ｂ遺跡』
ⅶ(財)福島県文化振興事業団	1999	「八方塚遺跡（第１次調査）」『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』
ⅷ(財)福島県文化振興事業団	2003	「宿仙木Ａ遺跡」『県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅱ・広域農道整備事業相馬２期地区遺跡発掘調査報告』
ⅸ(財)福島県文化振興事業団	2005	「宮前遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告40』
ⅹ福島県教育委員会	2006	『福島県内遺跡分布調査報告12』
ⅺ福島県教育委員会	2007	『福島県内遺跡分布調査報告13』
ⅻ福島県教育委員会	2010	『福島県内遺跡分布調査報告16』

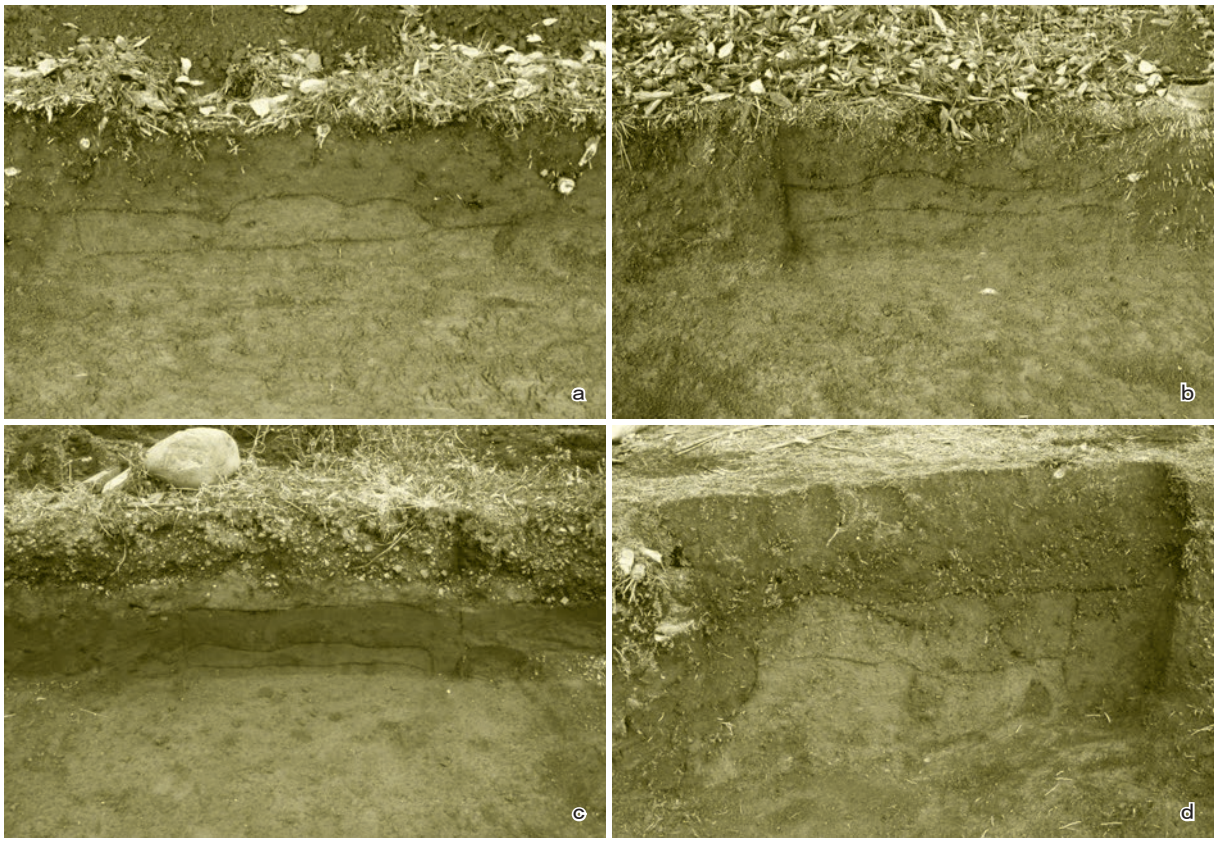
写　真　図　版

第１編　西原（にしはら）遺跡（１・２次調査）

1　遺跡の遠景（北側上空から）

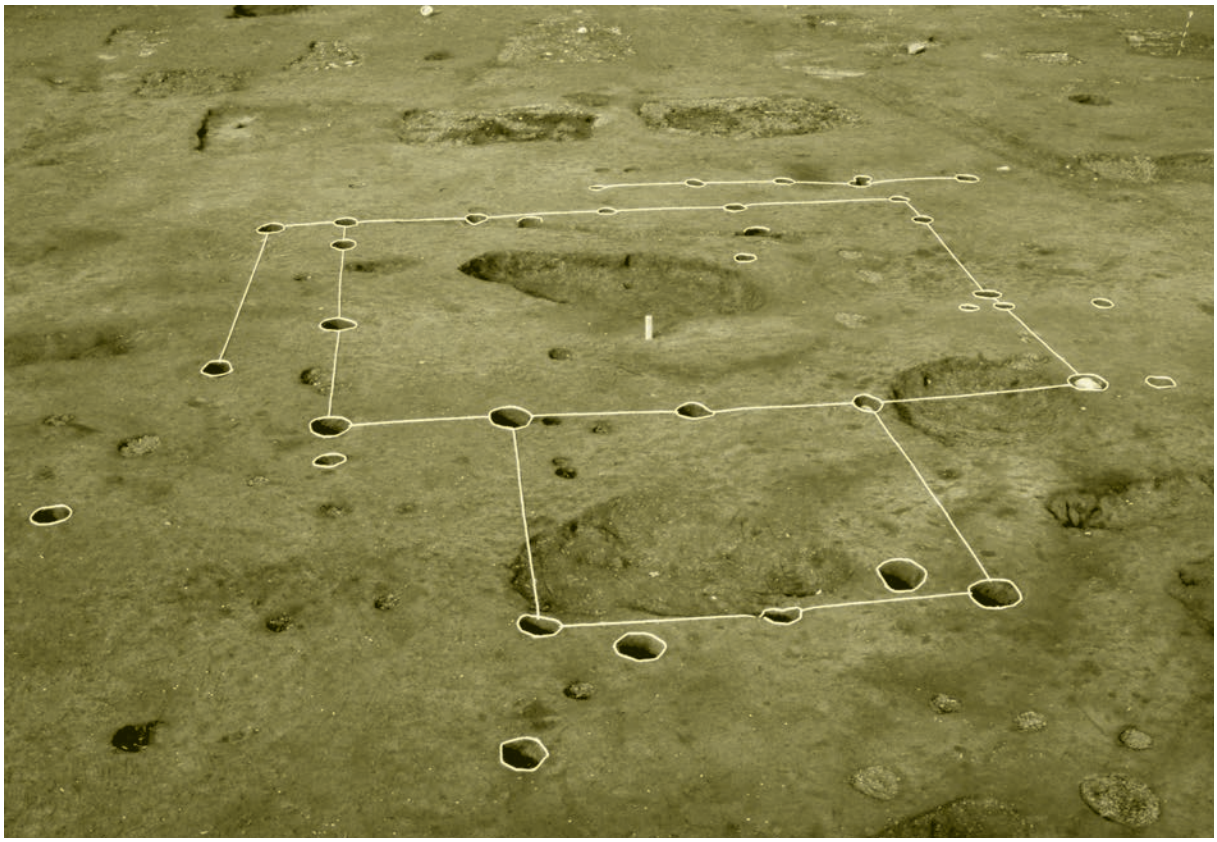
2　２次調査区全景（上空直上から）

３　１次調査区全景（北から）

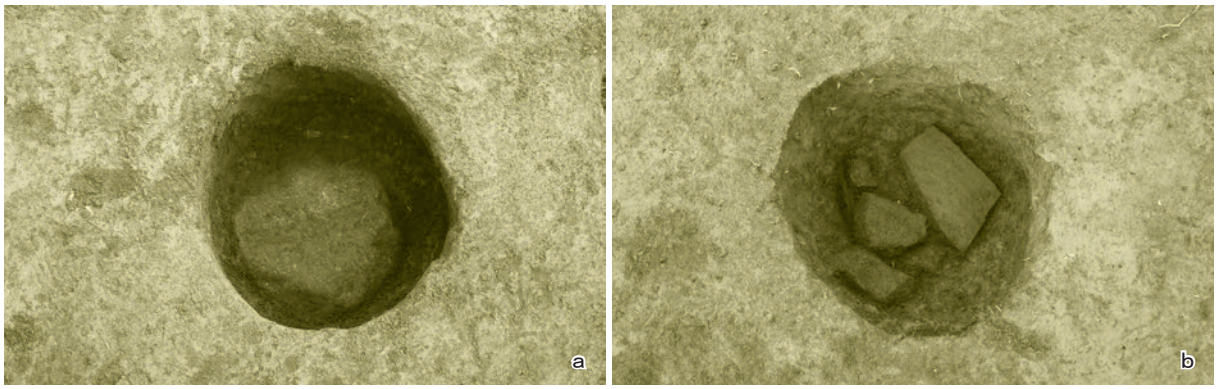


４　基本土層

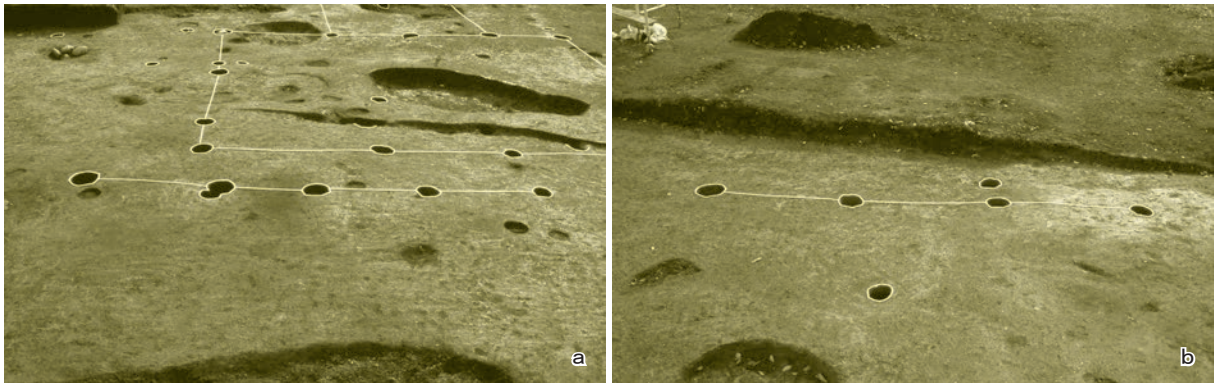
a　基本土層Ｂ－Ｂ’（東から）　b　基本土層Ｃ－Ｃ’（東から）
c　基本土層Ｄ－Ｄ’（西から）　d　基本土層Ｅ－Ｅ’（西から）



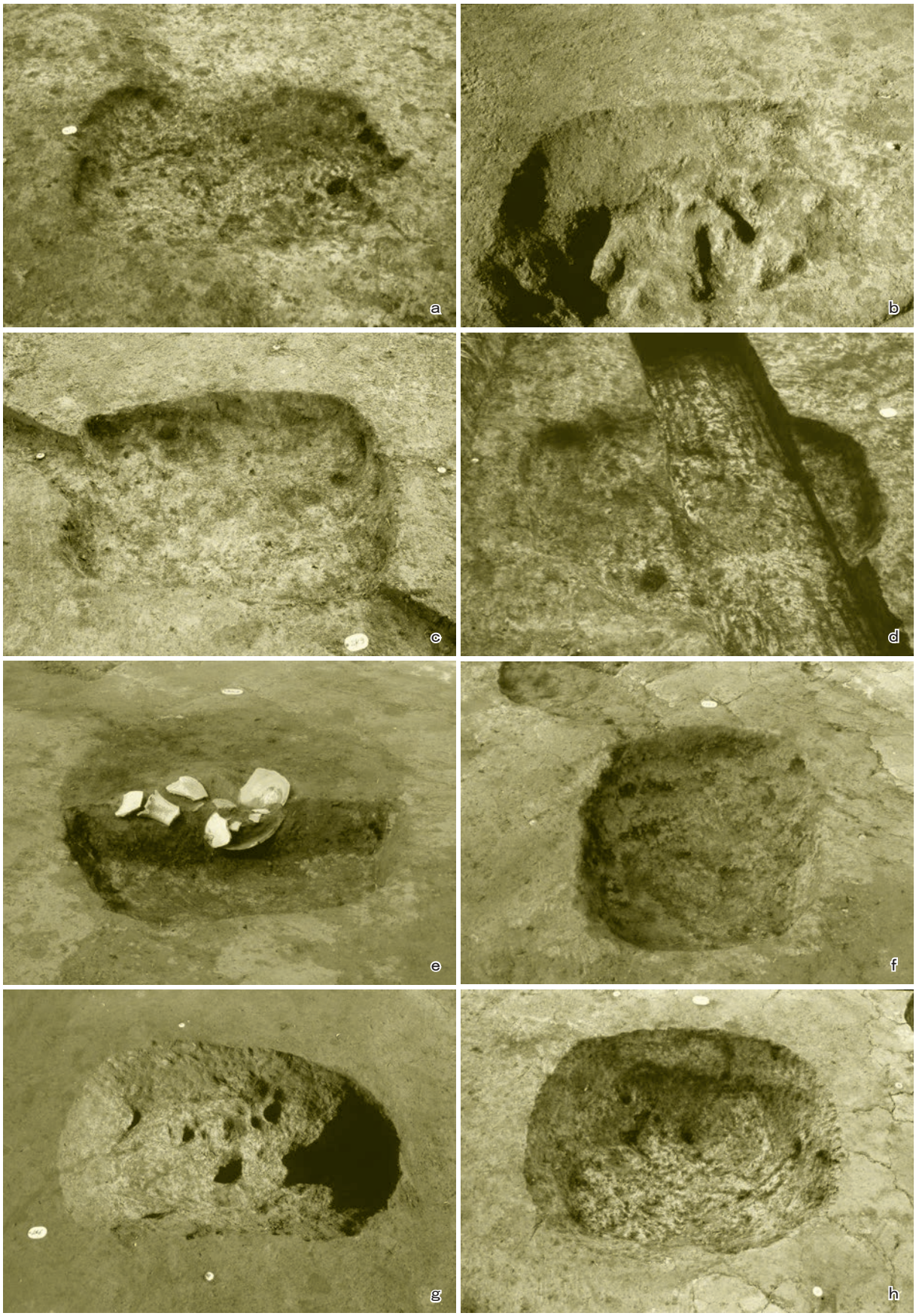
5　１号建物跡（南から）



6　１号建物跡柱穴　　a　Ｐ７ 根石出土状況（西から）　b　Ｐ12 根石出土状況（南から）

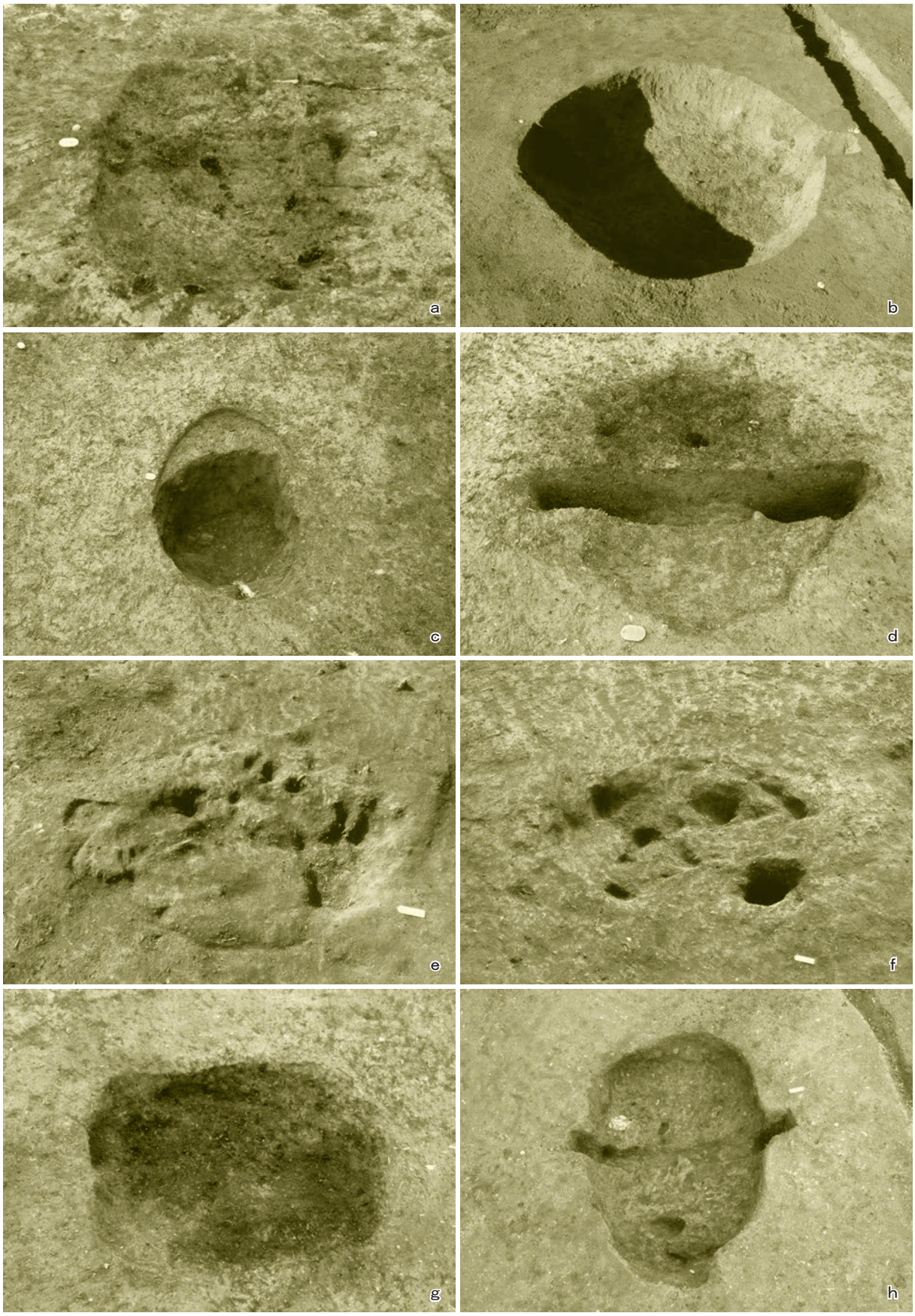


7　１・２号柱列跡　　a　１号柱列跡全景（北から）　b　２号柱列跡全景（北から）



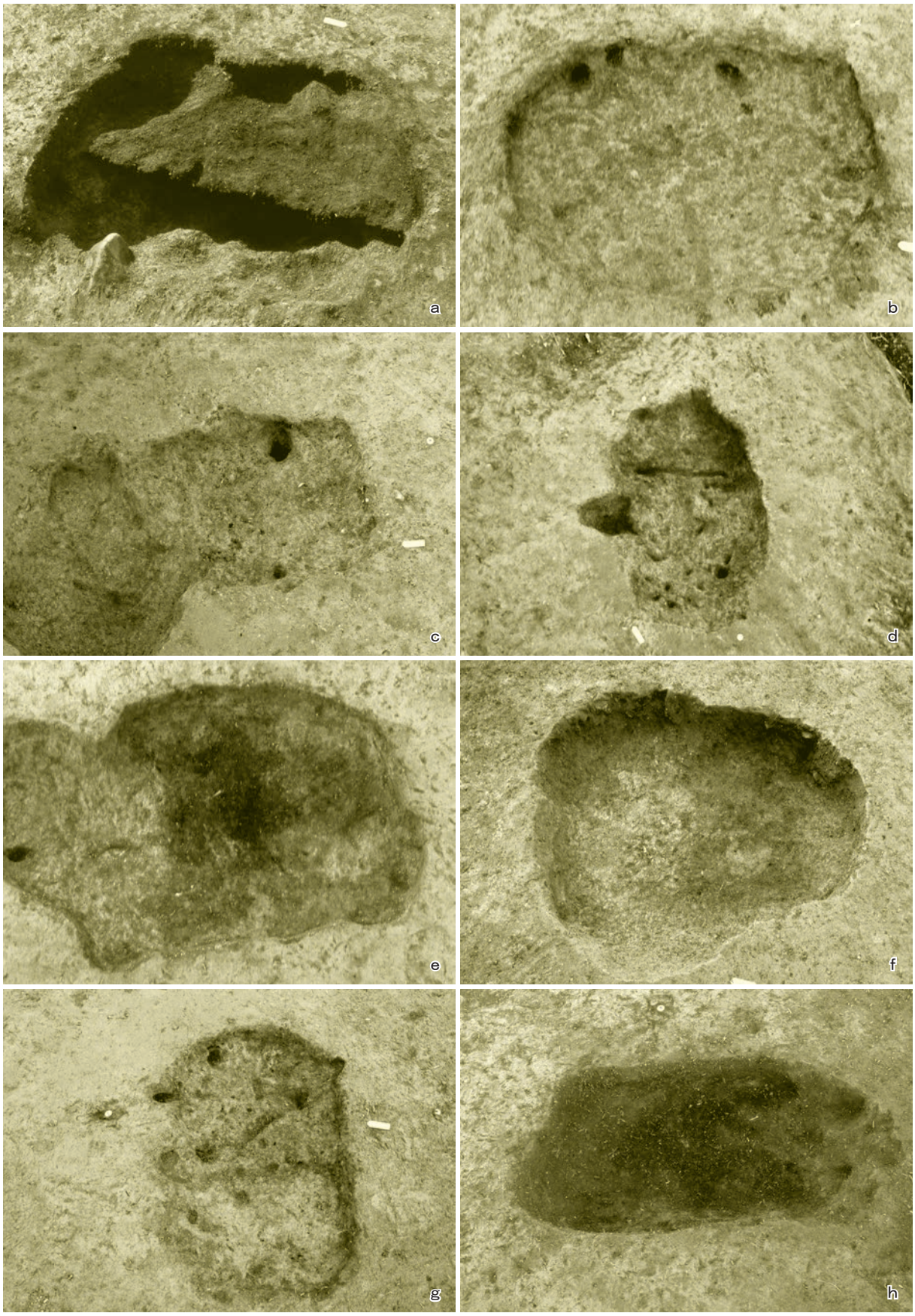
8　１～７号土坑

a　１号土坑全景（南から）
b　２号土坑全景（東から）
c　３号土坑全景（北から）
d　４号土坑全景（北から）
e　５号土坑遺物出土状況（南から）
f　５号土坑全景（南から）
g　６号土坑全景（南西から）
h　７号土坑全景（南東から）



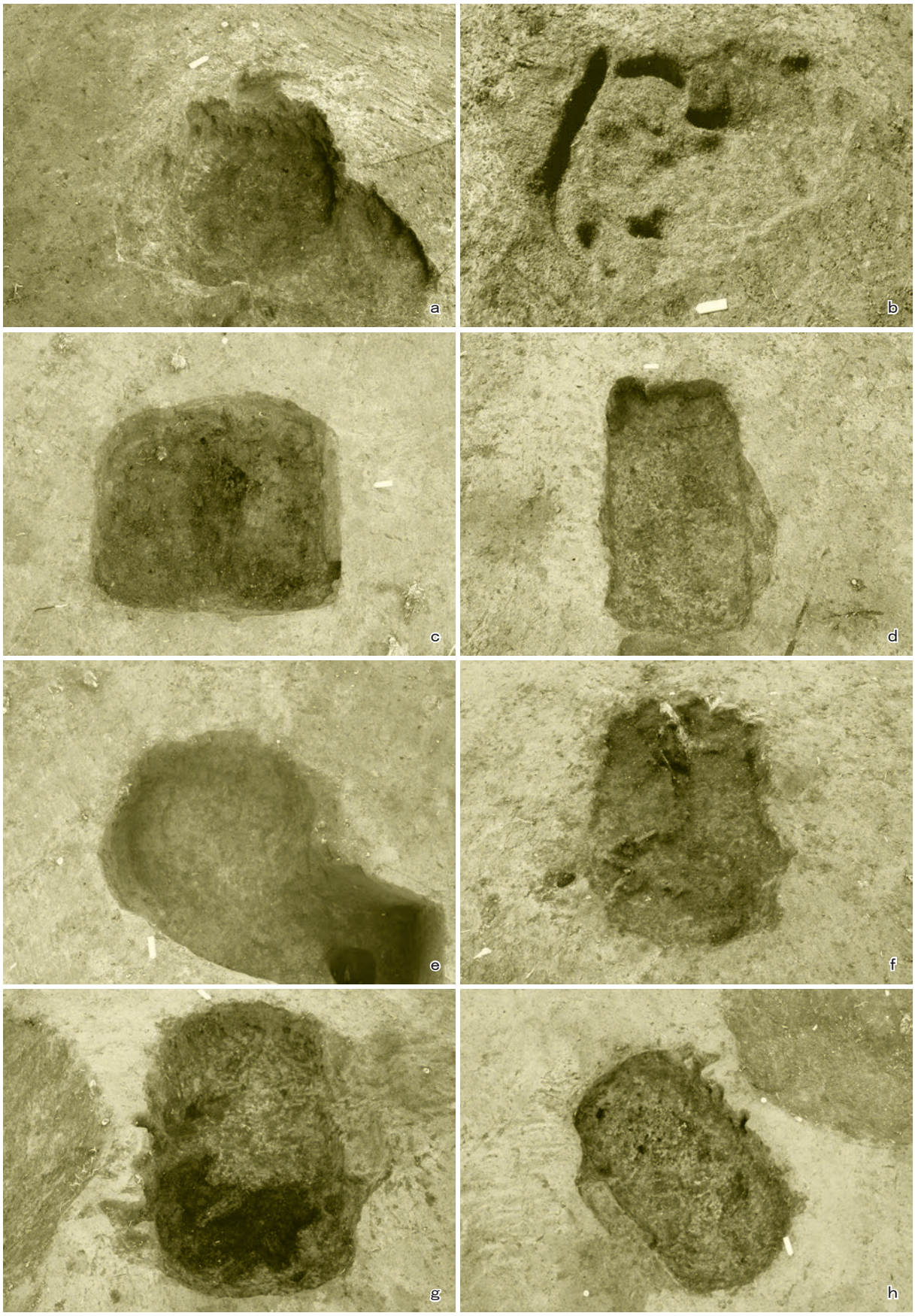
9　８～15号土坑

a　８号土坑全景（南から）
b　９号土坑全景（北から）
c　10号土坑全景（北から）
d　11号土坑全景（北から）
e　12号土坑全景（北東から）
f　13号土坑全景（北から）
g　14号土坑全景（北東から）
h　15号土坑全景（北西から）



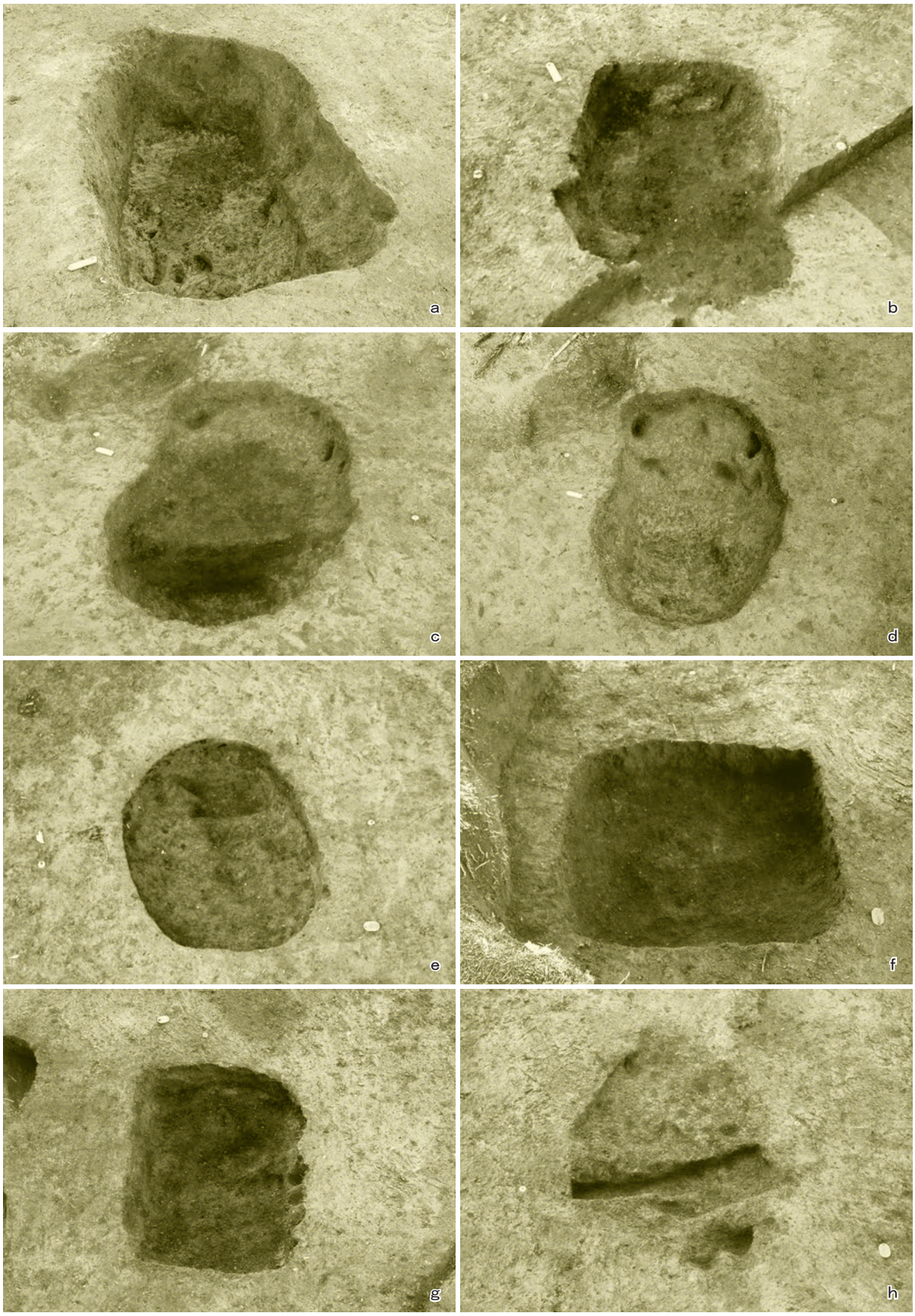
10　16～23号土坑

a　16号土坑全景（北東から）
b　17号土坑全景（北から）
c　18号土坑全景（北東から）
d　19号土坑全景（北から）
e　20号土坑全景（東から）
f　21号土坑全景（北から）
g　22号土坑全景（北東から）
h　23号土坑全景（南西から）



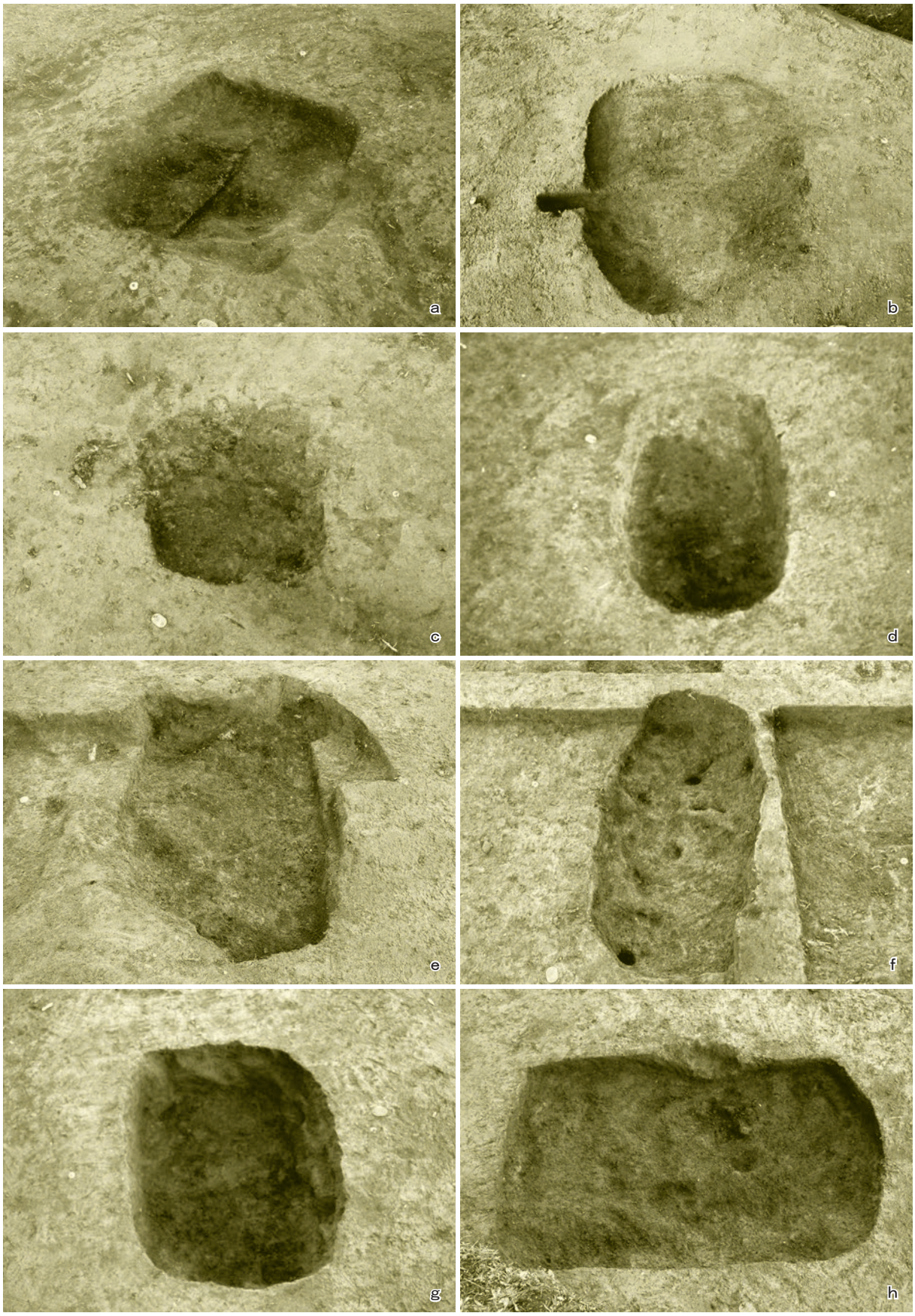
11　24～30号土坑

a　24号土坑全景（西から）
b　25号土坑全景（東から）
c　26号土坑全景（南西から）
d　27号土坑全景（東から）
e　28号土坑全景（北から）
f　29号土坑全景（南東から）
g　30号土坑木炭遺存状況（西から）
h　30号土坑全景（南東から）



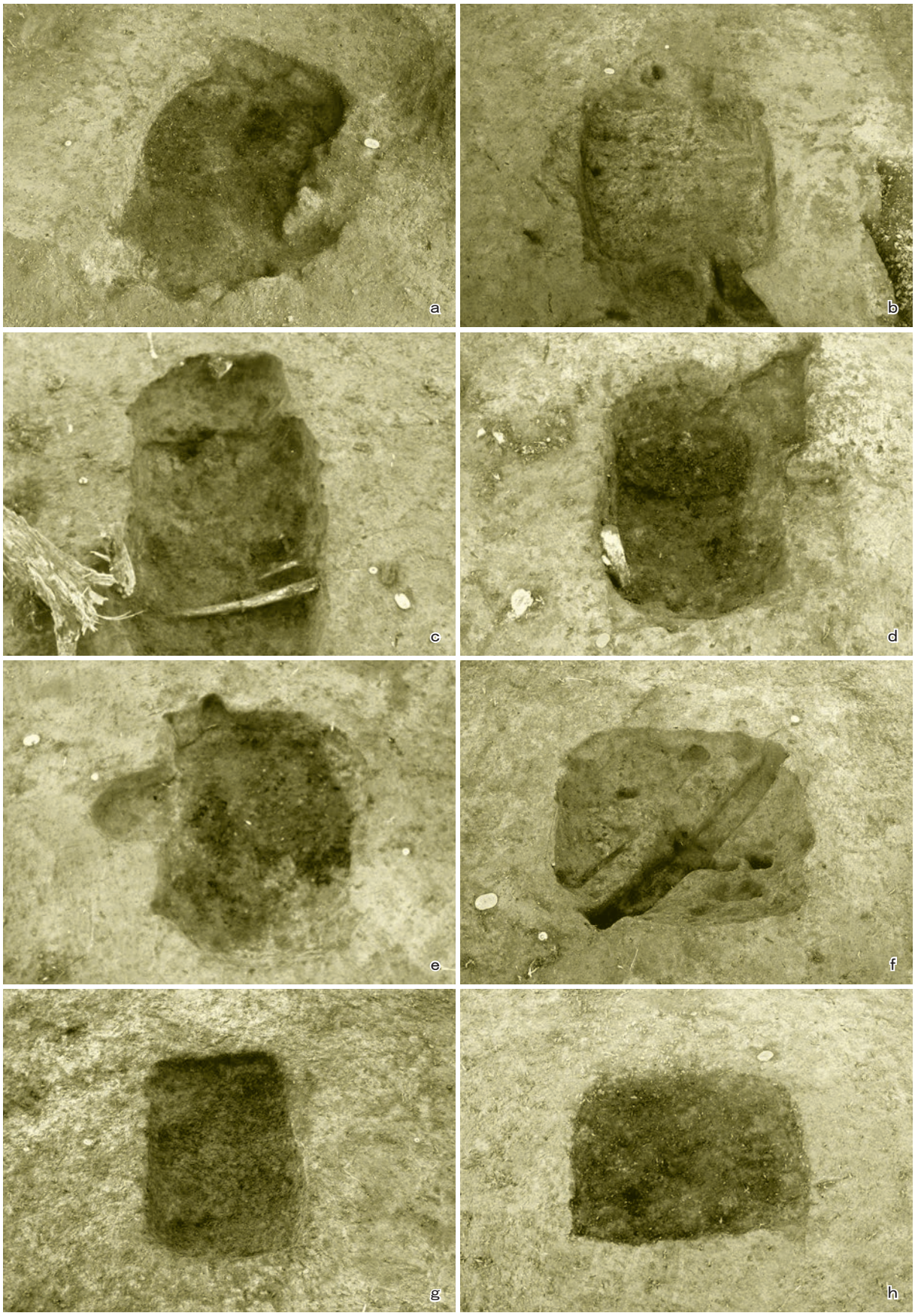
12　31～37号土坑

a　31号土坑全景（北から）
b　32号土坑全景（北西から）
c　33ａ号土坑全景（北西から）
d　33ｂ号土坑全景（北西から）
e　34号土坑全景（北東から）
f　35号土坑全景（北東から）
g　36号土坑全景（北東から）
h　37号土坑全景（東から）



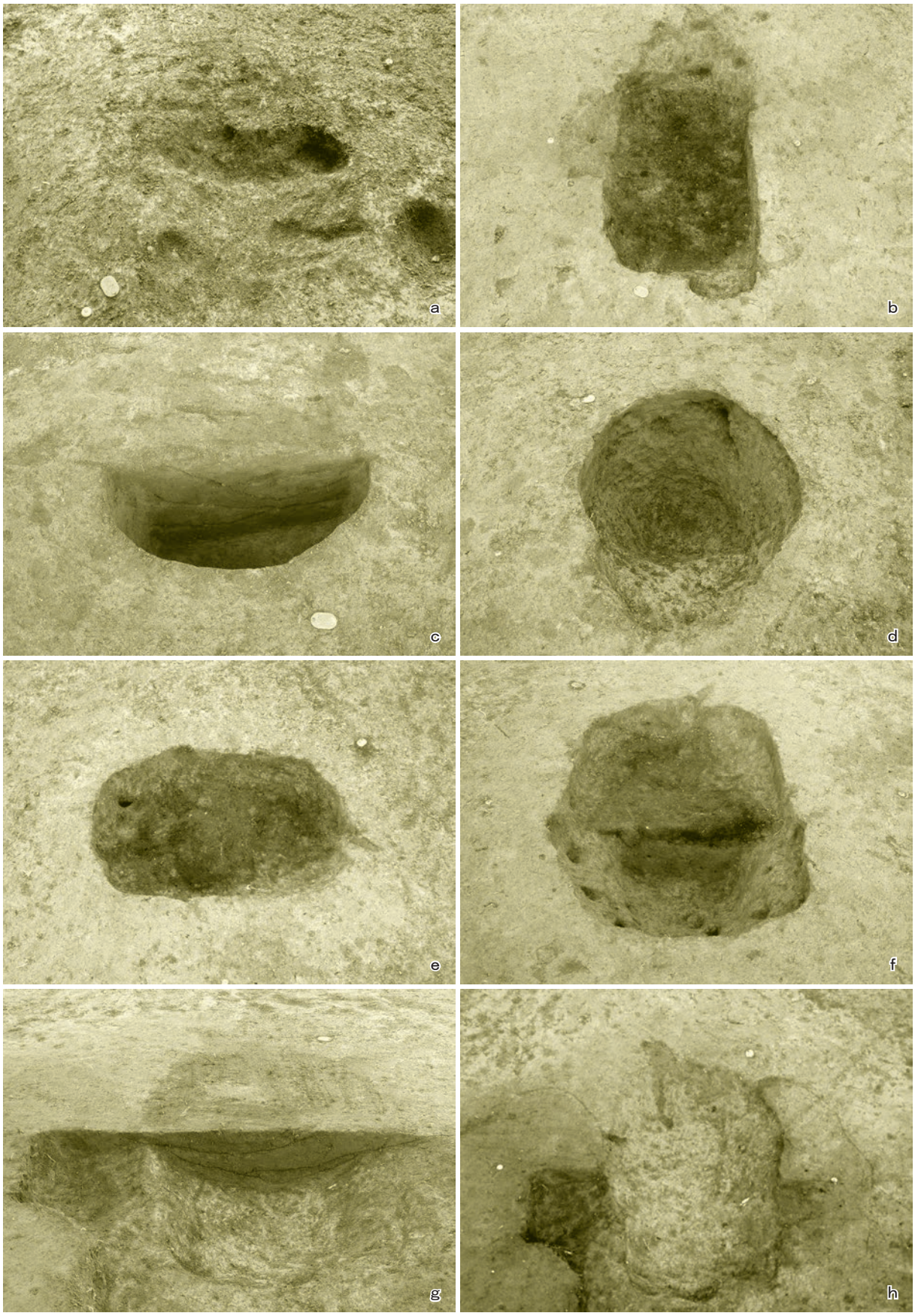
13　38～45号土坑

a　38号土坑全景（北西から）
b　39号土坑全景（南から）
c　40号土坑全景（南から）
d　41号土坑全景（西から）
e　42号土坑全景（南東から）
f　43号土坑全景（南から）
g　44号土坑全景（南西から）
h　45号土坑全景（南西から）



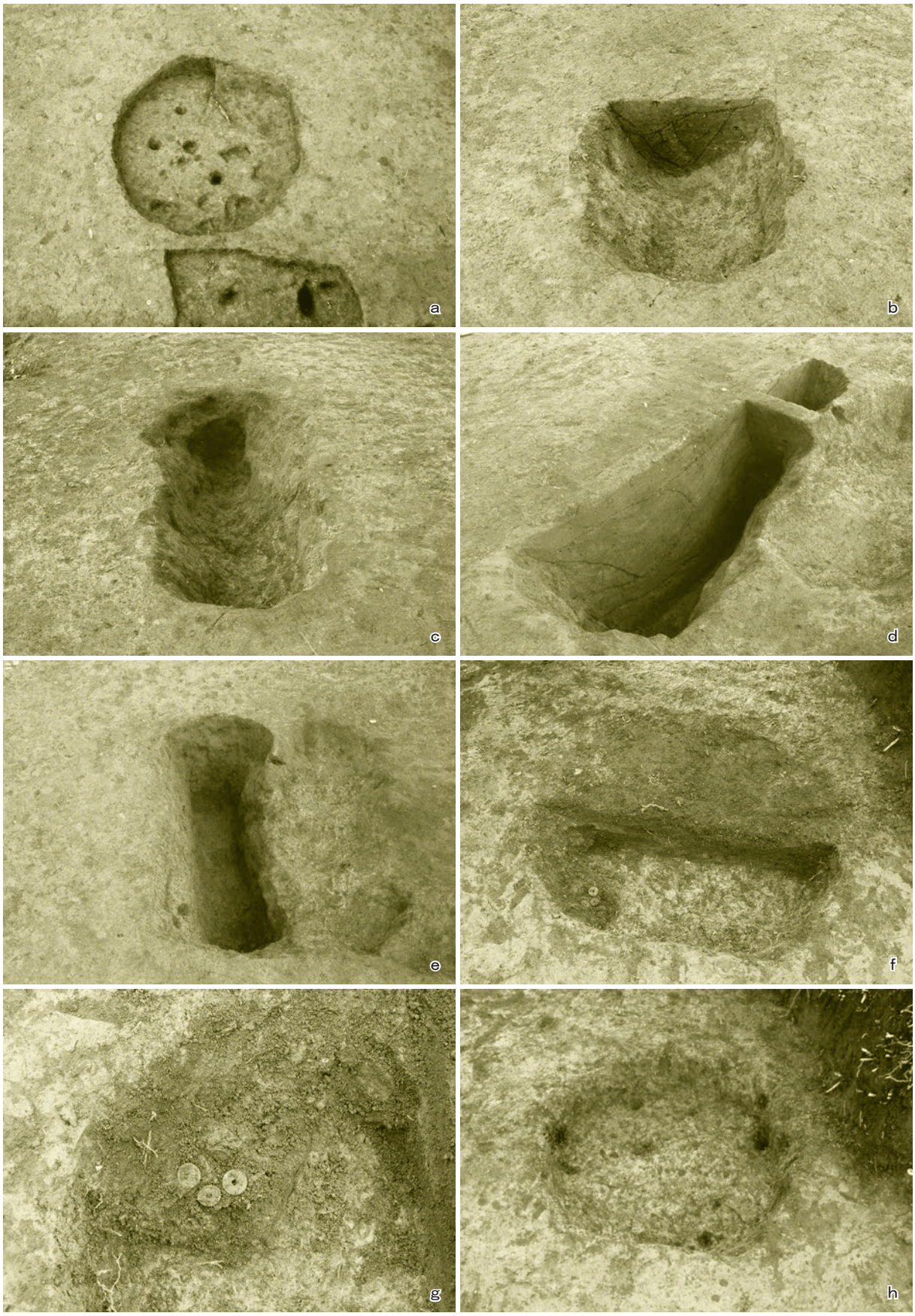
14　46～53号土坑

a　46号土坑全景（北西から）
b　47号土坑全景（南から）
c　48号土坑全景（北西から）
d　49号土坑全景（南から）
e　50号土坑全景（東から）
f　51号土坑全景（南西から）
g　52号土坑全景（東から）
h　53号土坑全景（南西から）



15　54～58号土坑

a　54号土坑全景（北東から）
b　55号土坑全景（南から）
c　56号土坑断面（南東から）
d　56号土坑全景（北東から）
e　57 a 号土坑全景（北東から）
f　57 b 号土坑全景（南東から）
g　58号土坑断面（西から）
h　58号土坑全景（西から）

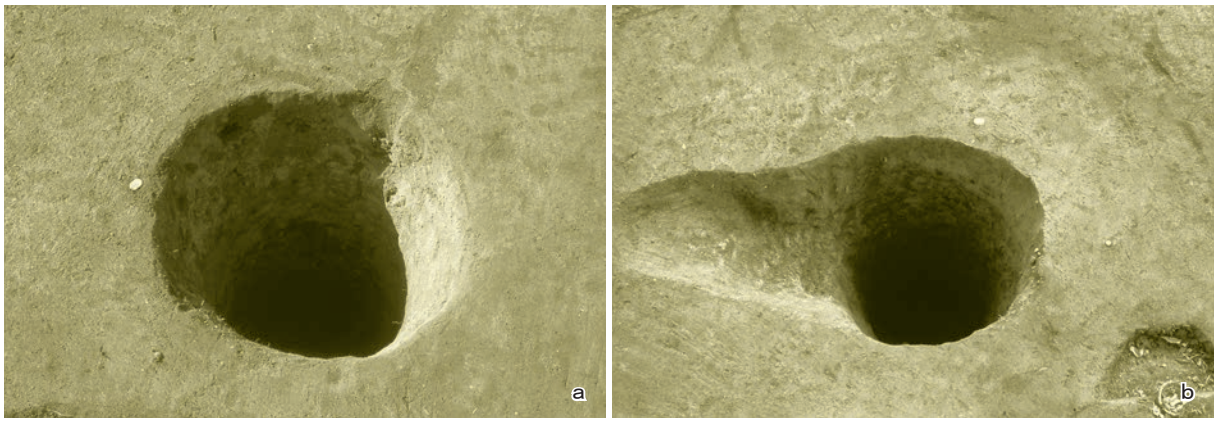


16　59～62号土坑

a　59号土坑全景（東から）
b　60号土坑断面（東から）
c　60号土坑全景（東から）
d　61号土坑断面（南西から）
e　61号土坑全景（南西から）
f　62号土坑断面（北から）
g　62号土坑銭出土状況（西から）
h　62号土坑全景（西から）

17　１～６号溝跡

a　１号溝跡（南から）　b　２号溝跡（南東から）
c　３号溝跡（南から）　d　４号溝跡（北西から）
e　５号溝跡（北西から）　f　６号溝跡（南西から）

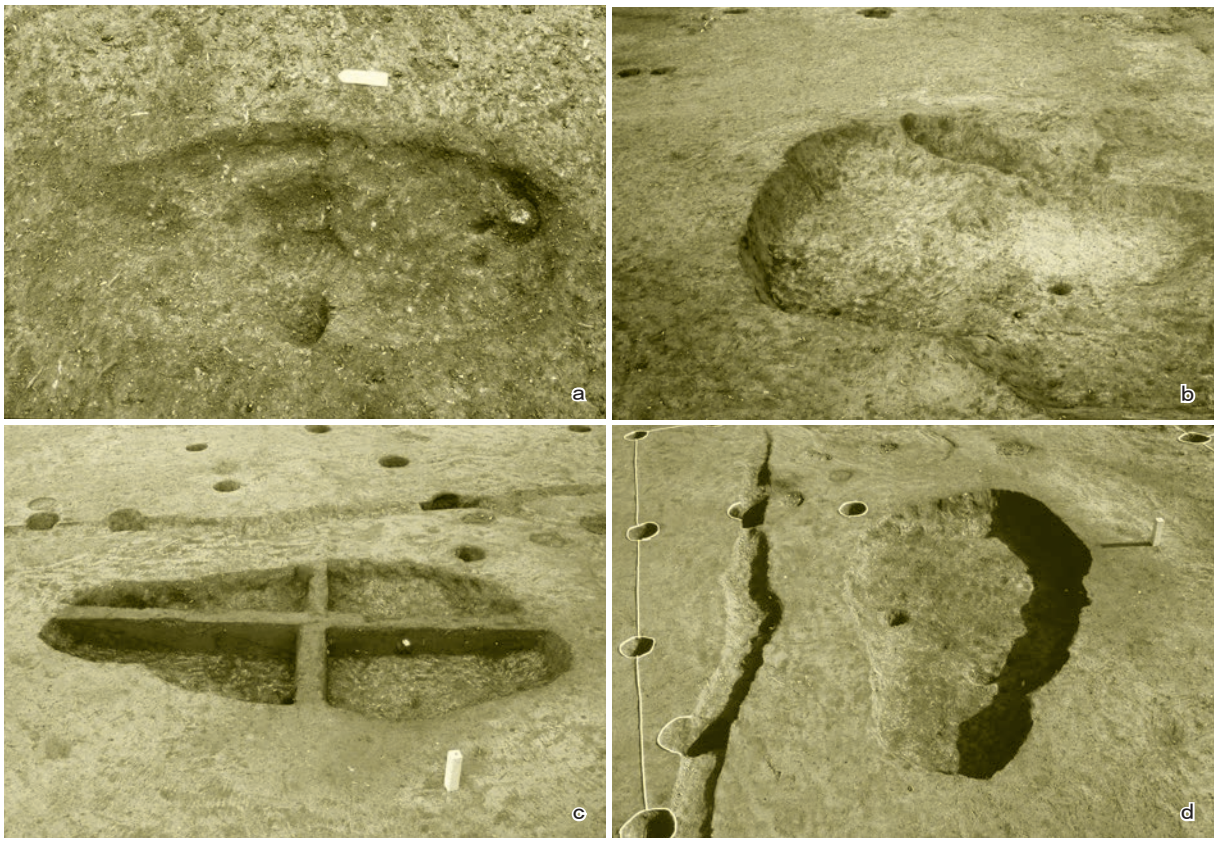


18　井戸跡

a　１号井戸跡（東から）　b　２号井戸跡（北から）

19　焼土遺構・集石遺構

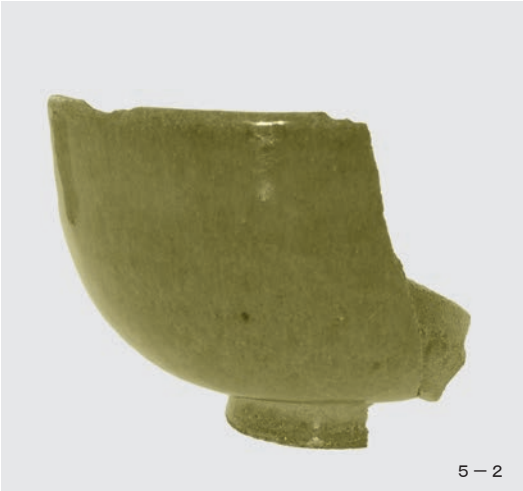
a　１号焼土遺構（西から）　b　２号焼土遺構（南東から）
c　１号集石遺構（南から）　d　２号集石遺構（南から）



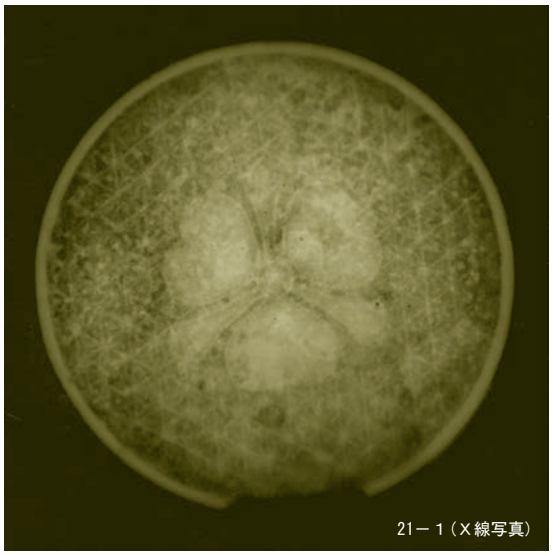
20　１～３号性格不明遺構

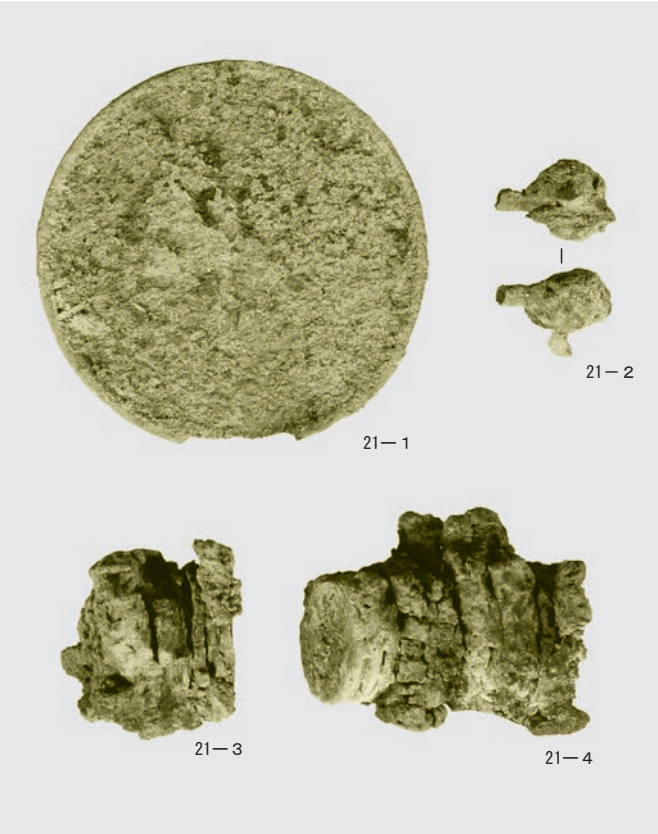
a　１号性格不明遺構（北東から）　b　２号性格不明遺構全景（南から）
c　３号性格不明遺構断面（南から）　d　３号性格不明遺構全景（西から）

21　５号土坑出土須恵器

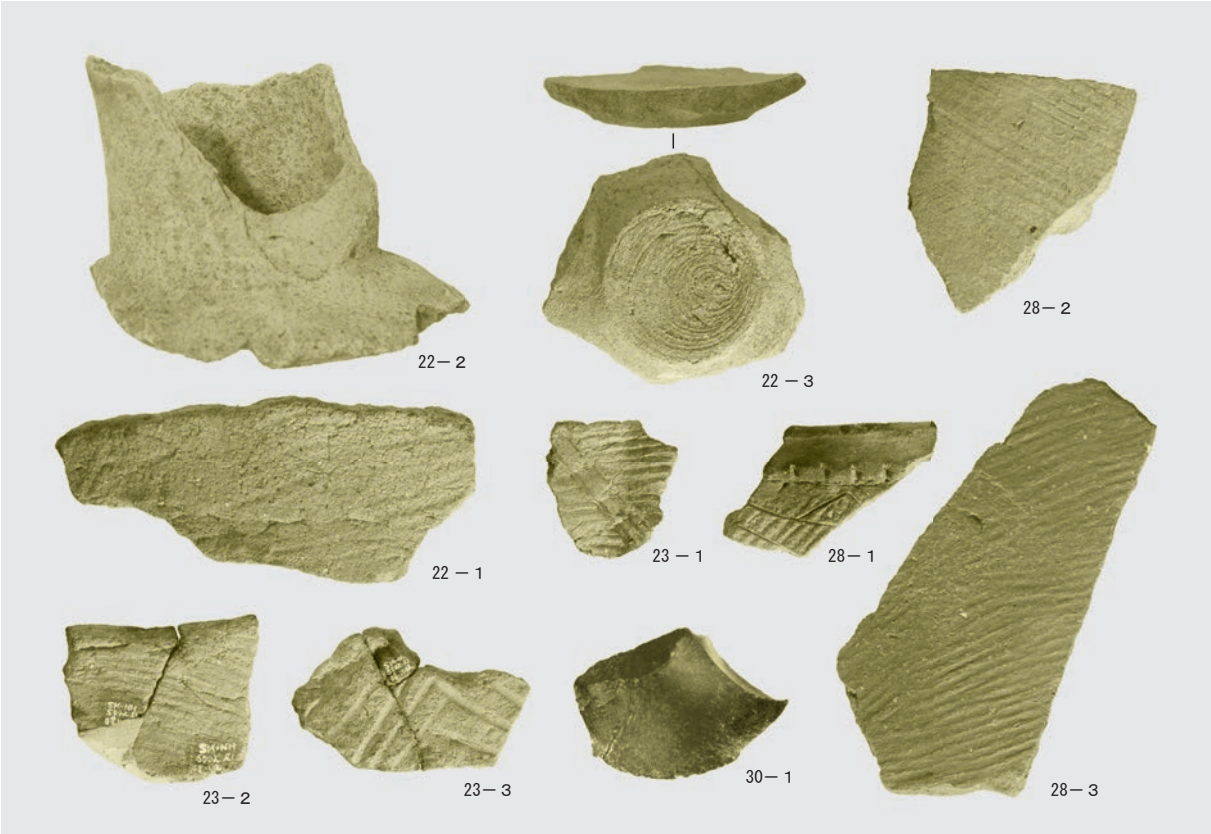


22　１号建物跡出土遺物

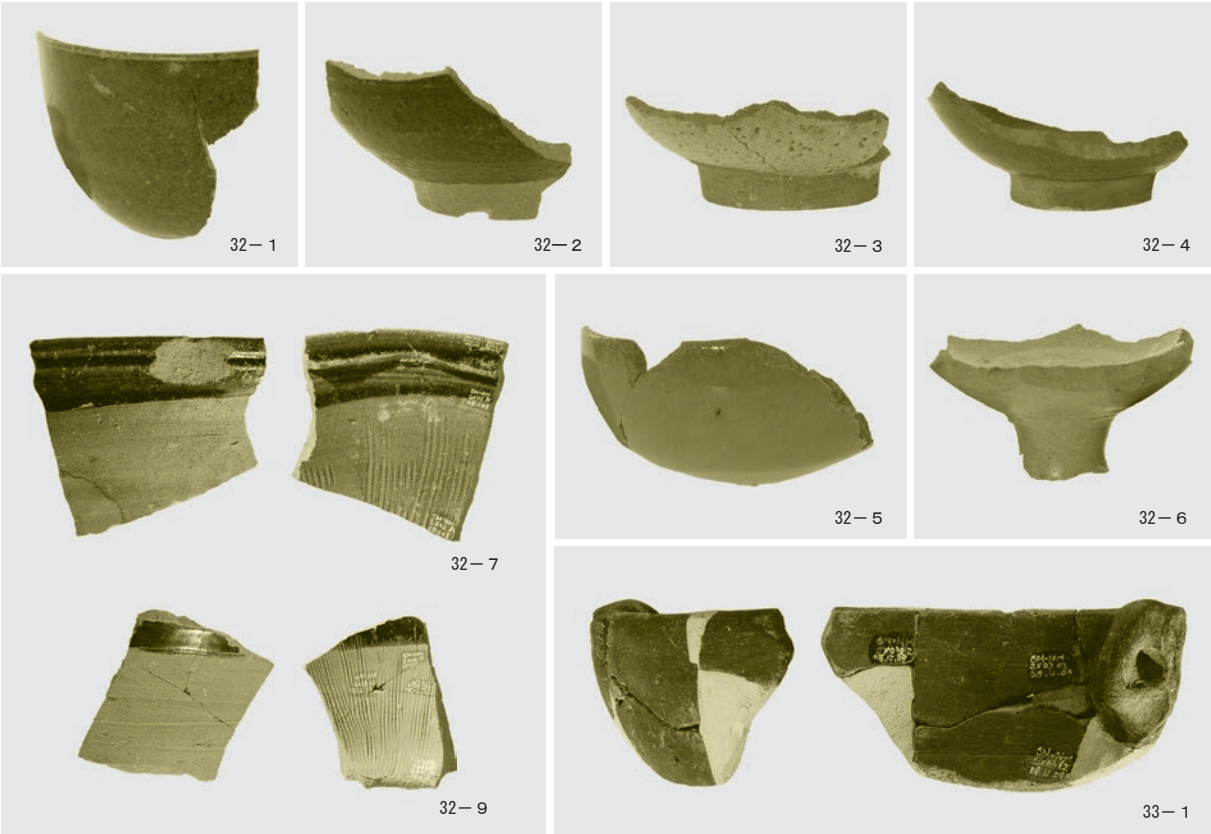




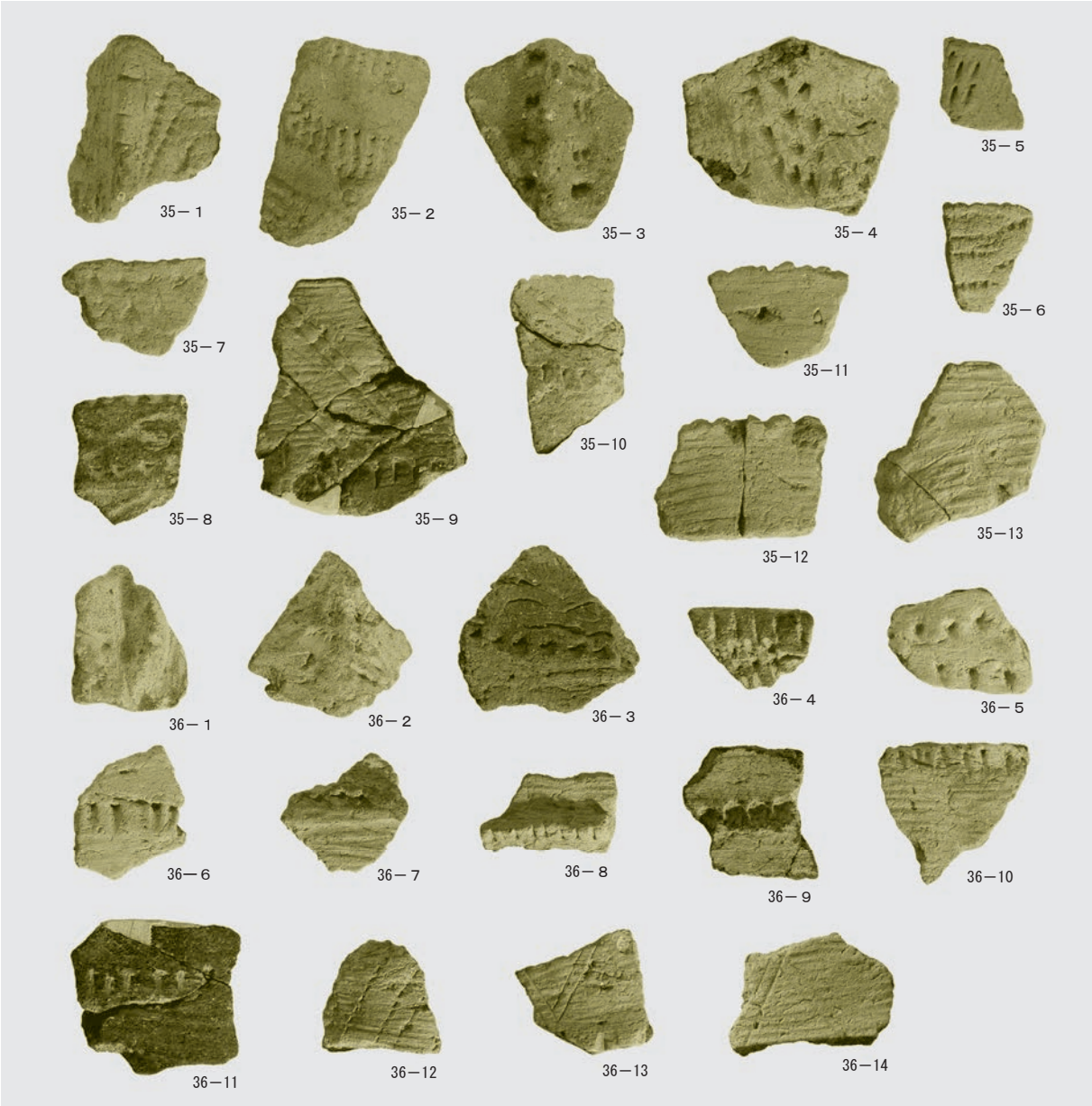
23　62号土坑出土金属製品



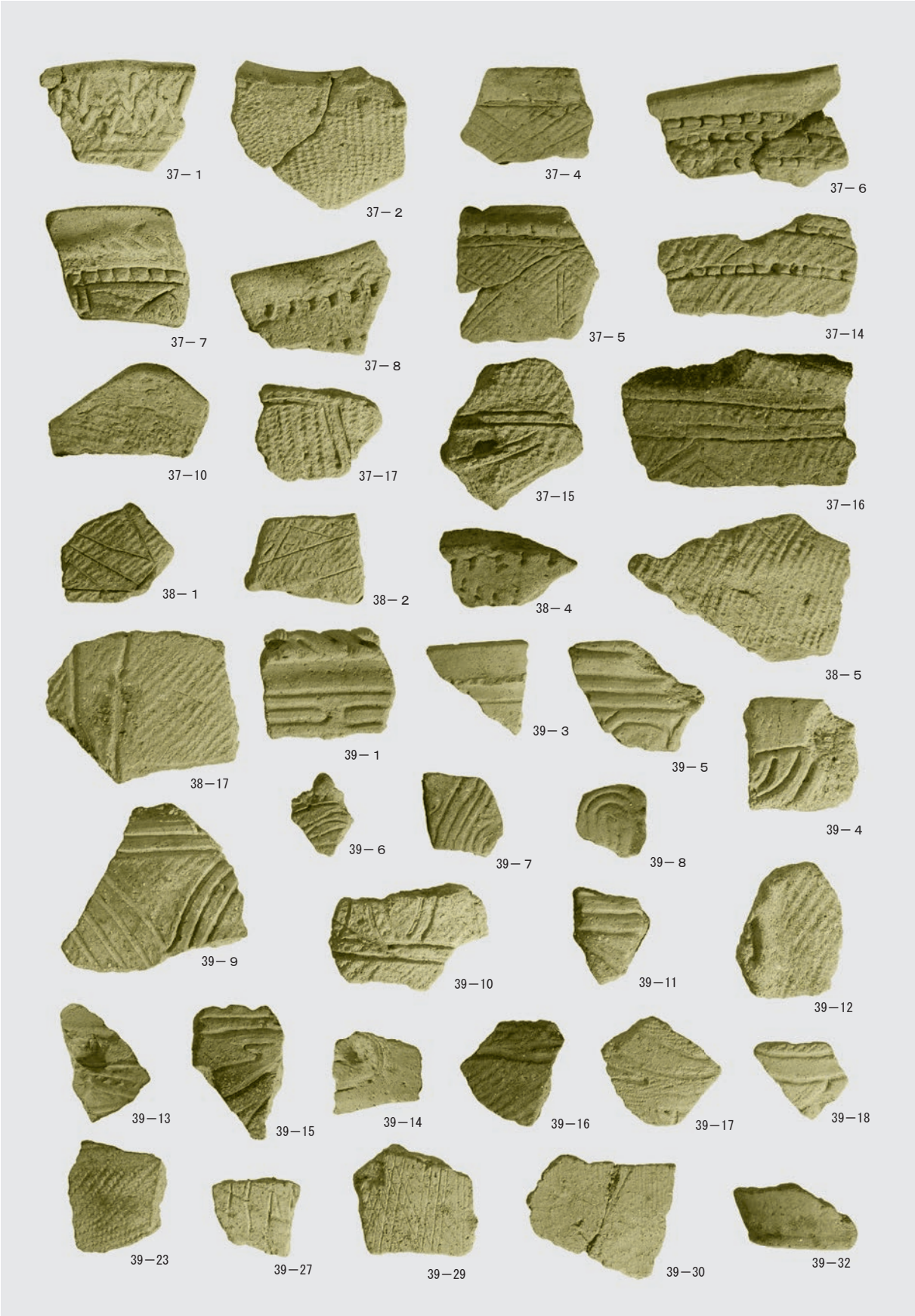
24　溝跡・井戸跡・集石遺構出土遺物



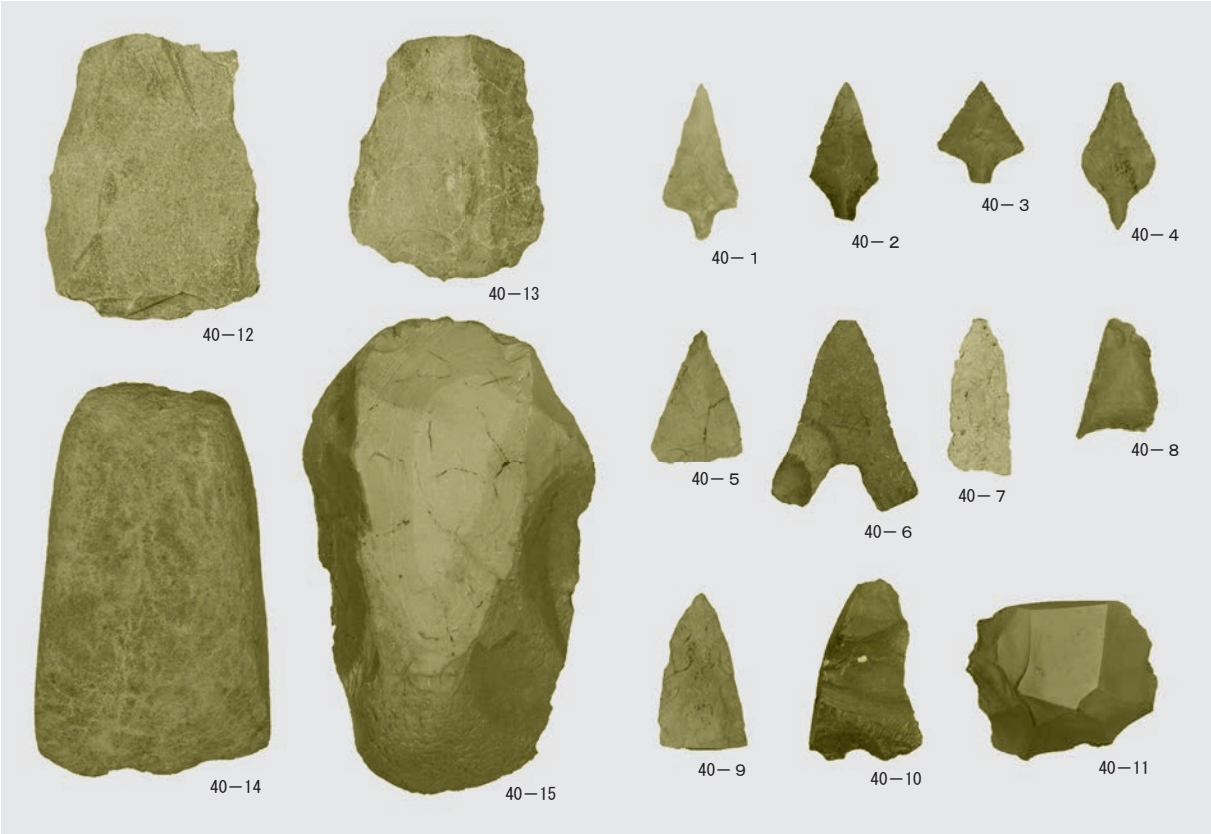
25　２・３号性格不明遺構出土陶磁器



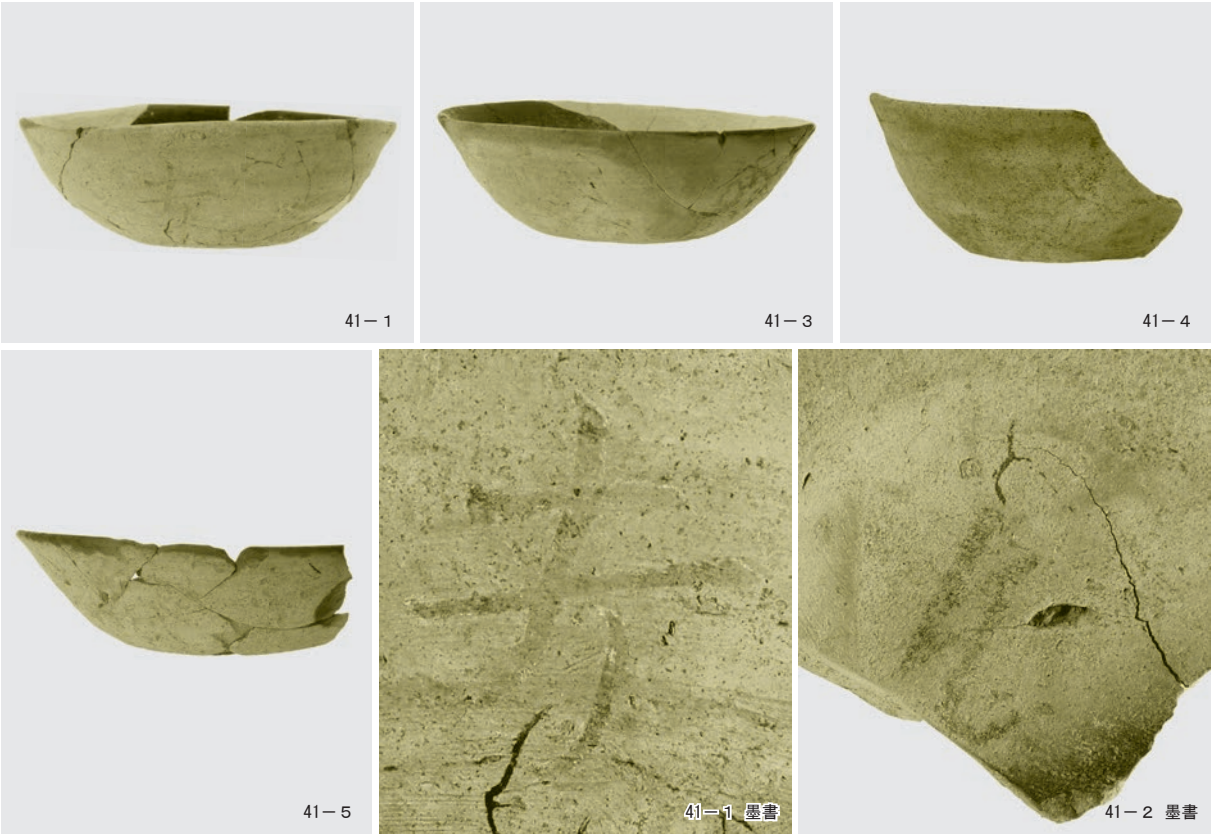
26　遺構外出土縄文土器（1）



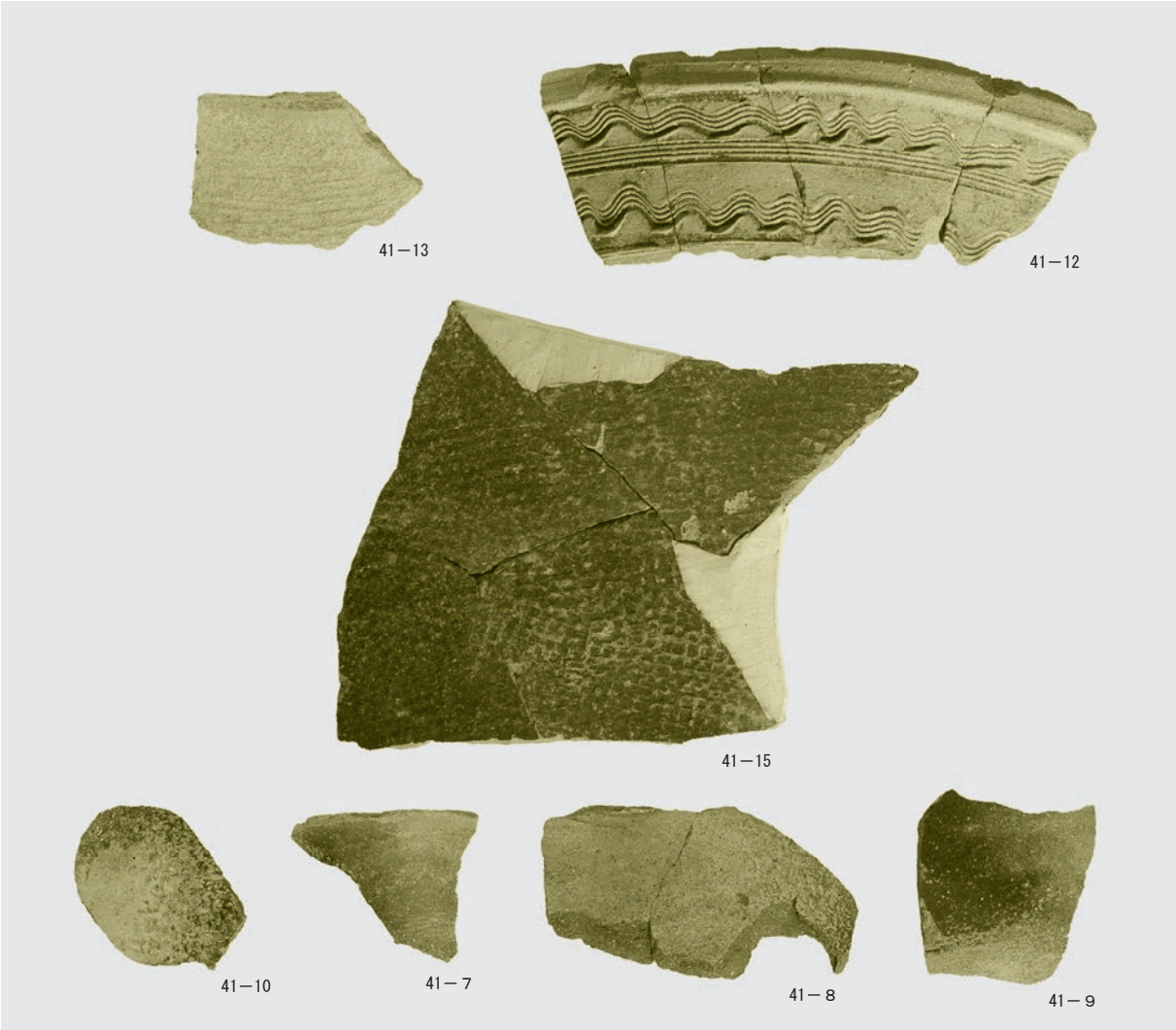
27　遺構外出土縄文土器（２）



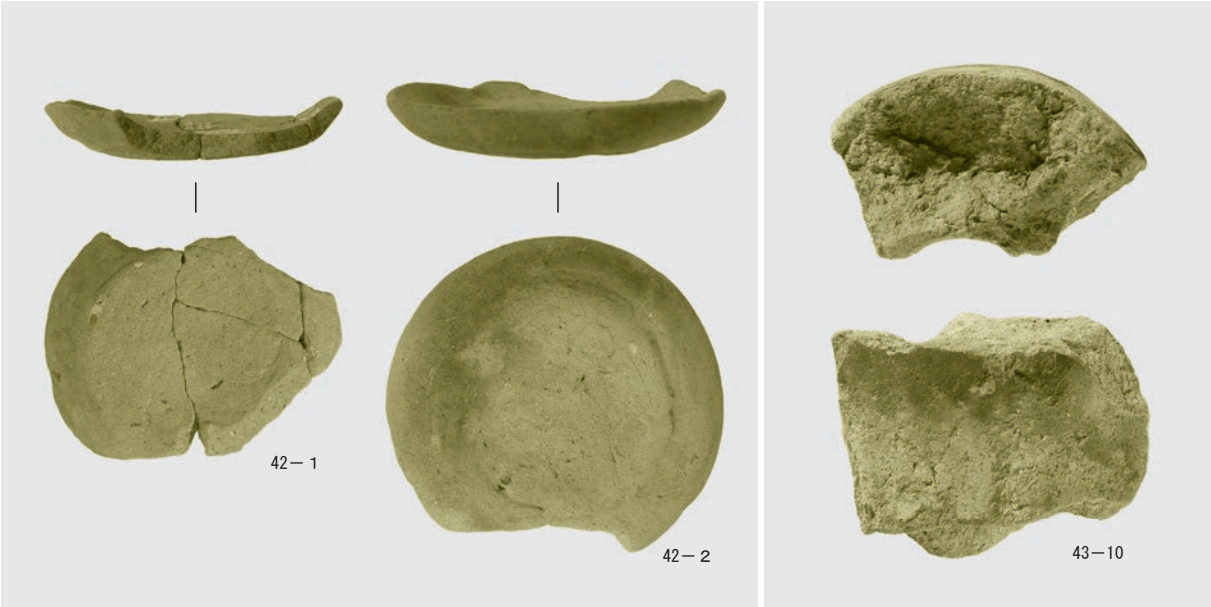
28　遺構外出土石器



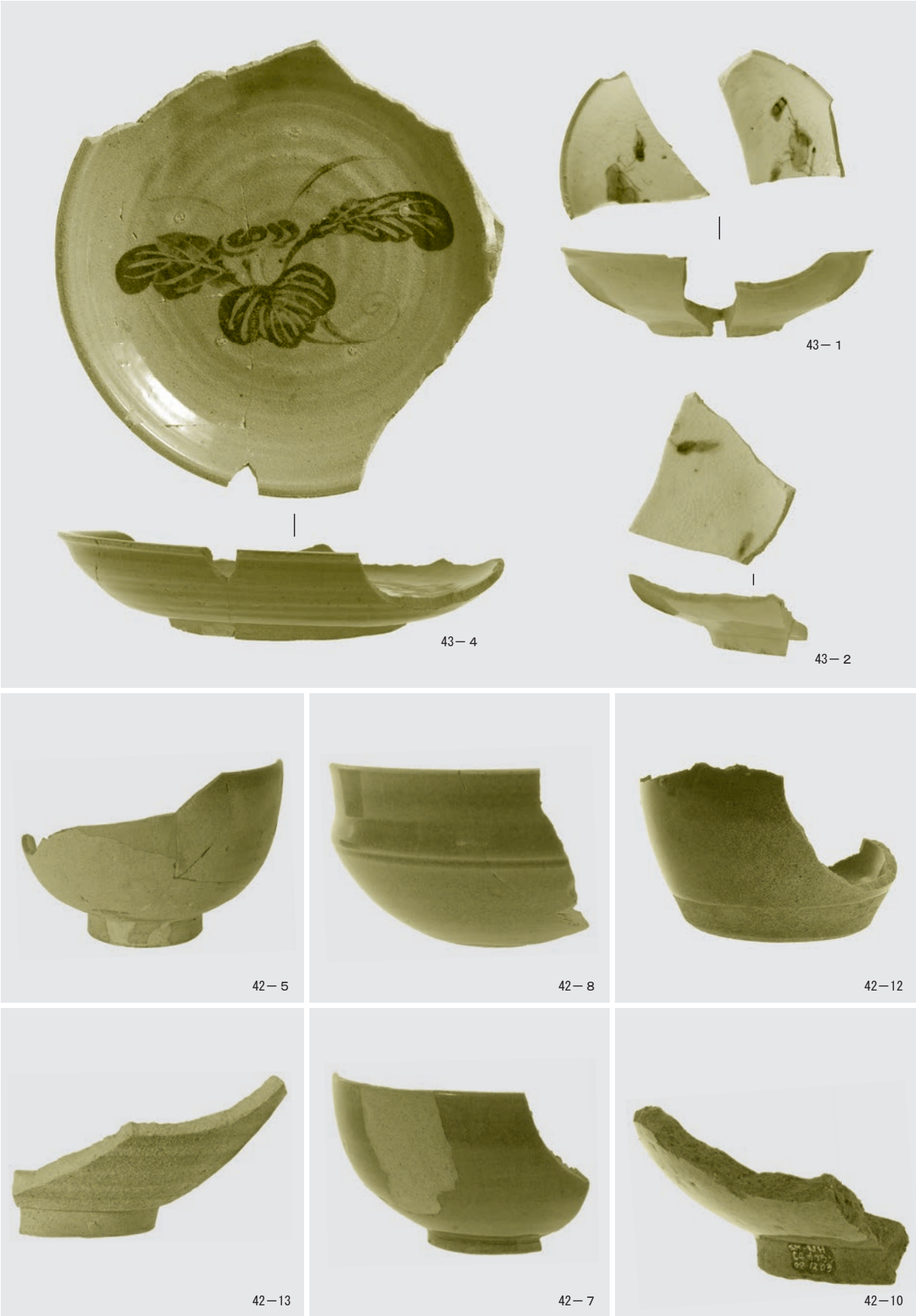
29　遺構外出土土師器



30　遺構外出土須恵器

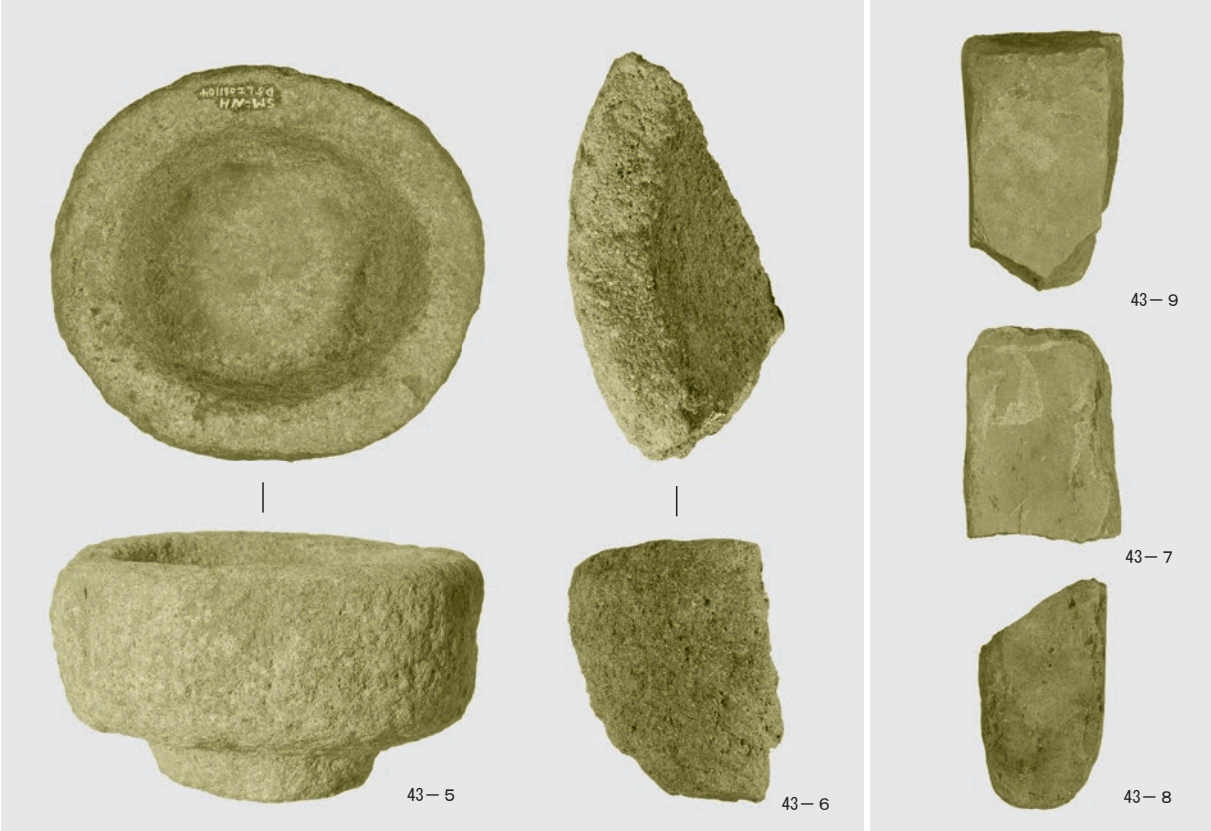


31　遺構外出土かわらけ・羽口



32　遺構外出土近世陶磁器（1）

33　遺構外出土近世陶磁器（２）



34　遺構外出土近世石製品

35　遺構外出土金属製品

写　真　図　版

第２編　宿仙木（しゅくせんぎ）Ａ遺跡（２次調査）

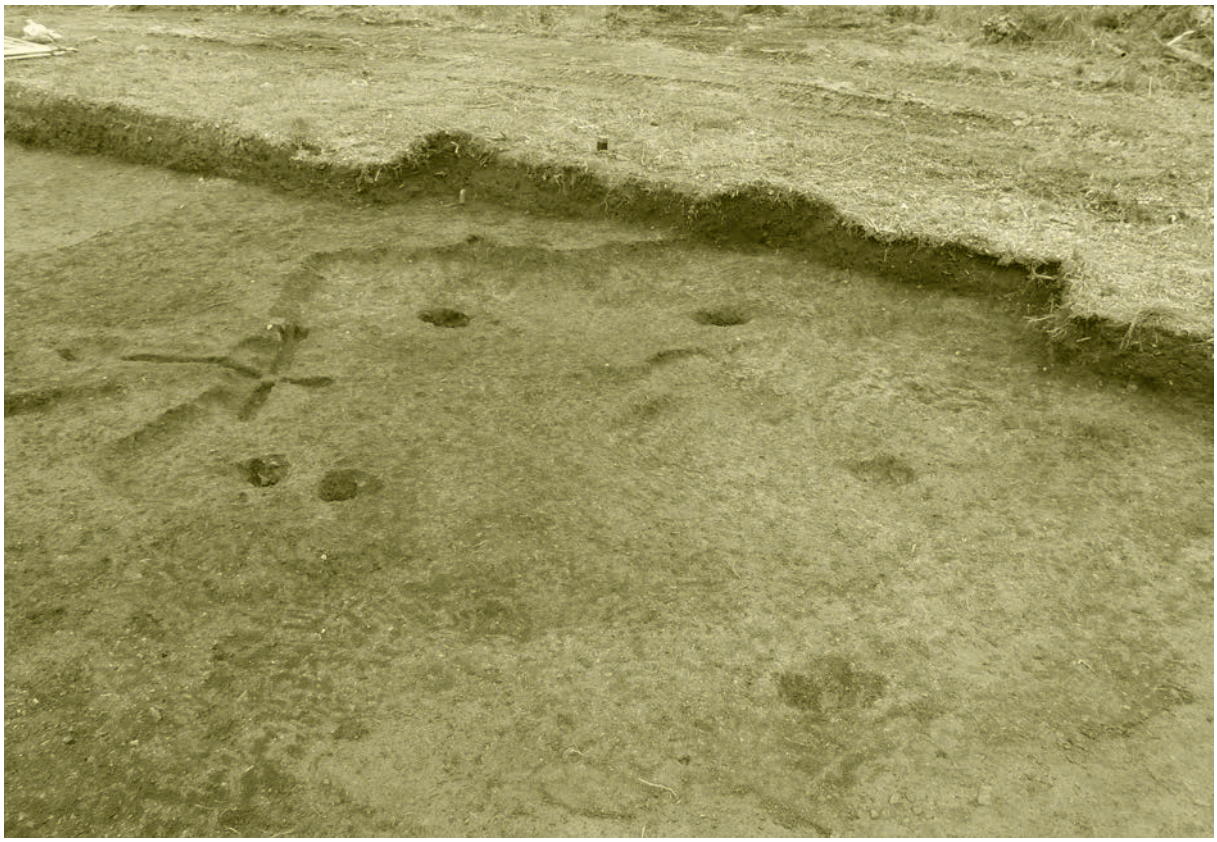
1　調査区全景（真上から）

２　調査区全景（南東から）

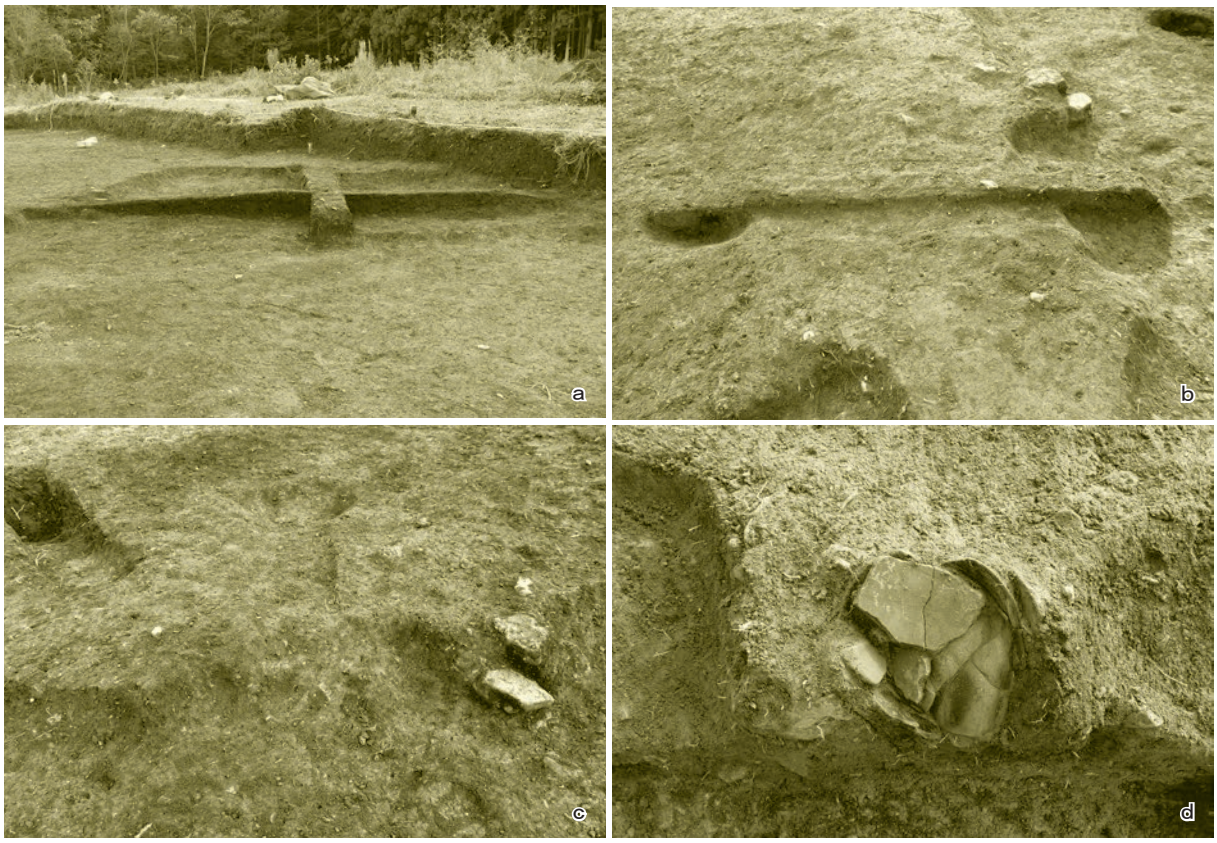
３　北調査区全景（真上から）

4　南調査区全景（南東から）

5　基本土層　　a　北調査区 断面C－C′（北から）　b　南調査区 断面A－A′（南東から）



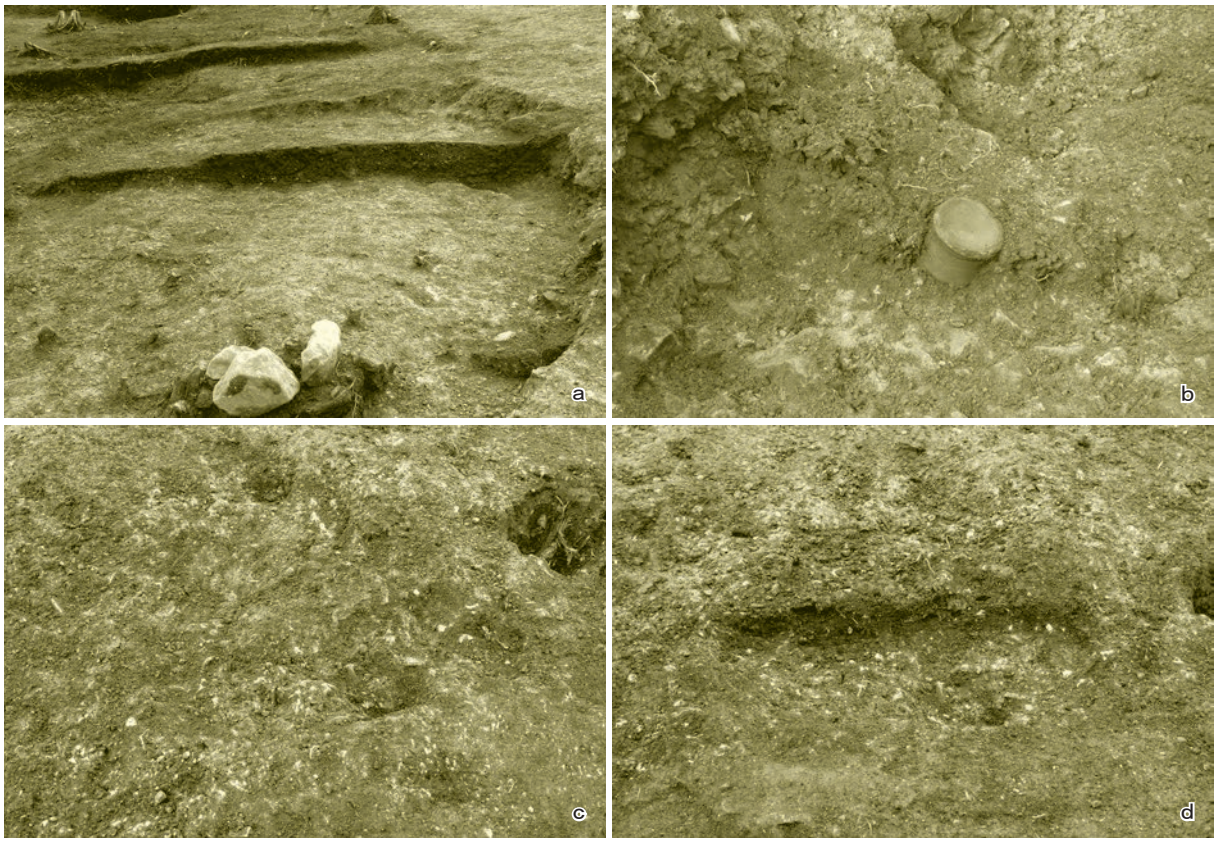
６　２号住居跡全景（北東から）



７　２号住居跡細部

a　東西断面（北東から）　b　煙道断面（北東から）
c　カマド全景（北西から）　d　カマド掘形内遺物出土状況（西から）

8　３号住居跡全景（北東から）



9　３号住居跡細部

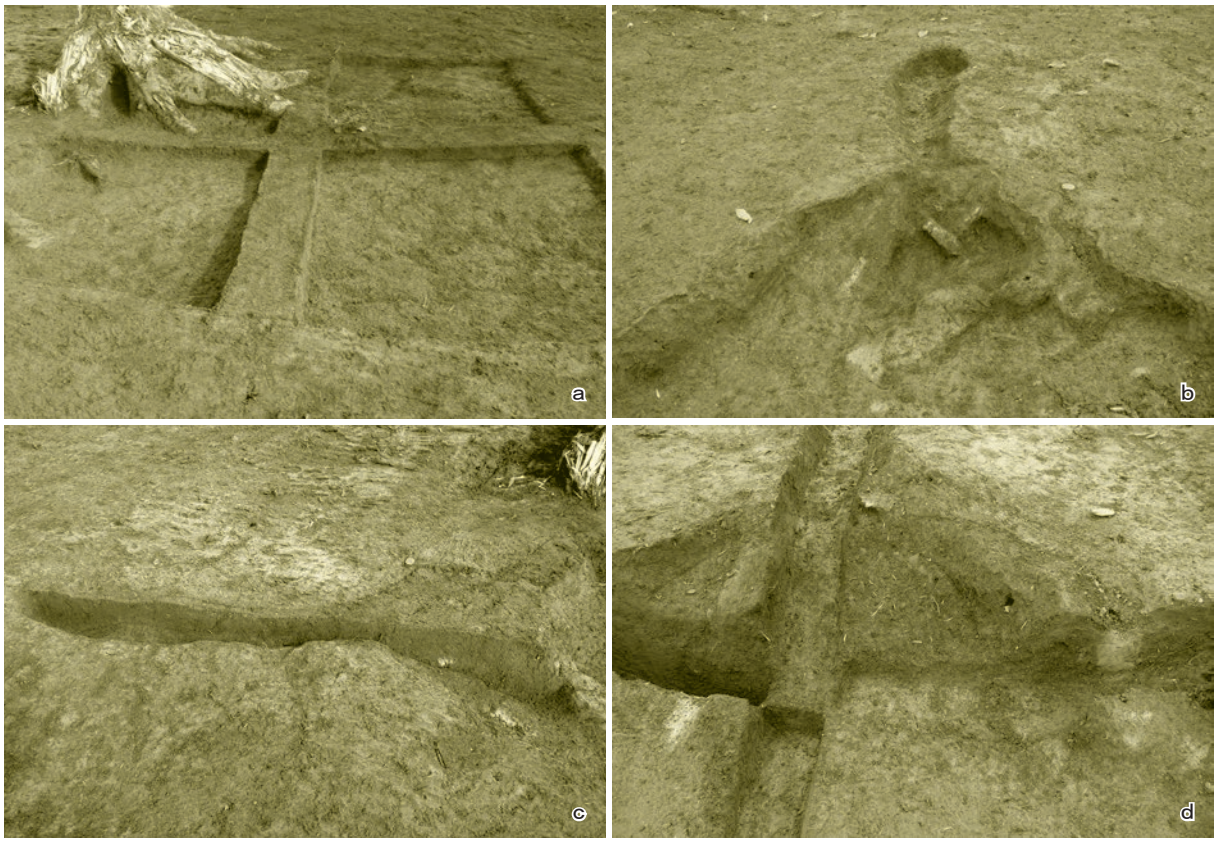
a　東西断面（北西から）　b　床面遺物出土状況（南東から）
c　炉全景（東から）　d　炉断割（東から）

10　４号住居跡全景（北から）

11　４号住居跡細部

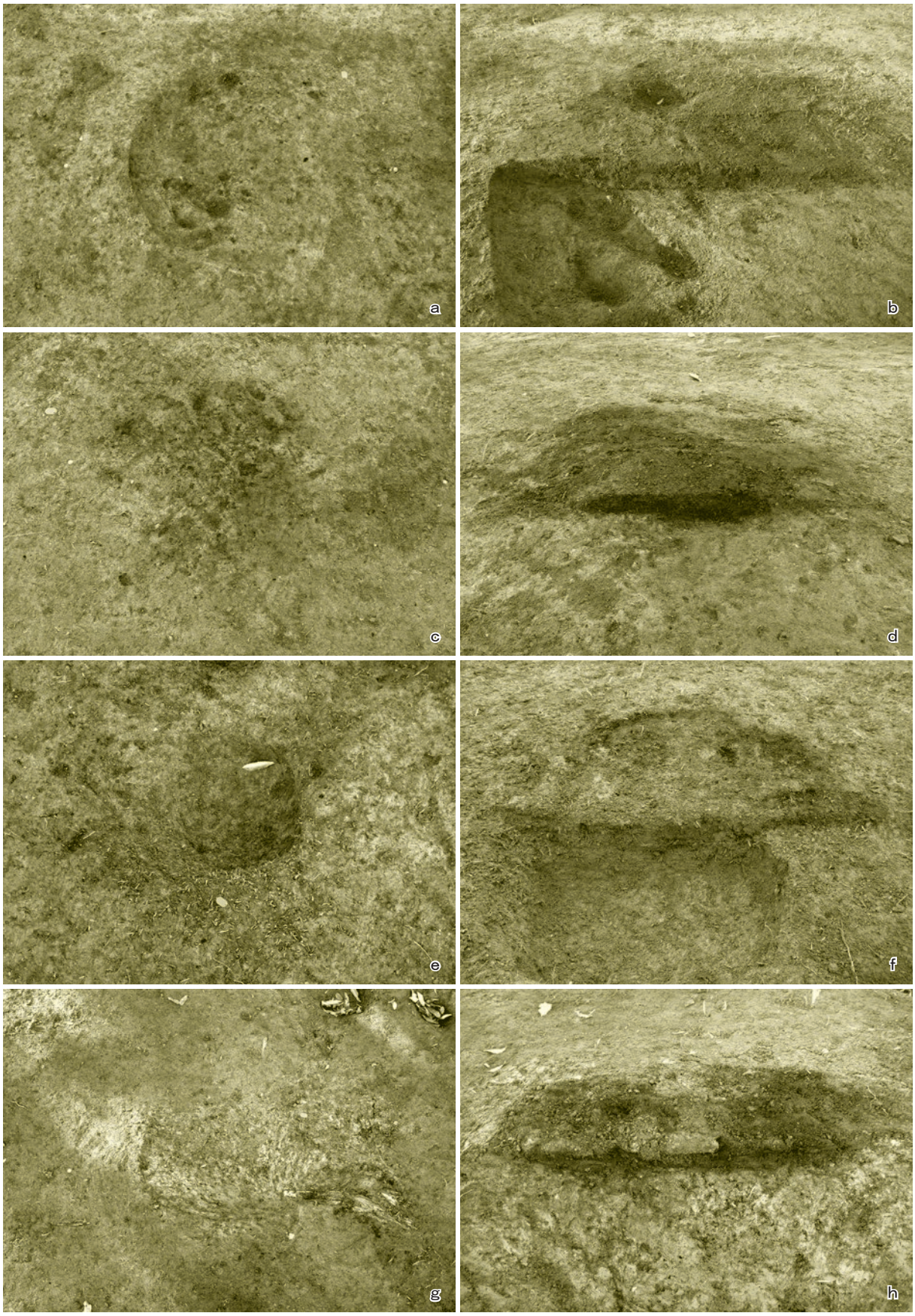
a　南北断面（東から）　b　カマド断面（西から）
c　カマド断割（北から）　d　カマド断割（東から）

12　５号住居跡全景（南から）



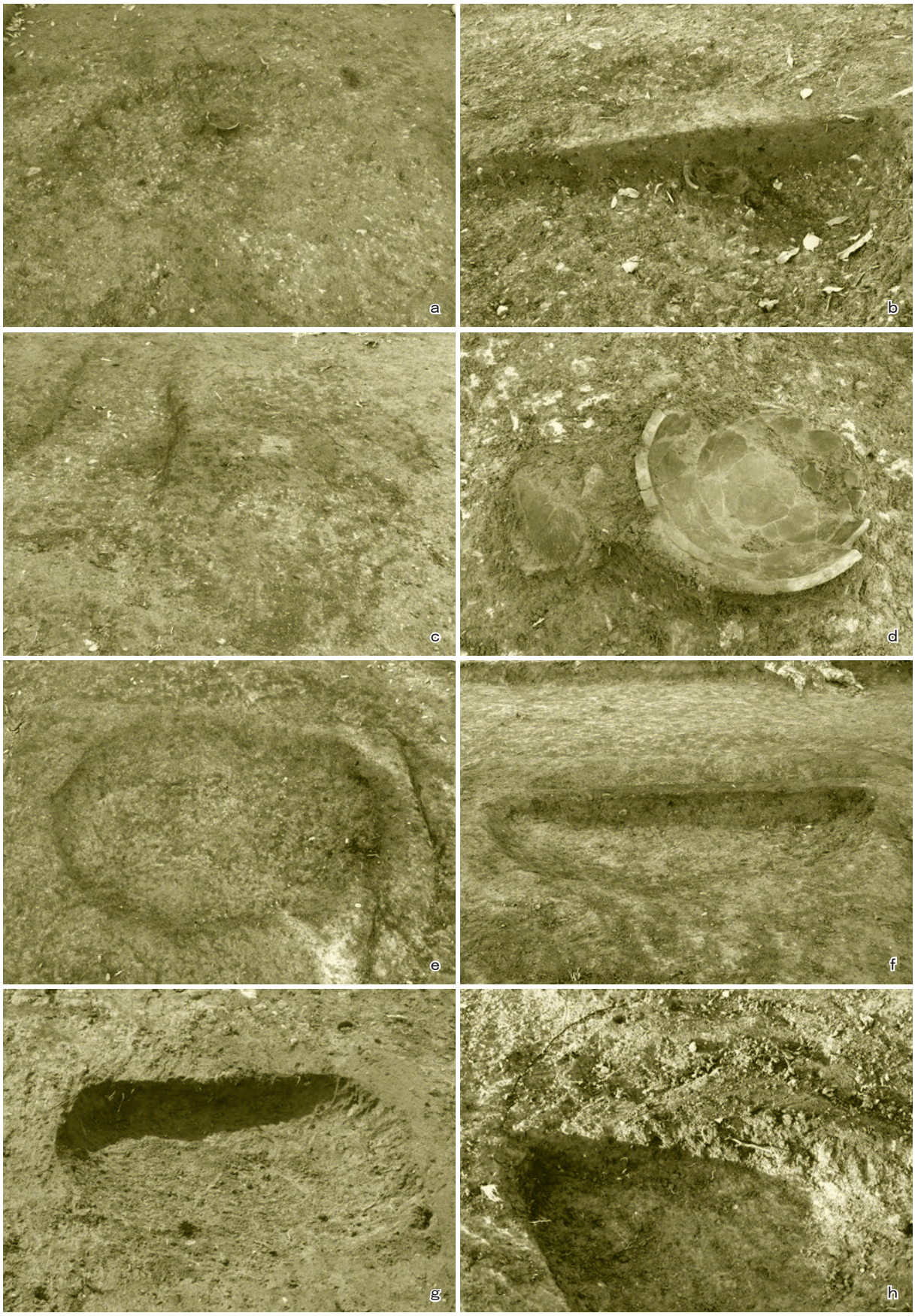
13　５号住居跡細部

a　南北断面（西から）　b　カマド全景（南から）
c　カマド断面（西から）　d　カマド燃焼部断割（南から）



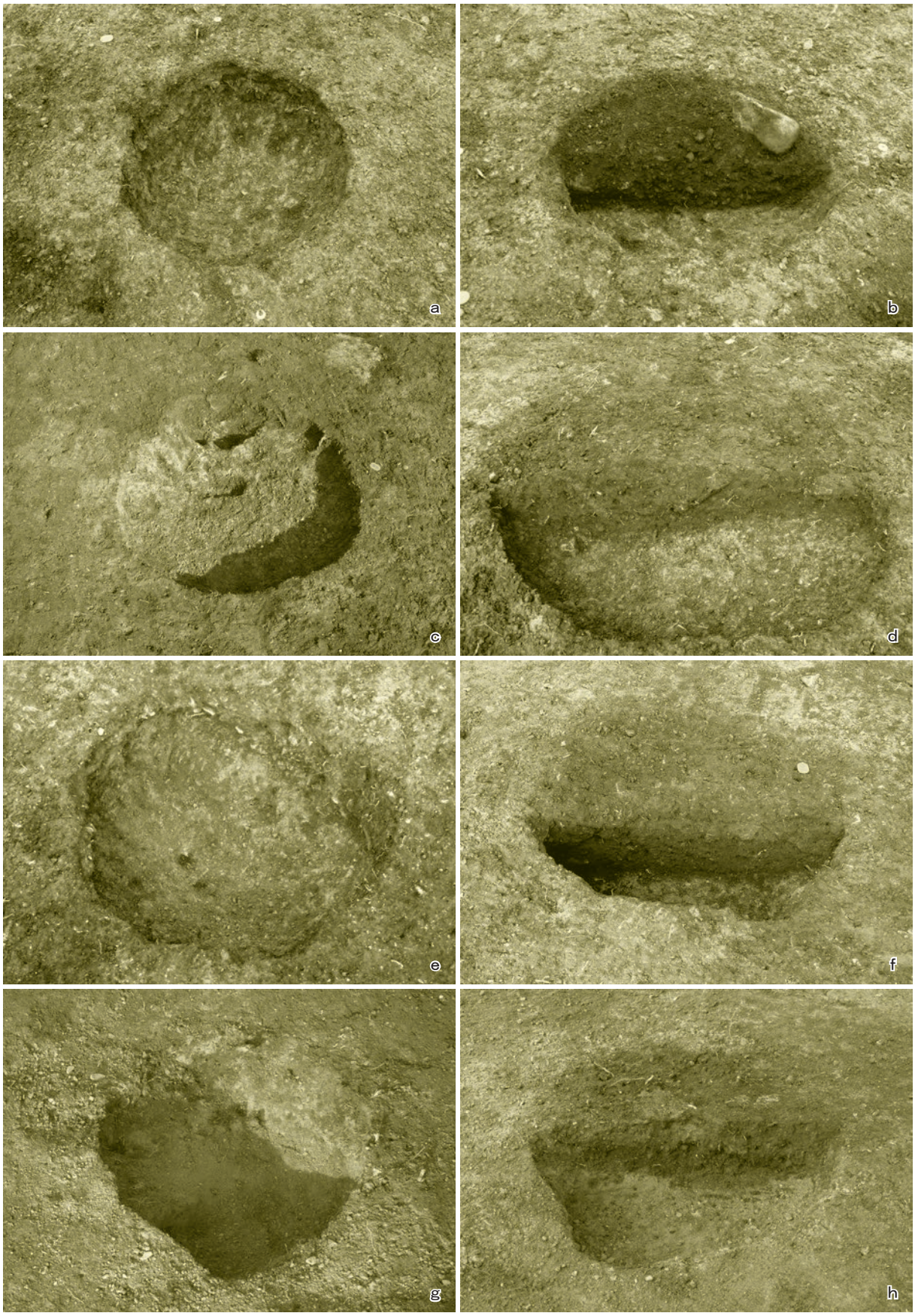
14　15～18号土坑

a　15号土坑全景（南から）　b　15号土坑断面（南から）
c　16号土坑全景（東から）　d　16号土坑断面（東から）
e　17号土坑全景（南から）　f　17号土坑断面（南東から）
g　18号土坑全景（東から）　h　18号土坑断面（東から）



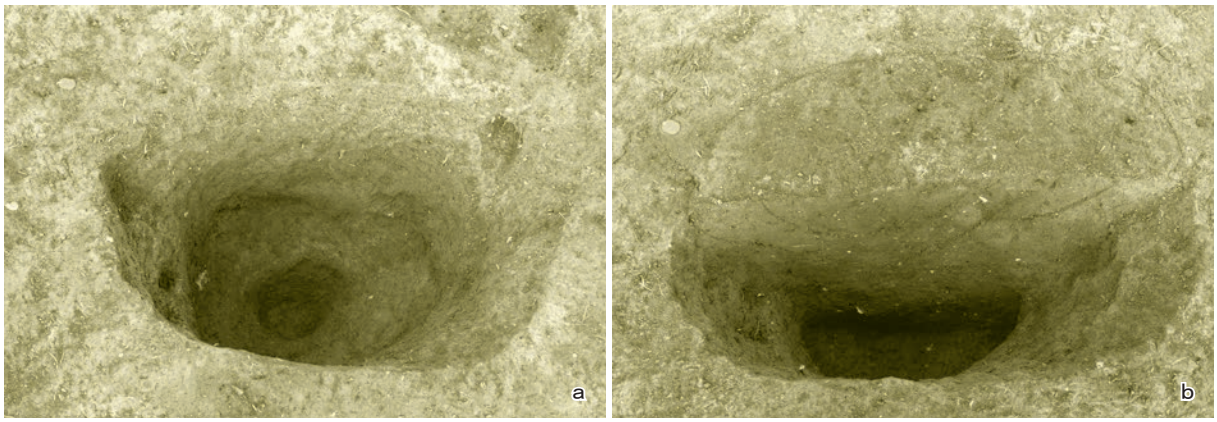
15　19～21号土坑

a　19号土坑全景（南から）
b　19号土坑断面（東から）
c　19号土坑検出面（南から）
d　19号土坑遺物出土状況（南から）
e　20号土坑全景（東から）
f　20号土坑断面（東から）
g　21号土坑全景（東から）
h　21号土坑断面（南から）



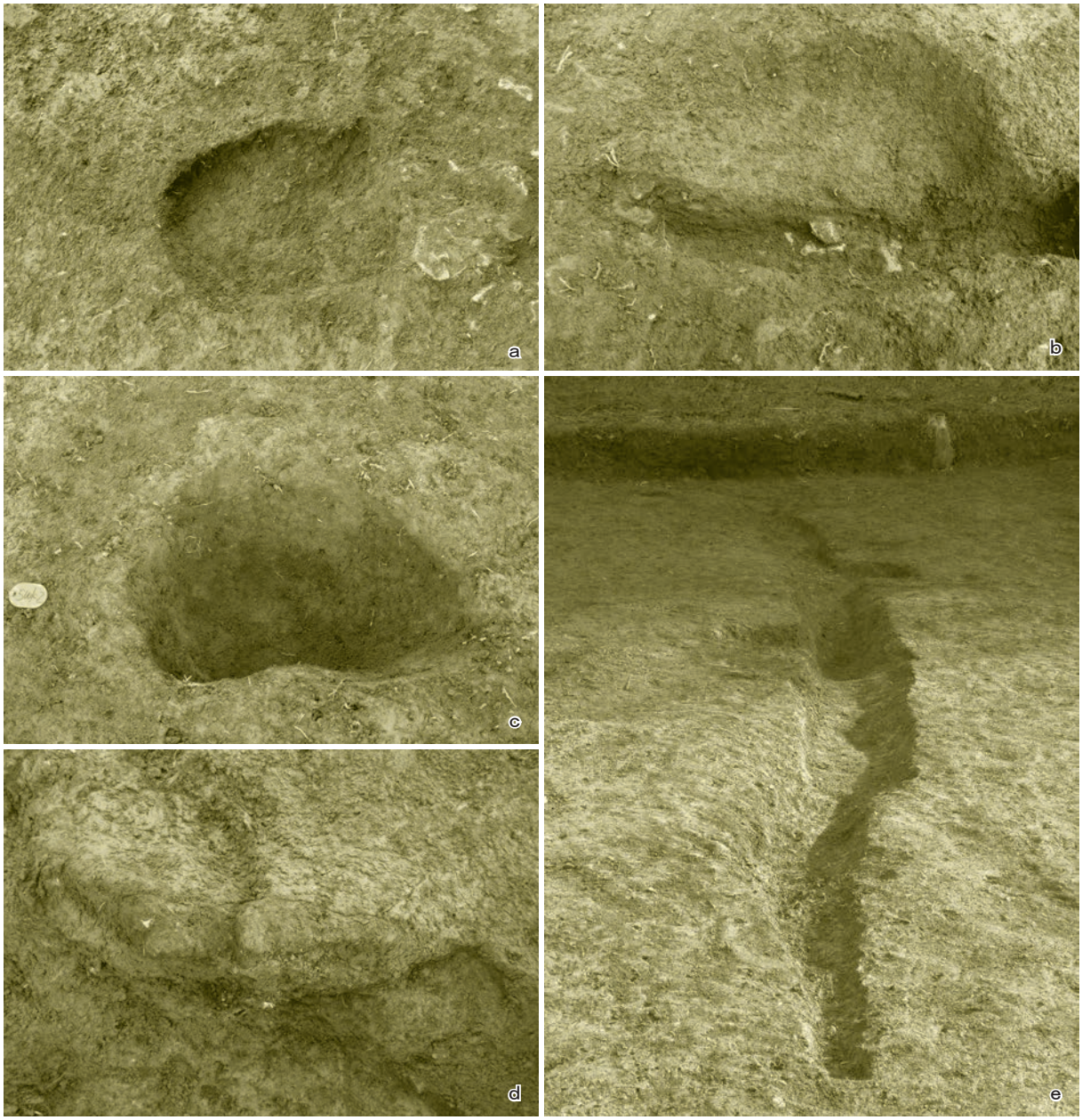
16　22～25号土坑

a　22号土坑全景（東から）
b　22号土坑断面（南から）
c　23号土坑全景（南から）
d　23号土坑断面（西から）
e　24号土坑全景（南東から）
f　24号土坑断面（南から）
g　25号土坑全景（南から）
h　25号土坑断面（南から）



17　26号土坑

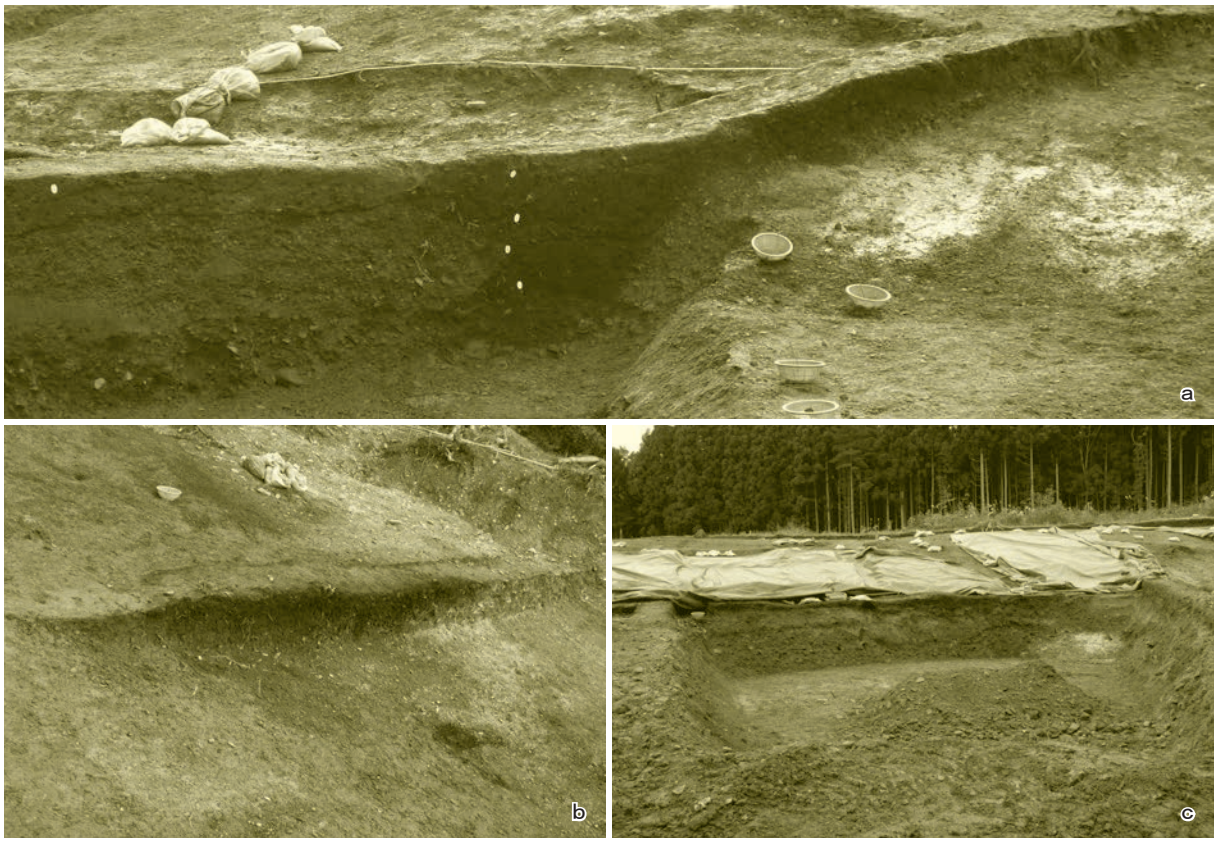
a　全景（南から）　b　断面（南から）



18　１・２号鍛冶炉，１号焼土遺構，１号溝跡

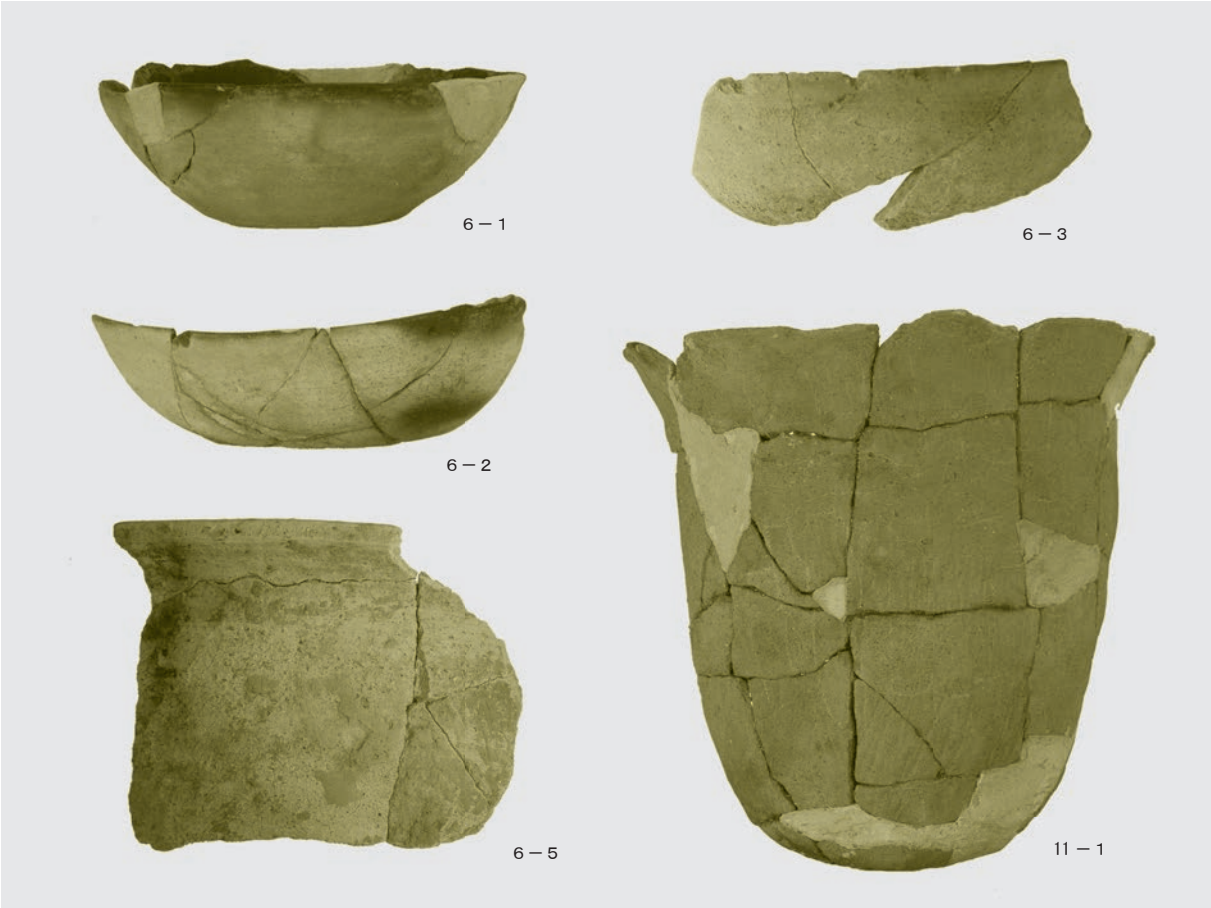
a　１号鍛冶炉跡全景（北西から）　b　１号鍛冶炉跡断割（南から）
c　２号鍛冶炉跡全景（南から）　d　１号焼土遺構全景（南西から）
e　１号溝跡全景（南西から）

19　北調査区　遺物包含層と河川跡検出状況（北から）

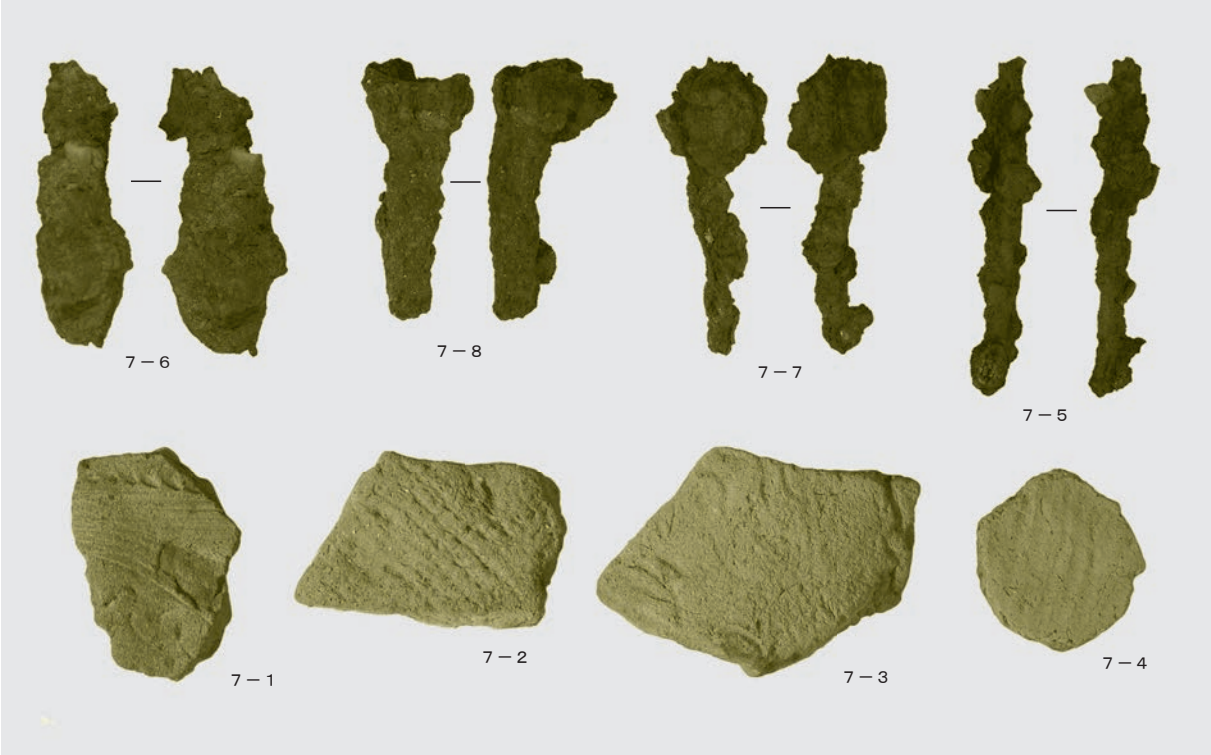


20　北調査区　遺物包含層断面

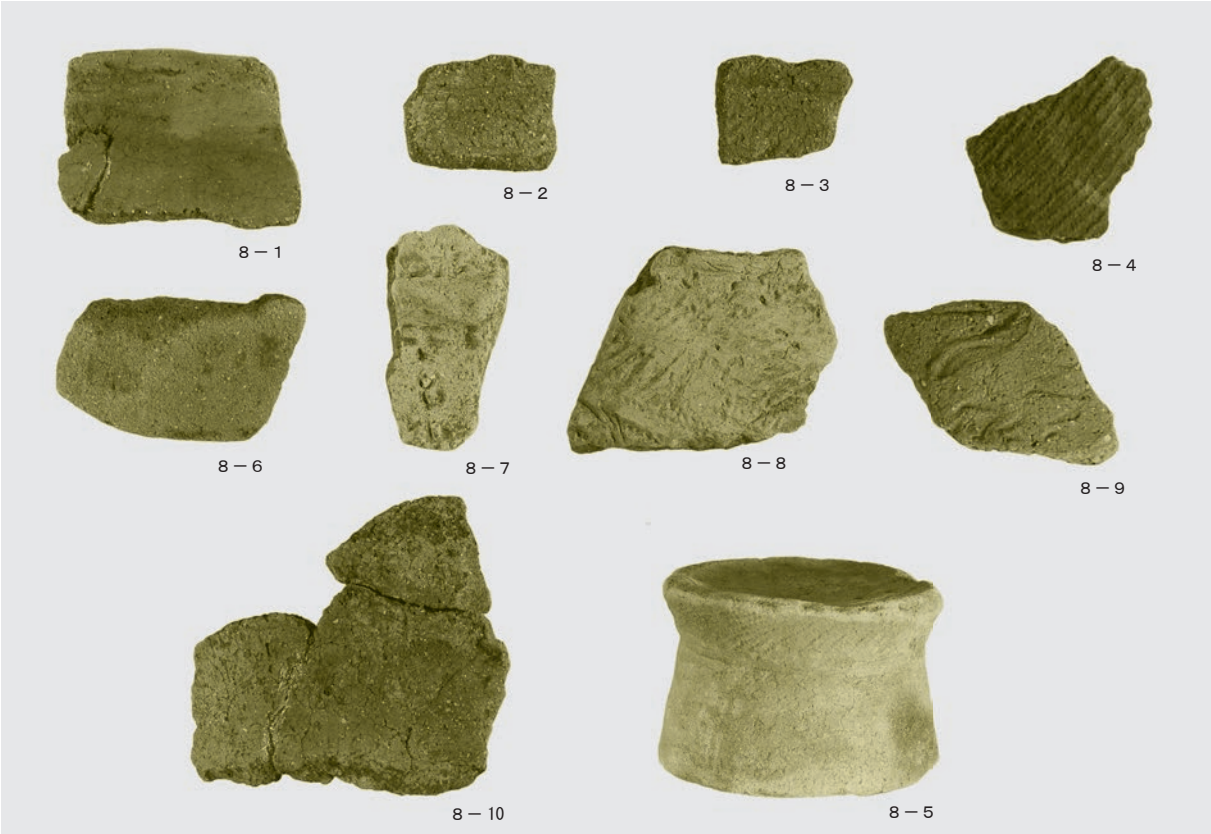
a　Ｅ－Ｅ′（北から）　b　Ｆ－Ｆ′（南東から）
c　Ｊ－Ｊ′（北東から）



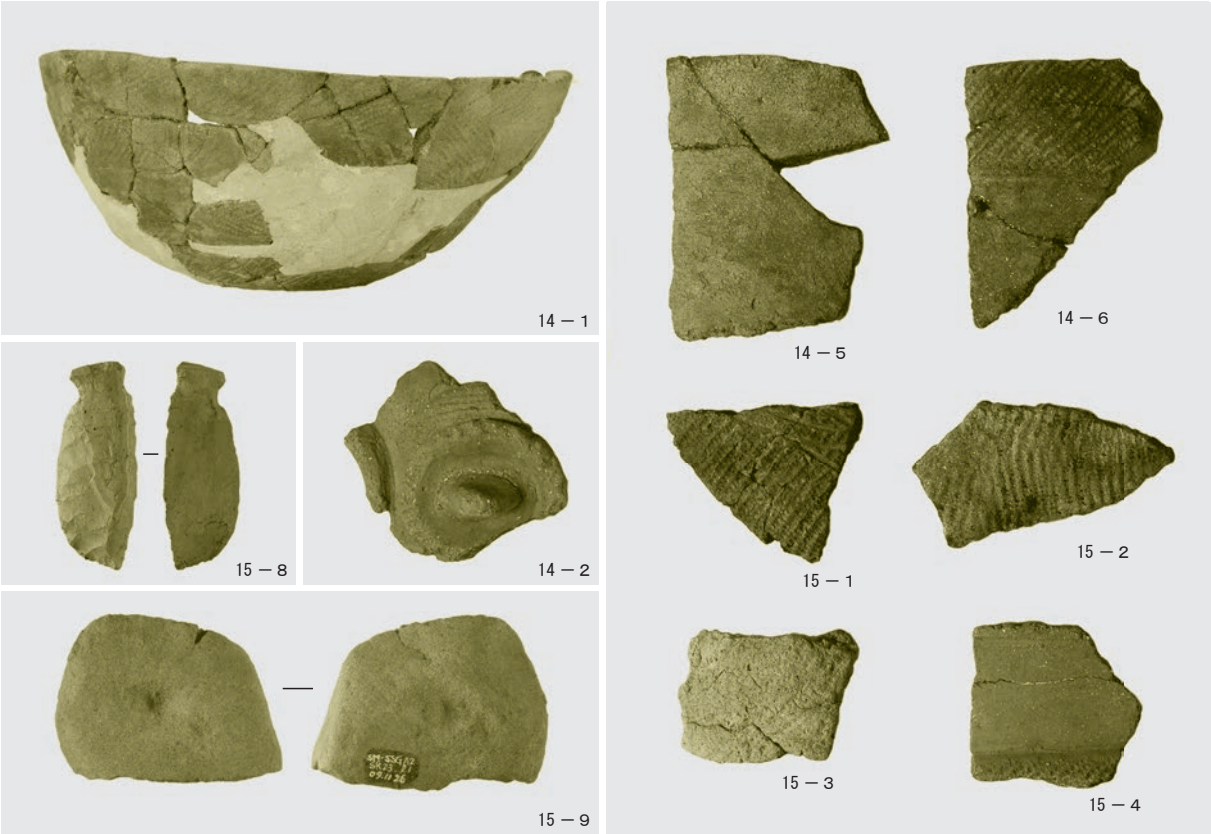
21　２・５号住居跡出土遺物



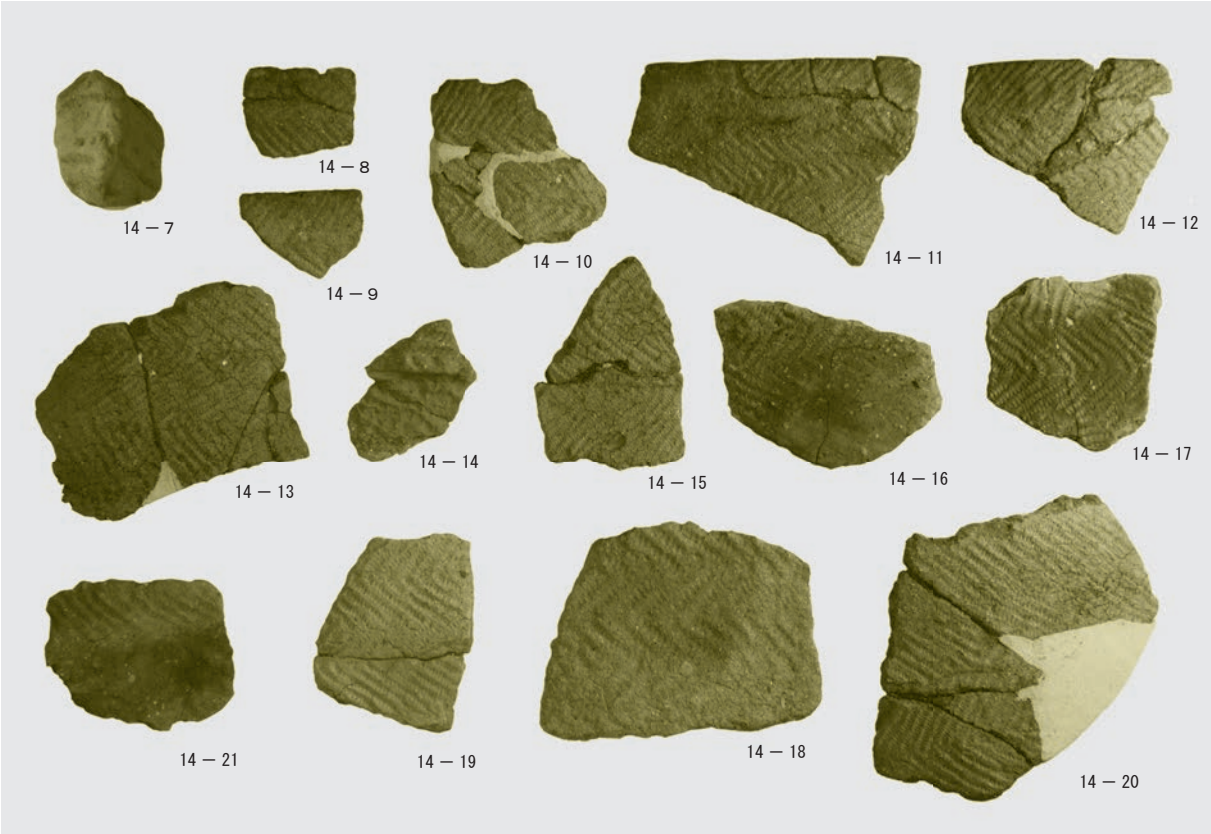
22　２号住居跡出土遺物



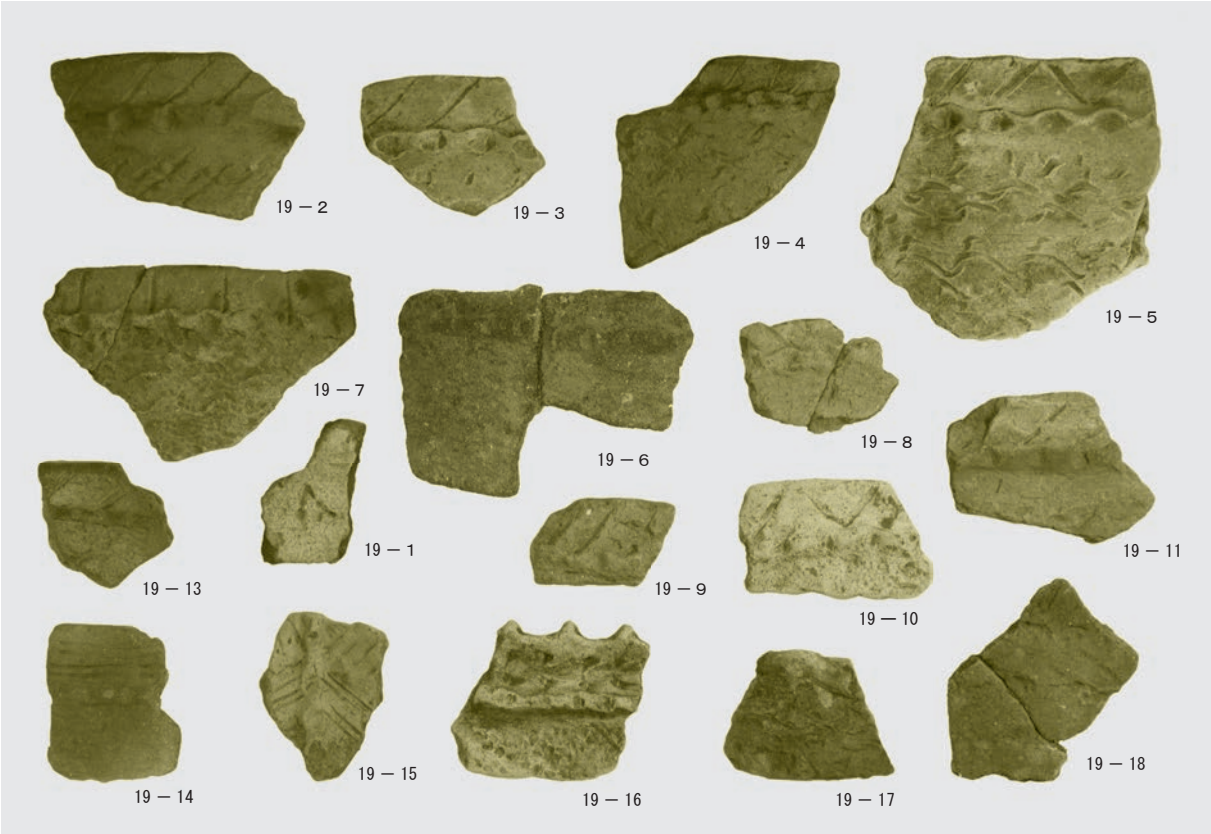
23　３号住居跡出土遺物



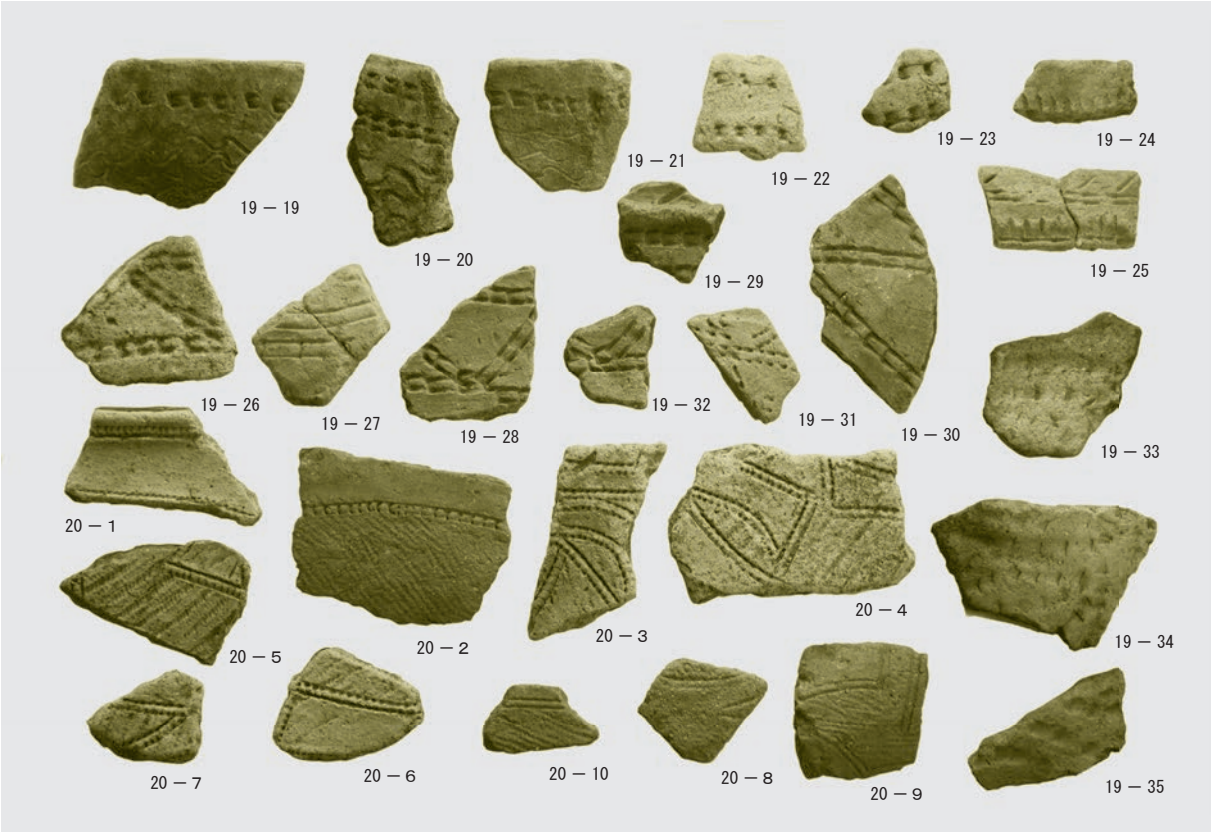
24　19・21・23・24・26号土坑出土遺物



25　20号土坑出土遺物

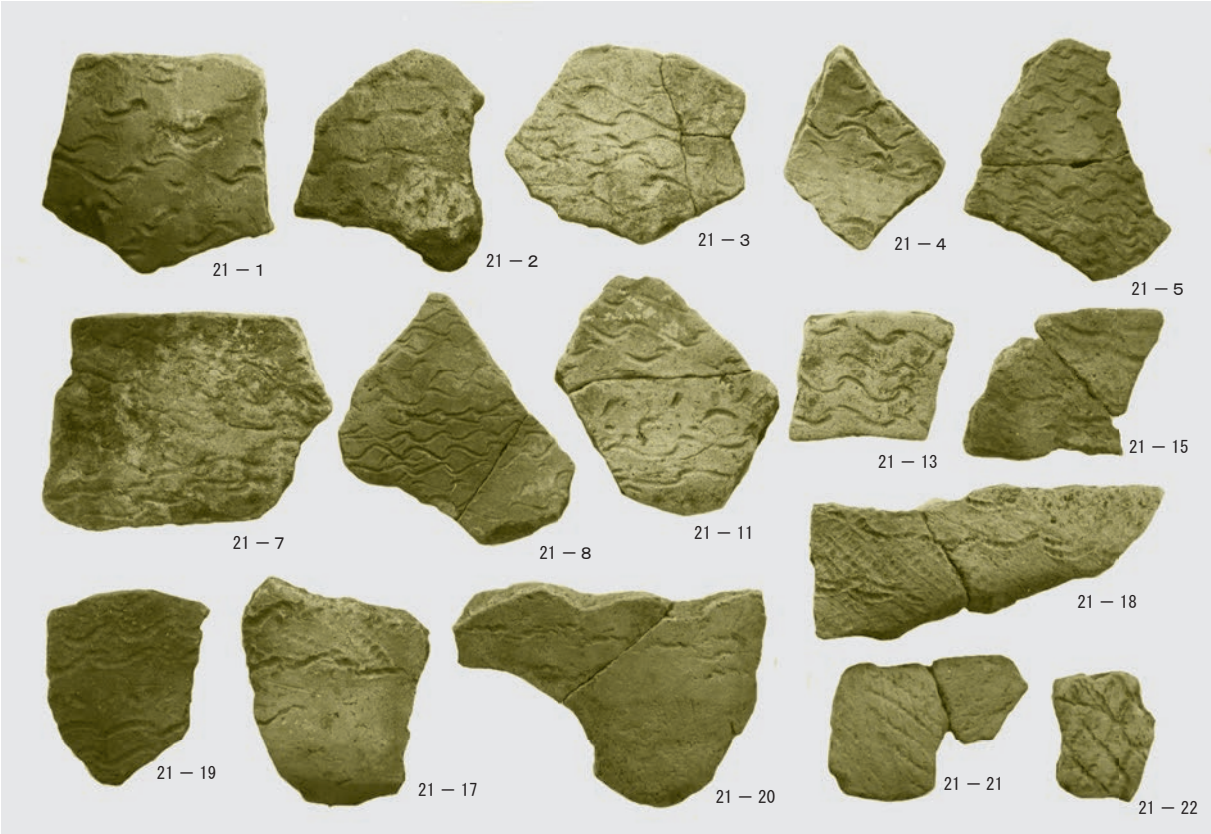


26　遺構外出土遺物（Ⅰ群土器・Ⅱ群土器１類）

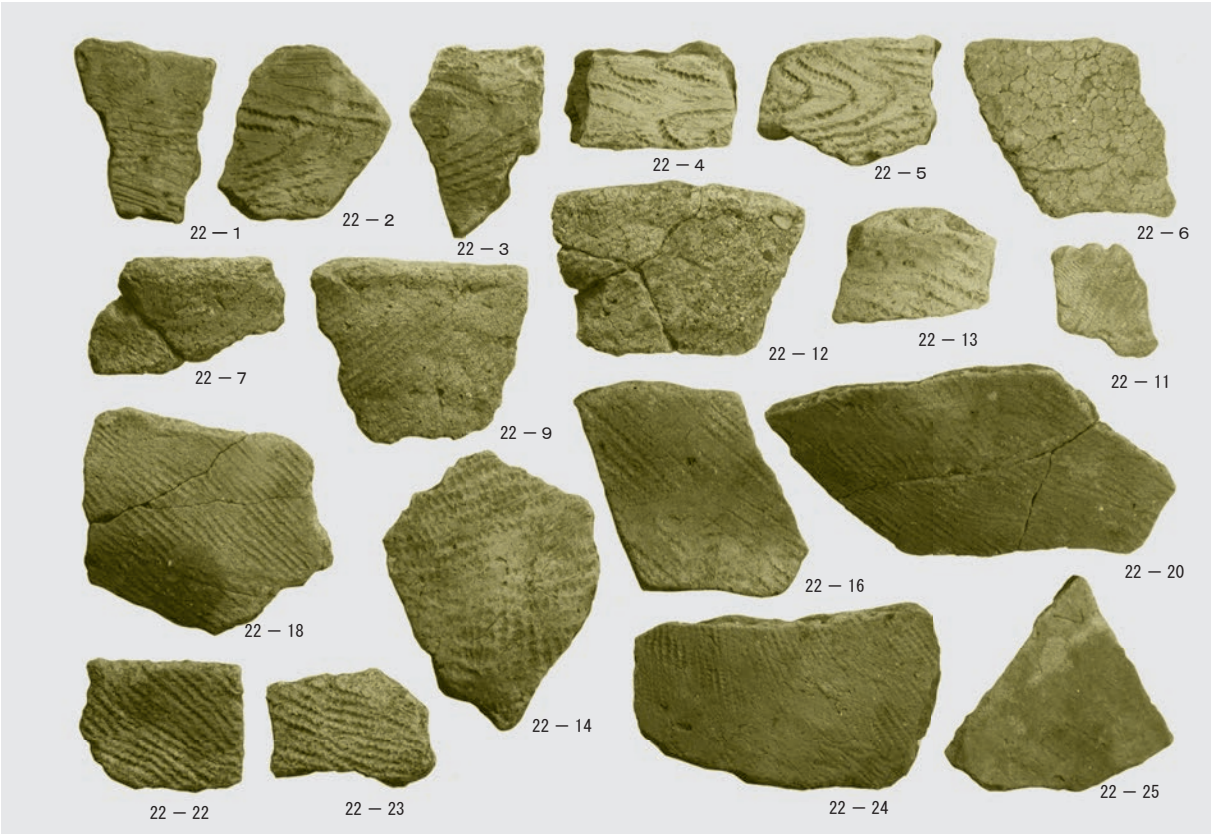


27　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器２類）

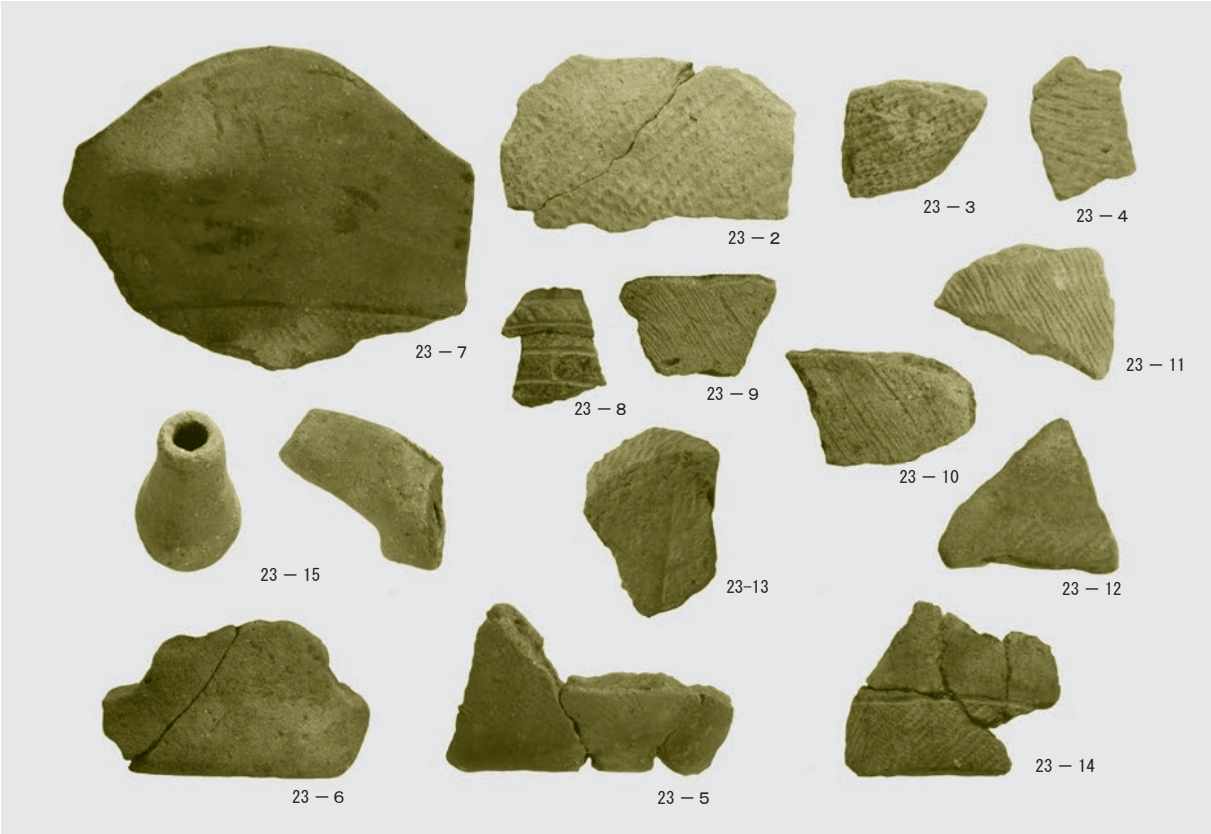
28　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器３・４類）



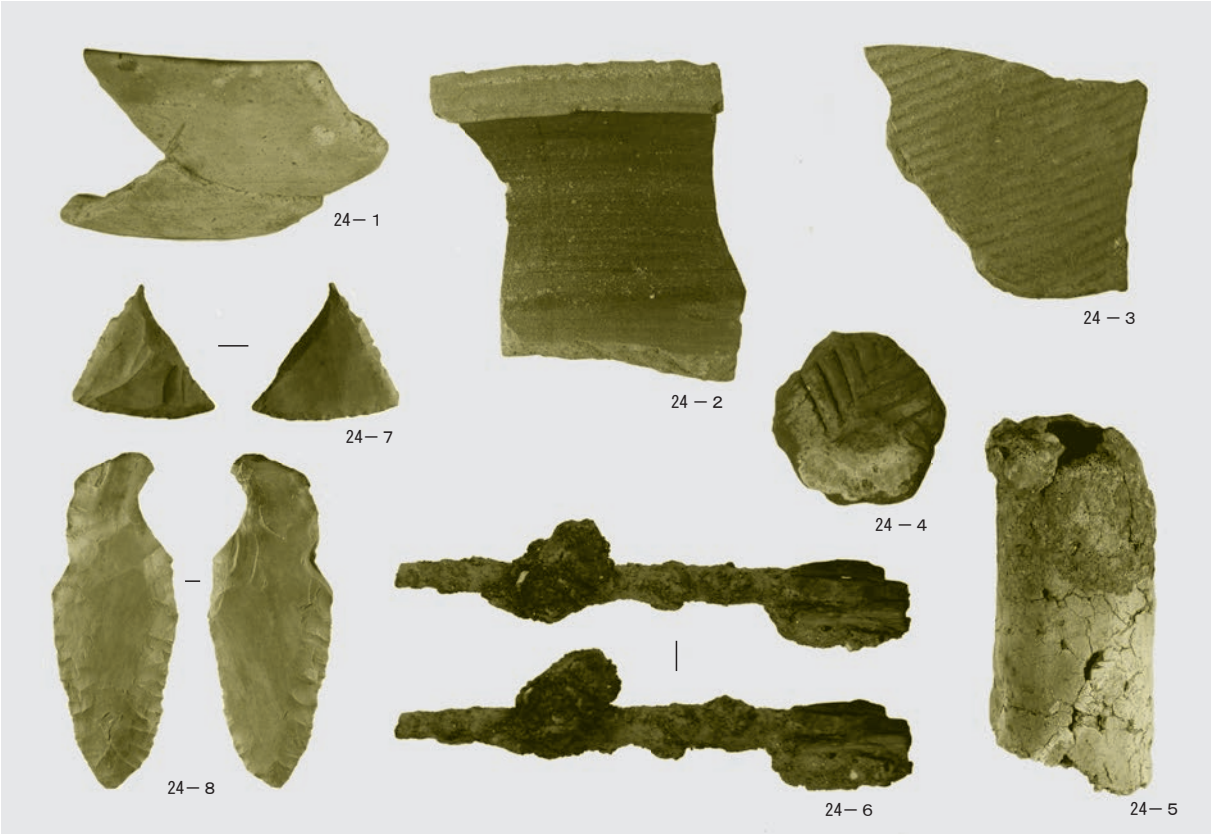
29　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器５類）



30　遺構外出土遺物（Ⅱ群土器５類）



31　遺構外出土遺物（Ⅲ群土器）



32　遺構外出土遺物（Ⅳ群土器・土製品・鉄製品）

報　告　書　抄　録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく64
書名	常磐自動車道遺跡調査報告64
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第473集
編著者名	山岸英夫・吉田秀享・笠井崇吉・三浦武司・髙橋岳・水野一夫・西澤正和・本田拓基
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8115　福島県福島市山下町1－25　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町2－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2010年12月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
西原（1･2次調査）	福島県相馬市 坪田字西原	72096	00193	37°46′7″	140°53′5″	20060915～1214 20080924～1219	2,700㎡ 5,200㎡	道路建設に伴う事前調査
宿仙木A（2次調査）	福島県相馬市 黒木字宿仙木	72096	00198	37°48″34″	140°53′14″	20091015～1218	4,900㎡	

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
西原（1･2次調査）	散布地 生産遺跡 集落 墓	縄文時代 古代 近世	掘立柱建物跡 柱列跡 土坑 井戸跡 溝跡 屋外焼土遺構 集石遺構 性格不明遺構	1棟 2カ所 62基 2基 6条 2基 2基 3基	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器 土製品 羽口 石器 金属製品	縄文時代早期後葉を中心とする散布地。平安時代の所産と考えられる木炭焼成土坑群。近世の建物跡・柱列・井戸跡などが一つのまとまりとして認められた。
宿仙木A（2次調査）	集落 河川	縄文時代 古代 近世	竪穴住居跡 土坑 鍛冶炉跡 屋外焼土遺構 溝跡 遺物包含層	4軒 12基 2基 1基 1条 1カ所	縄文土器 土師器 須恵器 羽口 石器 金属製品	縄文時代前期中葉の遺物包含層および，縄文時代後期中葉の集落跡。奈良・平安時代の集落跡。

要約

西原遺跡は，相馬市南部の丘陵上に位置する縄文時代・平安時代・近世の複合遺跡である。縄文時代は早期後葉を中心として，前期～晩期の遺物が散布する。平安時代は木炭焼成土坑による製炭の場である。近世は宅地および墓地であった。

宿仙木A遺跡は，阿武隈高地東端から連続する丘陵上に位置する縄文時代・奈良時代・平安時代の複合遺跡である。縄文時代は，河川跡に堆積した遺物包含層から前期中葉の大木２ｂ式を中心とする遺物が出土したほか，後期中葉の竪穴住居跡を確認した。奈良・平安時代は，集落跡であった。

福島県文化財調査報告書第473集

常磐自動車道遺跡調査報告64

西原（にしはら）遺跡（１・２次調査）

宿仙木（しゅくせんぎ）Ａ遺跡（２次調査）

平成22年12月22日発行

編　集	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部		
発　行	福島県教育委員会	（〒960－8688）	福島市杉妻町２－16
	財団法人福島県文化振興事業団	（〒960－8116）	福島市春日町５－54
	東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所	（〒976－0042）	相馬市中村字塚の原65－16
印　刷	共栄印刷株式会社	（〒963－0724）	郡山市田村町上行合字西川原７－５